岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第616集

作屋敷（さくやしき）遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区関連遺跡発掘調査

２０１３

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
（公財）岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第616集
作屋敷遺跡発掘調査報告書
２０１３
岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
（公財）岩手県文化振興事業団

作屋敷遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して、平成23年度に発掘調査された奥州市胆沢区作屋敷遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。今回で２回目となる当センターの調査によって、平安時代の集落跡が前回の調査地点の北側に広がることが明らかとなり、あわせて奈良時代の遺構・遺物も確認されました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局農政部農村整備室、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団

理 事 長　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は、岩手県奥州市胆沢区南都田字独光287番地ほかに所在する作屋敷遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県県南広域振興局農政部農村整備室と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、県南広域振興局農政部農村整備室の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。なお、費用は岩手県教育委員会が岩手県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。

3　岩手県遺跡台帳における遺跡番号は「NE25-0144」、遺跡略号は「SKY-11」である。

4　野外調査・室内整理に関わる期間等は、以下のとおりである。

野外調査…期　間：平成23年４月26日～９月２日

面　積：5,190㎡(発掘調査区：2,453㎡、確認調査区：2,737㎡)

担当者：濱田 宏、小林弘卓、巴 亜子

室内整理…期　間：平成23年11月１日～平成24年３月30日

担当者：濱田 宏、小林弘卓

5　報告書の執筆は、第Ⅰ章を県南広域振興局農政部農村整備室、それ以外を濱田･小林が分担した。本書の構成は濱田が、全体の編集は小林が行った。

6　野外調査時には県南地区の作業員20数名、室内整理では当センターの期限付職員３～５名が作業に従事した。

7　試料の分析・鑑定は次の機関と個人に依頼した。

炭化樹種の同定･･･阿部利吉(元岩手県木炭協会)

石材・石質鑑定･･･花崗岩研究会

黒曜石の原産地推定･･･明治大学文化財研究施設

8　基準点測量は興国設計株式会社に、航空写真は東邦航空株式会社に委託した。

9　出土した鉄製品の保存処理は、岩手県立博物館文化財科学に委託した。

10　調査および報告書作成にあたり、次の方々からご指導をいただいた(順不同・敬称略)。

石崎高臣(奥州市世界遺産推進室)、高橋千晶(奥州市教育委員会)

11　今回の発掘調査で出土した遺物と諸記録は、全て岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

12　調査成果は、既に当センターのホームページ、現地説明会資料、調査概報等に公表しているが、記載が異なる場合は本書の報告がすべてに優先する。

凡　　例

1　遺構実測図の縮尺は以下のとおりで、一部異なるものは各図にスケールと縮尺を付した。

　竪穴住居跡・住居状遺構…1/50

　竪穴住居跡のカマド…1/25

　土坑(墓壙含む)・陥し穴状遺構…1/40

　焼土遺構…1/20

　溝…平面1/100、断面1/50

　掘立柱建物跡…1/50

　柱穴状土坑…1/50あるいは1/100

2　層位は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土には算用数字を用いた。

3　遺構図版中の土器は「P」、石器および礫は「S」と表記した。

4　各遺物の縮尺は以下のとおりである。これに依らないものもあるが、それは別に示している。

　土師器・須恵器・礫石器…1/3

　石器類・土製品・鉄製品…1/2

5　遺物観察表の法量について、残存値は(　　)で、推定値は＜　　＞で表した。

6　本書では、東側調査区と西側調査区に分けて報告したが、遺構の写真図版は遺構毎の連番で掲載している。

7　土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいている。

8　国土地理院発行の地形図を掲載したものには、図中に図幅名と縮尺を付した。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　立 地 と 環 境
1　遺跡の位置と立地……1
2　地 形 と 地 質……2
3　基　本　層　序……2
4　周 辺 の 遺 跡……5
Ⅲ　野外調査と室内整理の方法
1　野　外　調　査……8
（1）グリッドの設定……8
（2）試掘・表土除去……8
（3）遺構検出と精査……8
（4）写　真　撮　影……10
（5）調　査　経　過……10
2　室　内　整　理……11
（1）作　業　経　過……11
（2）遺物整理の方法……11
（3）遺構図面の整理……11
（4）写真撮影と整理……11
Ⅳ　検出された遺構と遺物
1　東 側 調 査 区……13
（1）竪 穴 住 居 跡……13
（2）住 居 状 遺 構……33
（3）掘 立 柱 建 物……37
（4）土　坑　類……45
（5）炉　　跡……62
（6）溝　　跡……63
（7）焼　土　遺　構……74
（8）陥し穴状遺構……74
（9）柱 穴 状 土 坑……75
2　西 側 調 査 区……78
（1）竪 穴 住 居 跡……78
（2）掘 立 柱 建 物……79
（3）土　坑　類……81
（4）溝　　跡……81
（5）陥し穴状遺構……87
（6）柱 穴 状 土 坑……88
3　遺構外出土遺物……91

Ⅴ　総　　括
　1　遺　　物……124
　2　遺　　構……125
報告書抄録……181

図版目次

第１図　遺跡位置図…… 3
第２図　地形(段丘)分類図…… 4
第３図　周辺の遺跡図…… 6
第４図　グリッド配置図…… 9
第５図　調査範囲図…… 12
第６図　東側調査区全体図…… 14
第７図　東側調査区遺構配置図①…… 15
第８図　東側調査区遺構配置図②…… 16
第９図　東側調査区遺構配置図③…… 17
第10図　東側調査区遺構配置図④…… 18
第11図　101・102号住居跡…… 19
第12図　103号住居跡…… 21
第13図　105・106号住居跡…… 23
第14図　106号住居跡カマド…… 24
第15図　107号住居跡…… 25
第16図　107号住居跡カマド…… 26
第17図　108・109号住居跡…… 28
第18図　110号住居跡…… 31
第19図　111・113号住居跡…… 32
第20図　101号住居状遺構…… 34
第21図　102号住居状遺構…… 35
第22図　103号住居状遺構…… 36
第23図　101号掘立柱建物…… 38
第24図　102号掘立柱建物…… 39
第25図　103号掘立柱建物…… 41
第26図　104号掘立柱建物…… 42
第27図　105号掘立柱建物…… 43
第28図　106・107号掘立柱建物…… 44
第29図　101～109号土坑…… 57
第30図　111～113・115～117号土坑…… 58
第31図　118～123・125号土坑…… 59
第32図　126～134号土坑…… 60
第33図　135～141号土坑…… 61
第34図　101・102号炉跡…… 63
第35図　101～103号溝跡…… 70
第36図　104～115号溝跡…… 71
第37図　117・118・120号溝跡…… 72
第38図　121～128・130号溝跡…… 73
第39図　101・102号焼土遺構、101号陥し穴状遺構…… 75
第40図　西側調査区遺構配置図…… 77
第41図　114号住居跡…… 78
第42図　143・144号土坑、129・131～133号溝跡…… 85
第43図　134～140号溝跡…… 86
第44図　141・142号溝跡…… 87
第45図　102・103号陥し穴状遺構…… 88
第46図　西側調査区柱穴群、
　　108～113号掘立柱建物…… 89
第47図　出土遺物(１)…… 92
第48図　出土遺物(２)…… 93
第49図　出土遺物(３)…… 94
第50図　出土遺物(４)…… 95
第51図　出土遺物(５)…… 96
第52図　出土遺物(６)…… 97
第53図　出土遺物(７)…… 98
第54図　出土遺物(８)…… 99
第55図　出土遺物(９)……100
第56図　出土遺物(10)……101
第57図　出土遺物(11)……102
第58図　出土遺物(12)……103
第59図　出土遺物(13)……104
第60図　出土遺物(14)……105
第61図　出土遺物(15)……106
第62図　出土遺物(16)……107
第63図　出土遺物(17)……108
第64図　出土遺物(18)……109
第65図　出土遺物(19)……110
第66図　出土遺物(20)……111
第67図　出土遺物(21)……112
第68図　出土遺物(22)……113
第69図　出土遺物(23)……114
第70図　出土遺物(24)……115
第71図　出土遺物(25)……116
第72図　出土遺物(26)……117
第73図　102～106号掘立柱建物……126

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 7
第２表　東側調査区柱穴状土坑計測表…… 75
第３表　西側調査区柱穴状土坑計測表…… 89
第４表　土器（土師器・須恵器等）観察表……118
第５表　土製品観察表……122
第６表　鉄製品観察表……122
第７表　陶磁器観察表……123
第８表　石器・石製品観察表……123

写真図版目次

写真図版１　航空写真……130
写真図版２　調査前風景と掘立柱建物群……131
写真図版３　101・102号住居跡……132
写真図版４　103号住居跡……133
写真図版５　105号住居跡……134
写真図版６　106号住居跡……135
写真図版７　107号住居跡……136
写真図版８　108号住居跡……137
写真図版９　109号住居跡、作業風景……138
写真図版10　110号住居跡……139
写真図版11　111号住居跡……140
写真図版12　113号住居跡……141
写真図版13　114号住居跡、101号住居状遺構……142
写真図版14　102号住居状遺構……143
写真図版15　103号住居状遺構……144
写真図版16　掘立柱建物、柱穴埋土（１）……145
写真図版17　柱穴埋土（２）……146
写真図版18　101～104号土坑……147
写真図版19　105～108号土坑……148
写真図版20　109～113号土坑……149
写真図版21　115～117号土坑……150
写真図版22　118～121号土坑……151
写真図版23　122・123・125号土坑、102号住居状遺構……152
写真図版24　126～129号土坑……153
写真図版25　130～134号土坑、作業風景……154
写真図版26　135～139号土坑……155
写真図版27　136・141～144号土坑……156
写真図版28　101・102号炉跡、101～104号溝跡……157
写真図版29　105～111号溝跡……158
写真図版30　112～115・117・118号溝跡……159
写真図版31　118・121・123～125号溝跡……160
写真図版32　126～131号溝跡……161
写真図版33　132～135号溝跡……162
写真図版34　136～139号溝跡……163
写真図版35　139～141号溝跡……164
写真図版36　142号溝跡、101・102号焼土遺構、
101号陥し穴状遺構……165
写真図版37　102・103号陥し穴状遺構ほか……166
写真図版38　出土遺物（１）……167
写真図版39　出土遺物（２）……168
写真図版40　出土遺物（３）……169
写真図版41　出土遺物（４）……170
写真図版42　出土遺物（５）……171
写真図版43　出土遺物（６）……172
写真図版44　出土遺物（７）……173
写真図版45　出土遺物（８）……174
写真図版46　出土遺物（９）……175
写真図版47　出土遺物(10)……176
写真図版48　出土遺物(11)……177
写真図版49　出土遺物(12)……178
写真図版50　出土遺物(13)……179
写真図版51　出土遺物(14)……180

Ⅰ　調査に至る経過

作屋敷遺跡の発掘調査は、経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区のほ場整備工事に伴い、その事業区域内に当該遺跡が存在することから実施することとなったものである。

都鳥３期地区は、奥州市胆沢区南都田地内に位置し、水田の大部分は昭和26年～29年にかけて積雪寒冷地土地改良事業により10a 区画に整備されているが、農業機械の大型化が進む中で小区画となったこと、農道は幅員２～３ｍと狭小で通行に支障があること、水路は用排兼用土水路であるため用水不足や排水不良であり維持管理に多大な労力を投じていることなどから、地域営農の確立に十分な対応ができない状況である。このため本事業により水田を標準区画1ha の大区画化とし、併せて用排水路、道路の整備を行い、地域農業の中心となる経営体を育成し活力があり生産性の高い地域営農の確立を目指しているものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県県南広域振興局農政部農村整備室から平成22年10月６日付県南広農整第129－１号「経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区に係る埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成22年10月に試掘調査を実施し、工事に着手するには、作屋敷遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成22年11月24日付教生第1009号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当農村整備室へ回答してきた。

この回答をうけ、当農村整備室は、平成22年11月25日付県南広農整第129－３号「埋蔵文化財試掘調査に係る工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえて、当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて平成23年4月1日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）

Ⅱ　立 地 と 環 境

１　遺跡の位置と立地（第１図）

作屋敷遺跡がある奥州市は県の内陸南部に位置し、平成18年２月20日に旧水沢市、江刺市、胆沢町、前沢町、衣川村の２市２町１村が合併してできた県内第三の面積を擁する市である。総面積は993.35㎢と広大で、総人口は12.3万人（平成24年1月1日現在）を数える。市の北側は花巻市、北上市、金ヶ崎町、西和賀町、南は一関市、平泉町、東は遠野市、住田町、西側は奥羽山脈を越えた秋田県東成瀬村に接している。

市の西部胆沢区には、最北の前方後円墳と言われる国指定史跡「角塚古墳」があるが、本遺跡はその西南西約２㎞の、奥州市胆沢区南都田独光・作屋敷地区に跨って所在する。JR 東北本線水沢駅とは東に約６㎞、胆沢総合支所とは南西方向に約２㎞の距離をおく。地形図上は、国土地理院発行２万５千分の１地形図「供養塚」（NJ －54－14－14－３）の図幅に含まれ、遺跡最東端部は北緯39度８分９秒、東経141度4分48秒に位置し、遺跡はそこから西側に600～700ｍの広がりを有している。

遺跡の標高は、今回の調査地点で88.0～93.8ｍと５ｍ以上の差があるが、この中で最も標高の高い

部分は、遺跡を東西に二分する農道付近である。また、前回調査時の報告には調査区の標高が92.0～96.0mと記載されており、このことから遺跡南側は標高が高く、かつ中央から東西両方向には緩く下がる地形となっているようである。

2　地 形 と 地 質（第２図）

東北地方の中央を縦断している奥羽山脈は、グリーンタフ変動によって中新世以降に形成され、その構造は新第三系中新統および火山岩類を主体としている。河川は急流が多く、形成時期が新しいこともあって、北上川西側の支流には多くの土砂が供給された。その結果、北上川中流域西岸においては、胆沢扇状地をはじめとする堆積地形が発達、大きな平野部を形成した。この胆沢扇状地は、胆沢川上流の市野々付近を扇頂として、その範囲を北側は胆沢川、南は北股川などに挟まれた箇所とする。その面積は約20,000ha に及んでいる。

胆沢扇状地内にある新期の河岸段丘は、南から高位段丘、中位段丘、低位段丘、河岸低地に大別され､栗駒山や焼石岳の噴火で供給された火山灰がこれらを形成した。各段丘の詳細について記述する。

高位段丘は大歩、一首坂(30～60万年前)、西根(30～60万年前)に区分される。大歩段丘は金ヶ崎町永栄付近に分布し、標高は200～240mを測る。一首坂段丘は標高150～200mほどで、胆沢扇状地の南端部に発達し南東方向に緩やかに傾斜している。西根段丘は、標高220～290mの扇状地南端の扇頂部や低位段丘の中に標高110～140mの残丘として分布するほか、胆沢川左岸の一部にも標高180～190mの丘陵性台地を形成している。

中位段丘は胆沢段丘と呼ばれ、高位から標高80～250mの上野原(13～30万年前)､70～240mの横道(13～30万年前)､70～240mの堀切(11.5万年前)､60～130mの福原(8～9万年前)の４つに区分される。この中では、第２図に見るように堀切段丘が最も広く分布し、その北側に発達する福原段丘は北上地区の村崎野段丘に対比される可能性があるという(大上・吉田：1984)。

低位段丘である水沢段丘は、標高40～290mの高位面(2万年前)と38～120mの低位面(3千年前)の二つに区分される。前者は、胆沢川や北股川、北上川やその支流などの扇状地扇端部に広く分布し、後者は、胆沢川の中・下流域の両岸を主体として分布する。

第２図に見るように、本遺跡は低位段丘である水沢段丘高位面に立地しているが、国道397号線のさらに北側にある低位面との境界までは500mほどの距離がある。

3　基 本 層 序

本遺跡では、昭和30年代の開田の影響もあり現表土直下が地山となっている箇所が多い。その中で東側調査区の発掘調査区⑩付近では、表土直下に古代の遺物を包含する黒色土が観察される箇所がある。以下に、その付近の層序を示す。

第Ⅰａ層：10YR3/2　黒褐色　シルト　現表土と一部盛土層で層厚10～20cm。

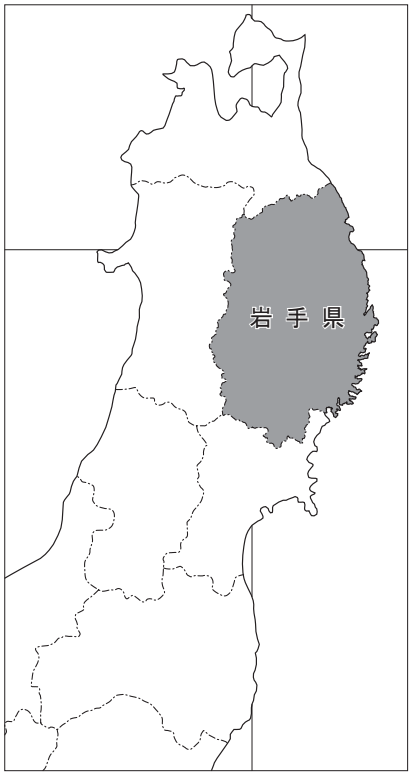
第Ⅰｂ層：10YR2/2　黒褐色　シルト　旧表土で地山の小ブロックを含む。層厚10～20cm。

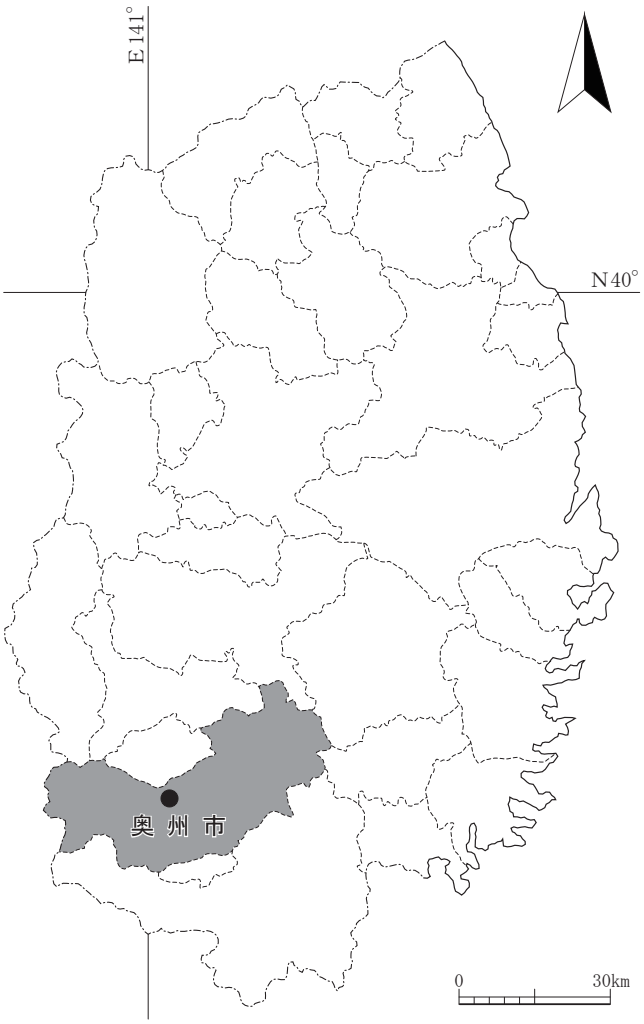
第Ⅱ層：10YR2/1　黒色　シルト　掘削を免れた部分に残る古代の遺物包含層。層厚10～15cm。

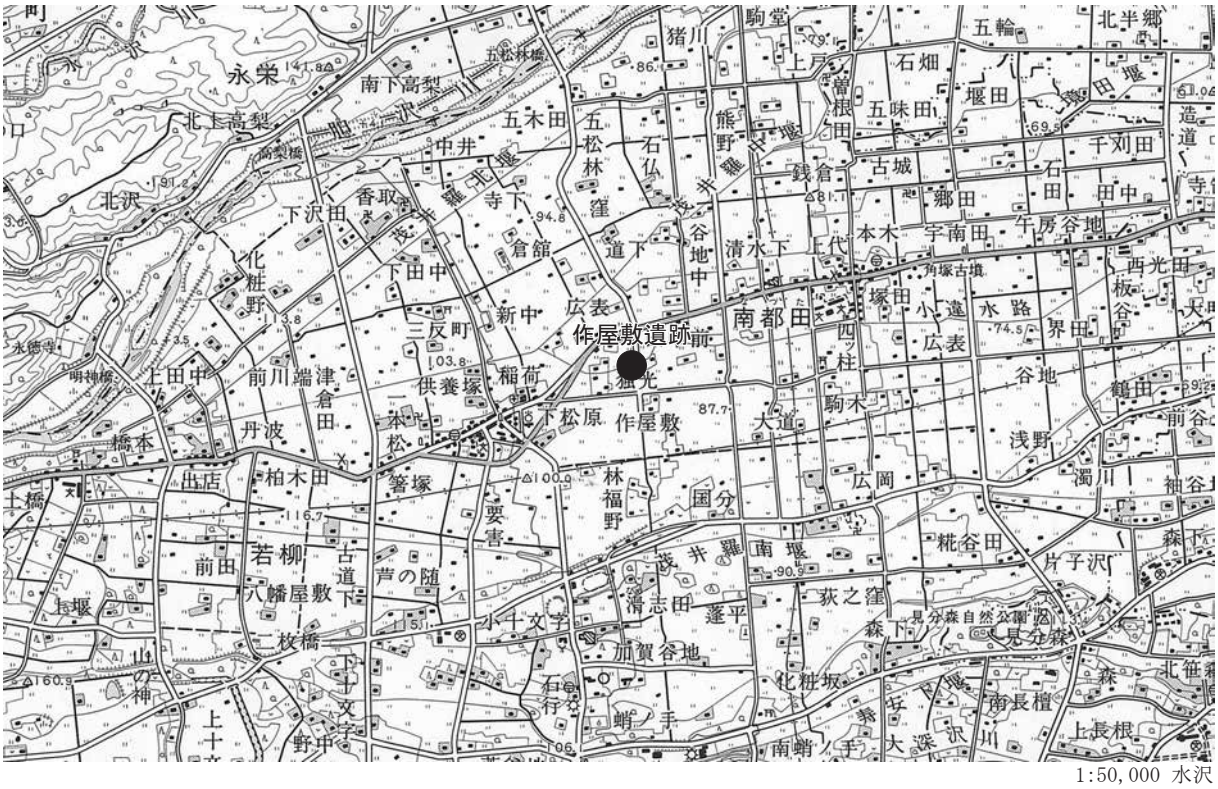
第Ⅲ層：10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　漸移層。これも第Ⅱ層と同様で層厚は10cm 前後。

第Ⅳ層：10YR5/6　黄褐色　粘土～粘土質シルト　地山で遺構の検出面となる。層厚は未確認。

遺構検出面は、第Ⅲ層上面(漸移層)と第Ⅳ層(地山)である。上述した古代の遺物を包含する第Ⅱ層







第１図　遺跡位置図

1:100,000(1:50,000 北上・水沢を転用)

高位段丘　中位段丘　低位段丘

第２図　地形(段丘)分類図

(黒～黒褐色土)が残る部分ではその層の上面で検出を試みたが、遺構間の重複部ということもあり不明瞭であったため、結果的に第Ⅲ層上面まで掘り下げている。

4　周 辺 の 遺 跡（第３図・第１表）

平成23年３月現在、岩手県遺跡情報検索システムに登録されている奥州市の遺跡は1,069箇所で、このうち胆沢区に所在する遺跡数は185を数える。第３図には角塚古墳を中央に置いた胆沢区南都田地区の53遺跡を図示し、第１表に遺跡の時代や内容を示す一覧を掲載した。第１表からわかるように、この53遺跡のほとんどはいわゆる古代の遺跡であり、中でも平安時代に属する遺跡が多数を占める。ここでは、第３図の図幅にある古墳・奈良・平安時代の遺跡について順に記載する。

古墳時代の遺跡は、最北の前方後円墳である国指定史跡角塚古墳(34)やその時代の交易を示す遺物が大量に出土した４～６世紀の集落跡中半入遺跡(３)、水沢区の高山遺跡(17)がある。平成23年度に当センターが発掘調査した沢田遺跡(27)、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡(28)からは当該期の竪穴住居や円形周溝、墓壙などが確認され、さらに後者からはフイゴの羽口や馬具など鉄関連の遺物が出土し、中半入遺跡とともに角塚古墳造営に関わる集落の可能性が指摘される。

古墳時代の後半(７世紀後半～)を含む奈良時代の遺跡は、銭倉遺跡(23)、要害遺跡(33)、塚田遺跡(35)、漆町遺跡(38)、堤遺跡(39)などがあり、堤遺跡では平成23年度の調査で８世紀の竪穴住居が数棟確認されている。また、蝦夷塚古墳(４)や糀谷田古墳(45)、鶴田古墳群(49･50)などは末期古墳とされる古墳群である。造営時期は、蝦夷塚古墳が８世紀後半、鶴田古墳群が９世紀代と推定されている。

上述のとおり、第３図に示したほとんどの遺跡は平安時代の土師器を伴い、須恵器を有する率も高い。平成20年度の本遺跡(１)の調査では９世紀後半～10世紀前半の集落跡が確認され、前掲沢田遺跡の平成23年度調査では、緑釉陶器や墨書土器、鉄鏃などの遺物が出土した沢跡が見つかった。平安時代を主体とするこれらの遺跡は、奈良時代と複合しているものも多いが、今回の調査でも古墳時代後期以降平安時代の前半まで、概ね３～４期にわたる遺構が確認された。

次に時代毎の立地について見ていく。第２図中には第３図で示した範囲を四角の囲みで表した。これを見ると、縄文時代の遺跡は中位段丘である福原段丘裾部に、古代のそれは水沢段丘の高位・低位面に集中していることがわかる。また、前者は古代との複合遺跡であることが多い。さらに、水沢段丘低位面と高位面の境界は国道397号線のすぐ北側に引かれているが、これを境とする何らかの傾向はこれだけからは掴めない。強いて言えば、古代の遺跡のうち、国道北側の低位面に比較的古い時期の遺跡が多いと言えるだろうか。

平安時代の胆沢地方の姿は「胆沢城」の盛衰とともにあることは明らかであり、胆沢城創建前後からその機能を失うまでの胆沢城西側地域の様相は、これら発掘調査の成果からより確かなものとなっていくであろう。

1:25,000 供養塚

第３図　周辺の遺跡図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	種　別	時　代	主な遺構・遺物	備　考
1	作屋敷	祭祀跡・集落跡	古代	土師合甕、土師器、須恵器	胆沢町教委1994年調査、岩埋文第569集（2010年）、報告遺跡
2	兵法田	散布地	縄文・平安	土師器、須恵器、石組炉	
3	中半入	集落跡・古墳	平安	土師器、須恵器、弥生土器	岩埋文第380・443・465集（2002、2004、2005年）、水埋文第18集(2004)、奥埋文第２集(2008)
4	蝦夷塚古墳	古墳	奈良	土師器、須恵器、マウンド	岩埋文第380集（2002年）
5	半入豪族屋敷	環濠屋敷	中・近世	濠	
6	太田Ⅰ	集落跡	平安	土師器、須恵器	
7	中ノ目	散布地	平安	土師器	
8	玉ノ木Ⅰ	散布地	平安	土師器	
9	太田Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	
10	玉の木Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	
11	太田Ⅲ	散布地	平安	土師器、	
12	小姓堂	散布地	平安	土師器	
13	外記Ⅱ	散布地	縄文、平安	縄文土器、土師器	
14	石畑	散布地	平安	土師器	
15	外記Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
16	曽根田(常楽寺舘)	散布地・城館跡	平安	土師器	
17	高山	集落跡	古墳	竪穴住居跡、土師器	
18	高谷宿	散布地	平安	土師器	
19	新屋敷	散布地	平安	土師器	
20	河原田	散布地	平安	土師器	
21	寺屋敷	散布地	平安	土師器	
22	銭倉	散布地	平安	土師器	水沢区登録分
23	銭倉	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢区登録分
24	机地館(盛興館)	城館跡	中世	水堀	
25	堰田	散布地	平安	土師器	
26	机地	散布地	奈良・平安	土師器	
27	沢田	散布地	奈良・平安	土師器	胆沢町教委第18集（1988年）
28	石田Ⅰ・Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	
29	西光田Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器	
30	西光田Ⅱ	集落跡	平安	土師器、須恵器	
31	西光田Ⅲ	散布地	平安	土師器	
32	宇南田	集落跡	平安	土師器	
33	要害(止々井館)	散布地・城館跡	奈良・平安・近世	土師器、須恵器、土塁	胆沢町教委第26集（1995年）
34	角塚古墳	古墳	古墳時代	埴輪	胆沢町教委第28集（2002年）
35	塚田	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、※奈良時代の土器	胆沢町教委第14集（1985年）
36	清水下	散布地	弥生・平安	弥生土器、縄文早期土器片、石包丁、土師器	
37	二本木	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、墨書土器、暗文土器	胆沢町教委第13集（1984年）、胆沢町教委1997年調査
38	漆町	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	土師器、須恵器、縄文早期土器片	
39	堤	散布地	平安	土師器	
40	川端	散布地	平安	土師器	胆沢町教委1995年調査
41	牡丹野	散布地	古代・縄文	縄文土器、土師器、須恵器	県教委第126集（2008年）、岩埋文第569集（2010年）
42	尼坂	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器(早・前期)、石器、装飾具、土師器	胆沢町教委第22・23・24・25集（1992～1994年）、岩埋文第569集（2010年）
43	広岡館(飯坂館)	城館跡	中世	二重堀、土塁	
44	国分	散布地	古代・近世	縄文土器、土師器、須恵器、石鏃、石斧	胆沢町教委第21集（1991年）
45	糀谷田	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)、土師器	
46	片子沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	
47	浅野	散布地	縄文・古代	縄文土器(前・中期)、土師器、須恵器、土偶、弥生土器	胆沢町教委第17集（1988年）
48	浅野前	集落跡	縄文・古代	縄文土器(前・中期)、須恵器、土師器	
49	鶴田Ⅱ	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器、フレーク	
50	鶴田Ⅰ	散布地	平安	土師器	
51	濁川	集落跡	縄文・平安	縄文土器(前・晩期)、土師器、須恵器	
52	合野	散布地	縄文・古代	縄文土器(前・晩期)、石鏃	
53	袖谷地Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器	

Ⅲ　野外調査と室内整理の方法

１　野　外　調　査

（１）グリッドの設定

グリッドの設定には、公共座標第Ｘ系（世界測地系）を使用した。前回平成20年度調査との兼ね合いもあったが、区割りの方法とグリッドの呼び方は前回と同様のまま、原点をＸ＝−95,700.000m、Ｙ＝20,300.000mに設定し直した。大グリッドは100×100m、原点を起点に西から東へローマ数字、北から南へアルファベットの大文字を、小グリッドは４×４ｍ、同じく西から東へ１～25の算用数字、北から南へアルファベットの小文字を付し、それらの組み合わせで「ＣⅣｇ５」などと呼称した（第４図参照）。

調査区内には、基準点２点と補助点７点を打設した。東側調査区には基準点２点と補助点３点、西側調査区には補助点のみ４点である。各基準点および補助点の座標値は以下のとおりである。

基準点１	Ｘ＝−95,898.384m	Ｙ＝21,074.074m	Ｈ＝89.746m
基準点２	Ｘ＝−95,881.459m	Ｙ＝21,246.064m	Ｈ＝87.955m
補助点１	Ｘ＝−95,868.702m	Ｙ＝21,034.918m	Ｈ＝90.128m
補助点２	Ｘ＝−95,853.632m	Ｙ＝21,065.899m	Ｈ＝89.773m
補助点３	Ｘ＝−95,816.590m	Ｙ＝21,242.322m	Ｈ＝88.011m
補助点４	Ｘ＝−96,000.259m	Ｙ＝20,873.042m	Ｈ＝91.035m
補助点５	Ｘ＝−96,005.812m	Ｙ＝20,767.152m	Ｈ＝91.957m
補助点６	Ｘ＝−95,983.869m	Ｙ＝20,651.158m	Ｈ＝93.016m
補助点７	Ｘ＝−96,016.923m	Ｙ＝20,572.784m	Ｈ＝93.811m

なお、平成23年３月11日に発生した東日本大震災の影響により、旧来の水平位置を表す座標値は南東方向に2.2m程度変動していることが示されたが、調査ではあくまでも当初に得られた座標値を使用した。なお、標高については調査途中で補正し、その補正値を使用した。

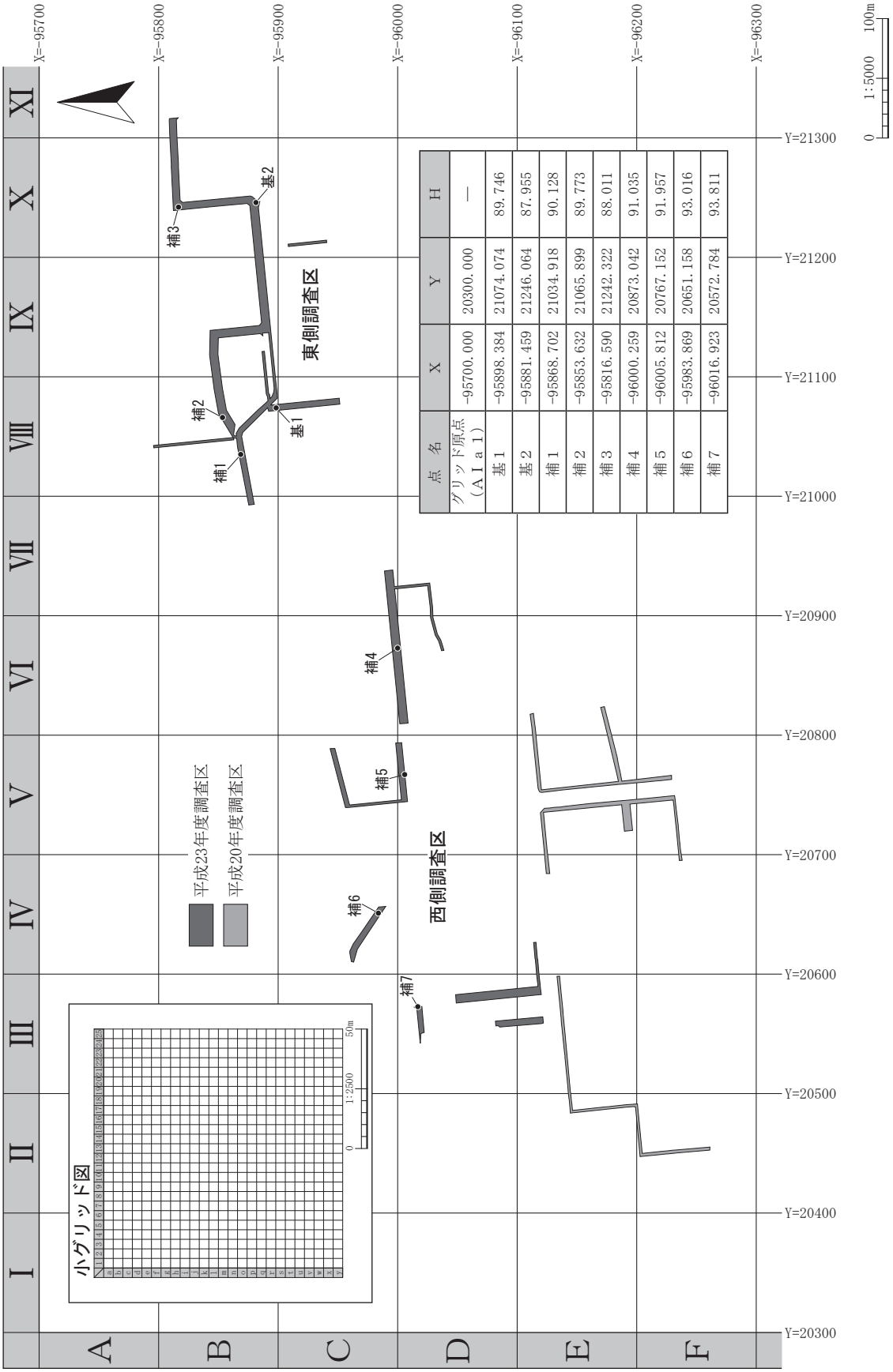
（２）試掘・表土除去

まず県の教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘調査の結果に基づいて、その試掘箇所をあらためて掘削し、遺構が検出される層位やそれまでの堆積土層を観察した。その後、重機による表土掘削が行える状態となるよう試掘トレンチを新設し、それについては遺物の出土状況も掴みながら、同様の作業を行った。重機による表土掘削は、調査区が離れていたこともあって、数回に分けて実施せざるを得なかった。

（３）遺構検出と精査

遺構の検出は、第Ⅲ層（地山である褐色土上面）面でのみ行った。古代の遺物包含層である第Ⅱ層（黒～黒褐色土）が残る部分では、その層の上面での検出を試みた箇所もあるが不明瞭であり、ほとんどは第Ⅲ層面での検出となった。

検出した遺構は、前回の検出遺構との混同を避ける意味から、検出順に３桁の連番、101号住居跡、102号土坑のように命名した。この遺構名は基本的に付け直しをせず、柱穴状土坑には欠番としたり、



点名	X	Y	H
グリッド原点（ＡＩａ１）	-95700.000	20300.000	—
基１	-95898.384	21074.074	89.746
基２	-95881.459	21246.064	87.955
補１	-95868.702	21034.918	90.128
補２	-95853.632	21065.899	89.773
補３	-95816.590	21242.322	88.011
補４	-96000.259	20873.042	91.035
補５	-96005.812	20767.152	91.957
補６	-95983.869	20651.158	93.016
補７	-96016.923	20572.784	93.811

第４図　グリッド配置図

土坑に変更したものもある。

竪穴住居跡の調査は四分法、その他の遺構については二分法を原則としたが、調査区の幅が狭かったこともあり、それに拠れない遺構もあった。個々の遺構は、土層の堆積や遺物の出土状態、遺構の全景を主体に写真撮影を行い、状況を見ながら土層図は人力で、平面図は電子平板により作図した。

遺構内の出土遺物は、遺構名と出土層位や地点を記載して取りあげ、床面と底面から出土したものは平面図に出土地点を入れた。遺構外からの出土分は、本調査区・確認調査区の別に層位を記して取りあげた。

竪穴住居跡の精査は、カマド精査後に貼床が認められるものについてはそれを除去、その断面図を追加し、写真撮影を経て終了としている。

（４）写　真　撮　影

写真撮影は、６×９判モノクロームフィルムカメラ(FUJI GSW690Ⅲ)１台とデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS 5D)１台を使用したが、後者のみですべてを賄った遺構もある。実際の撮影では、日付や被写体(遺構名など)を記した「撮影カード」を写し込み、室内整理時に活用した。

この他、現地説明会開催後の平成23年８月９日(火)には、セスナ機による航空写真撮影を実施している。

（５）調　査　経　過

平成23年３月11日(金)に起きた東日本大震災の影響により、調査は予定された期日から２週間ほど遅れた４月26日(火)から行われた。以下にそれ以降の作業経過を記す。

４月26日(火)資材搬入と環境整備(登録作業員20数名)
５月６日(金)重機による表土剥ぎの打ち合わせ
５月９日(月)重機稼働開始
５月26日(木)委託者、ほ場整備工事業者、県教育委員会生涯学習文化課と現地協議。
　　内容　①調査不能箇所について②調査に支障のある用水路の取り扱い
５月31日(火)ほ場整備工事業者による用水路の切り回し作業開始。
６月16日(木)調査員１名増員(30日まで)
７月５日(火)調査期間延長に係る三者協議。８月いっぱいまで期間延長とし、東側調査区から部分的に終了箇所を引き渡すことが決定される。
７月14日(木)調査区東部の部分終了確認。追加の試掘調査を行うことが決まる。
７月28日(木)２回目の部分終了確認。その箇所については８月12日引き渡しとなる。
８月６日(土)午前中に現地説明会開催。参加者70名を数える。
８月９日(火)東邦航空による空中写真撮影。
８月29日(月)重機による一部埋め戻し。
９月２日(金)資材整理とトラックへの積み込みを行い調査終了。

２　室　内　整　理

（１）作　業　経　過

平成23年11月１日（火）室内整理作業開始。12月中旬まで調査員は調査で不在のため、遺物水洗・記名・接合等を作業員５名で進める。

平成24年１月31日（火）作業員１名減、４名体制となる。

３月１日（木）調査員が１名増員となり２名体制。作業員は１名減の３名体制。

３月30日（金）平成23年度の室内整理作業を終了。

（２）遺物整理の方法

出土した遺物は、まず種類別（土器・土製品類、石器・石製品類、鉄製品、陶磁器類）に分類し、地点ごとに重量計測を行った。その際は、野外調査時の遺物収納袋で管理、連番を付けて一覧表を作成した。その後、遺物別に註記・接合作業を経て、本書掲載分と不掲載分を選択、掲載分は種類毎に仮番号を付して登録作業を行った。この後、それぞれの実測、点検・修正、トレースを行い、それらをスキャナーで取り込んでデジタルデータとし編集した。仮番号は、最終的に遺構内の遺物から掲載番号（算用数字の連番）に付け替えている。

本書への掲載にあたっては、遺構内出土の遺物を優先して選び、表土層や撹乱からのものは基本的に不掲載としているが、これにあたらないものもある。

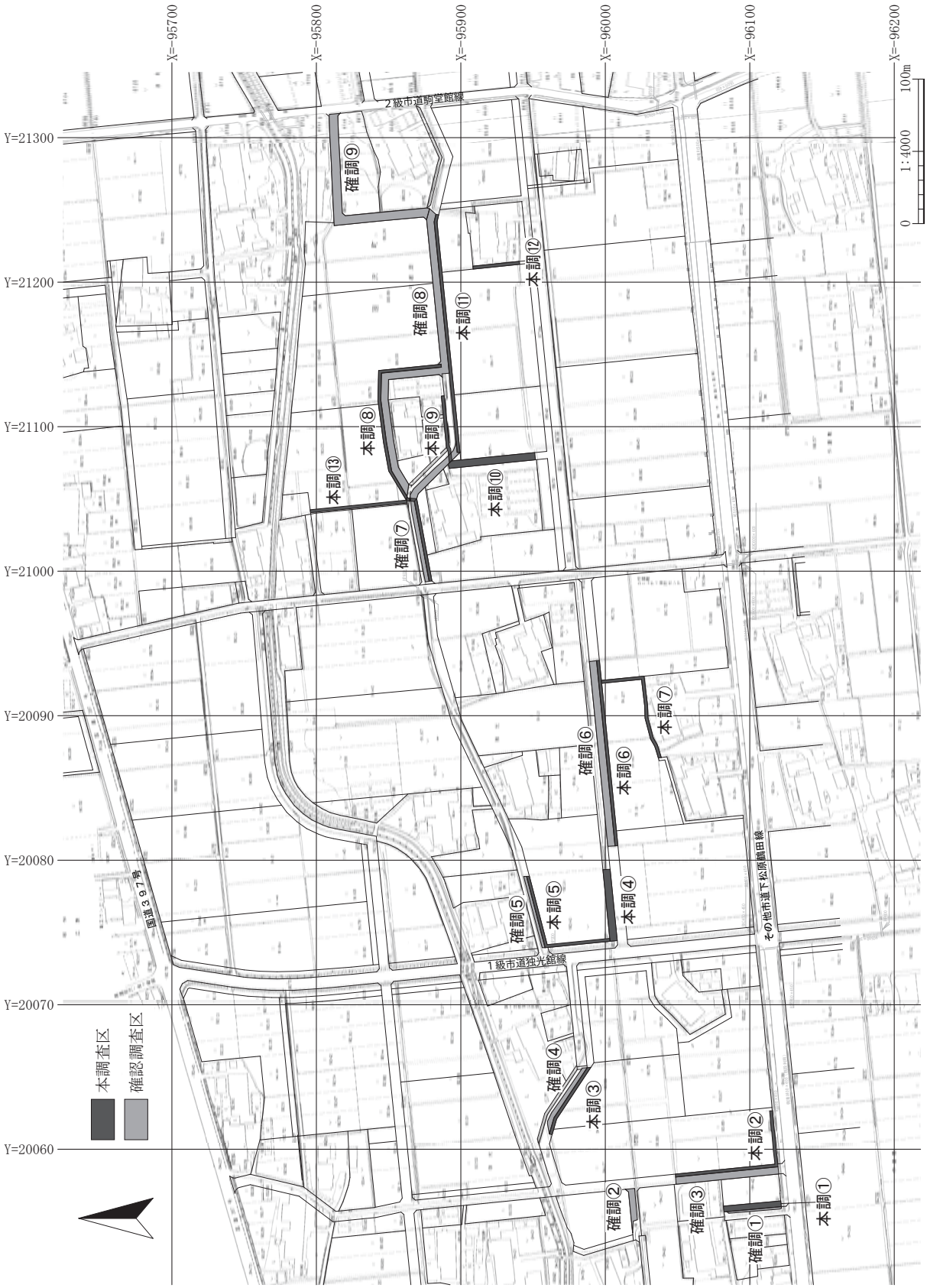
（３）遺構図面の整理

野外調査時に作製した遺構図は、電子平板（（株）キュービックの「遺構くん」）のデータを用いて作製した平面図と、作業員２名が人力で作製した断面図（縮尺1/20）をデジタルデータ化して、修整を加えた後にデジタル編集した。

（４）写真撮影と整理

野外調査時の遺構写真等は、６×９判モノクローム写真はネガとともにアルバムに貼付し、デジタルカメラで撮影したデータは、遺構ごとに個別のフォルダーにまとめた。

遺物の写真は、当センター写真室において撮影技師がデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS1 MarkⅡ）を使用し撮影した。撮影カット数はおよそ300カットである。


X=-95700
X=-95800
X=-95900
X=-96000
X=-96100
X=-96200
Y=21300
Y=21200
Y=21100
Y=21000
Y=20090
Y=20080
Y=20070
Y=20060
0
1:4000
100m
2級市道駒堂館線
1級市道独光館線
国道397号
その他市道下松原鳥田線
本調査区
確認調査区
確調⑨
確調⑧
確調⑦
確調⑥
確調⑤
確調④
確調③
確調②
確調①
本調⑫
本調⑪
本調⑩
本調⑨
本調⑧
本調⑦
本調⑥
本調⑤
本調④
本調③
本調②
本調①
本調⑬

第５図　調査範囲図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡12棟、住居状遺構３棟、掘立柱建物跡13棟、土坑47基、溝跡42条、焼土遺構２基、柱穴状土坑約270個である。調査区が現道を境に大きく２つに分かれるため、東側調査区と西側調査区と区分して報告する。

１　東 側 調 査 区

（１）竪 穴 住 居 跡

調査区の幅が狭いため住居全体を調査できたものは数棟であり、カマドを検出できなかったものや、ごく僅かな範囲の精査に終わったものもある。よって、後述する住居状遺構としたものとの明確な区別はできていない。当初、遺構名はすべて住居跡としていたが、遺物の種類やその出土状況などから住居状遺構へと変更して報告するものもある。（第104号住居跡→第102号住居状遺構・第112号住居跡→第103号住居状遺構）これらについては欠番扱いとした。

101号住居跡

遺構（第11図、写真図版３）

〔位置・重複〕東側調査区ＢＸ区の北東隅に位置する。遺構間の重複はなく、本遺構の北側はおおよそ半分が調査区域外にある。

〔検出面・状況〕第Ⅳ層面で黒褐色土のプランを確認した。

〔平面形〕方形と思われるが、上述のとおり北側の隅が調査区外に延びている。

〔規模〕一辺2.7～3.0ｍと推定される。〔壁高〕12～24㎝

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルト質土の単層を基調とし、部分的に褐色の粘土がブロック状に混入している。西隅の埋土は若干黒味が強い。

〔壁〕壁は底面から直立ぎみに立ち上がる。

〔床面〕ほぼ平坦で第Ⅳ層を床面とし、一部貼床が施されている。

〔カマド〕〔柱穴〕〔土坑〕〔周溝〕はいずれも検出されない。

遺物（第47図、写真図版38）

〔出土状況〕埋土から僅かな量の土師器が出土した。

〔土器〕土師器が46.4ｇ出土した。須恵器は出土していない。１は内外面ともハケメ調整が見られる土師器甕の体部である。

時期　甕の器面調整から８世紀代（後述する本書設定の第Ⅰ期かⅡ期）と思われるが、出土遺物が少なく詳細は不明である。

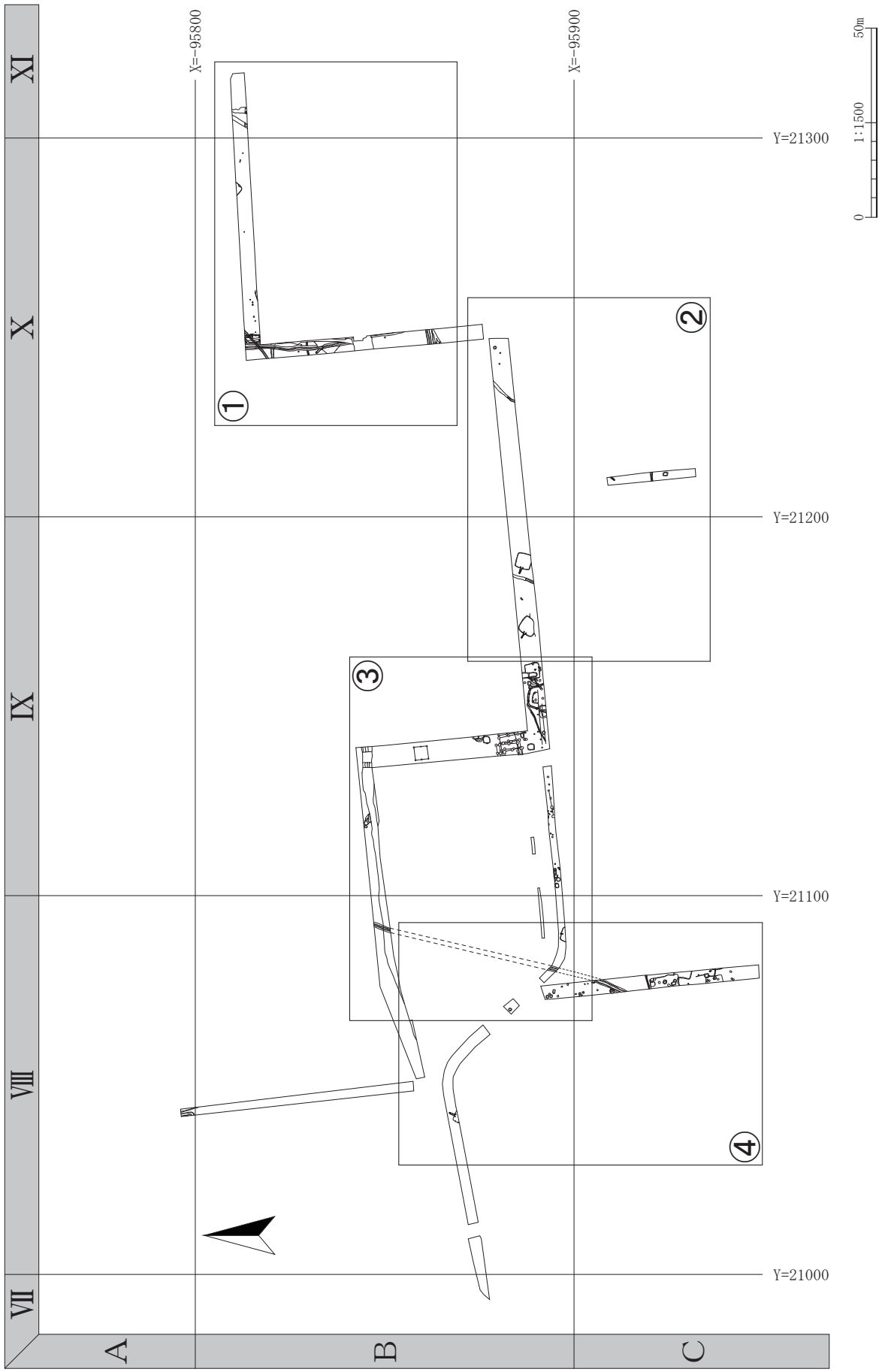
102号住居跡

遺構（第11図、写真図版３）

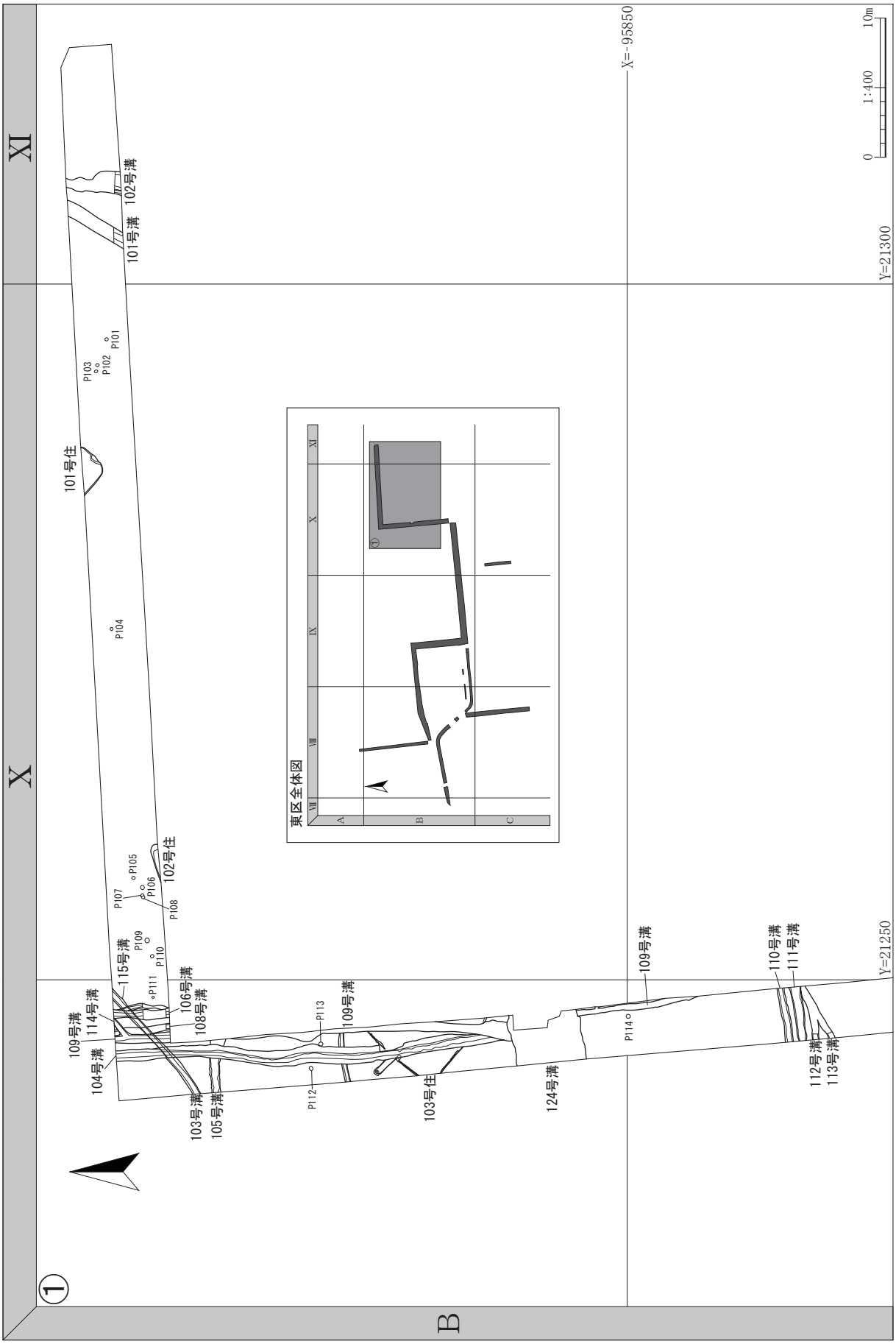
〔位置・重複〕東側調査区のＢＸ区中央北側にあり、調査範囲内では他の遺構との重複はない。本遺構の南側は、ほとんどが調査区域外に延びる。

〔検出面・状況〕第Ⅳ層で黒色土の細長いプランを確認、掘り上げ後に住居と判断した。

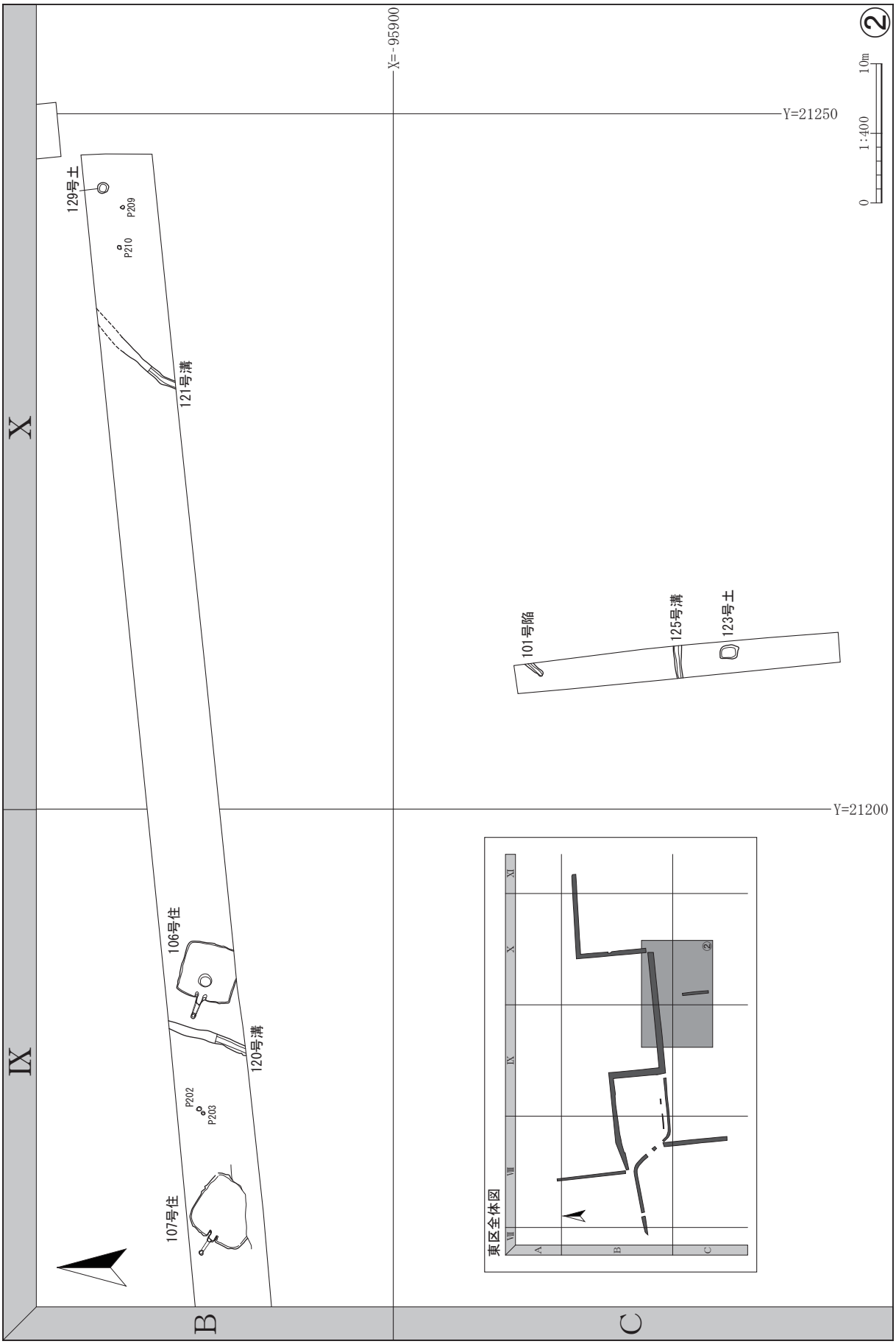
1　東側調査区



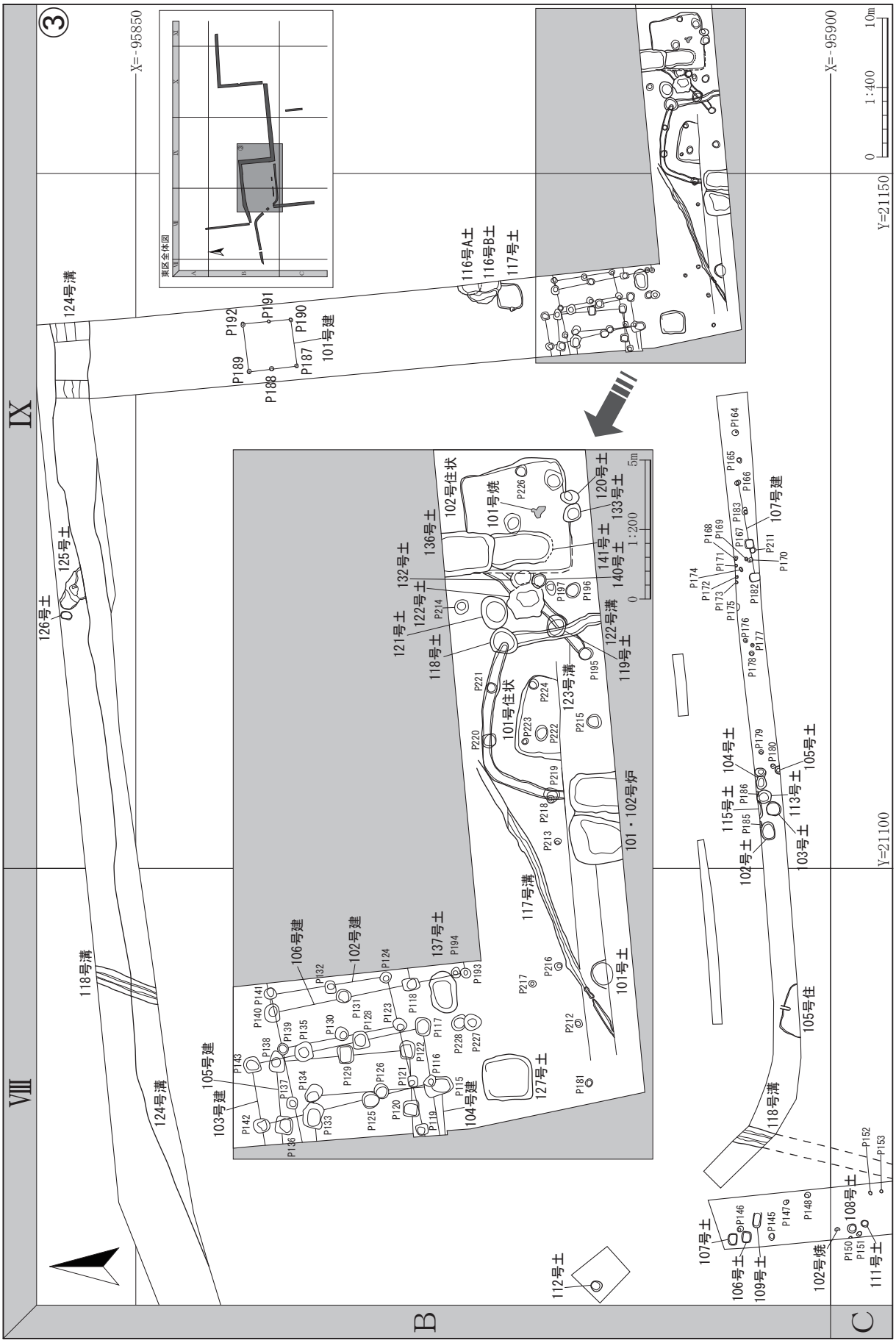
第６図　東側調査区全体図



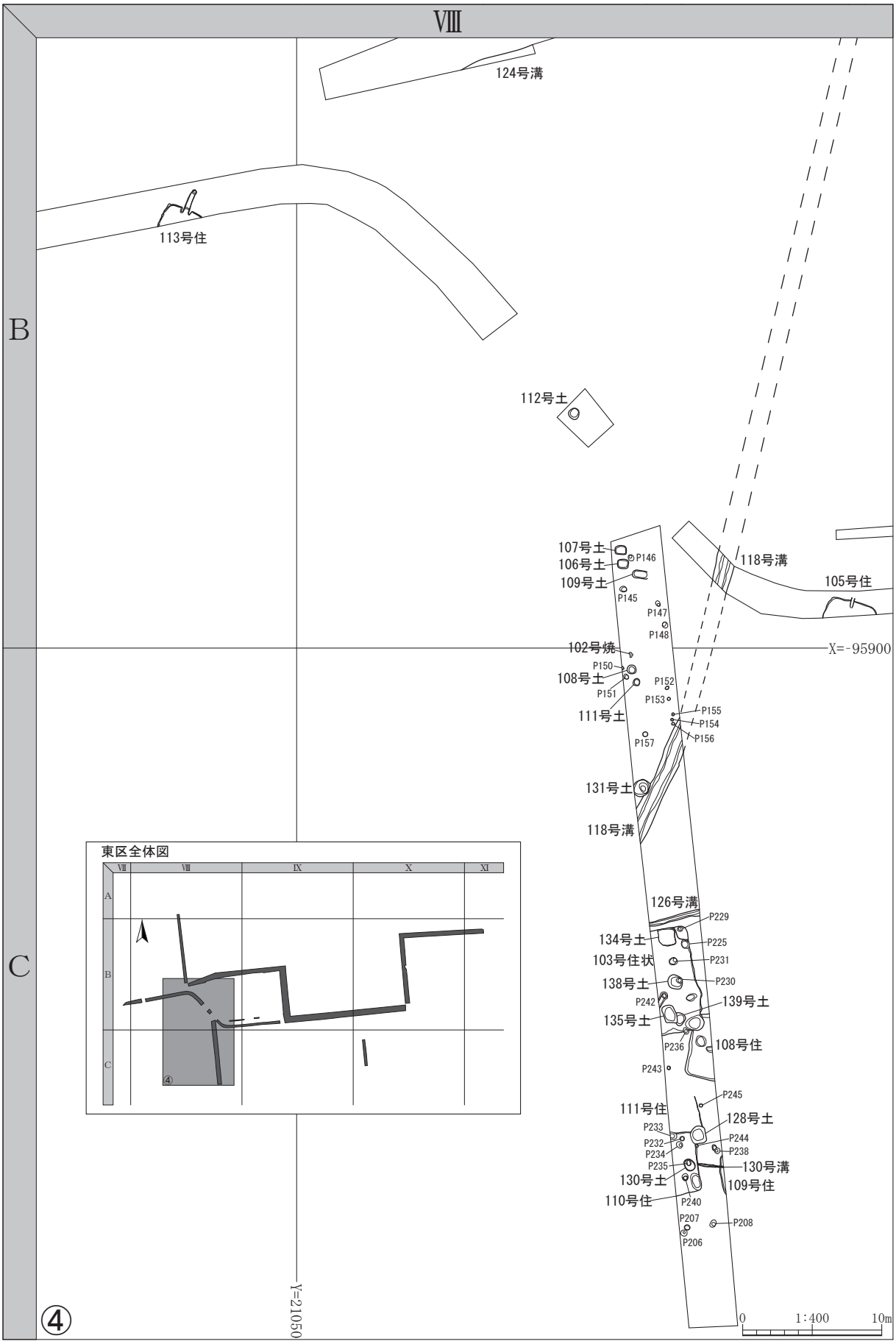
第７図　東側調査区遺構配置図①



第８図　東側調査区遺構配置図②

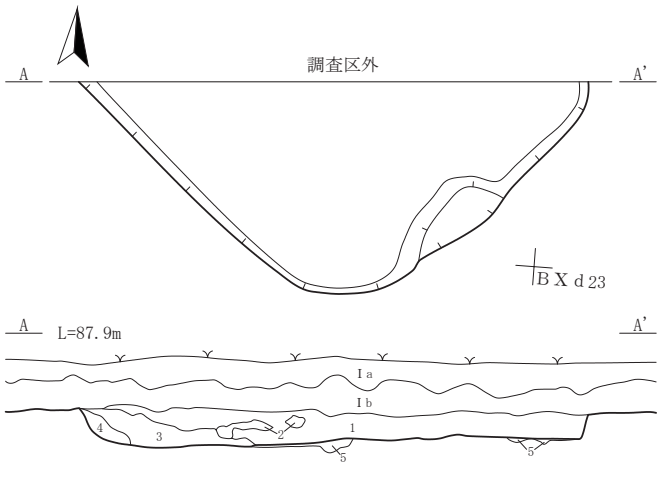


第９図　東側調査区遺構配置図③



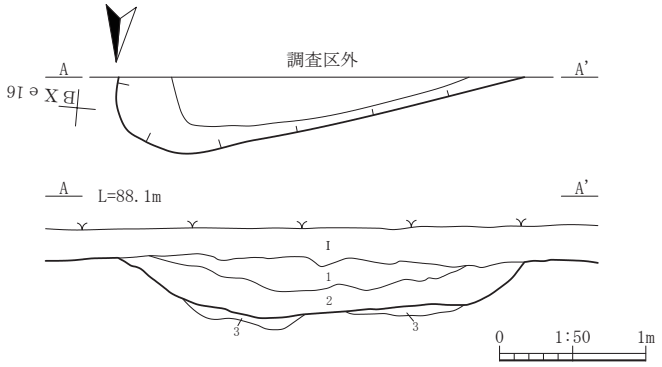
第10図　東側調査区遺構配置図④

101号住居



101号住居
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
　黄褐色土小ブロックをまばらに含む
2. 10YR4/4 褐色粘土 粘性有 締まり有 1層との混合ブロック状
3. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
　黄褐色土粒を全体に含み2層より明るい色調
4. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有 混入物少
5. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有 貼床埋土、部分的

102号住居



102号住居
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土粒をまばらに含む
2. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや有 締まりやや有
　黄褐色土粒の混入少
3. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　黄褐色土粒との混合土、貼床堀り方と思われる

第11図　101・102号住居跡

〔平面形〕住居跡であれば方形と思われるが、土坑の可能性も残る。
〔規模〕不明とせざるを得ない。〔壁高〕23～32cm。
〔埋土〕上下２層に分層した。上位は黄褐色土粒を含む黒色土、下位は上位より黒味を増す。
〔壁〕緩く外傾しながら立ち上がる。
〔床面〕第Ⅳ層を床面とし東側に傾斜がある。貼床が見られる。
〔カマド〕〔柱穴〕〔土坑〕〔周溝〕は確認できない。

遺物（第47図、写真図版38）

〔出土状況〕埋土から土師器片が数点出土した。
〔土器〕土師器のみ100.8ｇ出土している。これにも須恵器は見られない。２は内面が黒色処理されない土師器坏の口縁部である。

時期　９～10世紀代と思われるが、これも出土遺物が少なく詳細は不明である。

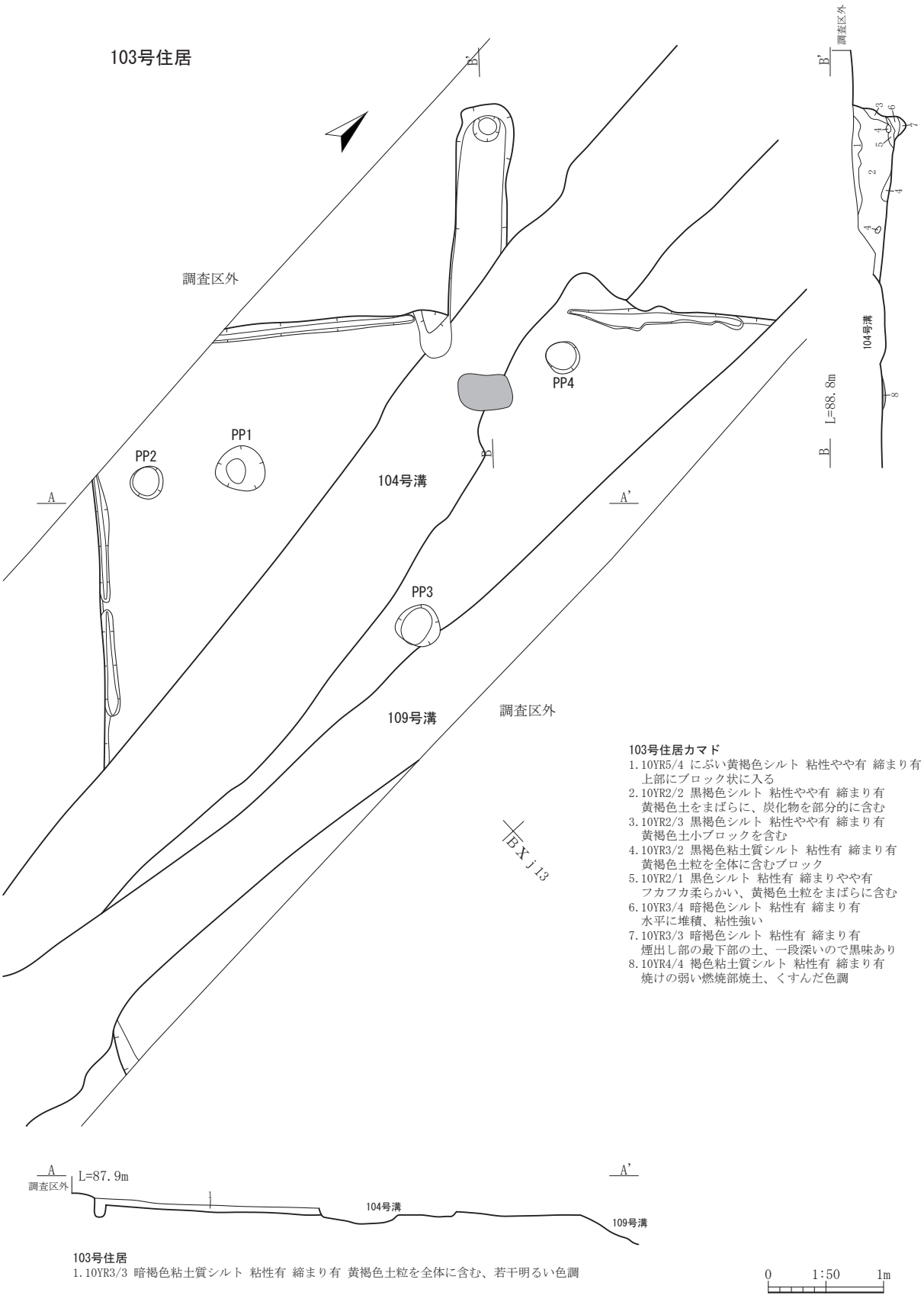
103号住居跡

遺構（第12図、写真図版４）

〔位置・重複〕東側調査区のＢＸ区中央やや北寄りに位置する。本遺構よりも新しい第104・109号溝跡に切られるが、前者はカマド付近で重複し、本体は左袖と燃焼部焼土だけを残す。これも北隅から南

隅を結ぶラインの東側約半分が調査区域外に延びている。
〔検出面・状況〕表土直下の第Ⅳ層面で、黒褐色土の直線的なプランを確認した。溝跡との重複も明瞭であった。
〔平面形〕方形基調と思われる。〔規模〕一辺6.5～7.0ｍほどの大形の住居跡と想定される。
〔壁高〕全体的に６㎝前後しか残存しない。
〔埋土〕暗褐色粘土質シルトが残るのみであり、上部はかなり削れられている。
〔壁〕残りが悪く状況は不明である。
〔床面〕第Ⅳ層を床面とし中央部がやや低い。貼床は施されない。
〔カマド〕＜位置＞北西壁　＜煙道方向＞Ｎ－40°－Ｗ
＜本体＞上述のとおり、左袖の一部と燃焼部焼土が残存する。焼土は30×43㎝ほどに広がるが、厚さは２㎝ほどしかない。
＜煙道・煙出し部＞全長は185㎝ほどで、煙道は僅かに傾斜しながら煙出し部まで下がる。煙出し部の底面はわずかに掘り窪められている。
〔柱穴〕PP １～４の４個検出した。PP １が主柱穴か。直径30～40㎝である。
〔土坑〕今回調査した部分では未確認である。
〔周溝〕北西壁と南西壁に床面からの深さ10㎝ほどの周溝が確認された。その状況から、全周していたものと思われる。
遺物（第47図、写真図版38）
〔出土状況〕埋土から土師器片が数点出土した。
〔土器〕土師器が9.0ｇ出土した。須恵器はない。３はロクロ成形の土師器甕の口唇部である。
時期　９世紀～10世紀代と思われるが、詳細は不明である。

105号住居跡
遺構（第13図、写真図版５）
〔位置・重複〕東側調査区ＢⅧ区の南東隅付近に位置する。遺構同士の重複はないが、住居の北側の煙出し・煙道は一部が撹乱を受けている。また、本遺構の南側約2/3は調査区域外にある。
〔検出面・状況〕第Ⅳ層面で黒褐色土のプランを確認した。残存状態はあまり良くない。
〔平面形〕方形基調と思われる。〔規模〕一辺は3.6～3.8ｍか。〔壁高〕10㎝前後。
〔埋土〕締まりのある黒褐色土の単層である。〔壁〕残りが悪く状況は不明である。
〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、細かい凹凸が見られる。全体に貼床が施されている。
〔カマド〕＜位置＞北東壁中央やや西寄り　＜煙道方向＞Ｎ－15°－Ｅ
＜本体＞カマド袖部は確認できず、燃焼部焼土のみ残る。焼土の広がりは24×30㎝、厚さは数㎝で焼け具合は良好とは言えない。
＜煙道・煙出し部＞燃焼部焼土奥側から70㎝ほど残存している。煙出し部の状況は不明である。
〔柱穴〕〔土坑〕〔周溝〕は今回調査できた部分では未確認。
遺物（第47図、写真図版38）
〔出土状況〕埋土から土師器・須恵器片が若干出土した。
〔土器〕土師器は55.4ｇ、須恵器は6.2ｇ出土した。４は非ロクロ成形の土師器坏の口縁部、内面は黒色処理され、外面はヨコナデ調整が明瞭である。５はロクロ成形の土師器甕口唇部である。
時期　９世紀前～後半（第Ⅲ期）と思われる。



第12図　103号住居跡

106号住居跡

遺構（第13・14図、写真図版６）

〔位置・重複〕東側調査区ＢⅨ区の南東隅付近に位置し、第107号住居跡とは西側に11ｍの距離を置く。遺構同士の重複は認められない。本遺構の南隅のみ調査区域外にある。

〔検出面・状況〕第Ⅱ層で遺物が出土。順次掘り下げて第Ⅳ層面で黒褐色土の方形プランを確認した。

〔平面形〕きれいな方形である。〔規模〕4.00ｍ×4.07ｍ。〔壁高〕15～17㎝。

〔埋土〕４層に分層した。上位は締まりのある黒褐色土、下位は黒色土が堆積し、壁際ににぶい黄褐色の粘土質土を含む。

〔壁〕確認された壁は、いずれも緩く外傾して立ち上がる。

〔床面〕細かな凹凸をもつが比較的平坦である。第Ⅳ層を床面とする。全体に貼床が見られるが、暗褐色シルト質土が埋め込まれている。

〔カマド〕＜位置＞北西壁中央　＜煙道方向＞Ｎ－67°－Ｗ

＜本体＞地山を削り出した袖を左右で確認できた。燃焼部焼土は形成されていないのか、確認出来なかった。

＜煙道・煙出し部＞くり抜き式の煙道で全長は155㎝を測る。煙道の底面は、煙出しまでほぼ平行に延び、煙出し部の底は７㎝ほど下に掘り込まれる。

〔柱穴〕カマドの焚き口付近に小土坑を有する。27×40㎝ほどの規模であるが、位置的にも柱として機能したものではないと思われる。

〔土坑〕Pit １はカマドの南側にあって、直径90㎝の円形をなす。床面からの深さは14㎝ほどである。

〔周溝〕確認されなかった。

遺物（第47・48図、写真図版38）

〔出土状況〕住居の埋土や貯蔵穴と思われる土坑の埋土、貼床などから土師器の坏・甕類が出土した。須恵器はごく僅かである。

〔土器〕土師器は5,844.9ｇ、須恵器は4.8ｇ出土した。６・７は非ロクロ成形の土師器坏で、内面は黒色処理される。いずれも外面に軽い段を有し、段より上位はヨコナデ調整、下位はヘラケズリ調整が明瞭に残る。ともに内面は丁寧にヘラミガキが施されている。８も非ロクロ成形の高坏である。これも外面に軽い段をもち、器面調整が６や７と同様であるもの。９は非ロクロ成形で長胴の、10は体部が横に張るいわゆる球胴甕である。内外面ともに口縁部にはヨコナデ、体部にはハケメ調整が明瞭に残るもので、これらが標準的な大きさであろう。後者の頸部には２条の段が巡り、器面調整はこれを境に変わる。11は体部がヘラナデ調整される球胴甕の破片で、輪積み痕が観察されるもの。12は10と同様の球胴甕体部、13は長胴甕で９よりも小ぶりである。14も13に似るが、外面にヘラミガキ調整が施される個体である。

時期　出土遺物から８世紀中頃から後半（第Ⅰ期）に属する遺構と思われる。

107号住居跡

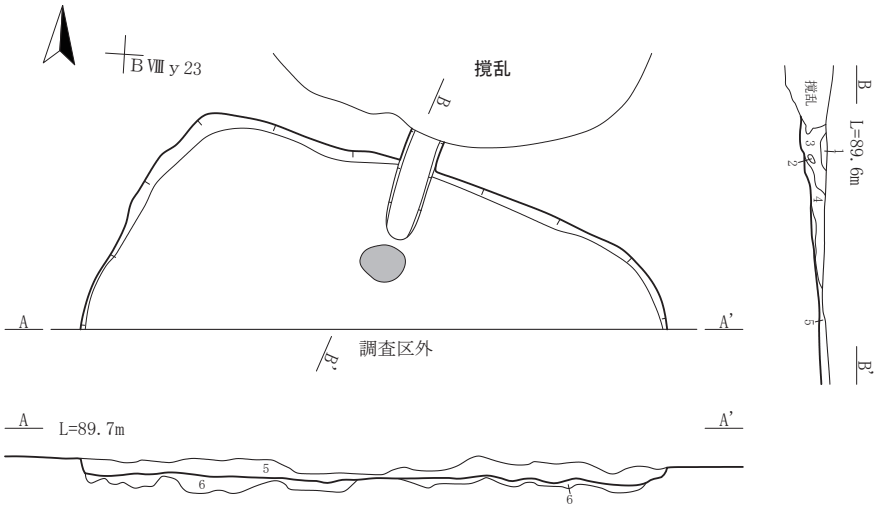
遺構（第15・16図、写真図版７）

〔位置・重複〕東側調査区ＢⅨ区の南東隅寄りに位置する。遺構間の重複はない。本遺構の南隅は撹乱により失われている。

〔検出面・状況〕これも第106号住居跡同様、第Ⅳ層面で黒褐色土の方形プランと遺物から確認した。

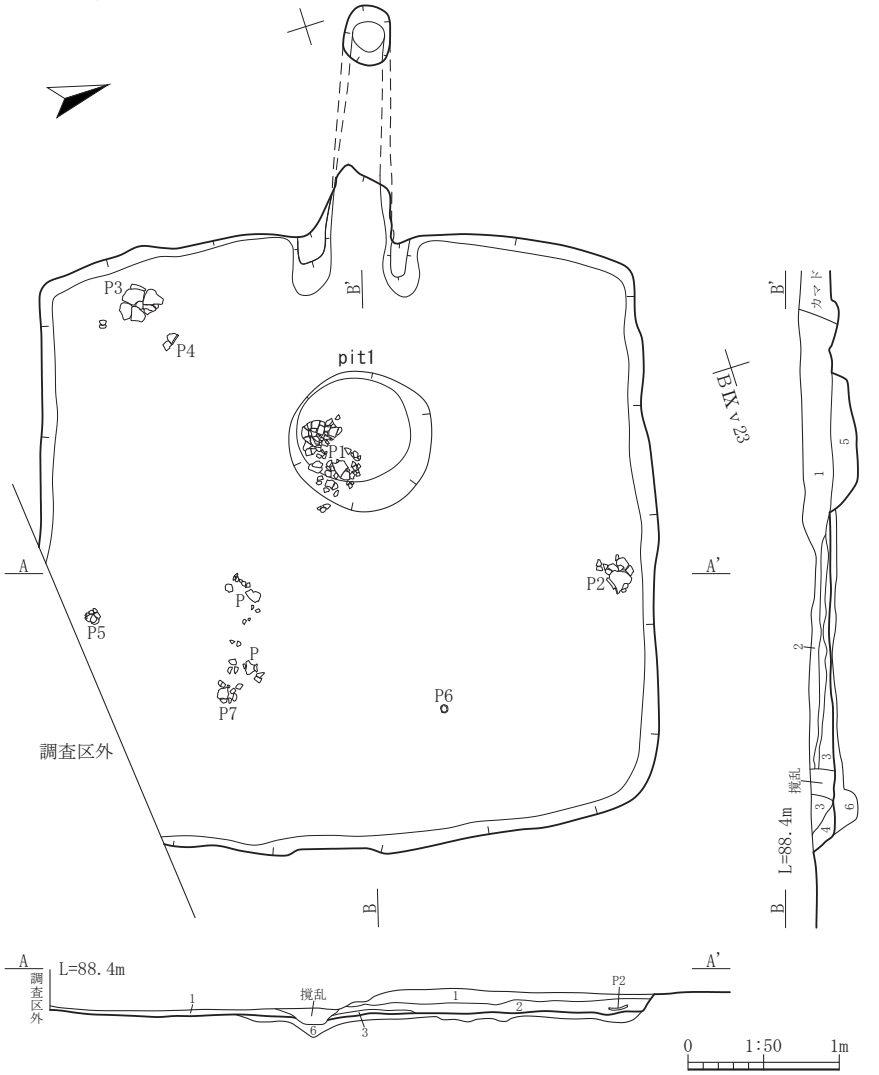
〔平面形〕隅丸の方形をなす。〔規模〕4.55ｍ×4.52ｍ。〔壁高〕20～26㎝。

105号住居



105号住居
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
　粘性あまりなし 締まり有
　黄褐色土粒をまばらに含む
2. 7.5YR4/4 褐色シルト
　粘性あまりなし 締まりやや有
　くすんだ色調の焼土ブロック
3. 10YR3/2 黒褐色シルト
　粘性やや有 締まり有
　黄褐色土粒、焼土粒わずか
4. 10YR3/2 黒褐色シルト
　粘性やや有 締まり有
　明褐色の焼土粒を全体に含む
5. 10YR3/2 黒褐色シルト
　粘性やや有 締まり有
6. 10YR2/3 黒褐色シルト
　粘性有 締まり有

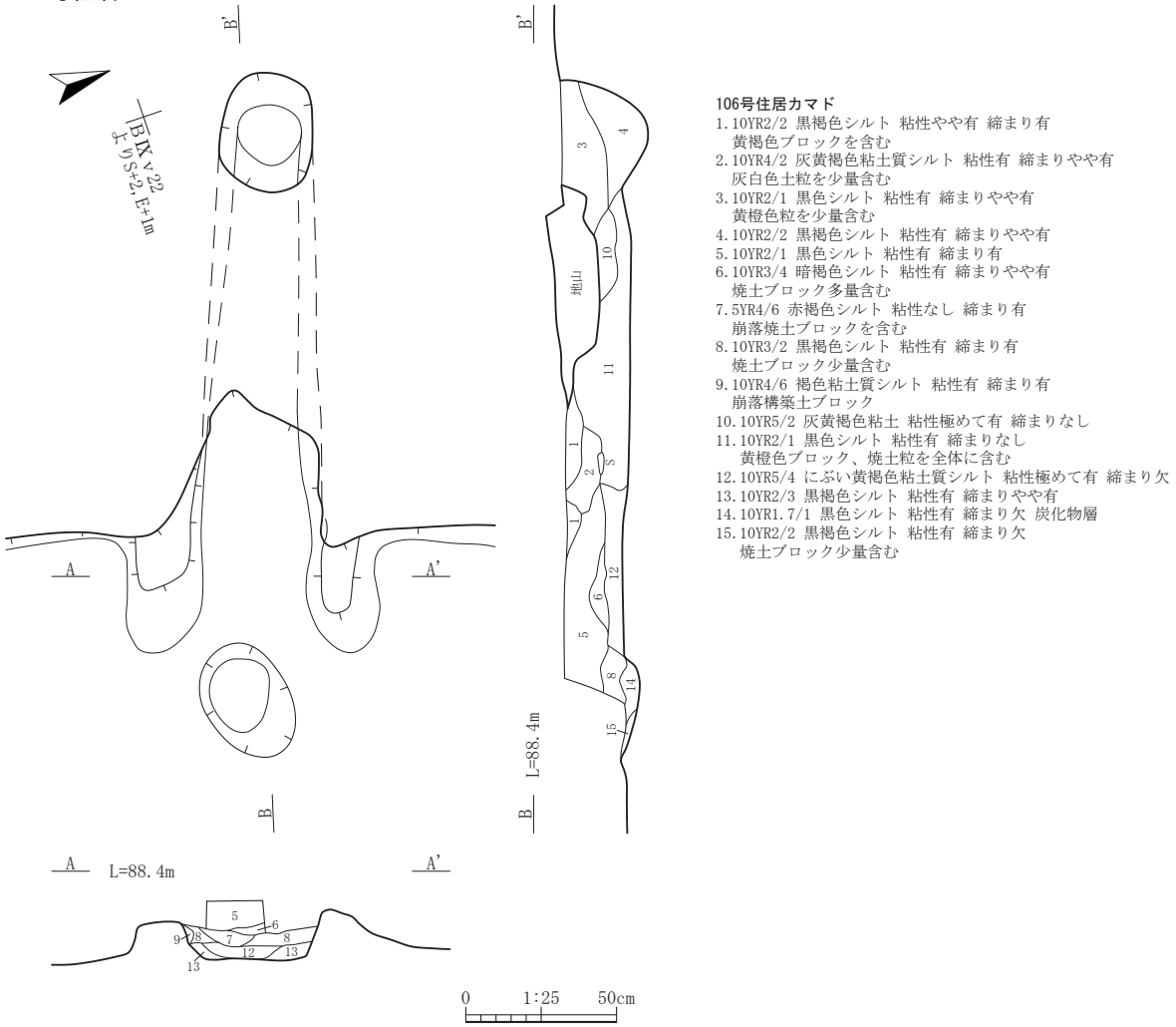
106号住居



106号住居
1. 10YR2/2 黒褐色シルト
　粘性有 締まり有
2. 10YR2/1 黒色粘土質シルト
　粘性有 締まりやや有
3. 10YR3/2 黒褐色シルト
　粘性有 締まり有
　灰白色粘質土を少量含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
　粘性有(強) 締まりやや有
　灰白色粘質土を多く含む
　→出入り口のためか？
5. 10YR2/2 黒褐色シルト
　粘性有 締まり有
　灰黄褐色ブロック多量に含む、
　pit1埋土
6. 10YR3/3 暗褐色シルト
　粘性有 締まり有 貼床土

第13図　105・106号住居跡

106号住居カマド



第14図　106号住居跡カマド

〔埋土〕５層に分層したが、概ね上下２層からなる。上位は締まりのある黒褐色土、下位は黄褐色土粒が混入する黒褐色土で、後者は粘性に富んでいる。また、下位の黒褐色土の下には暗褐色土のシルト質土を含む箇所がある。

〔壁〕いずれの壁も直立ぎみに立ち上がっている。

〔床面〕第Ⅳ層を床面としほぼ平坦である。全域に数 cm の貼床が認められ、遺物若干も出土した。掘り方には、褐色土粒を含む黒褐色土などが入れられている。

〔カマド〕＜位置＞北西壁中央　＜煙道方向＞Ｎ－58°－Ｗ

＜本体＞これも地山削り出しの袖が左右とも残り、その間には遺物と燃焼部焼土が確認できる。焼土は25×40cm ほどに広がり、厚さは４、５cm である。全体に焼けの良い暗赤褐色を呈している。

＜煙道・煙出し部＞これもくり抜き式の煙道で全長は130cm を測る。煙道は煙出し部に向けてごく僅かに下がっていくが、その底面に掘り込みは認められない。

〔柱穴〕PP １～７の７個を伴う可能性があるものとした。主柱穴は PP ４～７の４個と思われるが、直径は22～24cm ほどである。その他のものが補助柱となるかどうかは不明である。

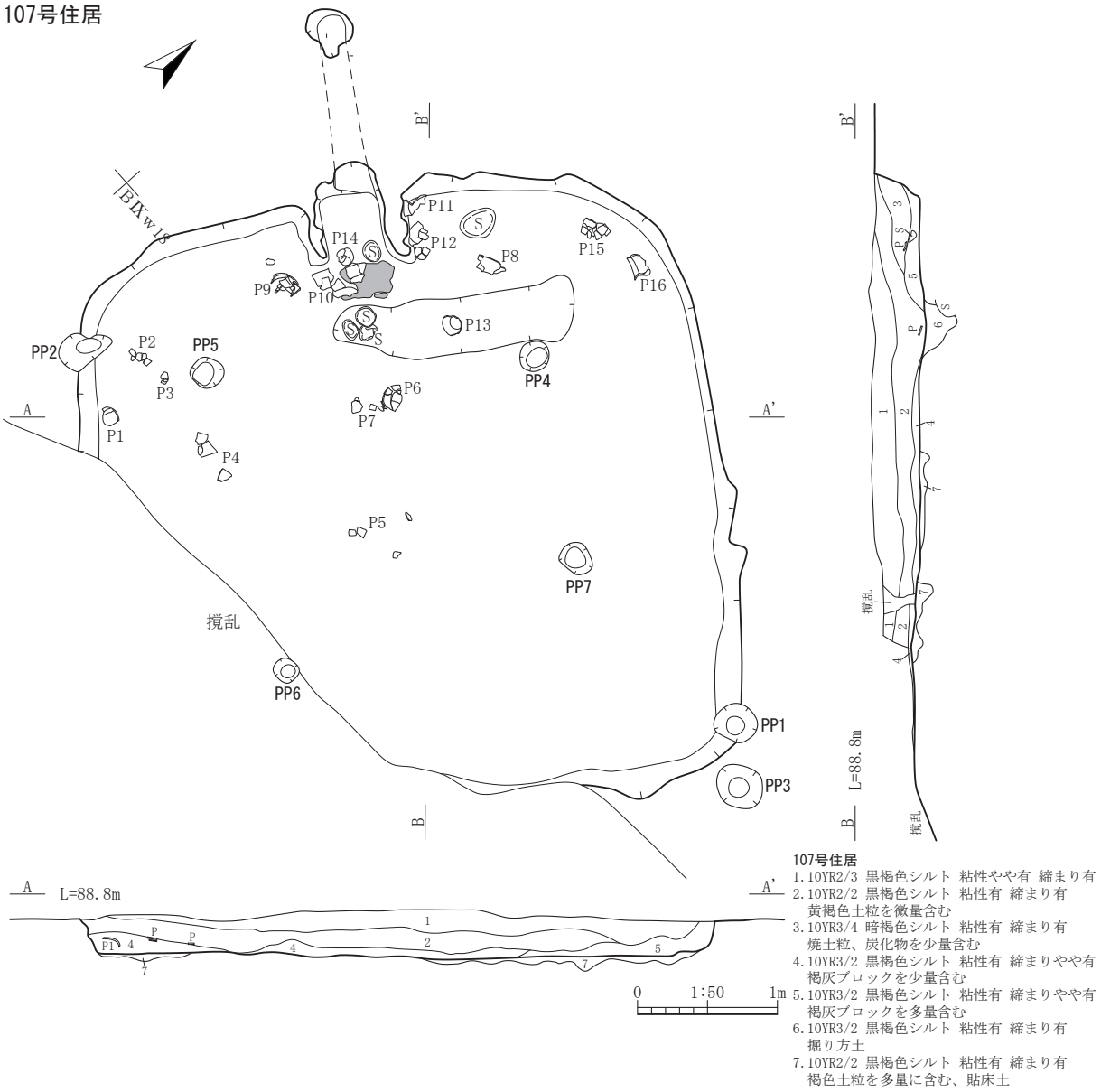
〔土坑〕カマドの焚き口部手前に長方形をなす掘り込みが認められた。深さは数 cm で、数個の礫や遺物も若干出土した。貯蔵穴となる土坑かは不明である。

〔周溝〕確認できない。

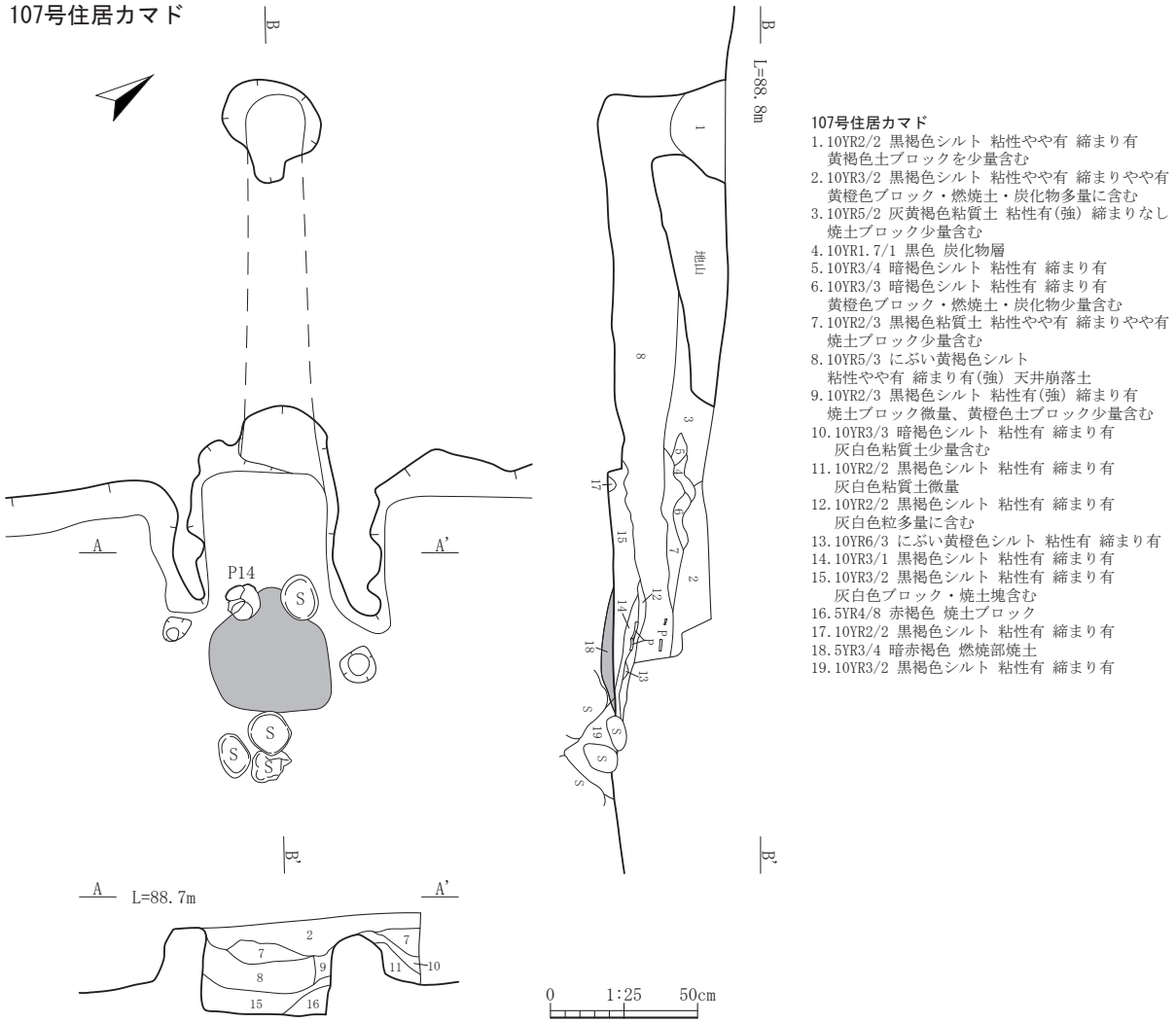
遺物（第48～50図、写真図版38～40）

〔出土状況〕埋土や床面から土師器の坏・甕類、甑の底部、須恵器の坏・甕類が出土した。床面およびその直上からの出土が多い。土師器の坏にはロクロ成形と非ロクロ成形のものがある。

〔土器〕ここからは土師器が16,322.8ｇ、須恵器は688.8ｇ出土している。15～27は非ロクロ成形の土師器坏で、内外面が黒色処理されるもの（16・19・20～23・25・26）と、内面だけのもの（15・18・24・27）がある。器形も16のような碗に近いもの、19のような口径が大きく器高の低いもの、そしてその中間形などバリエーションに富む。15～21は外面のみに軽い段を有しているが、器面調整がそれを境にヘラケズリ調整に変わるものがある（18・19）。内外面にヘラミガキ調整が施されている坏は、外面のそれも丁寧である（15～17・19・21など）。22・23は同一個体であった。口唇部が外反する器形は他には認められないものである。28～30はロクロ成形の土師器坏で、28の底部外面には回転糸切り痕が、29には回転ヘラ切り痕が、30にはヘラによる再調整痕が残る。28の外面体部下端はヘラケズリ調整が明瞭。29の体部から



第15図　107号住居跡



第16図　107号住居跡カマド

口縁部にかけての立ち上がりは直線的である。30はいわゆる赤焼き(須恵系)土器である。31～33は高坏で、いずれも内面は黒色処理される。31の外面にはうっすら段を有している。34は鉢とした。外面に２段の沈線があり、器面は内外面ともヘラナデ調整されているもの。35･36はロクロ成形の甕口縁部付近である。37･38は多孔式の甑底部で、同一個体の可能性もある。39は口縁の長さや外反するところなどから球胴甕の口縁部か。40～43は最大径を口唇部にもつ長胴甕の一群である。器面調整は、口縁部がヨコナデ後にヘラミガキ、体部がヘラナデ後にヘラミガキ調整である。44はこれらよりは小ぶりで体部中央に最大径をもつものである。45～47は須恵器の坏で、45は火襷が内外面に見られるもの。48～51は須恵器甕の破片資料で、49･50の内面には当て具痕が明瞭である。

時期　非ロクロ成形とロクロ成形の土師器が混在することから、８世紀末葉から９世紀初め(第Ⅱ期)に属する遺構と考えられる。これらと第106号住居跡出土の遺物を比較すると、若干の時期差が認められそうであるが、遺構のあり方から、同時存在していた可能性も否定できない。

108号住居跡

遺構（第17図、写真図版８）

〔位置・重複〕東側調査区ＣⅧ区の中央東寄りに位置し、第103号住居状遺構の南東隅と本遺構の北隅が重複する。本遺構の方が旧い。また本遺構の東側のほぼ半分は調査区域外に延びている。

〔検出面・状況〕この周辺は、表土を除去した段階で第Ⅱ層から遺物が多く出土した箇所であり、順次検出面を下げて第Ⅲ層からⅣ層上面で黒褐色土のプランを確認した。検出時には重複関係が明瞭ではなかった。

〔平面形〕方形と思われる。〔規模〕4.4m×？で、一辺は4.5m前後か。〔壁高〕24～28cm。

〔埋土〕２層に分層した。上～中位は黄褐色土粒を含む黒褐色土、下位はそれよりも黒味が若干抜ける黒褐色土が堆積する。

〔壁〕確認できた壁はいずれも外傾して立ち上がる。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とし細かい凹凸がある。暗褐色の粘土質シルト土が入れられる貼床が数 cm にわたって観察される。

〔カマド〕〔周溝〕は検出されない。

〔柱穴〕主柱穴となる PP １・２の２個確認できた。いずれも直径32cm、深さは後者で56cm である。

〔土坑〕貯蔵穴と思われる土坑が２基確認された。Pit １は73×84cm の略円形で、Pit ２は東側の調査区域外に延びており、規模は不明である。

遺物（第50･51図、写真図版40）

〔出土状況〕埋土と貼床から土師器の坏・甕、須恵器の甕、鉄製品が１点出土した。

〔土器〕土師器が572.5ｇ、須恵器は233.8ｇ出土した。52･53はロクロ成形の土師器坏で、２点とも器高があるのが目立つ。いずれも内面はヘラミガキ調整とともに黒色処理され、外面の体部下端にはヘラケズリが、53には底部外面にも再調整痕が残る。54はロクロ成形のいわゆる赤焼き（須恵系）土器の小形甕、55は須恵器甕の体部破片である。

〔鉄製品〕１点出土した。56は接合できなかった同一個体の鉄製刀子である。

時期　出土遺物から９世紀前半～後半（第Ⅲ期）に属するものと思われる。

109号住居跡

遺構（第17図、写真図版９）

〔位置・重複〕東側調査区ＣⅧ区、第108号住居跡の南、約５ｍに位置する。遺構のほとんどは東側の調査区域外にある。カマドを持たない住居状遺構、あるいは土坑の可能性もある。

〔検出面・状況〕検出面は第108号住居跡と同様である。

〔平面形〕方形と思われるが不明である。〔規模〕推定３ｍ前後　〔壁高〕22～31cm。

〔埋土〕２層に分層した。上下とも黒褐色の粘土質シルトが堆積するが、混入物である黄褐色土粒を含む量や大きさが異なる。

〔壁〕西壁は直立気味立ち上がる。〔床面〕大きな凹凸が見られる。第Ⅳ層を床面とする。

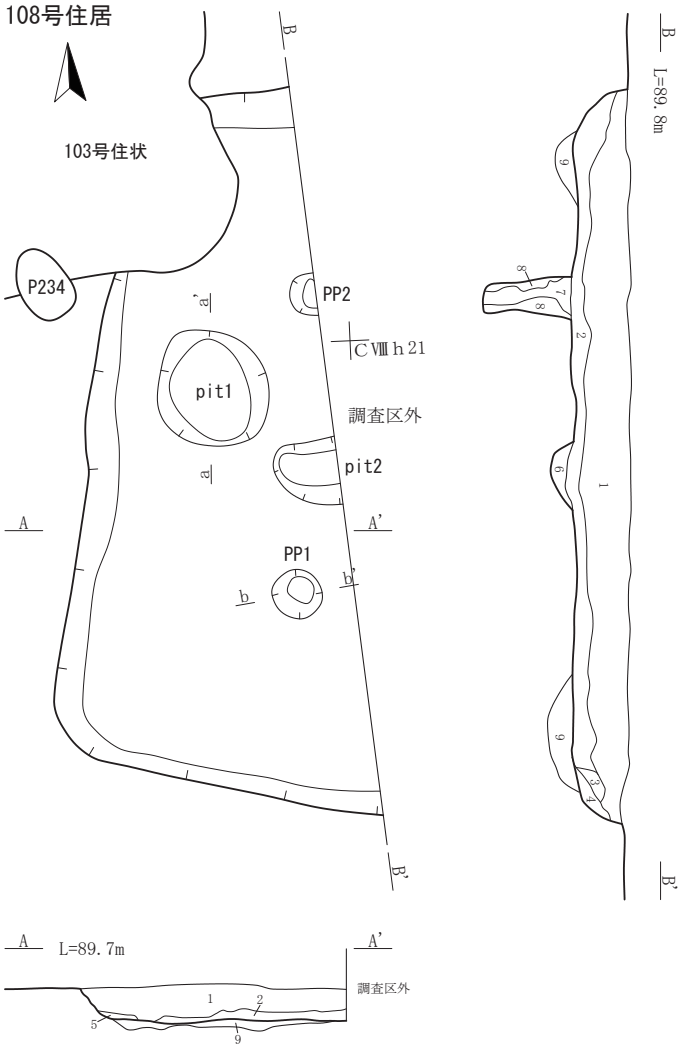
〔カマド〕〔柱穴〕〔土坑〕は検出されない。

遺物（第51図、写真図版40）

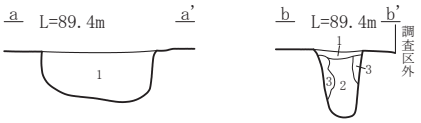
〔出土状況〕僅かに掘削した範囲の埋土から土師器が出土した。

〔土器〕土師器は32.6ｇ出土し１点掲載したた。57はロクロ成形の土師器坏口縁部である。

時期　103号住居状遺構との重複関係から、９世紀前半（第Ⅱ期か？）としておく。

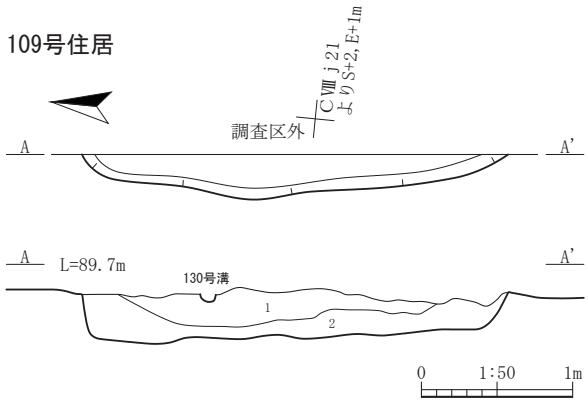


108号住居
1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
　黄褐色土粒をまばらに含む
2. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まりやや有
　1層より黒味が抜ける
3. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　黄褐色土粒を全体に含む
4. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　黄褐色土粒をわずかに含む
5. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
6. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　炭化物粒をわずかに含む、pit2
7. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　黄褐色土粒を全体に含む、PP2
8. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　地山崩落ブロック、PP2
9. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　貼床土



108号住居 pit1
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
　黄褐色土粒含む

108号住居 PP1
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
　炭化物粒をわずかに含む
2. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　黄褐色土粒を全体に含む
3. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　地山崩落ブロック



109号住居
1. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　黄褐色土粒小ブロックを全体に含む
2. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　黄褐色土粒を全体に含む

第17図　108・109号住居跡

110号住居跡

遺構（第18図、写真図版10）

〔位置・重複〕東側調査区ＣⅧ区の中央東寄り、第108号住居跡の南４ｍ、第109号住居跡の西1.5ｍに位置する。本遺構の北東隅は第128号土坑に、北壁中央付近はP233に切られ、かつ第111号住居跡の南側を切る。第130号土坑との新旧は不明である。また、本遺構のおよそ2/3は西側の調査区域外にある。

〔検出面・状況〕第Ⅱ層から検出面を下げ、第Ⅲ層からⅣ層上面で検出した。

〔平面形〕方形と思われる。〔規模〕4.4ｍ×？（方形として一辺4.5ｍ前後か）〔壁高〕15cm 前後。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色土の単層で、第Ⅱ層がのる部分がある。

〔壁〕南壁は直立気味に立ち上がる。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とし全体的に平坦である。貼床の掘り方には暗褐色土が入れられている。

〔カマド〕＜位置＞東壁中央から北寄り　＜煙道方向＞Ｎ－85°－Ｅ

＜本体＞数個の礫と黒褐色シルト質土が貼り付けられる左右の袖と燃焼部焼土を確認した。左袖は２個、右は３個の円礫が埋め込まれる。明赤褐色をなす燃焼部焼土は30×33cm の範囲に広がり、厚さは最大で５cm である。焼け具合は良好である。焼土の奥側（壁側）にも礫が置かれるが支脚となるものだろうか。

＜煙道・煙出し部＞上部が削られており煙道の構造は不明である。東壁から煙出しまでの長さは110 cm で、P238に切られている。

〔柱穴〕〔周溝〕は検出されない。

〔土坑〕位置的に貯蔵穴と考えられる土坑は南東隅に１基確認された。Pit １は62×127cm の長楕円形をなし、深さは13cm を測る。

遺物（第51・52図、写真図版40・41）

〔出土状況〕埋土や貯蔵穴から、土師器・須恵器の坏・甕類が出土した。

〔土器〕土師器は1,756.4ｇ、須恵器は1,117.8ｇ出土した。58・59はロクロ成形の土師器坏で、２点とも内面が黒色処理されている。60・61はロクロ成形非内黒の土師器坏である。後者には墨書があるが判読できない。62・63はロクロ成形の甕で、63の外面にはヘラケズリ調整が明瞭である。64は須恵器坏、65は壺類の底部。66～68は大甕の破片で、66は外面下端部にタタキメを残す。68の大甕の内面には細い調整痕が観察される。

時期　出土遺物から９世紀後半から10世紀初め（第Ⅳ期）に属するものと思われる。

111号住居跡

遺構（第19図、写真図版11）

〔位置・重複〕第110号住居跡との新旧関係は上述のとおりで、P233には南壁の一部を切られている。これも遺構西側の約半分は調査区域外にある。

〔検出面・状況〕カマド本体が確認されたことから住居跡としたもので、遺構上部はかなり削平が及んでいる。検出面は第Ⅲ層からⅣ層上面であるが、調査区西壁では住居の埋土が確認されず、第Ⅱ層が直接床面を覆う状態となっていた。

〔平面形〕方形と思われるが若干ゆがんでいる。

〔規模〕上述の状態であることから全体規模は不明である。〔壁高〕０～数 cm。

〔埋土〕〔壁〕残りが悪く、詳しい状況は不明である。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、貼床が認められる。

〔カマド〕＜位置＞東壁だがそこでの位置は不明である。　＜煙道方向＞Ｎ－82°－Ｅ
＜本体＞第110号住居跡同様、礫が配される左右の袖部と燃焼部焼土が確認できた。焼土は直径30cm程度の広がりを持ち、厚さは最大２cmである。遺物は燃焼部焼土の上部を中心に出土した。
＜煙道・煙出し部＞確認できなかった。
〔柱穴〕直径20cm程度のPP １を検出した。〔周溝〕〔土坑〕確認できなかった。

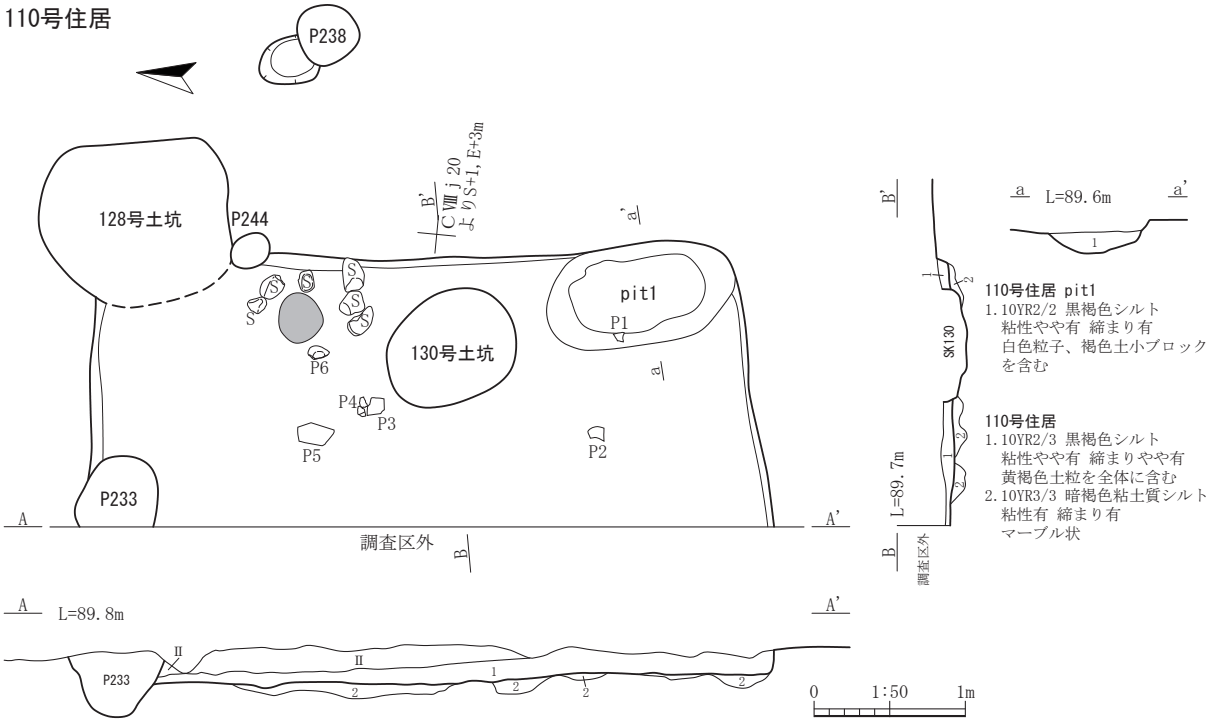
遺物（第52・53図、写真図版41・42）
〔出土状況〕埋土を主体として、ロクロ成形の土師器坏と鍋、非ロクロの甕、台石状の石器が１点出土している。
〔土器〕土師器は3,222.4ｇ、須恵器は71.5ｇ出土している。70～76はロクロ成形の土師器坏で、76のみ内面が黒色処理されない。いずれも口縁部は直線的に体部から延びている。70には墨書があるがこれも判読できない。71・72・74の底部外面は手持ちヘラケズリ調整がなされる。鍋とした78の体部は底部から丸みを持って立ち上がり、最大径をもつ口縁部に至る。口唇は軽く上方に引き出されている。器面はロクロ成形後、外面は丁寧なヘラケズリ調整が、内面には底部付近にヘラナデ調整が施される。79の石質はデイサイトである。

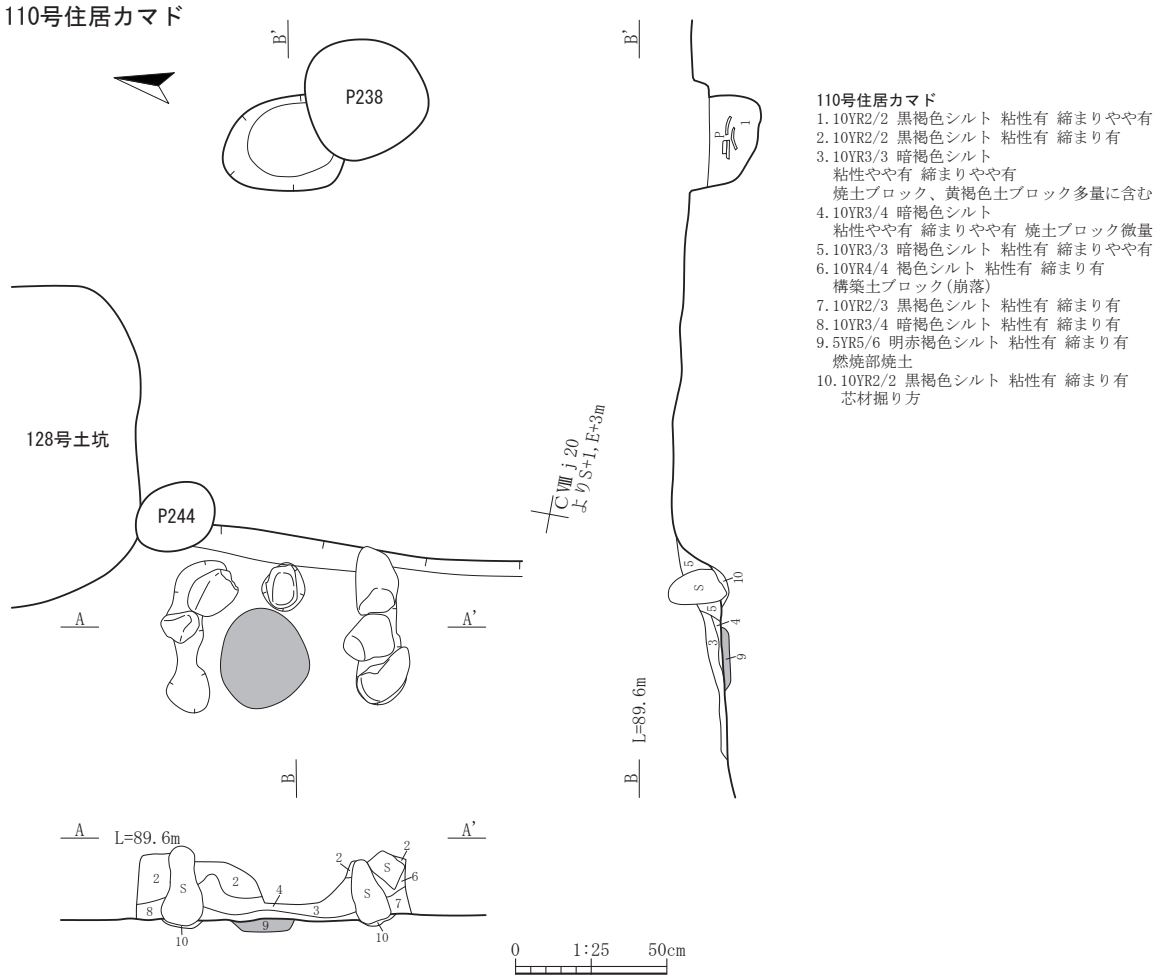
時期　出土遺物から９世紀後半から10世紀初め（第Ⅳ期）に属するものと考えられる。

113号住居跡

遺構（第19図、写真図版12）
〔位置・重複〕東側調査区ＢⅧ区の中央からわずかに南西側に位置する。付近に他の遺構が存在しない。本遺構も南側のほぼ半分が調査区域外に延びる。
〔検出面・状況〕第Ⅳ層上面で黒褐色土のプランと大量の遺物を確認した。
〔平面形〕隅丸方形。〔規模〕一辺３ｍ弱と思われる。〔壁高〕６～14cm。
〔埋土〕にぶい黄褐色土の小ブロックを含む黒色土の単層で、貼床には暗褐色土の粘土質シルトが見られる。
〔壁〕北東壁・北西壁とも外傾して立ち上がる。
〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、比較的大きな凹凸をもつ。部分的に貼床が見られる。
〔カマド〕＜位置＞北東壁中央　＜煙道方向＞Ｎ－23°－Ｅ
＜本体＞地山削り出しの両袖部と燃焼部焼土を確認した。遺物も多く出土した。燃焼部は直径13cm、厚さ数cmである。
＜煙道・煙出し部＞遺構上部が削られているため、くり抜き式の煙道か掘り込み式かは不明である。全長は145cmほどで煙出しまでほぼ水平に延びる。煙出し部の底面は、床面から17cmほど掘り込まれている。
〔柱穴〕23×27cmのPP １が確認できた。主柱穴の一つであろう。〔土坑〕検出されない
〔周溝〕深さ数cmの周溝が跡切れ跡切れに巡る。

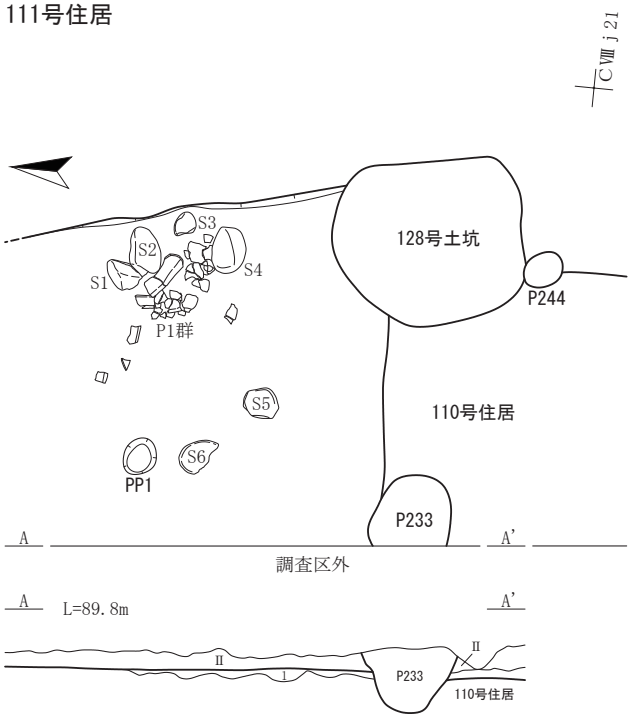
遺物（第54図、写真図版42・43）
〔出土状況〕埋土やカマド内から土師器の坏・甕類と石製紡錘車１点が出土した。
〔土器〕非ロクロ土師器のみ3,204.5ｇ出土した。80～82は非ロクロ成形の土師器坏で、80は大形である。いずれも内面はヘラミガキ調整、黒色処理が施され、外面にのみ軽い段を有する。段より上位はヨコナデ調整、下位はヘラケズリ調整が残る。84～87は非ロクロ成形の甕で、84は器高の小さい小形のもの、85が標準のサイズか。86は幾分体部が張るものの底部付近、87は球胴甕の底部と思われる。これらは内





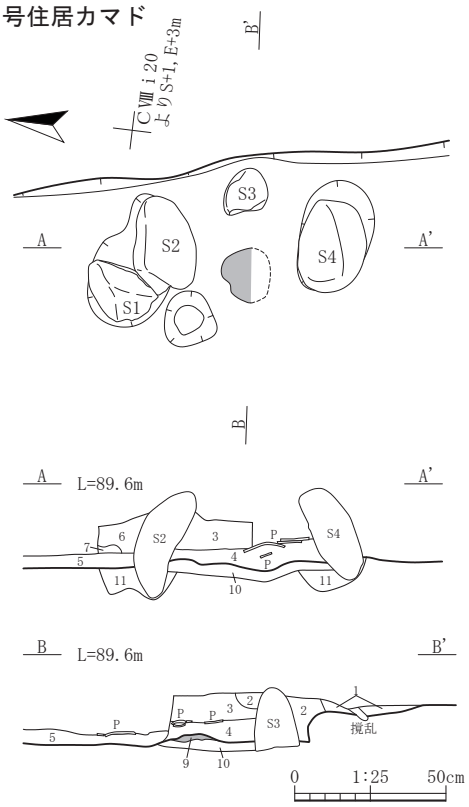
第18図　110号住居跡

111号住居



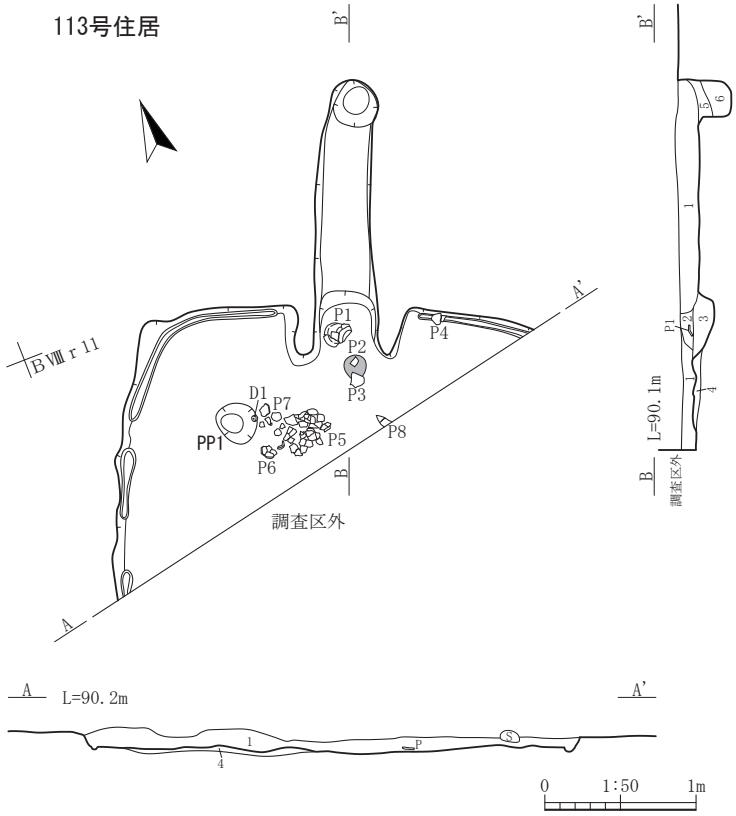
111号住居
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あまりなし 締まり有
黄褐色土粒を全体に含む、貼床土

111号住居カマド



111号住居カマド
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
2.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
3.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
4.10YR4/4 褐色シルト 粘性有 締まりやや有
5.10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりやや有
6.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
7.10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有
8.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性有 締まり有
9.5YR5/6 明赤褐色　燃焼部焼土
10.10YR2/3 黒褐色シルト 粘性有 締まり有 貼床土
11.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有 芯材掘り方

113号住居



113号住居
1.10YR2/1 黒色シルト 粘性あまりなし 締まり有
にぶい黄褐色土小ブロック及び酸化鉄分を含む
2.10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
カマド天井部崩落土、黒色大ブロックを含む
3.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まりやや有
橙色焼土粒をまばらに含む、カマド内の堆積土
4.10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
貼床掘り方埋土
5.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性有 締まりやや有
6.10YR3/3 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有

第19図　111・113号住居跡

外面ともハケメ調整が明瞭である。88はデイサイト製の紡錘車で、重量は59.1ｇを計る。表面はきれいに磨かれている。

時期　出土遺物から８世紀中ごろ～後半(第Ⅰ期)に属するものと考えられる。

(２)住 居 状 遺 構

住居状遺構として３棟報告する。本遺跡において、竪穴住居跡と住居状遺構との区別が不明確であることは前に述べたとおりである。

101号住居状遺構

遺構(第20図、写真図版13)

〔位置・重複〕東側調査区ＢⅨ区中央南側の遺構集中区内に位置し、西側４ｍには第102号住居状遺構、南東側17～18ｍに掘立柱建物群がある。方形と思われる竪穴部分の周囲を溝が巡るが、これを含めて一連の遺構と判断した。その周溝が第118号土坑と重複しているが、本遺構の方が新しい。また、P218～221とも重複関係にあるが、新旧関係は掴めなかった。なお、本遺構の南側半分弱は撹乱を受け失われている。

〔検出面・状況〕この付近を第Ⅱ層まで掘削中に遺物が出土し、遺構が集中することがわかった。そのうちのひとつであるが、最終的には第Ⅲ層～第Ⅳ層上面で確認した。

〔平面形〕掘り込み部分は方形基調だが台形状にゆがむ。周溝はそれと１ｍ前後の距離を保ちつつ巡り、東側で閉じ南側は撹乱により切られている。

〔規模〕住居状の掘り込み部分は2.9ｍ×？ｍ、周溝は全長7.1ｍ、幅30～40㎝を測る。

〔深さ〕掘り込み部分の深さは６～16㎝、周溝は20㎝前後である。

〔埋土〕掘り込み部分は褐色土粒を含む黒色土の単層、周溝部分は２層に分層でき、上位は褐色土粒を含む黒褐色土、下位は黒色土が堆積している。

〔掘り込み部分の壁〕残存する壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とする。細かい凹凸があるが、全体としては平坦である。

〔柱穴〕掘り込み部分に伴う可能性があるものはP222～224の３個であるが別に扱った。

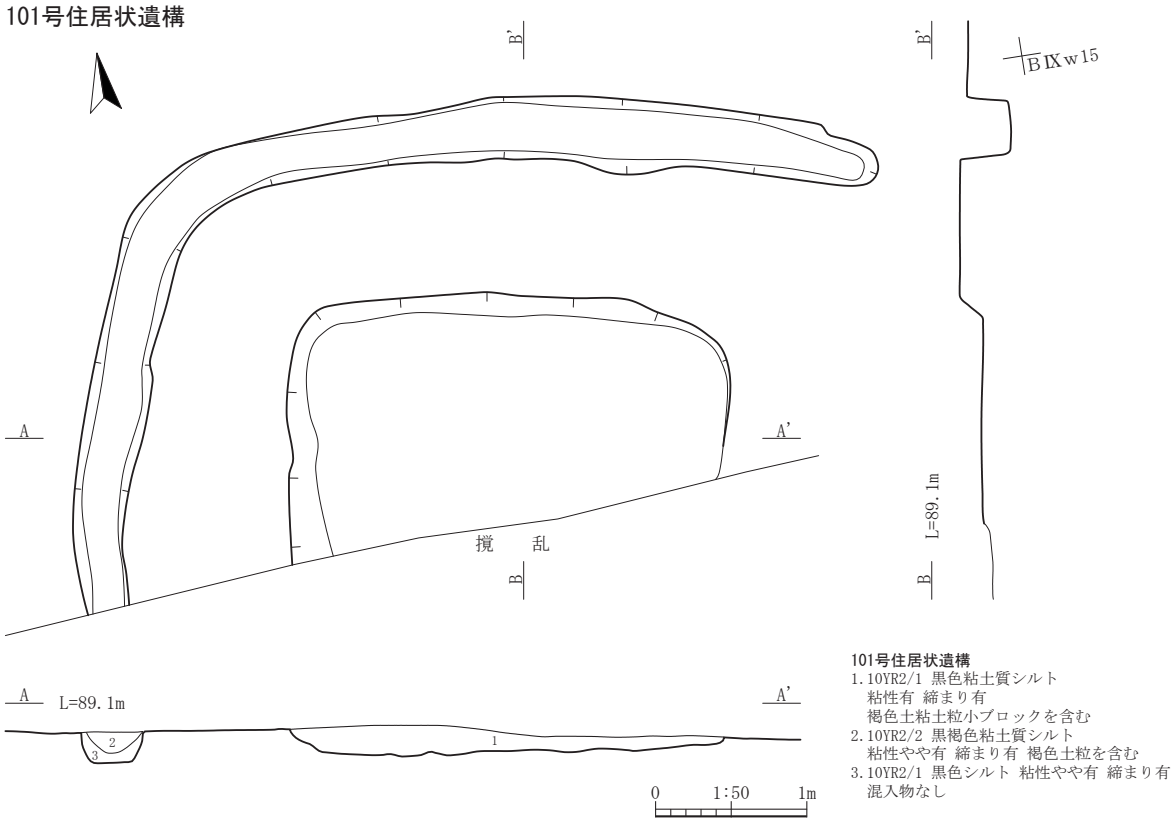
〔遺構の性格〕何らかの作業場であろうか。周溝の用途は不明である。

遺物(第55･65図、写真図版43)

〔出土状況〕竪穴状の箇所と周溝の埋土から土師器・須恵器が出土している。

〔土器〕前者からは土師器は113.4ｇ、須恵器は47.8ｇ、後者からは土師器が270.0ｇ、須恵器が238.5ｇ出土した。96はロクロ成形の内面が黒色処理される土師器坏､97･98はロクロ成形の土師器坏で、前者は口唇が外反するもの。99は非ロクロ成形の外面に段をもつ坏で、底部にヘラケズリ痕を残しているものである。237はロクロ成形の土師器坏の底部で、体部下端および底部外面にヘラによる再調整が見られるもの､238は須恵器大甕の体部破片である。この他、焼成粘土塊が35.6ｇ出土した。

時期　出土遺物から９世紀前半から10世紀初頭(第Ⅲ～Ⅳ期)のいずれかに属すると考えられる。



第20図　101号住居状遺構

102号住居状遺構

遺構(第21図、写真図版14)

〔位置・重複〕東側調査区ＢⅨ区中央南側の遺構集中区内に位置する。詳細な位置関係は、第101号住居状遺構で記載のとおりである。本遺構の北西から西側にかけて第132･136･141号土坑と、南壁中央で第120･133号土坑と重複関係にあるが、これらはいずれも本遺構より新しいものである。

〔検出面・状況〕第Ⅲ層～第Ⅳ層上面で確認した。遺構間の重複が著しい。

〔平面形〕方形基調であるが、南側に向かってに広がる台形状をなす。

〔規模〕3.5～4.0m×3.7m。〔壁高〕10～15cm。

〔埋土〕黄褐色土小ブロックと焼土粒を含む黒褐色土の単層である。

〔壁〕東壁以外は外傾気味に立ち上がる。東壁の立ち上がりはなだらかである。

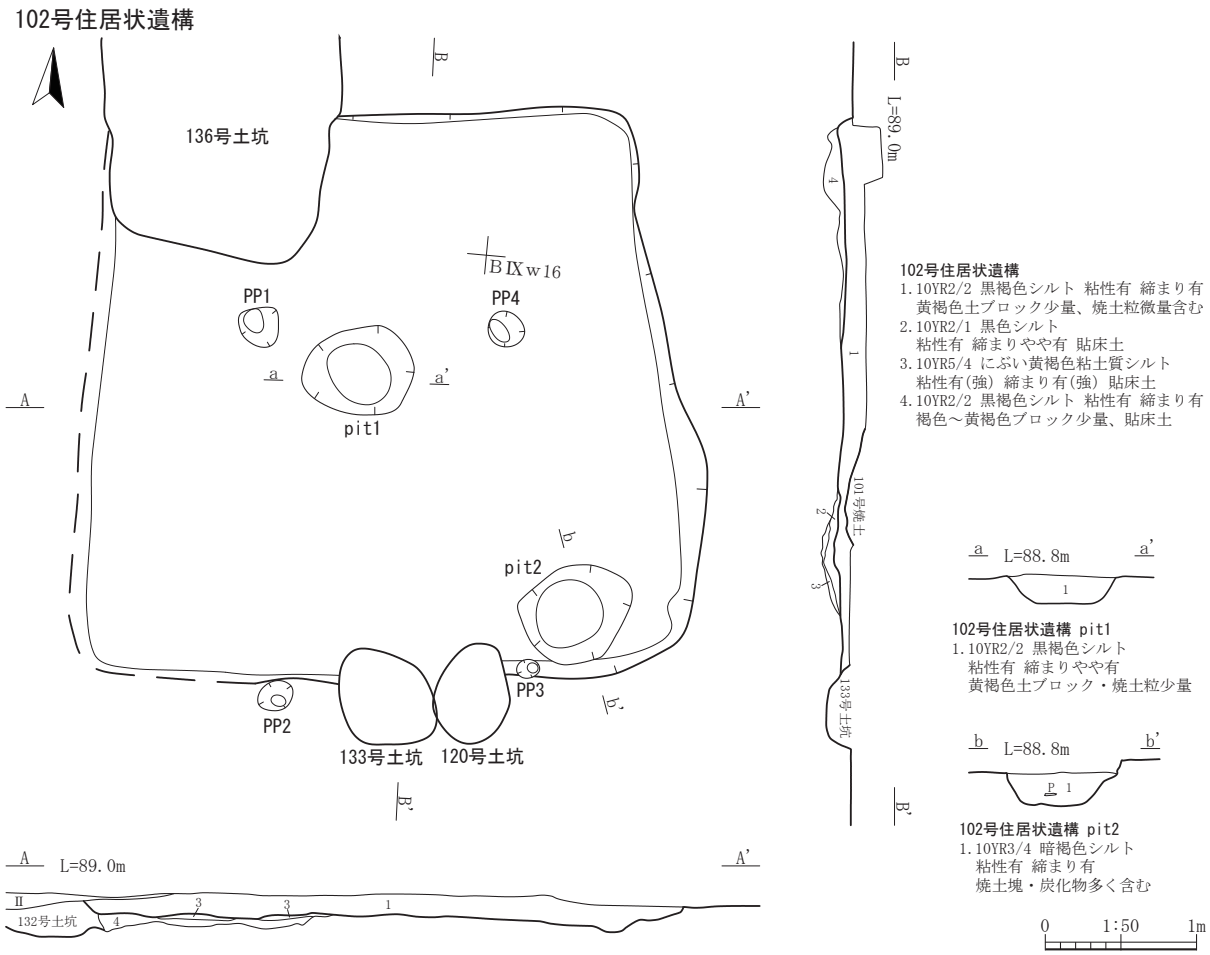
〔床面〕第Ⅳ層を床面とする。全体に細かな凹凸があり、中央部が若干高い。中央から西側に貼床が認められる。

〔柱穴〕主柱穴 PP １・４と南壁の外にある PP ２・３の４個が確認された。直径は14～24cm。後者の二つが主柱穴になるかはわからない。

〔土坑〕２基検出された。Pit １は59×72cm の円形で深さ16cm、Pit ２は62×73cm の円形、深さは21cm である。いずれも貯蔵、格納等に使われたものと思われる。

〔遺構の性格〕フイゴの羽口が出土していることから、鍛冶関連の作業場と考えたい。第101号焼土遺構が床面にあるが、これも本遺構に伴うものかは不明である。

遺物(第55･56図、写真図版43･44)



第21図　102号住居状遺構

〔出土状況〕埋土を中心に、ロクロ成形の土師器と須恵器の坏・甕類のほか、鉄製品や土製品、石器が出土している。

〔土器〕土師器は7,867.8ｇ、須恵器は1,642.3ｇ出土した。100～104はロクロ成形の土師器坏で内面が黒色処理されるもの、105～108はロクロ成形の非内黒土師器の坏である。口縁部が残るものは100のみである。109は高台がつく内黒の土師器坏、110は内面がヘラミガキ後に黒色処理される土師器の甕の底部である。111～115は土師器甕でロクロ成形は111と114・115、非ロクロは112・113である。116～119は須恵器の坏で、119には墨書があるが判読できない。120～122と125は甕類、123・124は壺の底部と肩部と思われる。

〔鉄製品〕126は刀子の欠損品である。なお、Pit 1からは鉄滓が143.5ｇ出土している。

〔土製品〕127は羽口の一部で、外面は変色している。

〔石器〕128はデイサイト製の磨石である。平安期のものかは不明である。

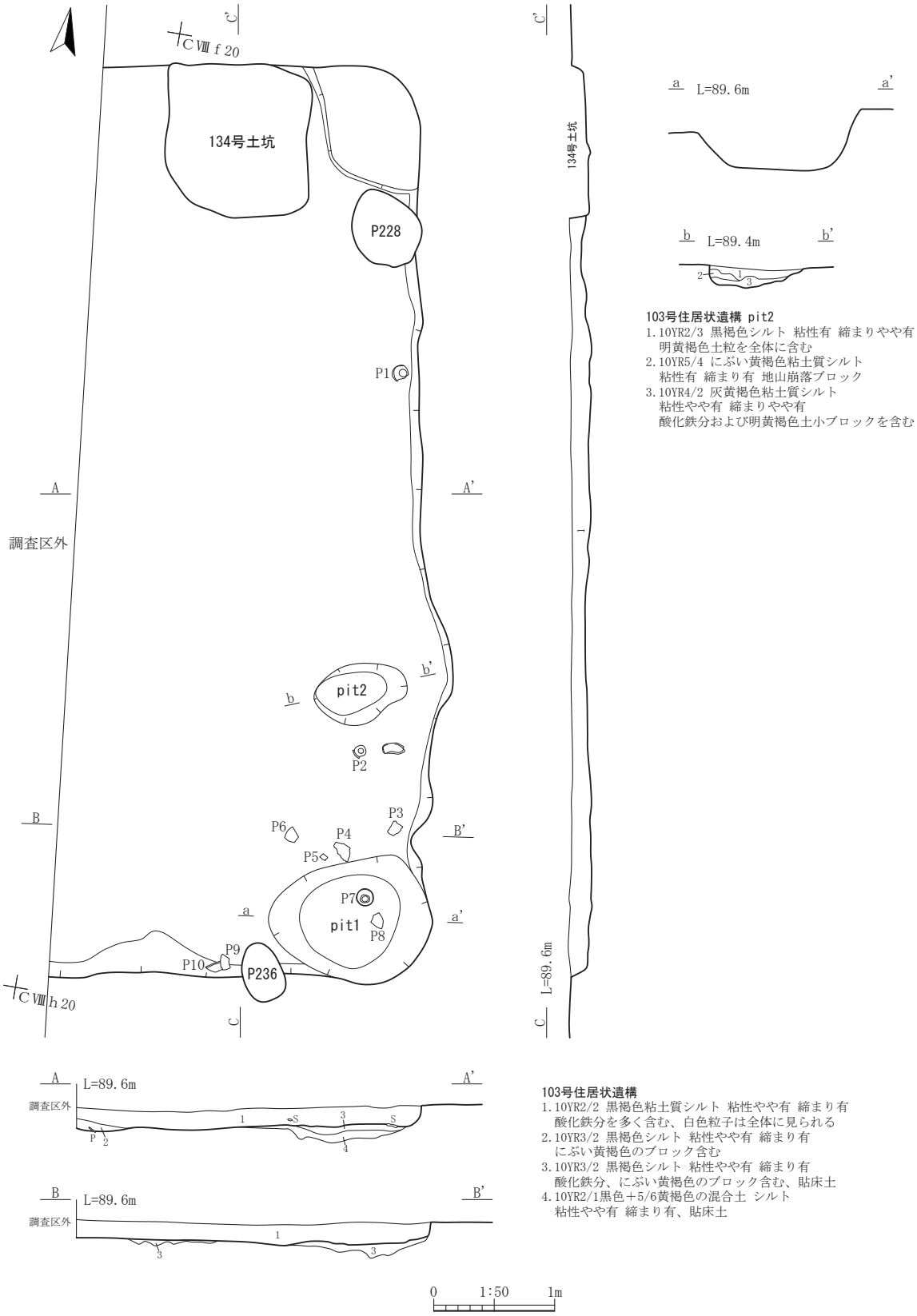
時期　出土遺物から、９世紀後半から10世紀初め(第Ⅳ期)の遺構と考えられる。

103号住居状遺構

遺構(第22図、写真図版15)

〔位置・重複〕東側調査区ＣⅨ区中央から東寄りの遺構が密集する区域にあって、第108号住居跡の北隅と本遺構の南東隅が重複する。本遺構の方が新しい。また、第134・135・138・139号土坑やP228～

103号住居状遺構



第22図　103号住居状遺構

230・236などの柱穴状小土坑と切り合うが、検出状況からいずれも本遺構に伴うか、これより旧い可能性が高い。
〔検出面・状況〕第Ⅱ層掘削時、この周辺からは大量の遺物が出土していたが、最終的に第Ⅲ層～第Ⅳ層上面で確認した。検出面を下げないと、遺構のプランが掴みにくかったことによる。
〔平面形〕西側約2/3が調査区域外に延びているが、方形基調と思われる。カマドの有無を問わず、比較的大形の遺構である。
〔規模〕南北7.6m×？　〔壁高〕15～19cm。〔埋土〕白色の粒子や鉄分を含む黒褐色土の単層。
〔壁〕削平により残りは悪いが、直立気味に立ち上がっている。
〔床面〕第Ⅳ層を床面とし、細かい凹凸がある。貼床は全体に施されている。
〔柱穴〕確認できなかった。
〔土坑〕Pit １・２の２基検出された。Pit １は102×136cm の楕円形、Pit ２は50×76cm の長楕円形をなす。Pit １からは長頸壺の頸部破片が出土した。
〔遺構の性格〕何らかの作業場と思われる。土錘が１点出土している。

遺物（第56～59図、写真図版44・45）
〔出土状況〕住居や付属する土坑の埋土、貼床の掘り方などから、ロクロ成形の土師器坏・甕、非ロクロの坏、須恵器は坏・長頸壺・甕類が出土している。
〔土器〕土師器は7,867.8ｇ、須恵器は1,642.3ｇ出土した。129～134はロクロ成形の土師器坏で内面が黒色処理される。130の底部外面は手持ちヘラケズリによる再調整が認められるもの、132は大ぶりである。135と136は非ロクロ成形の内面黒色処理の坏で、ともに外面に段をもつ。体部は内湾ぎみに立ち上がっている。137は線刻を有する甕の底部、138～140はロクロ成形の土師器甕で、大・中・小と揃う。141～154は須恵器で、141・142は坏、143・148は長頸壺の頸部である。うち前者は、頸部と肩部の繋ぎ目に突帯状のリングを持たない。147は壺の肩部かと思われるもの。144～146・150～154は甕類で、145の肩部付近の破片は内面にヘラナデ調整が明瞭に残る。149は口唇部の形状から、壺類ではなく甕の口縁部か。
〔土製品〕155は土錘である。重さは14.6ｇでこれのみ出土した。

時期　出土遺物の土師器坏にロクロと非ロクロのものが混在することから、８世紀末葉から９世紀後半（第Ⅱ～Ⅲ期）と広く捉えたい。

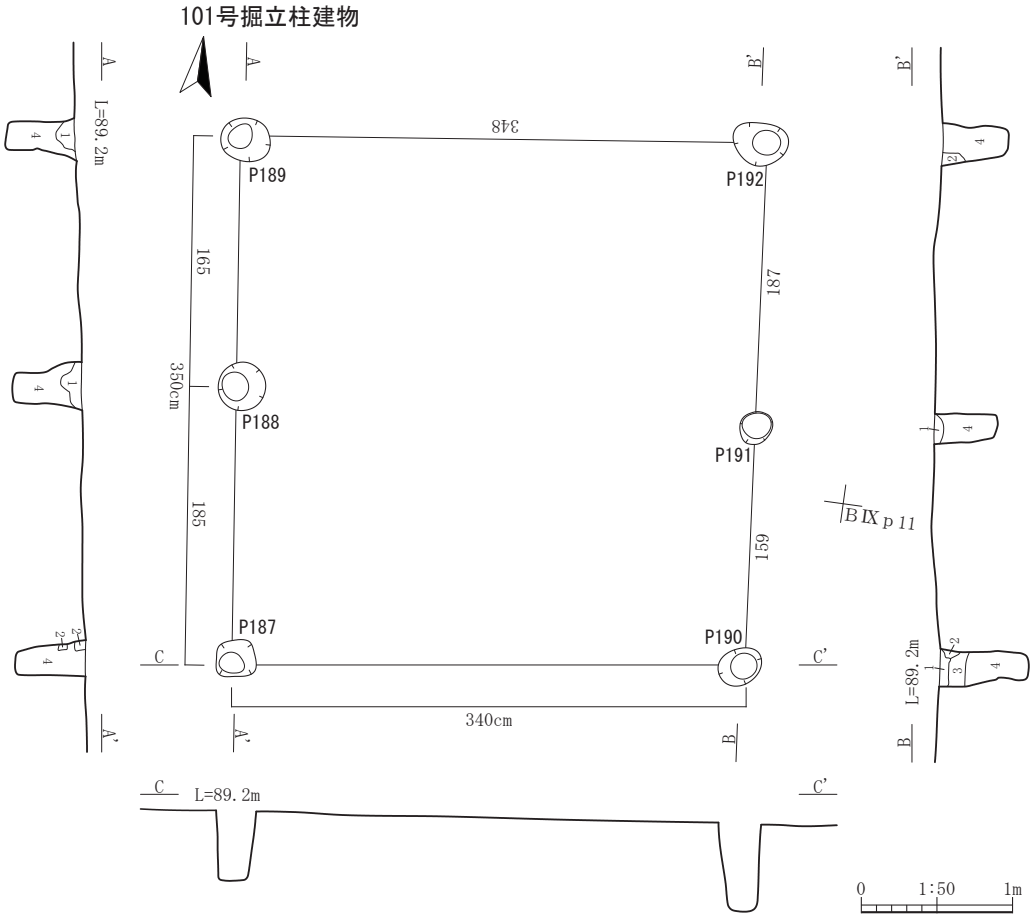
（３）掘 立 柱 建 物

101号掘立柱建物

遺構（第23図、写真図版16）
〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央西寄り、本調査区⑧・確認調査区⑧の掘立柱建物群の北側に位置する。
〔平面形式・方向〕桁行２間、梁間１間の掘立柱建物跡で６個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－５°－Ｗである。
〔規模〕桁行346cm（11.4尺）～350cm（11.6尺）、梁間340cm（11.2尺）～348cm（11.5尺）で、建物面積はおよそ12.0㎡（3.6坪）である。
〔柱間寸法〕桁行159cm（5.2尺）～187cm（6.2尺）、梁間340cm（11.2尺）～348cm（11.5尺）。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。



101号掘立柱建物
1.10YR3/1 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有 褐色土粒をまばらに含む
2.10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まりやや有 地山崩落ブロック
3.10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有 締まりやや有 混入物少ない
4.10YR1.7/1 黒色粘土質シルト 粘性やや有 締まりあまりなし 黄褐色土粒をまばらに含む

第23図　101号掘立柱建物

102号掘立柱建物

遺構（第24図、写真図版16）

〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央西寄り、本調査区⑧・確認調査区⑧の掘立柱建物群にあって、これらのすべてと重複しているが、平面形式からいずれよりも本遺構の方が新しいと判断される。

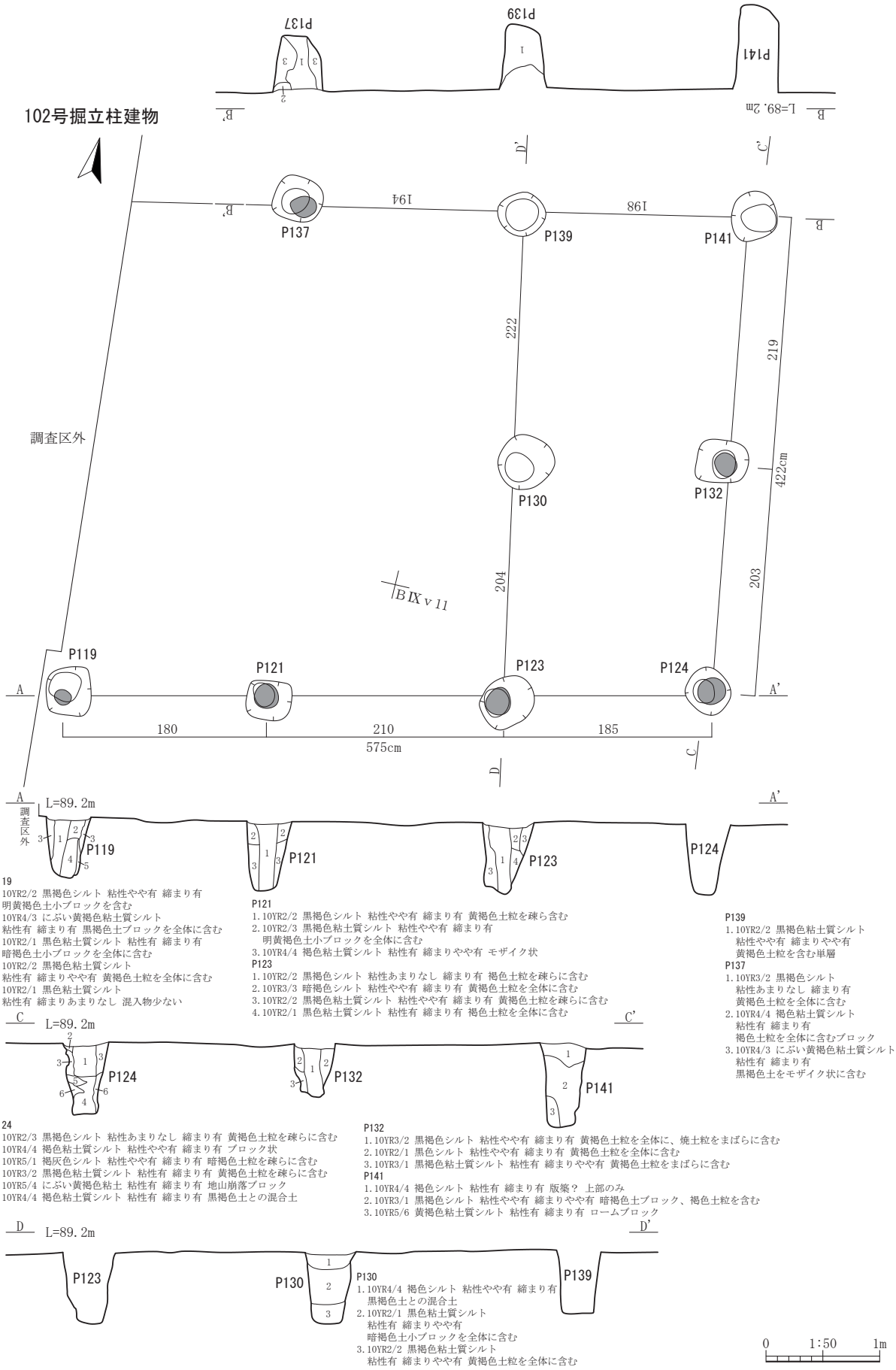
〔平面形式・方向〕桁行３間、梁間２間の掘立柱建物で９個の柱穴を用い、東側に１間分の間仕切りを有する。桁行の方向はＮ－80°－Ｅである。

〔規模〕桁行575cm（19.0尺）、梁間422cm（13.9尺）、面積はおよそ24.3㎡（7.4坪）。

〔柱間寸法〕桁行180cm（5.9尺）～210cm（6.9尺）、梁間203cm（6.7尺）～219cm（7.2尺）を測る。柱穴はP119・132・137が方形を、それ以外は円形を基調とし、P119・121・123・124・132・137には柱痕跡がみられる。

遺物　P121から須恵器が1.9ｇ、P123から土師器が10.7ｇ、P130から土師器が7.2ｇ、P137から土師器が8.7ｇ出土した。

時期　平安時代に属する建物跡と思われるが、他の掘立柱建物群との重複関係から９世紀半ば以降と考えられよう。



第24図　102号掘立柱建物

103号掘立柱建物

遺構(第25図、写真図版16)

〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央西寄り、本調査区⑧・確認調査区⑧の掘立柱建物群のひとつで、これもすべての建物群と重複する。104号掘立柱建物のP126･115と柱穴間の重複があるが、ともに本遺構の柱穴(P125･116)のほうが新しい。

〔平面形式・方向〕東西棟とみて桁行１間以上、梁間３間の大形の掘立柱建物で、間仕切りを持つか。８個の柱穴を検出した。桁行の方向はＮ－79°－Ｅである。

〔規模〕梁間625cm(20.6尺)で、桁行は不明。

〔柱間寸法〕桁行200cm(6.6尺)～220cm(7.3尺)、梁間192cm(6.3尺)～227cm(7.5尺)である。柱穴はP117･128･133･135･137などが方形を、それ以外は円形を基調とする。P117･125･133･142には柱痕跡が観察された。

遺物(第68図、写真図版50)

P116から土師器が29.1ｇ、須恵器が13.9ｇ、P117から104.0ｇと6.9ｇ、P125から土師器のみ7.4ｇ、P128からも土師器のみ85.0ｇ、P133からは土師器93.9ｇ、須恵器90.2ｇ、P135から須恵器のみ6.5ｇ、P142も須恵器のみが15.2ｇ、P143からも須恵器が0.7ｇ出土した。267はいわゆる赤焼き土器の甕底部、268･272は須恵器坏、269は須恵器甕(鉢？)の口縁部と思われる。274は流水波状文がかすかに見える甕口縁部の破片である。

時期　出土遺物から平安時代に属するが、９世紀前半に属する可能性がある。

104号掘立柱建物

遺構(第26図、写真図版16)

〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央南寄り、本調査区⑧・確認調査区⑧の掘立柱建物群の西側にあり、建物自体は西側に延びる。本遺構を構成するP115がP116(103号掘立柱建物)に、P126がP125(103号掘立柱建物)に切られている。

〔平面形式・方向〕梁間２間分３個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－88°－Ｗと思われる。

〔規模〕梁間465cm(15.3尺)。〔柱間寸法〕梁間216cm(7.1尺)～249cm(8.2尺)。

遺物(第68図、写真図版49･50)

P115から67.3ｇ、P126から29.2ｇ土師器が、P134からは土師器が29.2ｇ、須恵器が67.5ｇ出土した。262はロクロ成形の土師器坏で内面が黒色処理されるもの。270は黒色処理されないものである。

時期　出土遺物から平安時代に属する。重複関係から103号掘立柱建物より旧い遺構と判断される。

105号掘立柱建物

遺構(第27図、写真図版16)

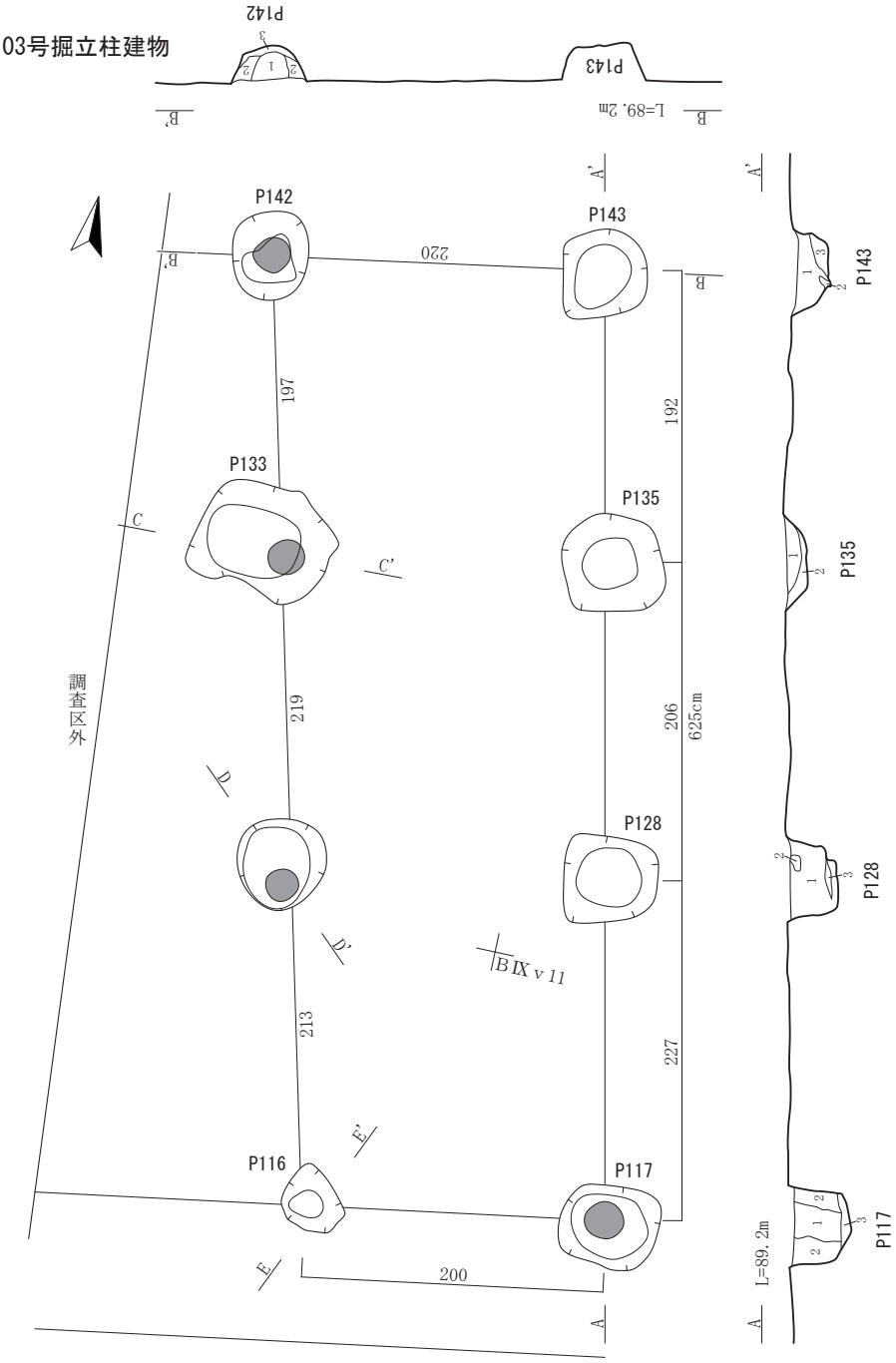
〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央南寄り、本調査区⑧・確認調査区⑧の掘立柱建物群の西側にあり、これも桁行が西側の調査区域外に延びている。102～104号掘立柱建物と重複しているが、柱穴同士の切り合いは認められない。

〔平面形式・方向〕桁行１間、梁間２間分５個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－５°－Ｗである。

〔規模〕桁行不明、梁間482cm(15.9尺)。

〔柱間寸法〕桁行213cm(7.0尺)、梁間232cm(7.7尺)～250cm(8.3尺)を測る。ほとんどが方形基調の柱穴で、P120･122･136には柱痕跡がみられる。

103号掘立柱建物



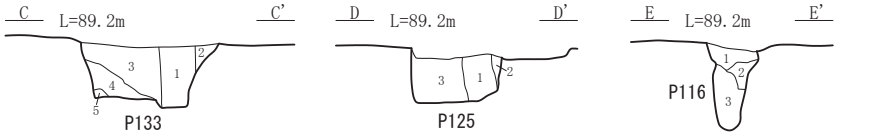
P117
1.10YR3/2 黒褐色シルト
粘性やや有 締まり有
焼土粒をわずかに含む
2.10YR2/3 黒褐色粘土質シルト
粘性あまりなし 締まり有
黄褐色土粒をわずかに含む
3.10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有
黄褐色土粒を全体に含む

P128
1.10YR3/2 黒褐色シルト
粘性あまりなし 締まり有
明黄褐色土粒、橙色焼土粒を疎らに含む
2.10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有
黒褐色土との混合ブロック
3.7.5YR4/4 褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有
暗赤褐色焼土粒を全体に含む

P135
1.10YR2/3 黒褐色シルト
粘性やや有 締まりやや有
白色粒子と黄褐色土粒を含む
2.10YR3/3 暗褐色シルト
粘性有 締まりやや有
黒褐色土との混合土

P143
1.10YR2/2 黒褐色シルト
粘性やや有 締まり有
白色粒子、褐色土粒を全体に含む
2.10YR5/6 黄褐色シルト
粘性有 締まり有
黒褐色土との混合土
3.10YR3/3 暗褐色シルト
粘性やや有 締まり有
黒褐色土を全体に含む

P142
1.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有 混入物少ない
2.10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有
黄褐色土小ブロックをわずかに含む
3.10YR3/3 暗褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有
黄褐色土と黒褐色土の混合



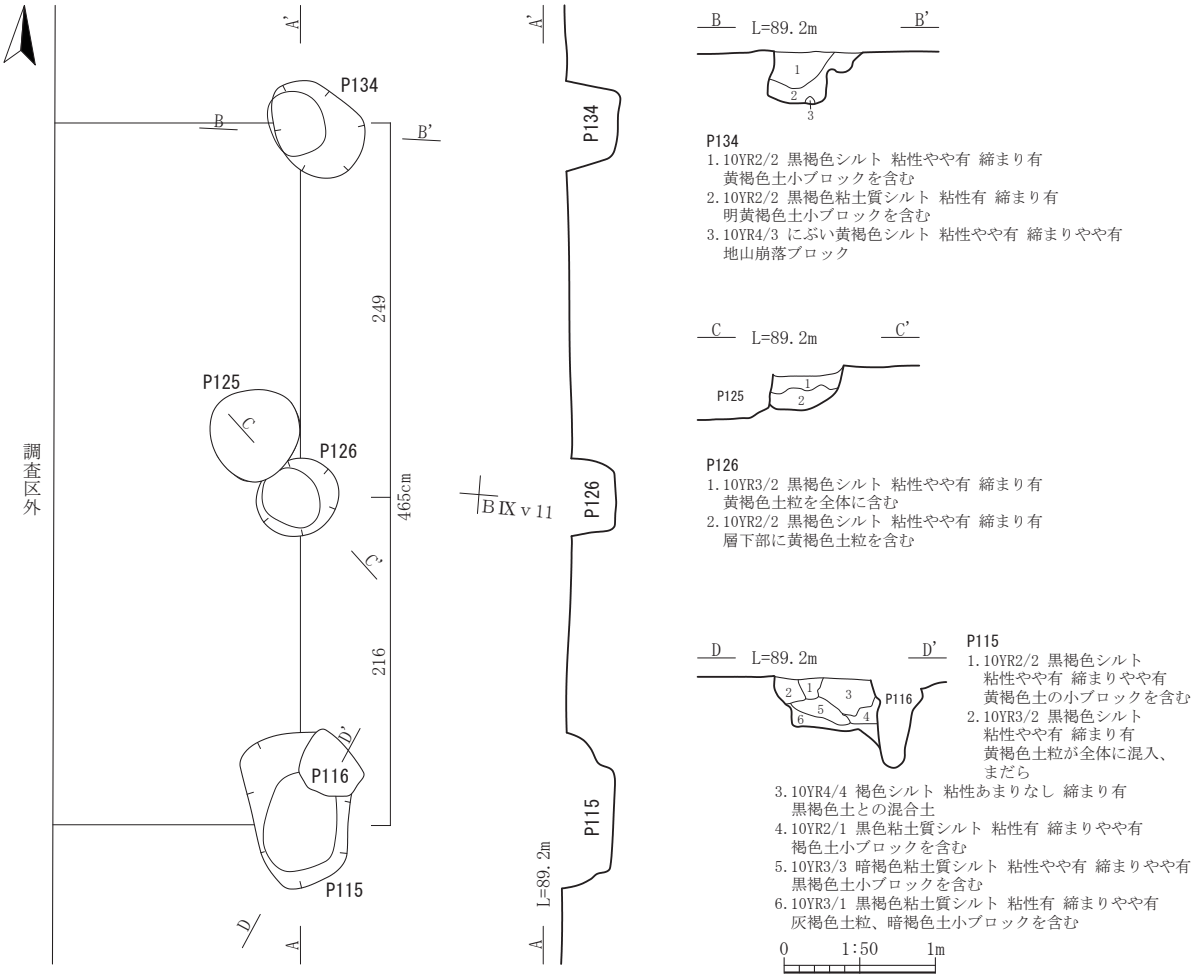
P133
1.10YR3/2 黒褐色シルト
粘性有 締まり有
黄褐色土粒を疎らに含む
2.10YR3/3 暗褐色シルト
粘性有 締まり有
橙色焼土粒を疎らに含む
3.10YR3/2 黒褐色シルト
粘性有 締まり有 褐色土との混合土
4.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
粘性やや有 締まり有
黄褐色土粒をわずかに含む
5.10YR4/4 褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有 地山崩落ブロック

P125
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
2.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
黄褐色土粒を全体に含む
3.10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有 締まり有
明黄褐色土小ブロックを全体に含む

P116
1.10YR2/3 黒褐色シルト
粘性やや有 締まり有
白色粒子を全体に含む
2.10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有
黄褐色土小ブロックとの混合土
3.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
粘性やや有 締まりやや有
混合物少ない、
下部に黄褐色土小ブロックを含む

第25図　103号掘立柱建物

104号掘立柱建物



第26図　104号掘立柱建物

遺物(第67･68図、写真図版49)

P120から土師器101.6ｇ、須恵器230.1ｇ、P122から7.1ｇと21.0ｇ、P129から30.8ｇと197.4ｇ、P136から46.0ｇと1.8ｇ、P138からは土師器のみ11.2ｇ出土した。またP129からは炭化材(樹種:クリ)が出土している。259はロクロ成形の土師器坏で内面はヘラミガキ調整後黒色処理され、底部には手持ちヘラケズリの再調整痕、あるいは底部ヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。260は須恵器甕の体部破片、261は同坏の底部、264は同大甕の肩部破片である。

時期　出土遺物から平安時代９世紀前半(第Ⅲ期前半)に属する掘立柱建物と思われる。平面形式から、重複する建物群の中で最も旧いものと思われる。

106号掘立柱建物

遺構(第28図、写真図版16)

〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央南寄り、本調査区⑧・確認調査区⑧の掘立柱建物群の東側にあり、建物自体も東側に延びている。102号掘立柱建物と重複するが、柱穴間の切り合いはない。平面形式から本遺構の方が旧いと思われる。

〔平面形式・方向〕梁間２間の南側に１間の庇が付く。桁行の方向はＮ－11°－Ｗである。

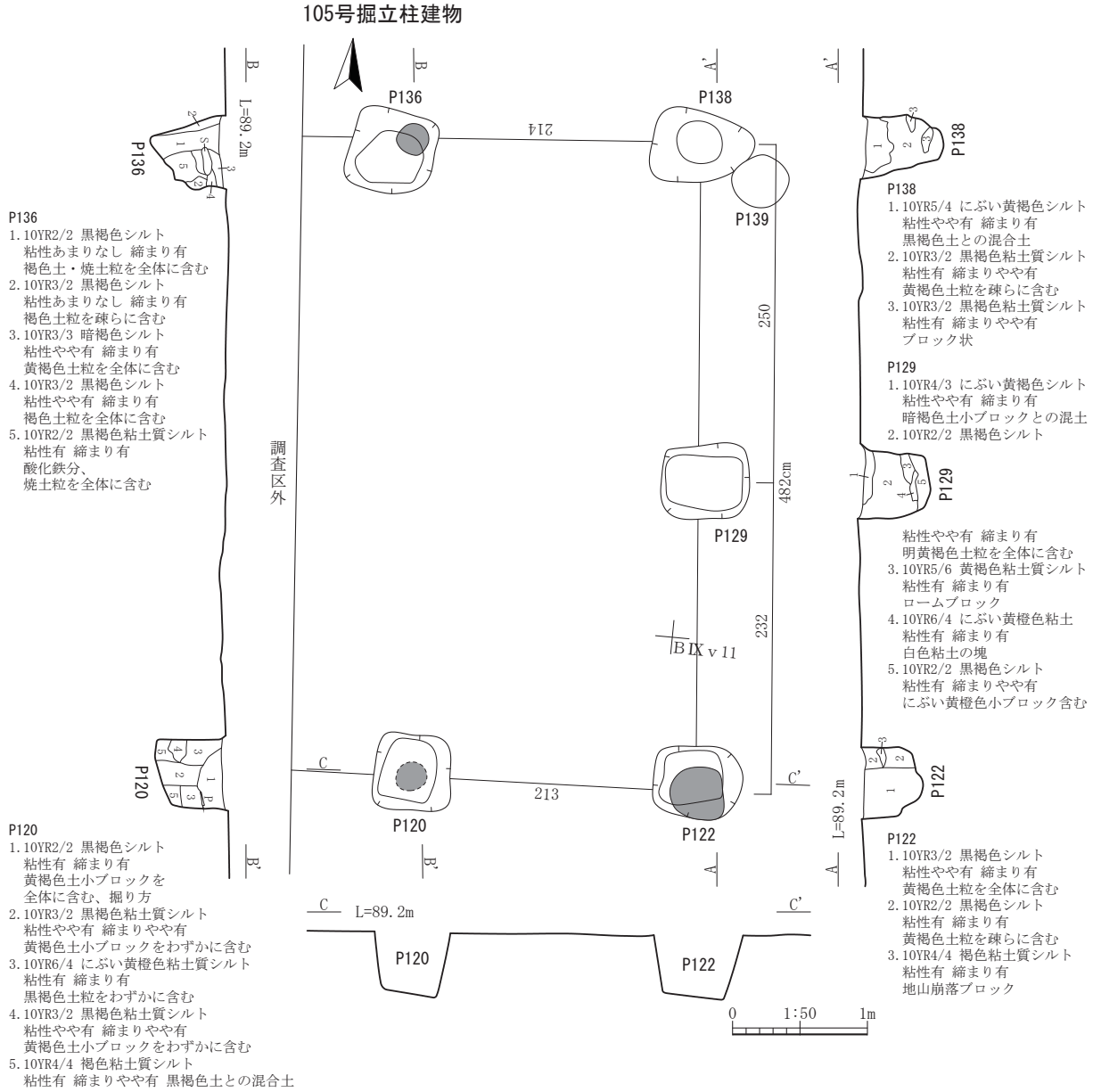
〔規模〕梁間709cm(23.4尺)。

〔柱間寸法〕梁間245cm(8.0尺)～263cm(8.7尺)。P118以外は円形基調の柱穴で、P131・140には柱痕跡が観察された。

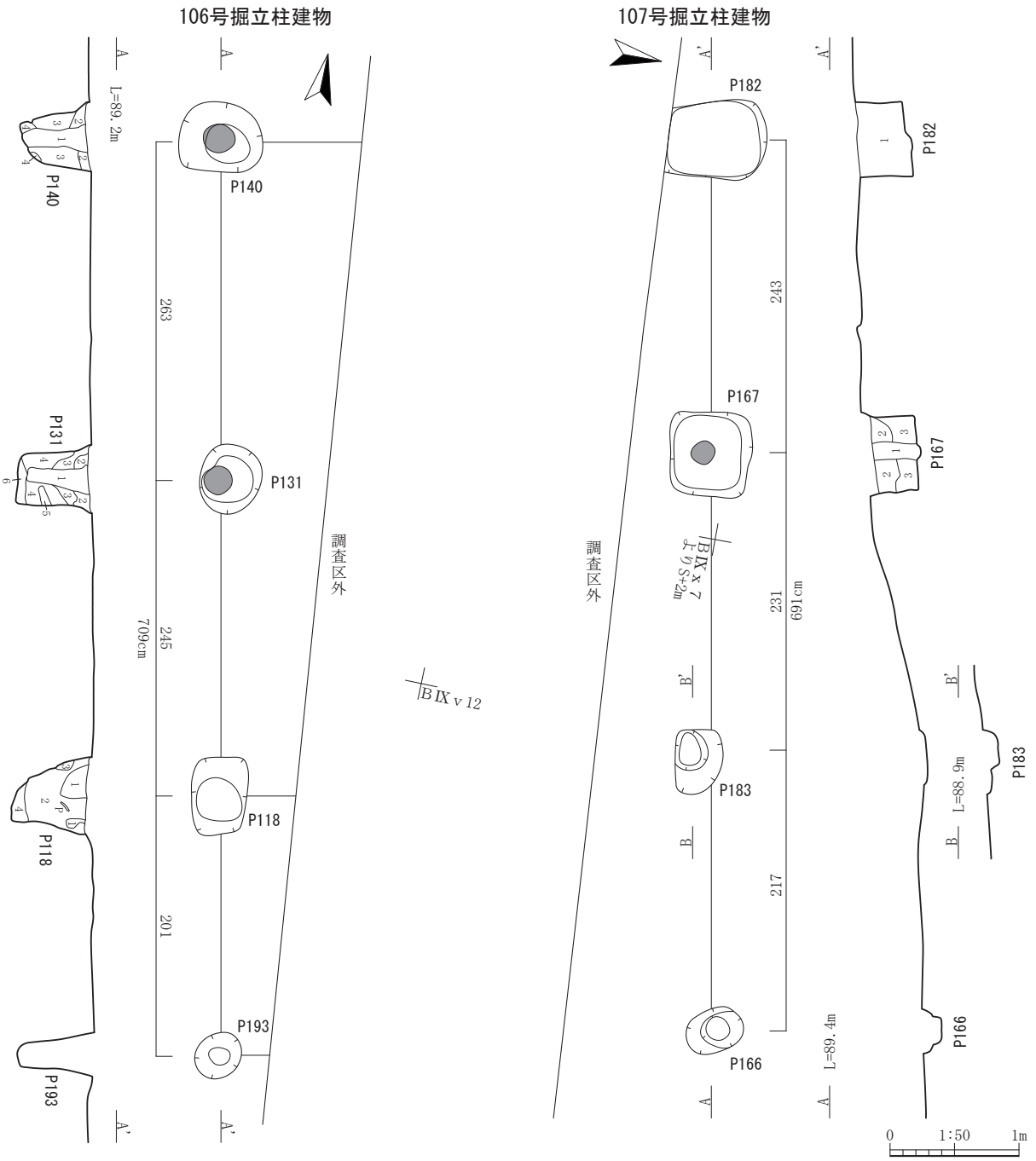
遺物(第65・67・68図、写真図版49・50)

P118から土師器が49.2ｇ、須恵器が84.8ｇ、P131から土師器が29.0ｇ、須恵器が229.4ｇ、P140から土師器が21.5ｇ出土した。258はP118出土のロクロ成形の土師器坏で、内面は黒色処理されないもの。底部外面に墨書がみられるが判読できない。265・266はP131出土の須恵器である。前者は壺の肩部、後者は大甕の口縁部破片で上下２列の流水波状文が明瞭である。240は内面が黒色処理されるロクロ成形の土師器坏である。

時期　出土遺物・平面形式から平安時代９世紀前半(第Ⅲ期前半)に属するものと思われる。



第27図　105号掘立柱建物



P140
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有 赤褐色焼土粒、炭化物を疎らに含む
2.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性あまりなし 締まり有 橙色焼土粒を含む
3.10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有 赤褐色焼土粒を全体に含む
4.10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有 黄褐色土粒を全体に含む

P131
1.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有 赤褐色焼土粒を疎らに含む
2.10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし 締まり有 褐色土粒を含む
3.10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有 橙色焼土粒を全体に含む
4.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土小ブロックを含む
5.10YR3/1 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色土を疎らに含む
6.10YR3/3 暗褐色シルト 粘性有(強) 締まりやや有 黄褐色土ブロックを含む

P118
1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性あまりなし 締まり有 黒褐色土との混合土
2.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有 赤褐色粘土粒を全体に含む
3.10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有 ブロック状
4.10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有 地山崩落ブロックを含む

P167
1.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
黄褐色土粒を疎らに含む
2.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
褐色土小ブロックとの混合土、黒褐色土主体
3.10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土の割合高

P182
1.10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
黒褐色土小ブロックとの混合土、まだら

第28図　106・107号掘立柱建物

107号掘立柱建物

遺構(第28図)

〔位置・重複関係〕ＢⅨ区中央のやや南西寄り、本調査区⑪の柱穴群の一部として第Ⅳ層で検出した。桁行側の柱列か。東側の２つの柱穴(P166･183)は、後世に上部が削平されており、本来の形状・深さを保っていない。

〔平面形式・方向〕３間分４個の柱穴を検出した。軸方向はＮ－81°－Ｅ。

〔規模〕691cm(22.8尺)。　〔柱間寸法〕217cm(7.1尺)～243cm(8.0尺)。P167･P182は方形基調で、P167には柱痕跡が認められる。

遺物　P167から土師器10.9ｇ、P182から土師器が7.8ｇ、須恵器が29.5ｇ出土した。

時期　出土遺物から平安時代に属するものと思われるが、詳細な時期は不明である。

(４)土　坑　類

101号土坑

遺構(第29図、写真図版18)

〔位置・検出状況〕東側調査区中央西寄りの遺構集中部、ＢⅨｗ11･ｘ11グリッドに跨がっている。他の遺構とともに、Ⅳ層上面で検出した。

〔平面形・規模〕円形をなすが、遺構の南側は撹乱を受けている。規模は開口部径100cm前後、底部径69×80cm、深さは最大で13cmである。

〔埋土〕上位は黄褐色土シルト、下位は褐色土ブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。

〔底面・壁〕底面は波打ち、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、古代に属する可能性がある。

102号土坑

遺構(第29図、写真図版18)

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｙ１グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕平面形は不整楕円形、規模は開口部径97×131cm、底部径71×103cm、深さは20～23cmである。

〔埋土〕上位は砂を含む黒褐色土、下位は黒褐色土を含む暗褐色土シルトが主体となる。

〔底面・壁〕底面には浅い凹凸を有し、壁は緩く立ち上がる。

遺物

〔土器・炭化材〕土師器が64.0g、須恵器が6.9gと、炭化材(樹種：センノキ)が１点出土した。

時期　出土遺物から平安時代に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

103号土坑

遺構(第29図、写真図版18)

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｙ１グリッドに位置し、北東側は113号土坑に接する。

〔平面形・規模〕平面形は略円形、規模は開口部径98×102cm、底部径85×92cm、深さは38cm。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。

〔底面・壁〕底面は丸みをもち、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物

〔土器〕土師器が29.1g 出土した。

時期　出土遺物から平安時代に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

104号土坑

遺構（第29図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｙ２グリッド、113号土坑の西側に隣接する。

〔平面形・規模〕略円形と円形が連結したような形状で、東西方向に延びる。埋土の堆積状況から、一連の遺構と判断した。規模は開口部径50×153cm、底部径は楕円部分が38×62cm、円形部分が32×36cm、深さは22～28cm を測る。

〔埋土〕上位は両者にかけて焼土粒を含む黒褐色シルトの同一層が堆積する。西側の楕円部は焼土粒を含む黒・暗褐色土、褐色土などと地山崩落土が堆積、人為的に埋め戻されているようである。

〔底面・壁〕底面は丸みをもち、壁も緩やかに立ち上がっている。

遺物（第59図、写真図版45）

〔土器・炭化材〕埋土から土師器が182.4g のほか、炭化材（樹種：クリ）が出土している。156はロクロ成形の土師器甕で、底部外面に回転糸切り痕を残す。外面の下端部にはハケメ調整が見られる。

時期　出土遺物から平安時代に属すると思われる。

105号土坑

遺構（第29図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｙ２グリッド、104号土坑の南側３ｍに位置する。遺構のほぼ南側半分は調査区外にある。

〔平面形・規模〕円形基調と思われる。規模は開口部径69×？ cm、底部径直径25cm、深さ26cm。

〔埋土〕５層に分層したが、いずれも黒褐色の粘土質シルトが基調となる。人為的に埋め戻される。

〔底面・壁〕壁は凹凸を持って直立気味に立ち上がる。

遺物（第59図、写真図版45）

〔土器〕埋土から土師器が79.8g、須恵器が6.1g 出土した。157はロクロ成形の土師器甕口縁部で、口唇部は斜め上方に引き出される。ロクロ痕以外は観察されない。

時期　出土遺物から平安時代に属すると思われる土坑である。

106号土坑

遺構（第29図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＢⅧｗ18・ｗ19グリッドに跨がる。107号土坑の南側２ｍに位置する。

〔平面形・規模〕隅丸長方形をなす。規模は開口部径67×78cm、底部径50×65cm、深さ18cm。

〔埋土〕橙色焼土粒を含む暗褐色粘土質シルトの単層に、上位に黒褐色シルトのブロックを含む。

〔底面・壁〕底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。

遺物（第59・60図、写真図版45・46）

〔土器〕土師器が1105.1g、須恵器が160.1g の総量1,265.2g 出土した。158～162はロクロ成形の土師器坏で、いずれも内面はヘラミガキ調整後に黒色処理される。158は外面下端部、底部外面の外周部にヘ

ラケズリの再調整が明瞭である。160・161は外面下端のみ再調整されるものである。163は107号土坑のものと接合した土師器甕でロクロ成形されるもの。164は須恵器の坏で、底径が7.6cmと大きい。

時期　出土遺物の特徴から、平安時代９世紀前半（第Ⅱ期）に属する土坑と思われる。

107号土坑

遺構（第29図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＢⅧｗ18グリッドに位置する。他は106号土坑で記載のとおり。

〔平面形・規模〕不整隅丸長方形をなす。規模は開口部径64×82cm、底部径50×70cm、深さ15cm。

〔埋土〕粘性の強い暗褐色粘土質シルトの単層である。人為的に埋め戻された様相である。

〔底面・壁〕底面は中央が盛り上がり、壁は直立気味に立ち上がっている。

遺物（第60図、写真図版46）

〔土器〕土師器が262.8g出土している。163は上述のとおり。

時期　106号土坑の出土遺物と接合していることから、９世紀前半に106号土坑とともに使われた土坑であろう。用途は不明である。

108号土坑

遺構（第29図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧａ19グリッド、111号土坑北側２ｍに位置する。

〔平面形・規模〕円形をなす。規模は開口部の直径63cm、底部の直径41cm、深さ16cmである。

〔埋土〕上位は暗褐色土小ブロックを含む黒褐色シルト、下位は暗褐色砂質シルトが堆積する。

〔底面・壁〕底面には段がつき、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物（第60図、写真図版46）

〔土器〕土師器が338.4g出土した。165はロクロ成形の坏で、内面にヘラナデ調整が残り、黒色処理されない個体。166はロクロ成形甕の口縁部で、斜めの細線が数条見えるもの。167は須恵器甕の底部破片である。

時期　出土遺物の特徴から、平安時代９世紀前半（第Ⅱ期）に属する土坑と思われる。

109号土坑

遺構（第29図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＢⅧｘ19グリッド、106号土坑の南東約３ｍに位置する。遺構の東側は撹乱を受けている。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は開口部径115cm前後、底部径44×93cm、深さ23cm。

〔埋土〕褐色土粒をまばらに含む黒色シルトの単層である。　〔底面・壁〕底面には細かな段がある。

遺物

〔土器〕土師器が30.7g出土している。

時期　出土遺物から、平安時代９世紀前半（第Ⅱ期）に属する土坑と思われる。

111号土坑

遺構（第30図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧａ19グリッド、108号土坑の南側にある。

〔平面形・規模〕平面形は略円形で、規模は開口部45×52cm、底部36×39cm、深さ21cm である。
〔埋土〕暗褐色土小ブロックを含む黒褐色粘土質シルトの単層で、地山のブロックが混入する。
〔底面・壁〕底面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　出土遺物がなく、時期は不明である。

112号土坑

遺構（第30図、写真図版20）
〔位置・検出状況〕東側調査区西側ＢⅧｕ18グリッドに位置する。この付近には、水道管等の地下埋設物や民家への進入路があったため、調査していない箇所がある。
〔平面形・規模〕略円形をなす。規模は、開口径77×83cm、底部径54×61cm、深さ14～22cm。
〔埋土〕黒色シルトの単層。　〔底面・壁〕底面はやや傾斜がつき、壁は直立気味に立ち上がる。
遺物
〔土器〕土師器が34.1g 出土している
時期　出土遺物から古代の遺構と思われるが、詳細な時期は不明である。

113号土坑

遺構（第30図、写真図版20）
〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｘ１・ｘ２グリッドに跨がる。103号土坑などとともに検出した。
〔平面形・規模〕平面形は略円形。規模は開口部径94×104cm、底部径は60×66cm、深さ31cm。
〔埋土〕上位は黄褐色土粒を含む黒褐色シルト、中位はにぶい黄褐色土粘土質シルト、下位は煤けた色調の焼土粒を含む黒褐色粘土質シルトが堆積する。焼土粒は全域に散在している。
〔底面・壁〕底面は凹凸を持ちつつ、壁は緩やかに立ち上がる。
遺物
〔土器〕埋土から土師器が58.6g、須恵器が5.6g 出土した。
時期　出土遺物から平安時代に属する土坑と思われる。

115号土坑

遺構（第30図、写真図版21）
〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｘ２グリッド付近に位置する。ほとんどが北側の調査区域外に延びている。
〔平面形・規模〕平面形は方形基調と思われる。規模は、開口部131cm、底部径97cm、深さ25cm。
〔埋土〕暗褐色シルトを主体とするが、褐色土ブロックを含む黒褐色シルトや黒色のシルトなども混じり、自然に堆積したものではないと判断した。
〔底面・壁〕底面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。
遺物
〔土器〕土師器が12.5g 出土している。
時期　出土遺物から古代に属する遺構であろうが、詳細な時期は不明である。周辺にある117･127号土坑に類似する遺構の可能性もある。

116号Ａ・Ｂ土坑

遺構（第30図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｓ10･11グリッドなどに跨って位置し、遺構の東側半分ほどが調査区域外に延びる。当初重複している土坑とは認識できず、また西側には本遺構構築以前に埋め戻された不整形の掘り込みも認められた。北側を116号土坑Ａ、南側を同Ｂとして報告する。

〔重複関係〕西側の掘り込み部→Ｂ→Ａの順に新しい。また、Ｂは117号土坑の北東隅を切っている。

〔平面形・規模〕Ａ・Ｂとも円形基調と思われる。規模は、Ａが開口部172cm、底部径120cm、深さ33～42cm。Ｂが開口部160cm前後、底部径147cm、深さ45～54cmを測る。掘り込み部は不整形で、長さ228cm、幅80cm前後、深さは最深部で67cmである。

〔埋土〕Ａは上位に黒色シルト、下位に黄褐色土粒を含む黒褐色土粘土質シルトが堆積する。ＢはＡとよく似ているが、その下に白色粘土を含む明黄褐色粘土層やにぶい黄橙色の粘土層などがみられ、これらは西側の掘り込み部にも堆積している。

〔底面・壁〕ともに底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。掘り込み部の底面は大きく波打つ。

遺物（第60図、写真図版46）

〔土器〕掘り込み部以外の埋土から土師器が223.4g、須恵器が232.8g出土した。ＡかＢかはわからない。168は須恵器大甕の体部、169はロクロ成形の土師器坏で、内面がヘラミガキ後黒色処理される。

時期　出土遺物から、９世紀前半から10世紀初頭（第Ⅱ～Ⅲ期）のいずれかに属すると考えられる。掘り込み部は、粘土の採掘でできた可能性がある。が、土坑との関係は不明である。

117号土坑

遺構（第30図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｔ11グリッドに位置する。重複関係は116号土坑で記載のとおりである。西壁に柱穴状のピット（PP １）を１つ有する。

〔平面形・規模〕平面形は不整な隅丸方形をなす。規模は、開口部180×183cm、底部径157×158cm、深さ33cm前後。PP １は直径30cmほどで、深さは71cmを測る。

〔埋土〕上位は黄褐色土粒を含む黒褐色シルト、中位は褐色等の小ブロックを含む黒色土シルト、下位は褐色の粘土質土が堆積する。

〔底面・壁〕底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物

〔土器〕埋土から土師器が98.0g、須恵器が23.7g出土した。

時期　出土遺物から古代に属する遺構と思われるが、詳細な時期は不明である。

118号土坑

遺構（第31図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ14グリッドに位置し、第Ⅳ層で検出した。

〔重複関係〕101号住居状遺構外周溝の東部で切り合うが、本遺構の方が旧い。

〔平面形・規模〕平面形は略円形。規模は開口部径90×100cm、底部径は67×76cm、深さ18cm。

〔埋土〕上位は焼土粒を含む黒褐色シルト、下位は褐色シルトや黒褐色シルトのブロックが堆積する。

〔底面・壁〕底面はわずかに丸みを持ち、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物（第60図、写真図版46）

〔土器〕埋土から土師器が326.2g、須恵器が76.5g出土した。170・171はロクロ成形の土師器坏でいわゆる赤焼きと呼ばれるもの。172・173は須恵器の坏で、前者は122号土坑出土の破片と接合した。両者は器高が大きく異なっている。また、口縁部が外反する171と172は、その断面がよく似ている。

時期　出土遺物から、９世紀前半から10世紀初頭(第Ⅱ～Ⅲ期)のいずれかに属すると考えられる。

119号土坑

遺構(第31図、写真図版22)

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ14グリッドに位置し、これも第Ⅳ層で検出した。

〔重複関係〕122・123号溝と重複するが、いずれよりも本遺構の方が新しいと思われる。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形。規模は開口部径66×77cm、底部径は48×61cm、深さ17cm。

〔埋土〕焼土ブロックを含む黒褐色シルトの単層で、上部ににぶい黄褐色土のブロックが混じる。

〔底面・壁〕底面はわずかに凹凸を持ち、壁はなだらかに立ち上がる。

遺物(第60・61図、写真図版46)

〔土器〕埋土から土師器が281.2g、須恵器が290.7g出土した。174・175はロクロ成形の土師器坏で、前者は内面が黒色処理されるが、後者にはそれが施されない。底部外面にヘラケズリによる再調整痕が観察され、その意味で赤焼き土器とは言えない。176は須恵器甕の口縁部破片である。

時期　出土遺物から、９世紀前半から10世紀初頭(第Ⅱ～Ⅲ期)のいずれかに属すると考えられる。

120号土坑

遺構(第31図、写真図版22)

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ16グリッドに位置する。

〔重複関係〕102号住居状遺構を切り、133号土坑とは西側で接している。

〔平面形・規模〕平面形は略円形。規模は開口部径50×67cm、底部径は25×34cm、深さ36cm。

〔埋土〕上位は焼土粒を含む黒褐色シルト、中位は炭化物を含む黒色シルト、下位は焼土ブロックや黄褐色土ブロックを含む黒褐色土からなる。

〔底面・壁〕底面はやや傾斜を持ち、壁は南側に緩やかに立ち上がる。

遺物(第61図、写真図版46)

〔土器〕埋土から土師器が490.2g、須恵器が360.1g出土した。177は須恵器甕の体部下端の破片で、内面に当て具痕が明瞭に残るもの。178も須恵器大甕の体部である。

時期　出土遺物から、平安時代のいずれかに属する土坑と考えられる。

121号土坑

遺構(第31図、写真図版22)

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｖ15・ｗ15グリッドなどに跨がり、西側に118号土坑、南側に122号土坑が接する。

〔平面形・規模〕平面形は略円形。規模は開口部径93×121cm、底部径は67×74cm、深さ20cm。

〔埋土〕上位は焼土粒を大量に含む黒褐色シルト、中位に暗褐色粘土質シルトを挟み、下位は焼土粒が混入する黒色シルトが堆積する。

〔底面・壁〕底面は浅い皿状をなし、壁はそのままなだらかに立ち上がる。

遺物(第61図、写真図版46)

〔土器〕埋土から土師器が81.9g、須恵器が89.8g 出土した。179はロクロ成形の土師器坏で内面に黒色処理が施されるもの。180はロクロ成形の土師器坏で、体部外面に墨書が見られるが判読できない個体。181は須恵器坏の略完形品である。

時期　出土遺物から、９世紀前半から10世紀初頭（第Ⅱ～Ⅲ期）のいずれかに属すると考えられる。

122号土坑

遺構（第31図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ14グリッドに位置する。

〔重複関係〕北側で122号土坑が接し、東側で132・140号土坑と重複する。ともに本遺構より新しい。

〔平面形・規模〕平面形は細かい凸凹を有する略円形をなす。規模は開口部径130cm 前後、底部径は58×80cm、深さ21cm。

〔埋土〕最上位に薄くにぶい黄褐色シルトがみられるが、全体としては黒色シルトが主体である。

〔底面・壁〕底面は凹凸をなし、壁はそのままダラダラと立ち上がる。

遺物（第61図、写真図版46・47）

〔土器〕埋土から土師器が567.7g、須恵器が422.3g 出土している。182～184はロクロ成形の土師器の坏である。182はいわゆる赤焼き土器で、判読不能の墨書が体部下端から底部にかけて観察される。183・184は内面が黒色処理され、後者は外面下端にヘラケズリ調整がかすかに見えるもの。185は須恵器坏の完形品、186は須恵器甕の体部破片である。この他、焼成粘土塊が20.5g 出土した。

〔鉄製品〕187は紡錘車の軸と思われる鉄製品で、両端は欠損している。

時期　出土遺物から、９世紀前半から10世紀初頭（第Ⅱ～Ⅲ期）のいずれかに属すると考えられる。

123号土坑

遺構（第31図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕東側調査区南東部ＣＸｆ３・ｆ４グリッドに跨がる。第Ⅳ層で検出した。

〔平面形・規模〕不整長方形。規模は開口部径95×126cm、底部径は72×102cm、深さ16cm。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色粘土質シルトの単層である。

〔底面・壁〕底面は浅皿状をなし、壁は自然に立ち上がる。

遺物　出土していない

時期　出土遺物がなく、時期が不明の土坑である。

125号土坑

遺構（第31図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部北寄りＢⅨ１５グリッドに位置し、北西側に126号土坑が隣接する。遺構の南側は調査区域外に延びる。　〔重複関係〕124号溝に南側を切られている。

〔平面形・規模〕平面形は不整形。規模は開口部径250cm 以上、底部径220cm 以上、深さ37～55cm。

〔埋土〕黄褐色土粒等を含む黒褐色土粘土質シルトが主体で、底面の凹凸部に粘性の強い黒褐色土や黒色土が堆積する。

〔底面・壁〕底面は大きな凹凸を有し、北壁はオーバーハングして立ち上がる。

遺物（第62図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が295.6g、須恵器が17.1g 出土した。192はロクロ成形の土師器坏で、いわゆる

赤焼きと呼ばれるもの。193は同じ赤焼き土器の甕で、底部には回転糸切り痕が残っている。

時期　出土遺物から、９世紀後半から10世紀初頭（第Ⅲ期）に属すると思われる。形状が定形をなさず、用途については不明とせざるを得ないが、粘土層まで掘り込まれていることから、古代の粘土採掘坑の可能性がある。

126号土坑

遺構（第32図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕125号土坑と同じＢⅨ１５グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕不整楕円形をなす。規模は開口部径54×81cm、底部径は47×73cm、深さ16cm。

〔埋土〕黄褐色土小ブロックを含む黒褐色シルトの単層で、部分的にロームブロックを含む。

〔底面・壁〕底面は細かい凹凸を持ち、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物　出土していない

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

127号土坑

遺構（第32図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｖ10・ｗ10グリッドにあり、掘立柱建物群の南側２ｍほどに位置する。第Ⅲ層下面で検出した。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形から長方形で、規模は開口部径165×180cm、底部径134×150cm、深さは24～31cmを測る。

〔埋土〕上位は明黄褐色土の小ブロックを含む黒褐色土粘土質シルト、下位は地山の崩落ブロックを含む灰黄褐色粘土質シルトからなる。

〔底面・壁〕底面は中央部が盛り上がるもののほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物（第62図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が3.0g、須恵器が343.2g出土した。194は須恵器坏の体部から底部の破片、195は須恵器甕の底部である。後者の外面には、タタキメやヘラケズリ調整が観察される。

時期　出土遺物から、９世紀前半から10世紀にかけて（第Ⅱ～Ⅲ期）のいずれかに属する土坑と思われる。方形基調であることから、作業場的な用途も想定されよう。

128号土坑

遺構（第32図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧｉ20グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、他の竪穴住居などとともに検出した。

〔重複関係〕110・111号住居と重複するが、いずれよりも本遺構の方が新しい。

〔平面形・規模〕平面形は方形基調である。規模は開口部径110×129cm、底部径74×78cm、深さ23cm。

〔埋土〕黄褐色土小ブロックを含む黒褐色シルトが主体である。

〔底面・壁〕底面は細かい凹凸を持つ。壁はなだらかに立ち上がる。

遺物　出土していない

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

129号土坑

遺構（第32図、写真図版24）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部東寄りＢＸｔ12グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕平面形は円形、規模は開口部径75×82cm、底部径49×54cm、深さ13cm。

〔埋土〕黒褐色粘土質シルトの単層。　〔底面・壁〕底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物

〔土器〕埋土から土師器が24.0g、須恵器が1.9g 出土した。

時期　出土遺物から、古代に属する遺構であるが、詳細な時期は不明である。

130号土坑

遺構（第32図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部の110号住居内、ＣⅧｊ20グリッドに位置する。

〔重複関係〕110号住居の床面で検出したが、新旧は不明である。Ｐ235との関係も不明である。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で、規模は開口部径70×92cm、底部径60×85cm、深さ18cm。

〔埋土〕上位から中位は黄褐色土粒を含む黒褐色シルト、下位は暗褐色土や黄褐色土粒を含む黒褐色シルトが薄く堆積している。　〔底面・壁〕底面は凹凸を持ち、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物（第62図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が59.8g、須恵器が14.8g 出土した。196はロクロ成形の土師器坏の体部破片で、内面がヘラミガキ調整後、黒色処理されるものである。

時期　出土遺物から、平安時代のいずれかに属する土坑と考えられる。

131号土坑

遺構（第32図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧｃ19グリッドに位置する。本遺構の東側にある118号溝とともに第Ⅲ層で検出した。西側はわずかに調査区域外に延びる。

〔重複関係〕118号溝と重複するが、溝に切られる。埋土の状況から、それほどの時期差はないものと思われる。

〔平面形・規模〕平面形は略円形、規模は開口部径116×127cm、底部径32×41cm、深さは48cm。

〔埋土〕４層に分層される。上位は白色粒子を含む黒褐色シルト、中位も黒褐色シルトだが酸化鉄を含む層、下位は黄褐色土粒を含む黒褐色シルトである。なお、上位の黒褐色土は118号溝も覆う。

〔底面・壁〕底面は土坑状の掘り込みを持ち、西壁は直立気味に立ち上がる。

遺物（第62図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が292.4g、須恵器が13.2g 出土した。197は非ロクロ成形の土師器甕で、口縁部は内湾しながら大きく開く。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ調整、体部は外面がハケメ、内面はヘラナデ調整がかすかにみられる。

時期　出土遺物から、平安時代のいずれかに属する土坑と考えられる。比較的旧いものか。

132号土坑

遺構（第32図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ15グリッドに位置し、122号土坑・102号住居状遺構などに

挟まれる。
〔重複関係〕102号住居状遺構、122・140号土坑のいずれよりも本遺構のほうが旧い。123号溝とも切り合うが、こちらは本遺構のほうが新しい。
〔平面形・規模〕平面形は円形基調と思われる。規模は直径80cm 前後、底部径50×59cm、深さ23cm。
〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトのブロックを含んでいる。
〔底面・壁〕底面は丸みを持つ。東西の壁は重複により失われている。
遺物
〔土器〕埋土から土師器が55.3g、須恵器が5.1g 出土した。
時期　出土遺物から、平安時代のいずれかに属する土坑と考えられる。

133号土坑

遺構（第32図、写真図版25）
〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ15グリッドに位置し、102号住居状遺構の精査中に検出した。
〔重複関係〕102号住居状遺構の南壁中央を切っている。
〔平面形・規模〕平面形は円形基調で、規模は開口部径62×77cm、底部径40×41cm、深さ17cm。
〔埋土〕黄褐色土ブロックや焼土粒を含む黒褐色シルトの単層である。
〔底面・壁〕底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。
遺物（第62図、写真図版47）
〔土器〕埋土から土師器が155.8g、須恵器が178.4g 出土した。198は非ロクロ成形の土師器甕で、口縁部は外反しながら開いている。口縁部の調整はヨコナデ調整、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施される。
時期　出土遺物から、平安時代のいずれかに属する土坑と考えられる。平安時代でも後半か。

134号土坑

遺構（第32図、写真図版25）
〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧｆ20グリッドに位置する。103号住居状遺構内で検出した。
〔重複関係〕103号住居状遺構の床面で確認しており、本遺構のほうが旧いと思われる。
〔平面形・規模〕平面形は不整方形をなす。規模は開口部径が117×127cm、底部径が113×118cm、深さは16cm を測る。　〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒色シルトの単層。
〔底面・壁〕底面はほぼ平坦で、壁は直立気味である。
遺物
〔土器〕埋土から土師器が120.0g、須恵器が34.1g 出土した。
時期　出土遺物から、平安時代のいずれかに属する土坑と考えられる。

135号土坑

遺構（第33図、写真図版26）
〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧｇ20グリッドに位置する。これも103号住居状遺構内で検出した。　〔重複関係〕本遺構が139号土坑を切っている。103号住居状遺構よりは旧いと思われる。
〔平面形・規模〕不整長方形をなす。規模は開口部径90×128cm、底部径71×96cm、深さ23cm。
〔埋土〕黒色土と黄褐色土の混合土の単層である。

〔底面・壁〕底面は凹凸を持ち、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物　出土していない

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、重複関係から古代以前の土坑と考えられる。

136号土坑

遺構（第33図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｖ15グリッドに位置し、141号土坑とともに第Ⅳ層で黒色土の広がりを確認した。北側は調査区域外に延びており、長軸側の規模は不明である。

〔重複関係〕102号住居状遺構、123号溝、141号土坑と重複し、いずれよりも本遺構のほうが新しい。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形と思われる。規模は開口部径156×？ cm、底部径117×？ cm、深さ24cm を測る。

〔埋土〕上位は褐灰色ブロックを含む黒褐色シルト、中位は黄褐色土粒を含む黒褐色シルト、下位には灰黄褐色や暗褐色シルトが薄く堆積している。

〔底面・壁〕底面には細かい凹凸を持ち、壁はなだらかに立ち上がる。

遺物（第63図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が1,035.7g、須恵器が389.5g 出土した。199～202はロクロ成形の土師器坏で、内面はいずれもヘラミガキ調整後、黒色処理されているもの。201と202は底部外面に墨書があるが、これもともに判読できない。203はロクロ成形の土師器坏でいわゆる赤焼き土器、204･205はロクロ成形の甕の口縁部破片である。206と207は須恵器坏の完形品と壺の肩部で、207は内外面にヘラナデ調整痕が明瞭である。

時期　出土遺物から、９世紀～10世紀代（第Ⅲ期）に属する土坑と考えられる。

137号土坑

遺構（第33図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｖ11グリッド、掘立柱建物群の南側に位置する。

〔平面形・規模〕平面形は不整楕円形。規模は開口部径93×152cm、底部径60×100cm、深さ54cm。

〔埋土〕上位は黒褐色シルト、褐色シルト、黒色シルトの順に、中～下位は黒色シルト、最下部には褐色土ブロックを含む黒色土シルトが堆積する。

〔底面・壁〕底面は大きく波打ち、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物（第63図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が62.6g、須恵器が22.8g 出土した。208は須恵器坏で底部を欠く。

時期　出土遺物から、平安時代に属する土坑と考えられるが詳細な時期は不明である。

138号土坑

遺構（第33図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧｆ20･ｇ20グリッドに位置する。103号住居状遺構の床面で検出した。　〔重複関係〕103号住居状遺構より旧い。Ｐ230にも切られている。

〔平面形・規模〕平面形は不整円形。規模は開口部径96×105cm、底部径67×70cm、深さ16cm。

〔埋土〕黒褐色シルトの単層である。　〔底面・壁〕底面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。

遺物（第63図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が49.2g、須恵器が47.2g 出土した。209は須恵器の長頸壺の頸部である。

時期　出土遺物から、平安時代に属する土坑と考えられるが詳細な時期は不明である。

139号土坑

遺構（第33図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕東側調査区南西部ＣⅧｇ20グリッドに位置し、これも103号住居状遺構の床面で135号土坑とともに検出した。

〔重複関係〕103号住居状遺構より旧く、135号土坑より新しい。

〔平面形・規模〕平面形は不整円形で、規模は開口部径87×89cm、底部径56×64cm、深さ18cm。

〔埋土〕白色粒子を含む黒褐色シルトの単層に、ブロック状の明黄褐色土が混入する。

〔底面・壁〕底面は平坦で、東壁は緩やかに立ち上がる。

遺物（第63図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が18.1g 出土した。210はロクロ成形の土師器坏である。

時期　出土遺物から、平安時代に属する土坑と考えられるが詳細な時期は不明である。

140号土坑

遺構（第33図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ15グリッドに位置し、102号住居状遺構の西側に接する。

〔重複関係〕122号土坑を切る。102号住居状遺構とは重複していない。

〔平面形・規模〕平面形は円形で、規模は開口部径50×51cm、底部径36×38cm、深さ15cm 前後。

〔埋土〕掘りきってしまい不明である。

〔底面・壁〕底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物（第63図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が69.6g 出土した。211はロクロ成形の土師器坏である。

時期　出土遺物から、平安時代に属する土坑と考えられるが詳細な時期は不明である。

141号土坑

遺構（第33図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｖ15・ｗ15グリッドに跨がって位置する。検出状況は136号土坑で記載のとおりである。

〔重複関係〕102号住居状遺構、136号土坑と重複し、前者より本遺構のほうが旧い。後者のと関係は掴めなかった。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形か楕円基調と思われる。規模は開口部径113×？ cm、底部径88×？cm、深さ18cm 前後である。

〔埋土〕粘性の強い黒色シルトが主体で、最下部に灰黄褐色シルトがみられる。

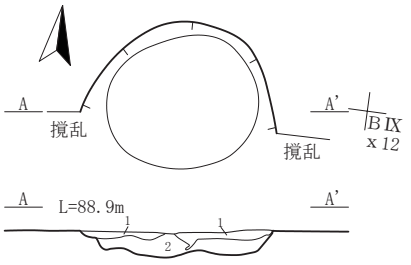
〔底面・壁〕底面に凹凸を持つ。壁はなだらかに立ち上がる。

遺物（第63図、写真図版47）

〔土器〕埋土から土師器が24.8g、須恵器が5.1g 出土した。212は須恵器長頸壺の頸部で、だいぶ小ぶりな個体である。

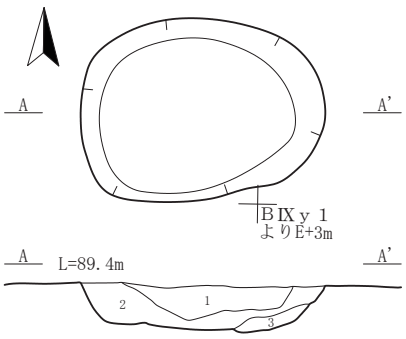
時期　出土遺物から、平安時代属する土坑と考えられるが詳細な時期は不明である。

101号土坑



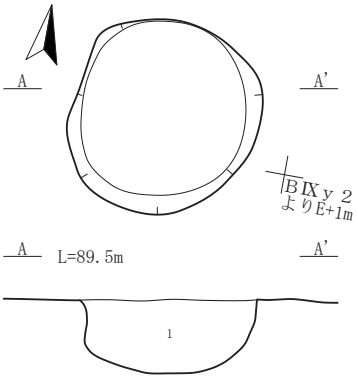
101号土坑
1. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有
埋め戻し
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
褐色土ブロックを含む

102号土坑



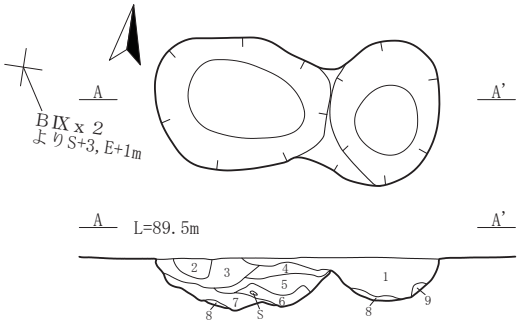
102号土坑
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり有
暗褐色土との混合土、砂を感じる
2. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性有 締まり有
黒褐色土との混合土
3. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性有 締まり有
黄褐色土粒を全体に含む

103号土坑



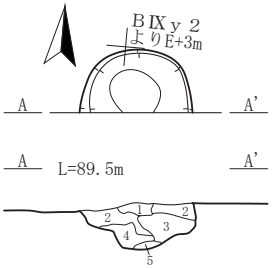
103号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
黄褐色土粒をまばらに含む

104号土坑



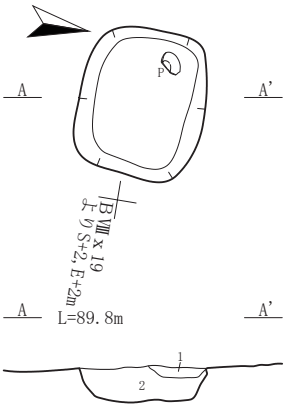
104号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あまりなし 締まり有
赤褐色焼土粒・褐色土粒を含む
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性有 締まり有
褐色焼土粒を含むブロック
3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
褐色土粒・焼土粒を全体に含む
4. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
3層より黒味あり
5. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性有 締まり有
褐色粘土粒を全体に含む
6. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性有 締まり有
焼土粒混入少ない
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性有 締まり有
焼土粒を全体に含む
8. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有 ブロック状
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性有 締まり有
地山崩落ブロック

105号土坑



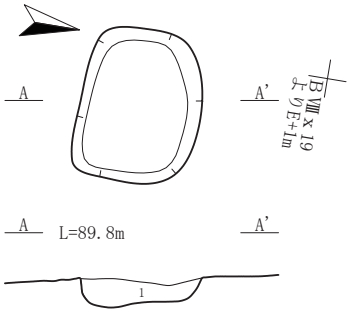
105号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有 褐色土粒を疎らに含む
2. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有 黄褐色土粒を全体に含む
3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有 黄褐色土粒を疎らに含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
粘性有 締まり有 黒褐色土粒を含む
5. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有 ブロック状

106号土坑



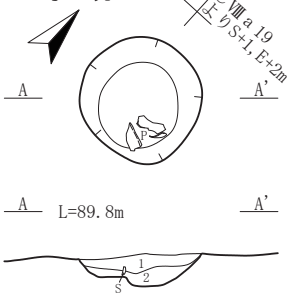
106号土坑
1. 10YR3/1 黒褐色シルト
粘性やや有 締まり有
橙色焼土粒を疎らに含む
2. 7.5YR3/4 暗褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有
橙色焼土粒、褐色土を含む

107号土坑



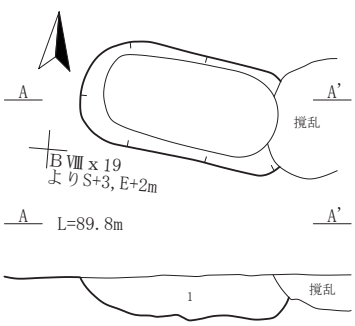
107号土坑
1. 7.5YR3/4 暗褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有 埋め戻されている

108号土坑

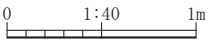


108号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト
粘性やや有 締まり有 暗褐色土小ブロックを含む
2. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
粘性やや有 締まり有 地山崩落土を含む

109号土坑

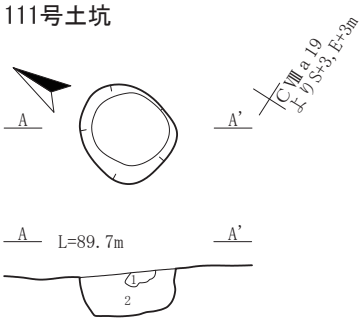


109号土坑
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有 締まり有
褐色土粒がごくまばらに入る



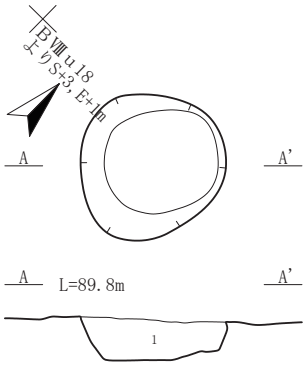
第29図　101～109号土坑

111号土坑



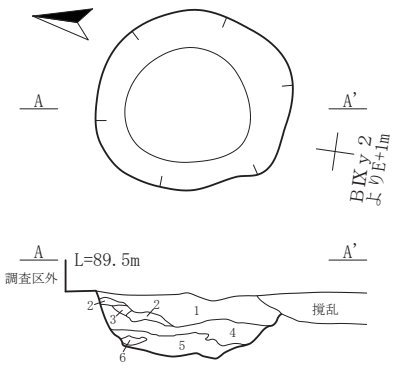
111号土坑
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
   粘性有 締まり有 地山のブロック
2. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
   粘性やや有 締まり有
   黄褐色土小ブロックを含む

112号土坑



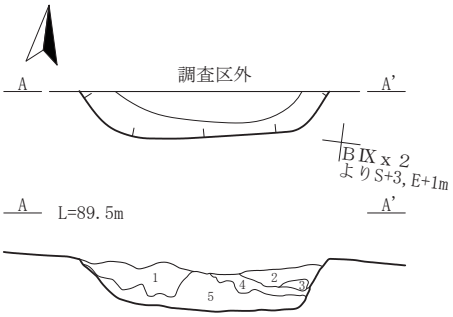
112号土坑
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有 締まりやや有
   黒色土の単層で混入物なし

113号土坑



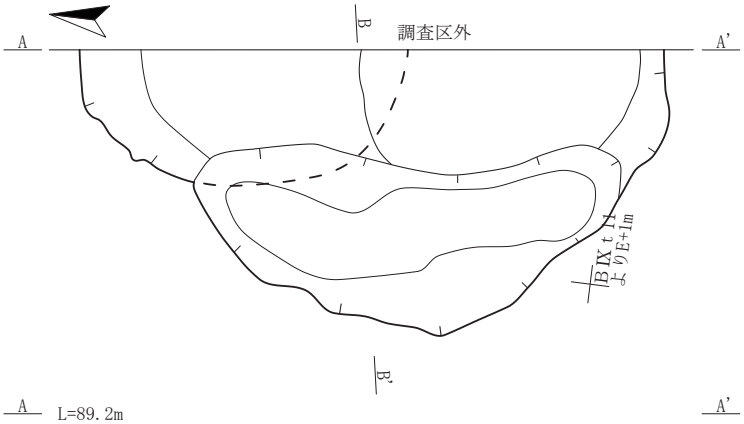
113号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
   黄褐色土粒及びそのブロックを全体に含む
2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
   黄褐色土粒、焼土粒を全体に含む
3. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
   粘性やや有 締まりやや有 焼土粒、黄褐色土粒を含む
5. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
   褐色焼土粒をまばらに含む
6. 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
   くすんだ色調の黒褐色土、焼土粒微量

115号土坑

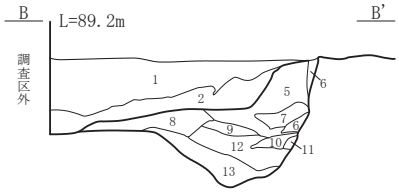


115号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
   褐色土ブロックとの混合土
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
   褐色土の混入少ない
3. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
   ロームブロック
4. 10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりやや有
   褐色土小ブロックを含む
5. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有

116号Ａ・Ｂ土坑

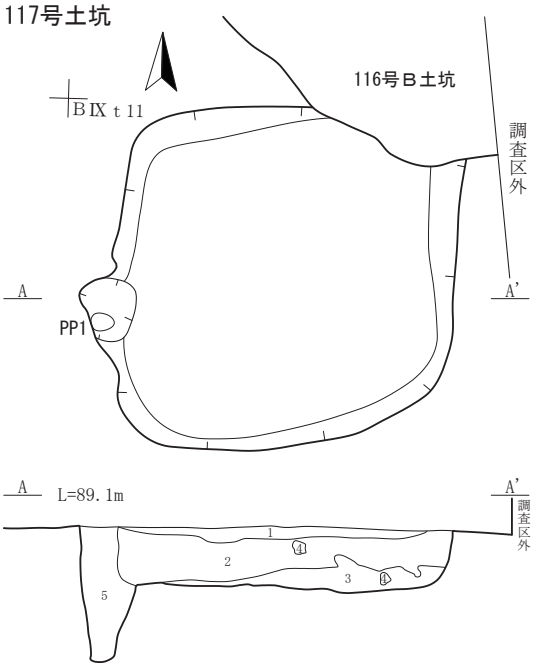


116号Ａ・Ｂ土坑
1. 10YR2/1 黒色シルト
   粘性やや有 締まりやや有
   1層の赤褐色焼土粒が混入しない
2. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
   粘性やや有 締まりやや有
   黄褐色粘土粒、
   黒褐色粘土粒を疎らに含む
3. 10YR2/1 黒色シルト
   粘性あまりなし 締まりやや有
   褐色土粒をまばらに含む
4. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
   粘性やや有 締まり有
   黄褐色土粒をまばらに含む



5. 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性やや有 締まり有
   褐色土粒を全体に含むが少ない
6. 10YR4/4 褐色粘土 粘性有(強) 締まり有
   地山崩落ブロック(粘土層)
7. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
   地山崩落ブロック(漸移層)
8. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
   黄褐色土粒を全体に含む
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
   粘性やや有 締まり有 黒褐色シルトとの混合土
10. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや有 締まり有
    黒褐色土との混合土
11. 10YR6/6 明黄褐色粘土 粘性有(強) 締まりやや有
    地山崩落ブロック(白粘土層)
12. 10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まり有
    黄褐色土小ブロックをわずかに含む
13. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土 粘性有(強) 締まり有
    黒色土との混合土

117号土坑

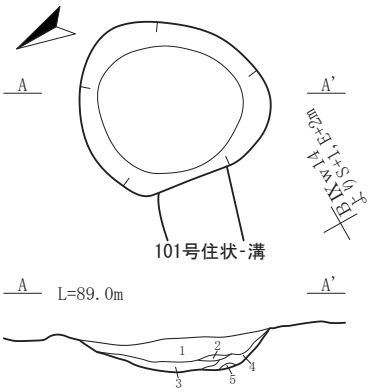


117号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト
   粘性やや有 締まり有
   黄褐色土ブロックを含む
2. 10YR2/1 黒色シルト
   粘性あまりなし 締まり有
   明黄褐・褐色土小ブロックを含む
3. 10YR4/4 褐色粘土
   粘性有 締まり有
   黒褐色土粒を全体に含む
4. 10YR4/4 褐色粘土質シルト
   粘性やや有 締まり有 ローム塊
5. 10YR2/1 黒色シルト
   粘性やや有 締まり有
   黄褐色土ブロックをわずかに含む

0　1:40　1m

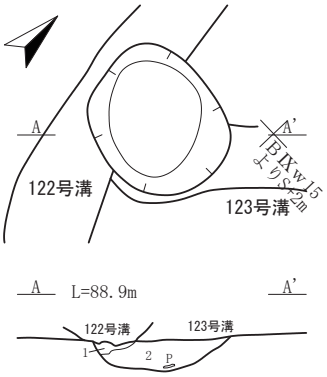
第30図　111～113・115～117号土坑

118号土坑



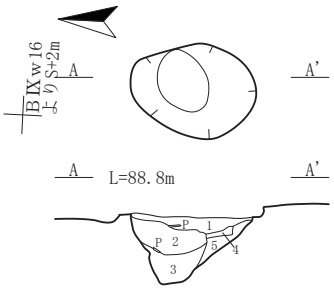
118号土坑
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
焼土ブロック少量
2.10YR5/8 黄褐色シルト 粘性極めて有 締まり有
3.10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有
黄褐色土ブロック微量
4.10YR2/3 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
5.10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有

119号土坑



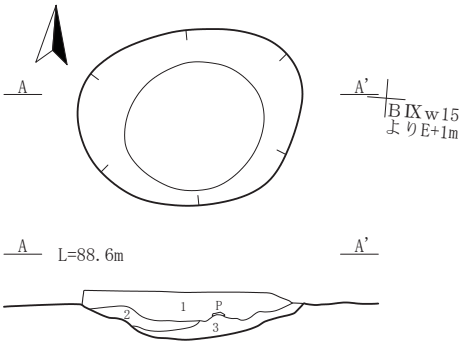
119号土坑
1.10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有
2.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
黄橙色焼土ブロック少量含む

120号土坑



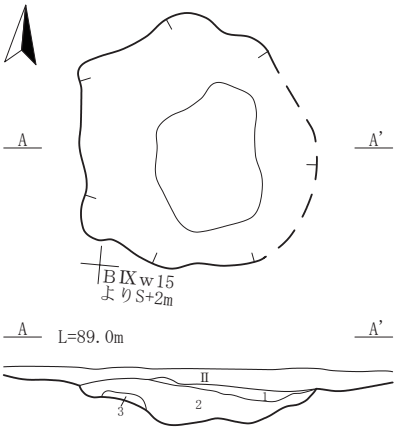
120号土坑
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
焼土ブロック微量
2.10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりやや有
炭化物微量
3.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
焼土ブロック・黄褐色土ブロック少量
4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性有 締まりやや有
5.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
灰黄褐色土ブロック多く含む

121号土坑



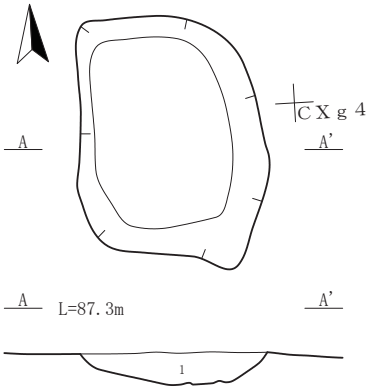
121号土坑
1.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有 焼土粒多く含む
2.10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性有(強) 締まり有
3.10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まりなし 焼土粒わずかに含む

122号土坑



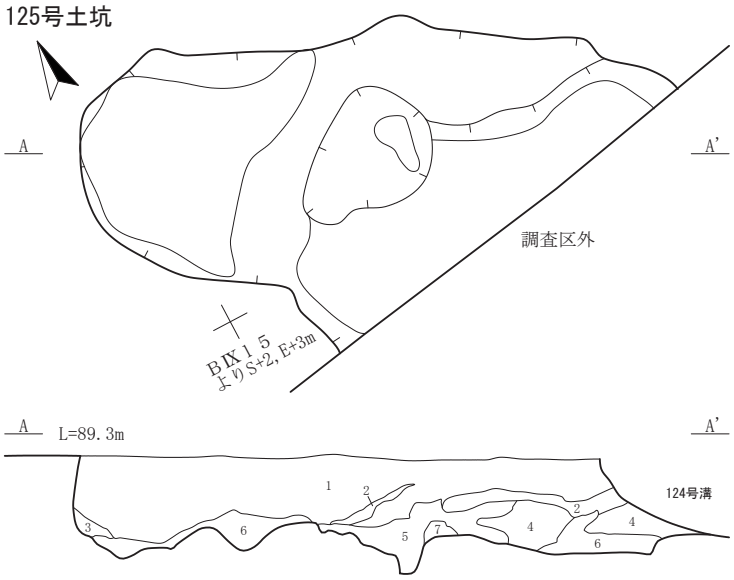
122号土坑
1.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや有 締まりなし
2.10YR2/1 黒色シルト 粘性有 締まり有
3.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性有(強) 締まり有

123号土坑



123号土坑
1.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性やや有 締まりなし
黄褐色土粒を全体に含む

125号土坑

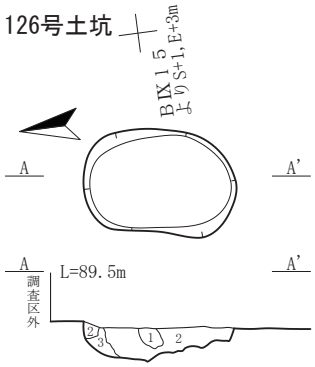


125号土坑
1.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性あまりなし 締まり有
黄褐色土粒、酸化鉄分を斑状に含む
2.10YR2/3 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
明黄褐色土小ブロックを全体に含む、マーブル状か？
3.10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 粘性有 締まり有 地山崩落ブロック
4.10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
明黄褐色土、黒褐色土との混合土
5.10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや有 締まりやや有 混入物なし
6.10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
にぶい黄橙色小ブロックとの混合土
7.10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有 ブロック状

0　1:40　1m

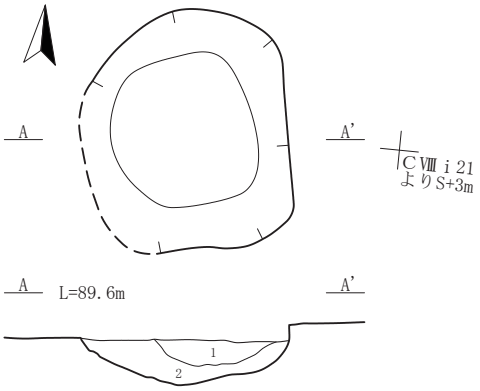
第31図　118～123・125号土坑

126号土坑



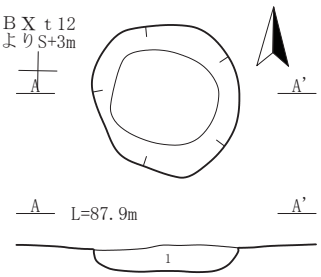
126号土坑
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
　褐色土との混合土
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
　黄褐色土小ブロックを含む
3. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　ロームブロック

128号土坑



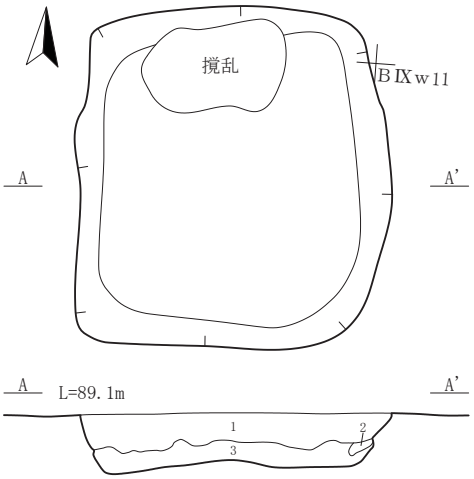
128号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
　酸化鉄分多く含む
2. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　黄褐色土小ブロック及びその細性含む

129号土坑



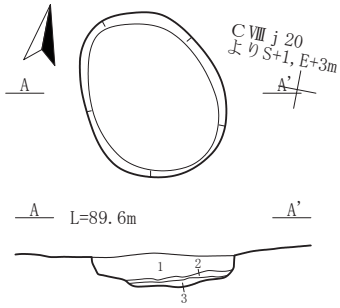
129号土坑
1. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
　粘性なし 締まり有

127号土坑



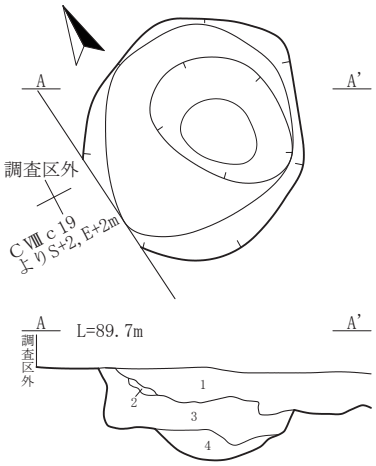
127号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　酸化鉄分、明黄褐色土小ブロックを含む
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
　粘性やや有 締まりやや有 地山崩落ブロック
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　明黄褐・黒褐色土をマーブル状に含む

130号土坑



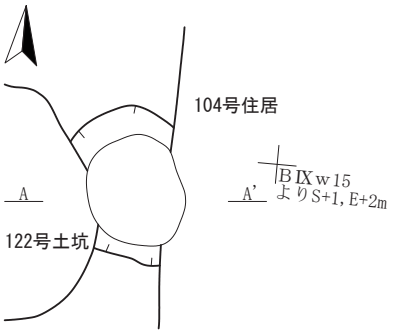
130号土坑
1. 10YR2/3 黒褐色シルト
　粘性やや有 締まりやや有
　黄褐色土粒を全体に含む
2. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト
　粘性有 締まりやや有 マーブル状
3. 10YR2/3 黒褐色シルト
　粘性やや有 締まりやや有
　黄褐色土粒を全体に含む

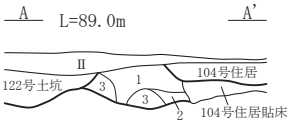
131号土坑



131号土坑
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
　白色粒子を全体に含む、ザラザラした感じ
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
　黄褐色土粒を全体に含む
3. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性あまりなし 締まり有
　酸化鉄を全体に含む、白色粒子はわずか
4. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有
　黄褐色土粒をまばらに含む

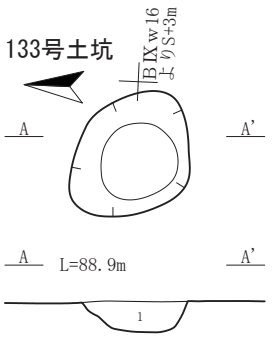
132号土坑





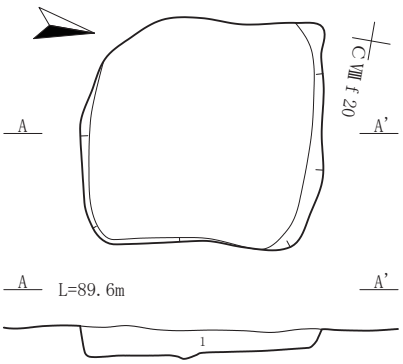
132号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
　黄褐色土粒少量
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有
　焼土ブロック
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性有 締まり有
　黒褐色土との混合土

133号土坑



133号土坑
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まり有
　黄褐色土ブロック少量、焼土粒微量含む

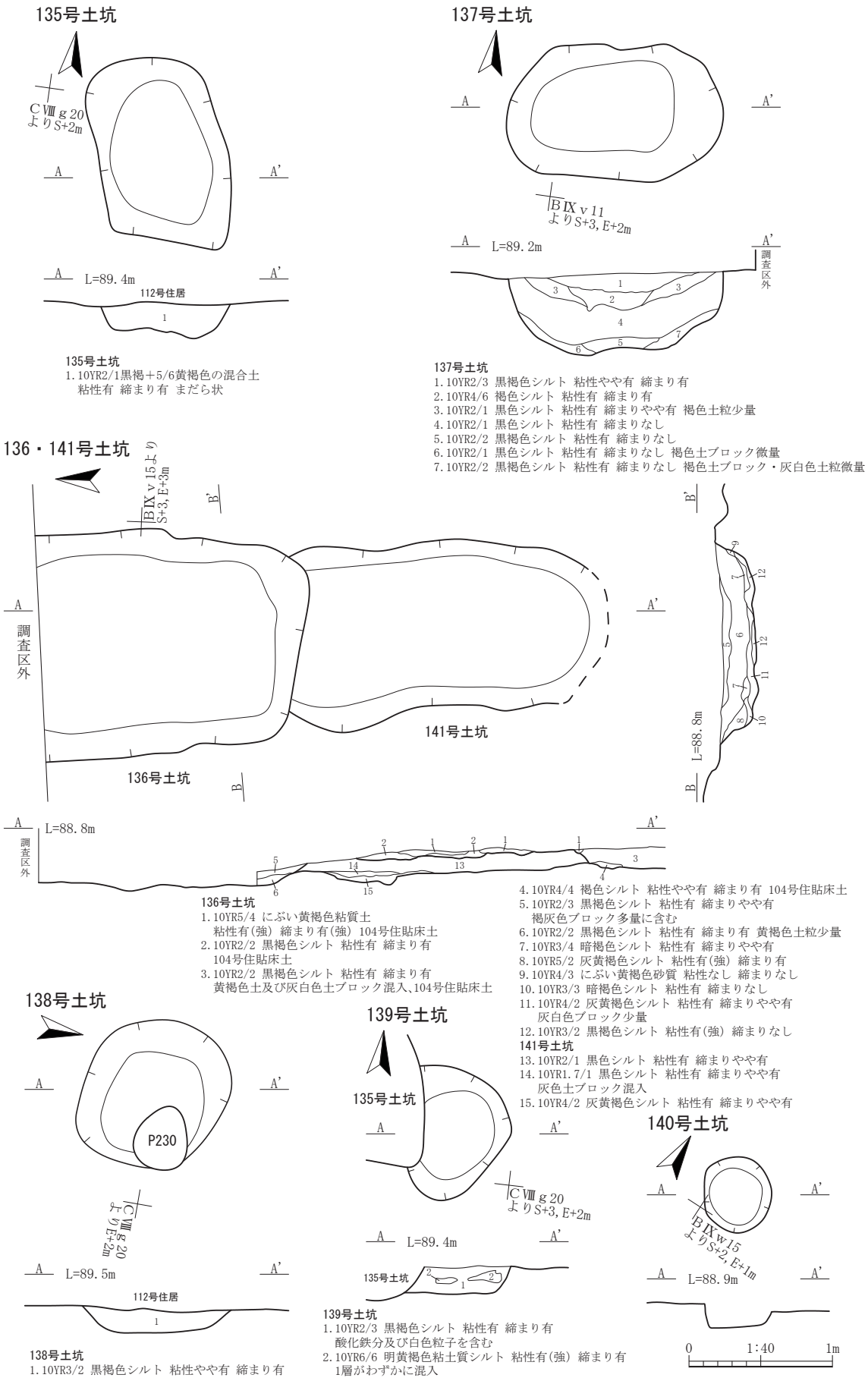
134号土坑



134号土坑
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや有 締まりやや有
　黄褐色土粒をまばらに含む

0　1:40　1m

第32図　126～134号土坑



第33図　135～141号土坑

（５）炉　　跡

101号炉跡

遺構（第34図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ12グリッドに位置し、東側に接する102号炉跡とともに第Ⅳ層上面で検出した。本遺構と102号炉跡の南側は調査区域外に延びている。

〔重複関係〕検出した際は102号炉跡と重複しているように見えたが、埋土が同時に埋め戻された様相をなしており、新旧関係はないものと思われる。両者で一体の遺構である可能性もある。

〔平面形・規模〕平面形は不整長方形か。規模は開口部径180×？ cm、底部径108×？ cm、深さは62cmを測る。

〔埋土〕上位は橙色焼土粒を含む黒褐色シルト、中位も焼土粒を大量に含む黒褐色シルトと黒色土、下位は白色粒子を含む灰黄褐色粘土質シルトが堆積する。上位から中位にかけての黒褐色シルトは、一部102号炉跡にわたって堆積しており、ほぼ同時に埋め戻された様相をなす。

〔底面・壁〕底面はわずかに波打ち、壁は外反気味に立ち上がる。

遺物（第64図、写真図版47・48）

〔土器〕土師器が996.0g、須恵器が199.4g 出土した。219～221はロクロ成形の土師器坏で、内面が黒色処理されるもの。いずれも体部下端にはヘラケズリ調整が施され、221は底部にも及ぶ。222はロクロ成形の土師器甕の口縁部である。223・224は須恵器坏、225は須恵器甕の体部破片である。226は焼けた粘土塊で、写真のみ掲載した。

時期　出土した遺物から、時期は９世紀前半（第Ⅱ期）と思われる。炉跡としたが用途は不明であり、先述したように、102号炉跡とともに機能した遺構と思われる。

102号炉跡

遺構（第34図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ12・ｗ13グリッドに跨がる。検出状況などは、101号炉跡で記載のとおりである。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形か。規模は開口部径141×？ cm、底部径104×？ cm、深さは最大で52cm である。

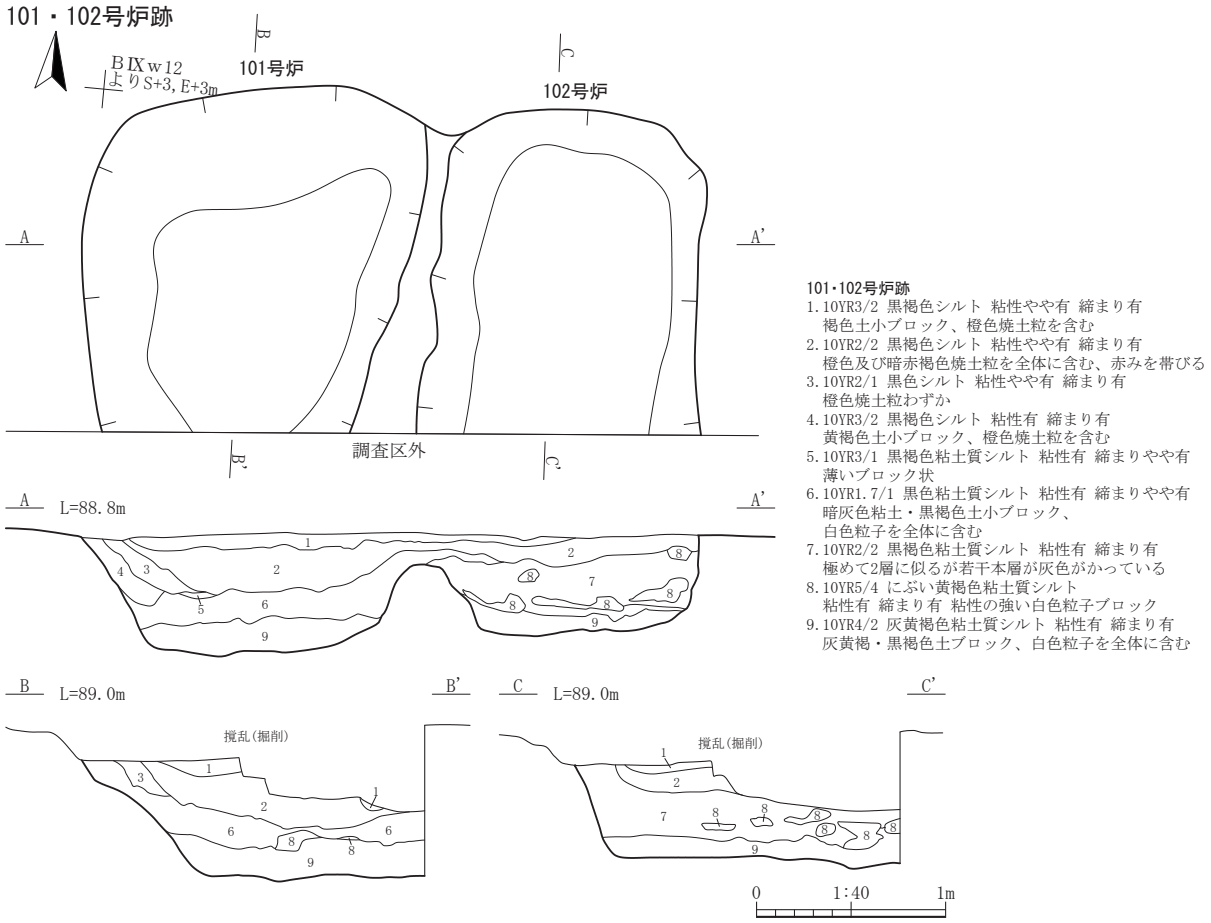
〔埋土〕上位は101号炉跡の埋土と同じ黒褐色シルト、中位はにぶい黄褐色のブロックを含む黒褐色粘土質シルト、下位は101号炉跡と同じ灰黄褐色粘土質シルトが堆積している。

〔底面・壁〕底面はほぼ平坦で、西壁は緩やかに、東壁は直立気味に立ち上がっている。

遺物（第64・65図、写真図版48）

〔土器・その他〕土師器が257.8g、須恵器が131.4g 出土した。227はロクロ成形の土師器坏で、内面は黒色処理されない。228はロクロ成形の甕の体部で、内面はヘラミガキ調整後黒色処理されているもの。229・230は須恵器で、前者は壺の肩部、後者は甕の体部破片と思われる。

時期　上述したように、９世紀前半（第Ⅱ期）に属し、101号炉跡とともに使用されたと考えられる。



第34図　101・102号炉跡

（６）溝　　跡

101号溝

遺構（第35図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨、ＢＸＩｄ２グリッド付近に位置する。確認調査区で検出した溝であり、精査は遺構の深さを確認するにとどめた。

〔方向・規模〕北東から南西方向に延びる。検出した長さは450cm、幅100cm 前後、深さ40cm である。

〔埋土〕黄褐色土を含む黒褐色土が主体で、これは２つに分層される。　〔断面形〕Ｕ字状をなす。

遺物

〔土器〕埋土中から土師器細片が10.7ｇ出土した。

時期　古代以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

102号溝

遺構（第35図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨、ＢＸＩｄ３グリッド付近にありこれもすべてを掘りあげていない。

〔方向・規模〕南北方向に延び、検出した長さは390cm、幅60～165cm 前後、深さは最大で26cm。

〔埋土〕黄褐色土を含む暗褐色土の単層だが、一部に黒褐色土を含む。　〔断面形〕浅皿状。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である

103号溝

遺構（第35図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の北西隅、ＢＸｅ11･12グリッドほかに位置する。確認調査区で検出したものであるが、土師器が出土したことからすべてを精査した。

〔重複関係〕104･106･108･109･114･115号溝と重複するが、いずれよりも本遺構のほうが旧い。

〔方向・規模〕北東から南西方向に延びている。長さは950cm、幅38～62cm、深さは38cm である。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルトとにぶい黄褐色土粘土質シルトが主体で、一部に褐色土を含む。人為的に埋め戻された様相をなす。　〔断面形〕深めの逆台形状をなす。

遺物

〔土器〕埋土中から土師器片が265.８ｇ出土した。いずれも細片であり掲載していない。

時期　古代以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

104号溝

遺構（第36図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の北西隅から南側に延びる。ＢＸｈ12～14グリッドに位置する。これも検出した部分はすべて精査した。

〔重複関係〕109号溝と重複し、本遺構のほうが旧い。

〔方向・規模〕ほぼ南北方向に西側にわずかに膨らみつつ延びる。規模は、長さ18.３m、幅41～90cm、深さは北端で28cm を測る。東側の壁は段状に立ち上がっている。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルト質土の単層である。　〔断面形〕逆台形状をなす。

遺物（第65図、写真図版48）

〔土器〕埋土中から土師器片が541.３ｇ出土した。231は甕の体部下半と思われ、外面にはヘラケズリ調整が明瞭である。内面には輪積み痕も見られる。

時期　出土遺物から平安時代に属する溝と思われる。

105号溝

遺構（第36図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の北西隅やや南側を東西に横切る。ＢＸｆ11グリッドに位置する。埋土から黒曜石が出土したことからすべてを精査した。

〔重複関係〕104号溝に切られている。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に延びるが、東側でわずかに南に下がるか。規模は、長さ375cm、幅58～105cm、深さは25cm である。

〔埋土〕土師器片や上述の黒曜石を含む黒褐色シルト質土の単層である。　〔断面形〕浅いＵ字状。

遺物（第65図、写真図版48）

〔土器〕埋土中から土師器片78.３ｇと、232～236の黒曜石製の剥片５点が出土した。

時期　出土遺物から、古墳時代を含む古代に属する可能性がある溝跡である。

106号溝

遺構（第36図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨北西隅にある溝跡重複部の一つで、ＢＸｄ12グリッドに位置する。遺

構南側は精査していない。
〔重複関係〕115号溝を切り、114号溝には切られている。
〔方向・規模〕ほぼ南北方向に直線状に延びる。規模は、長さ400cm、幅46～70cm、深さ27cm。
〔埋土〕黄褐色土粒を含む暗褐色粘土質シルトの単層である。　〔断面形〕逆台形状。
遺物
〔土器〕埋土から土師器片3.3ｇが出土している。
時期　出土した遺物から、古代に属する可能性がある溝跡であるが、詳細な時期は不明である。

107号溝

遺構（第36図、写真図版29）
〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の南北方向区、ＢＸｈ11グリッド付近に位置する。
〔重複関係〕104･109号溝と重複し、本遺構がいずれよりも旧い。
〔方向・規模〕ほぼ東西方向に延びるが、わずかに湾曲している。規模は、長さ380cm、幅30～39cm、深さ12cm である。
〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕逆台形状。
遺物　出土していない。
時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、重複関係から古代まで遡る可能性がある。

108号溝

遺構（第36図、写真図版29）
〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の南北方向区、ＢＸｄ12グリッドに位置する。重複する複数の溝とともに第Ⅳ層で検出した。精査は南端部のみで行った。
〔重複関係〕109･114号溝に切られている。
〔方向・規模〕ほぼ南北方向に延びる。規模は、長さ400cm、幅45cm、深さ16cm である。
〔埋土〕混入物のない黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕逆台形状か。
遺物　出土していない。
時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

109号溝

遺構（第36図、写真図版29）
〔位置・検出状況〕確認調査区⑨北西隅の溝が集中する箇所にある。ＢＸｄ12～ｊ12グリッドにかけて位置する。
〔重複関係〕114号溝と重複するが新旧は不明。南端部では124号溝に切られている。
〔方向・規模〕ほぼ南北方向に延びるが、南側に進むに従い幅が調査区外に広がる。規模は、長さ18.7ｍ、幅52～？ cm、深さは北端部で28cm を測る。
〔埋土〕黄褐色土小ブロックを含む黒褐色土の単層である。　〔断面形〕北端部では逆台形状をなす。
遺物
〔土器〕埋土中から土師器片17.0ｇが出土した。
時期　土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明としておく。

110号溝

遺構（第36図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の南北方向区、ＢＸｐ12・ｐ13グリッドに跨がる。111号溝などとともに第Ⅳ層で検出した。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に延びる。規模は、長さ400cm、幅60cm前後、深さ16cmである。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色粘土質シルトの単層である。　〔断面形〕浅い逆台形状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

111号溝

遺構（第36図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の南北方向区110号溝の南、約３ｍに平行している。

〔重複関係〕わずかに112･113号溝と重複する。本遺構のほうが新しいと思われる。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向である。規模は、長さ400cm、幅50～72cm、深さは最大24cmを測る。

〔埋土〕黄褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕逆台形状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

112･113号溝

遺構（第36図、写真図版30）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の南北方向区111号溝の南側に隣接している。これらは一部しか精査していない。

〔重複関係〕上述したとおり、111号溝に切られている。またこの二つの溝同士も切り合うが、ともに掘りあげておらず新旧は不明である。

〔方向・規模〕112号溝はほぼ東西方向、113号溝は一つの溝となった後、南西から北東方向に変わる。規模は、いずれも長さ400cm、幅50cm弱、深さは20cm前後である。

〔埋土〕ともに黄褐色土粒やそのブロックを含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕長方形状。

遺物　出土していない。

時期　ともに出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

114号溝

遺構（第36図、写真図版30）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の東西方向区109号溝の北東部、ＢＸｄ12グリッドに位置する。

〔重複関係〕109号溝と重複する。新旧関係は掴めなかった。

〔方向・規模〕南西から北東方向に延びる。規模は、長さ120cm、幅45cm、深さ20cm前後。

〔埋土〕灰黄褐色土との混合土である褐色の粘土質シルトを主体とする。　〔断面形〕逆台形状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

115号溝

遺構（第36図、写真図版30）

〔位置・検出状況〕確認調査区⑨の東西方向区、106号溝の東側に位置する。

〔重複関係〕106号溝と重複し、本遺構の方が旧い。

〔方向・規模〕南北方向に延びるが中央部は東側に張り出す。規模は、長さ320cm、幅30cm前後、深さ15cmを測る。

〔埋土〕褐色土ブロックを含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕U字状。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

116号溝→101号住居状遺構の周溝へ変更

117号溝

遺構（第37図、写真図版30）

〔位置・検出状況〕本調査区⑪確認調査区⑧西隅の遺構集中部にあり、ＢⅨｖ13・ｗ12・ｗ13グリッドなどに跨がる。確認調査区の一部は精査していない。

〔方向・規模〕西南西から北北東方向に延びる。規模は、長さ10.8m、幅22～41cm、深さは27cm。

〔埋土〕褐色土粒を含む黒色土の単層。　〔断面形〕U字状。

遺物　出土していない。

時期　遺物が出土しておらず、時期は不明である。

118号溝

遺構（第37図、写真図版31）

〔位置・検出状況〕本調査区⑩および確認調査区⑦の２カ所で確認したが、断面形状等から同一のものと判断した。前者はＣⅧｃ19・ｄ19、後者はＢⅧｘ21に位置する。

〔重複関係〕本調査区⑩で131号土坑に切られている。時期差があるとしてもわずかであろう。

〔方向・規模〕南南西から北北東方向に延びるものと思われる。規模は、両者間の未精査箇所を含む長さ20.5m、上幅130～142cm、下幅38～67cm、深さは最大で100cmを測る。

〔埋土〕上位は白色粒子を含む黒褐色シルト、中位は黄褐色土粒を含む黒色粘土質シルト、下位はグライ化した砂質土を含む黒色土が主体となる。　〔断面形〕Ｖ字あるいはＹ字状をなす。

遺物（第65図、写真図版48）

〔土器〕埋土中から土師器片が381.1ｇ、須恵器片が44.4ｇ出土した。239は土師器の高坏脚部で内外面にヘラナデ調整が明瞭に残るもの。240は土師器甕の体部、241は須恵器甕の体部破片である。

時期　奈良あるいは平安時代に属する区画溝と思われる。本調査区⑧確認調査区⑧にも同様の規模をもつ溝が確認されており（第６図参照）、これらが同一の遺構とすれば、全長70～80m以上の区画溝となろう。

120号溝

遺構（第37図）

〔位置・検出状況〕本調査区⑪確認調査区⑧中央部のＢⅨｖ21・ｗ21・ｖ22グリッドに位置し、106号住

居の北西に隣接する。確認調査区箇所は精査していない。
〔方向・規模〕南南西から北北東方向に延びる。長さ580cm、規模は、幅65cm前後、深さ17～20cm。
〔埋土〕黒褐色シルトの単層で混入物はない。　〔断面形〕逆台形状をなす。
遺物（第65図、写真図版48）
〔土器〕埋土中から土師器片が15.4ｇ、須恵器片が139.6ｇ出土した。242は須恵器甕の体部で、外面にはタタキメ、内面にはカキメを残す。
時期　平安時代に属する溝で、何らかの区画溝あるいは106号住居に付属する施設の可能性がある。

121号溝

遺構（第38図、写真図版31）
〔位置・検出状況〕本調査区⑪確認調査区⑧の東側、ＢＸｕ8・ｕ9グリッドなどに跨がる。これも確認調査区は精査していない。
〔方向・規模〕南西から北東方向に延びる。規模は、長さ7.3m、幅50～70cm、深さ18cmを測る。
〔埋土〕黒褐色シルトの単層。　〔断面形〕台形状。
遺物　出土していない。
時期　遺物が出土しておらず、時期は不明である。

122号溝

遺構（第38図、写真図版31）
〔位置・検出状況〕本調査区⑪確認調査区⑧東西区西側、ＢⅨｖ15グリッドに位置する。
〔重複関係〕118号土坑と123号溝と重複するが、前者より旧く後者よりは新しい。
〔方向・規模〕ほぼ南北方向に延びる。規模は、長さ310cm、幅37～52cm、深さ10cm前後を測る。
〔埋土〕にぶい黄褐色土を含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕浅皿状をなす。
遺物（第65・66図、写真図版48）
〔土器〕埋土中から土師器片が256.6ｇ、須恵器片が42.7ｇ出土した。243はロクロ成形の土師器坏で、内面は黒色処理され、外面の体部下端にはヘラケズリ調整が見られる。この他には、土師器片が付着した刀子と思われる鉄製品が１点(244)出土した。
時期　出土遺物から平安時代に属する溝と思われる。性格は不明である。

123号溝

遺構（第38図、写真図版31）
〔位置・検出状況〕上述のとおり、122号溝などとともに検出した。ＢⅨｖ15・ｗ15グリッドにある。
〔重複関係〕122・132号土坑、122号溝、P195と重複する。いずれよりも本遺構のほうが旧い。
〔方向・規模〕北東から南西方向に延びる。規模は、長さ450cm、幅35～48cm、深さ10cm前後。
〔埋土〕上位は黒褐色シルト、下位は黄褐色土粒を含む暗褐色シルトである。　〔断面形〕浅皿状。
遺物
〔土器〕埋土中から土師器片が250.5ｇ、須恵器片が103.8ｇ出土した。
時期　出土遺物から平安時代に属する溝と思われる。これも性格は不明である。

124号溝

遺構（第38図、写真図版31）

〔位置・検出状況〕本調査区⑧確認調査区⑧東西区に長くあって、ＢⅧ区中央からＢⅨｌ９・ｌ10グリッドにかけて検出した。先に示したグリッド付近でその幅や深さを確認している。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に直線状に延びる。本遺構の南側はほとんどが調査区域外となる。規模は、長さ約30ｍ、幅120～144cm、深さは最深部で146cm を測る。

〔埋土〕人為的な堆積を見せる箇所もあった。埋土の上・下位を問わず、土師器や須恵器の破片、近世陶磁器を含んでいた。土層注記なし。　〔断面形〕Ｕ字状をなすが、北側の壁に段を有する。

遺物（第66図、写真図版49）

〔土器・陶磁器類〕土師器が810.0ｇ、須恵器が787.6ｇと近世陶磁器が数点出土した。245～247は須恵器で、245は内面に放射状の円形当て具痕が明瞭な甕の体部、246・247は大甕の肩部と口縁部である。248は仏具と思われる磁器の破片である。

時期　当初は近世の豪族居館に伴う堀跡を想定したが、西側のＢⅨ区（確認調査区⑨南北区）まで延びている可能性もあり、近世以降の溝跡と判断した。

125号溝

遺構（第38図、写真図版31）

〔位置・検出状況〕本調査区⑫の中央、ＣＸｆ３グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に延びる。長さ232cm、幅40～58cm、深さは16cm を測る。

〔埋土〕黄褐色土粒を疎らに含む黒褐色粘土質シルトの単層。　〔断面形〕逆台形状。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、時期は不明である。

126号溝

遺構（第38図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕本調査区⑩の中央、ＣⅧｅ19・ｆ19グリッドに位置する。他の遺構とともに、Ⅲ層下面で検出した。

〔方向・規模〕西南西から東北東方向に延び、規模は、長さ370cm、幅27～49cm、深さは45cm である。

〔埋土〕上位から中位は、地山の崩落ブロックを含む黒褐色粘土質シルトが、下位は灰黄褐色粘土質シルトが堆積する。　〔断面形〕細いバケツ形をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

127号溝

遺構（第38図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕本調査区⑬の北端、ＡⅧｘ12グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。

〔方向・規模〕南北方向に延びつつ西側に曲がる。長さ350cm 前後、幅60～85cm、深さ19cm である。

〔埋土〕褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕逆台形状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

128号溝

遺構（第38図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕127号溝の東側に隣接し、これもＡⅧｘ12グリッドに位置する。遺構全体は検出できておらず、東側に広がるものと思われる。

〔方向・規模〕ほぼ南北方向に延びるようである。長さ500cm、幅は不明、深さは15cm前後である。

〔埋土〕上位は黒色粘土質シルト、下位は褐色土粒を含む黒褐色シルトである。　〔断面形〕逆台形状か。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

130号溝跡

遺構（第38図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕本調査区⑩南側、109・110号住居の間、ＣⅧｊ20・ｊ21グリッドに跨がって位置する。当初は住居付属の煙道を想定し精査したものである。

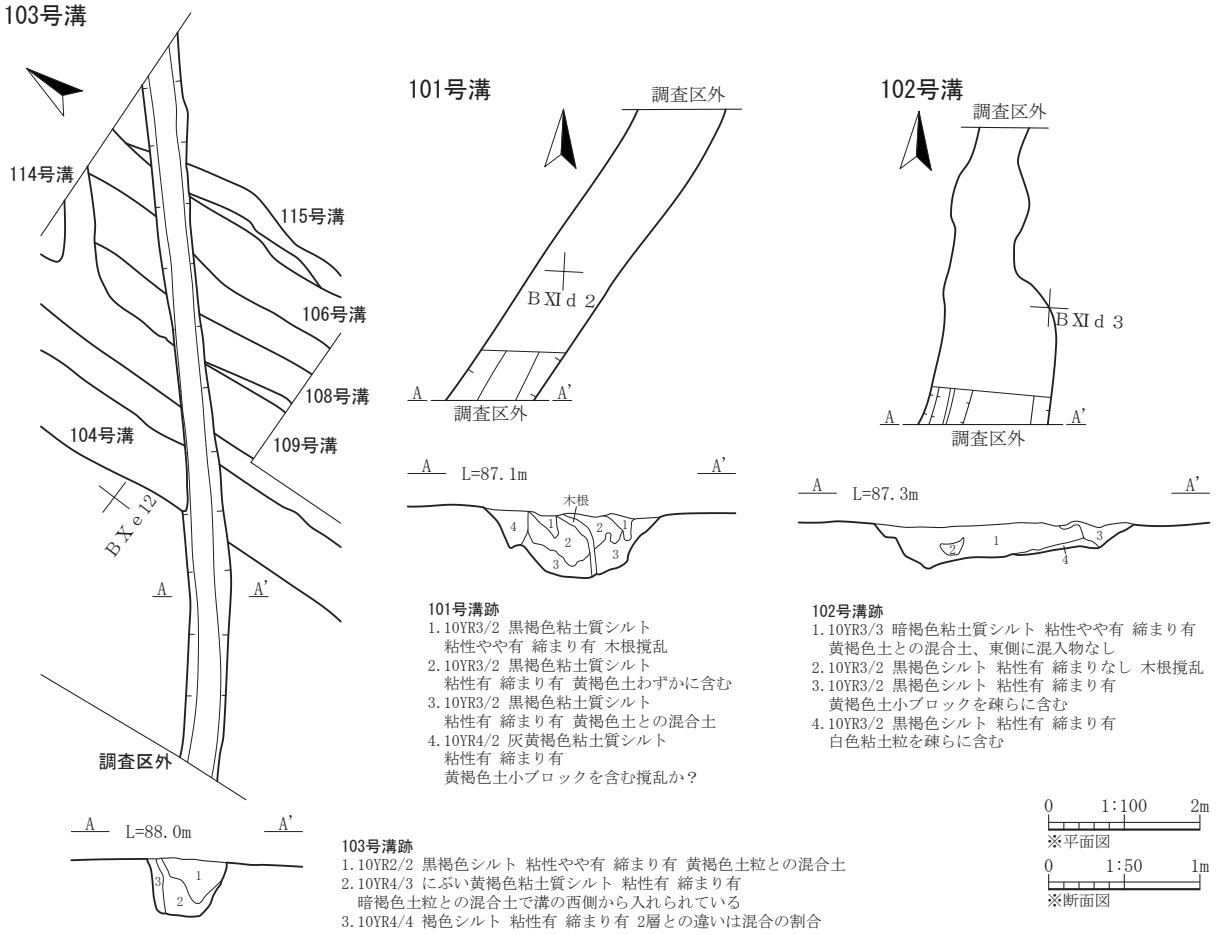
〔重複関係〕109・110号住居と重複していたと思われるが、新旧は不明である。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に延びる。規模は、長さ195cm、幅10～18cm、深さ３cmである。

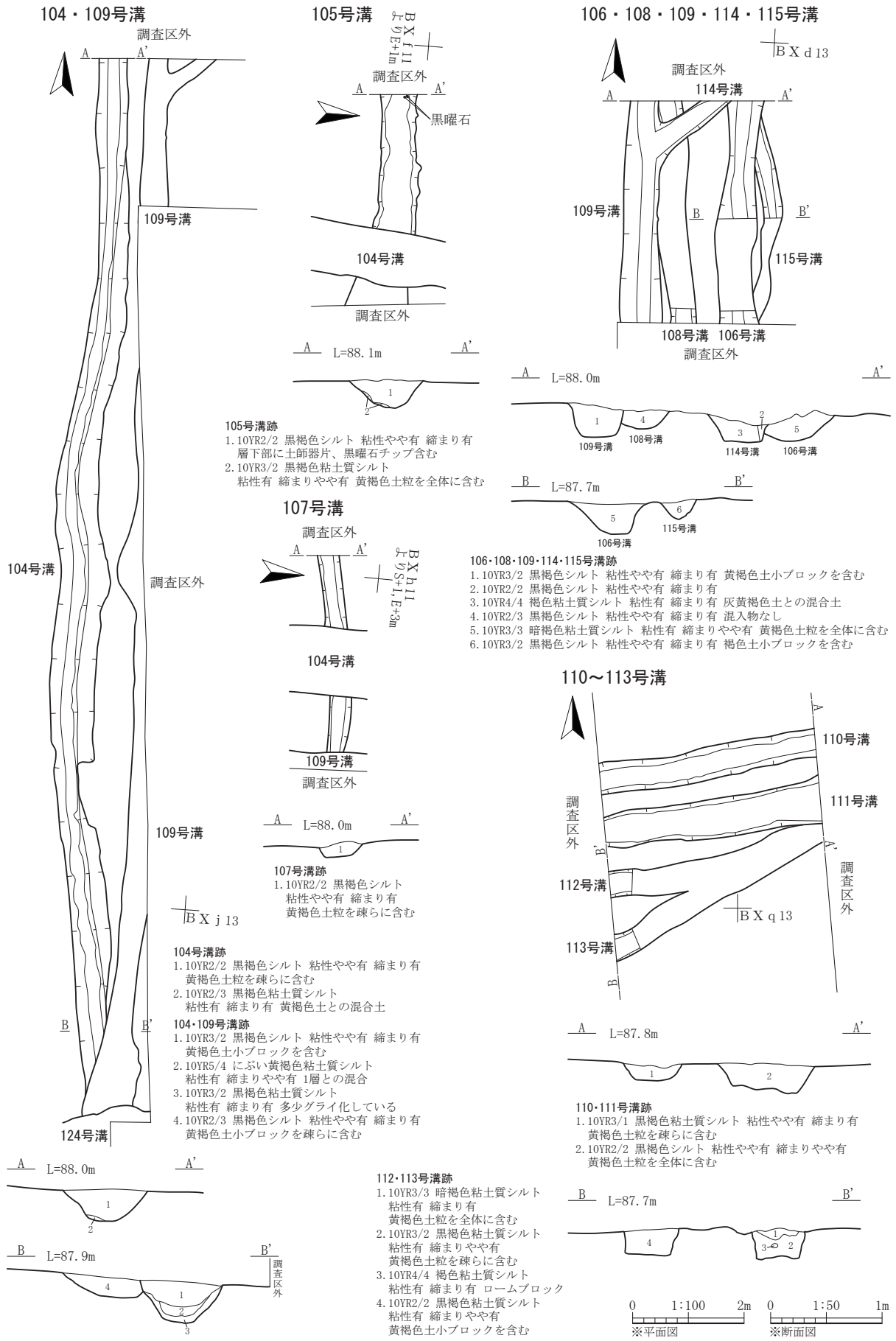
〔埋土〕締まりのない黒褐色土の単層である。　〔断面形〕浅いＵ字状。

遺物　出土していない。

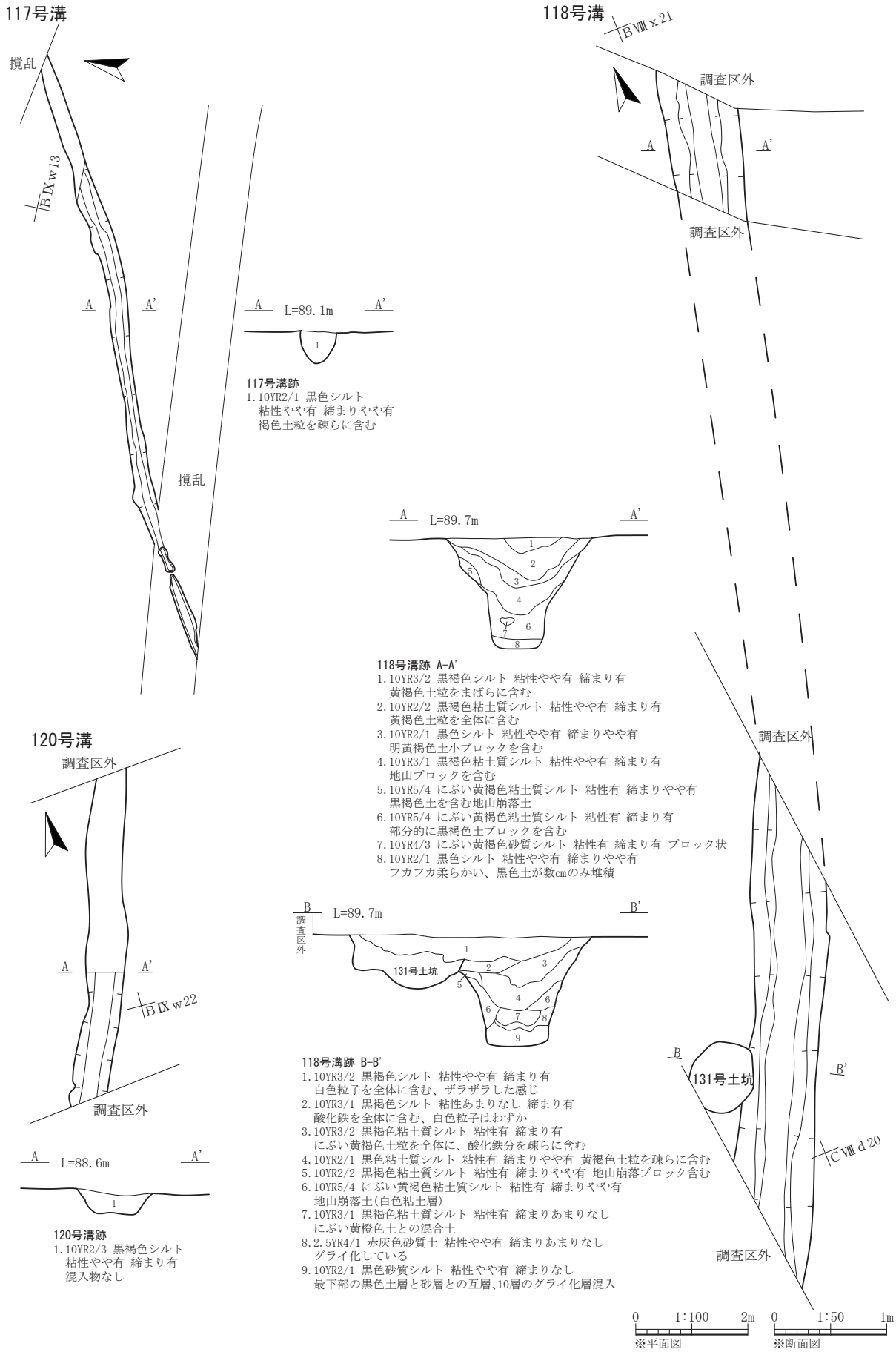
時期　遺物が出土しておらず、時期は不明である。



第35図　101～103号溝跡

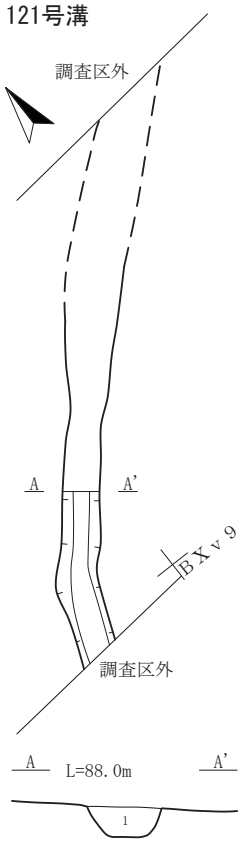


第36図　104～115号溝跡



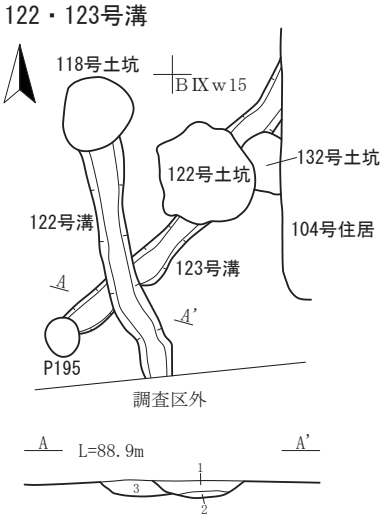
第37図　117・118・120号溝跡

121号溝



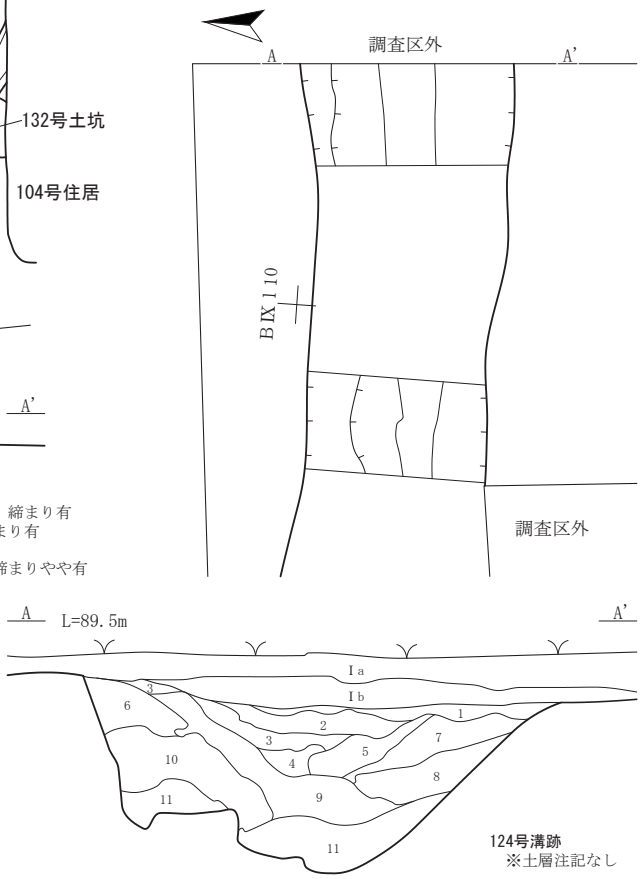
121号溝跡
1. 10YR2/3 黒褐色シルト
粘性やや有 締まり有
混入物なし

122・123号溝



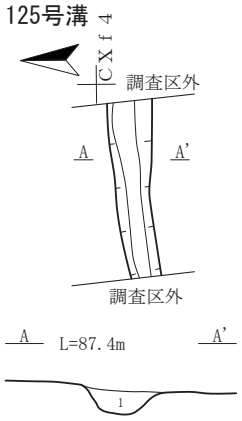
122・123号溝跡
1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性有 締まり有
黄褐色土混入
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし 締まりやや有
にぶい黄褐色土を縞状に含む

124号溝



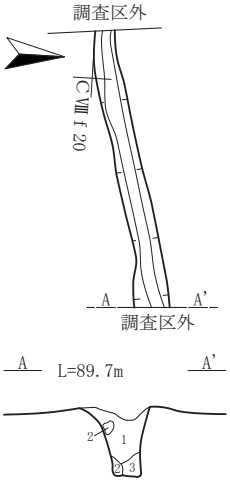
124号溝跡
※土層注記なし

125号溝



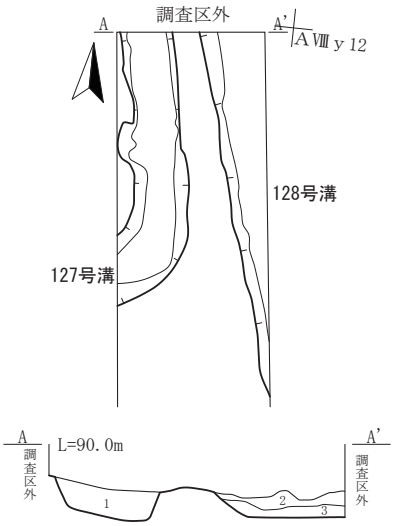
125号溝跡
1. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト
粘性やや有 締まり有
黄褐色土粒を疎らに含む

126号溝



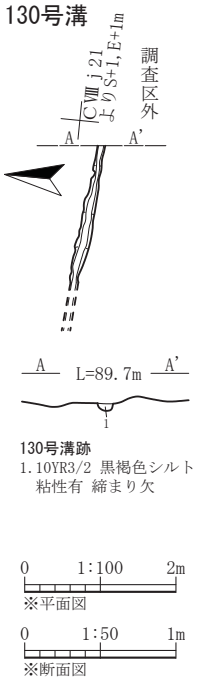
126号溝跡
1. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
粘性有 締まり有
酸化鉄分、明黄褐色土小ブロックを含む
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
粘性やや有 締まりやや有
地山崩落ブロック
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
粘性有 締まりやや有
明黄褐色土、黒褐色土をマーブル状に含む

127・128号溝



127・128号溝跡
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
褐色土粒を全体に含む
2. 10YR2/1 黒色粘土質シルト 粘性有 締まり有
混入物なし、黒味強い
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有
褐色土粒を疎らに含む、127号溝1層に似る

130号溝



130号溝跡
1. 10YR3/2 黒褐色シルト
粘性有 締まり欠

第38図　121～128・130号溝跡

（７）焼　土　遺　構

101号焼土遺構

遺構（第39図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕東側調査区中央部ＢⅨｗ16グリッドの遺構集中部にある102号住居状遺構内に位置する。Ⅳ層上面で検出した。

〔平面形・規模・厚さ〕平面形は40×50cmほどの範囲に不整形に広がる。燃焼部焼土の上部は、焼土粒を含む黒褐色土などで20cmあまり被覆されている。燃焼部は最大10cmの厚さがあり、明赤褐色の色調をなす。〔断面形〕燃焼部は浅皿状を呈する。

遺物　燃焼部から鉄滓が16.5ｇ出土した。

時期　ここでは別に報告したが、102号住居状遺構に伴う可能性もある焼土遺構である。

102号焼土遺構

遺構（第39図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕東側調査区ＣⅧａ19グリッドにおいて、周辺の土坑群とともにⅣ層で検出した。

〔平面形・規模・厚さ〕平面形は25×40cmほどの範囲に細長く形成される。焼土の厚さは１cm程度である。

遺物　出土していない。

時期　平安時代の遺構に伴っていた焼土遺構と思われるが、詳細は不明である。

（８）陥し穴状遺構

101号陥し穴状遺構

遺構（第39図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕東側調査区ＣＸ区の北西隅付近にあって、125号溝跡・123号土坑とともに、Ⅳ層上面で黒色の溝状のプランを確認した。本遺構の北東側約半分は調査区域外にある。

〔平面形・規模〕平面形はいわゆる溝状である。調査できた長さは、開口部でおよそ130cm、幅40cm前後、底部では130cm、13～20cmである。

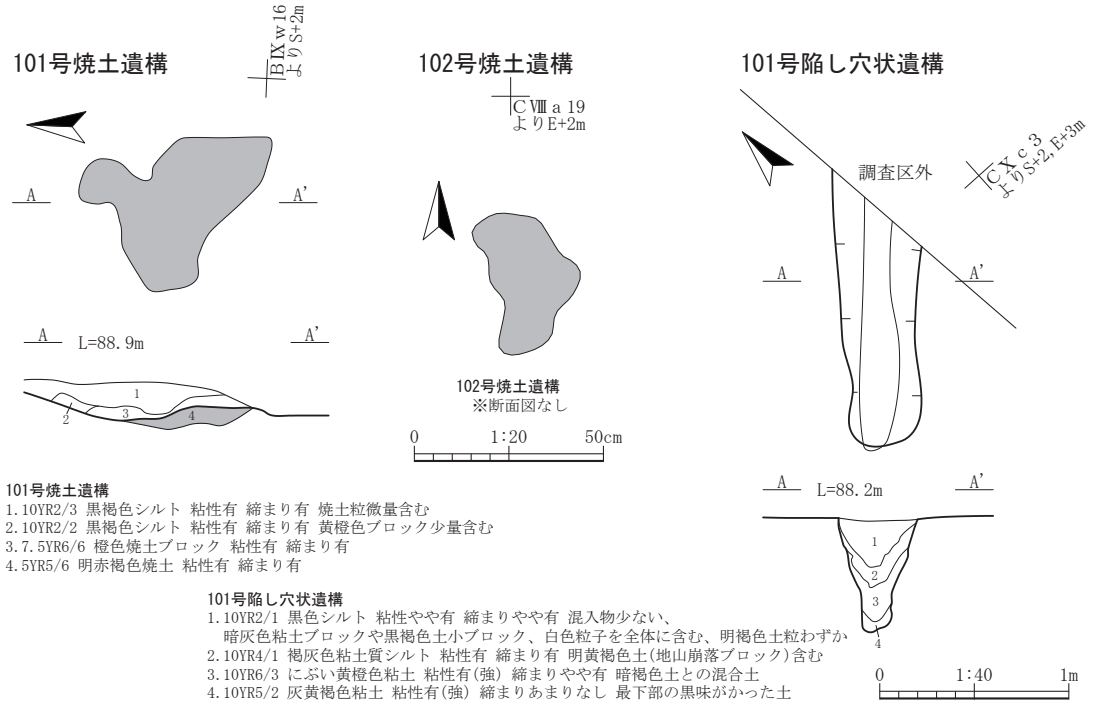
〔長軸方向〕Ｎ－42°－Ｅ

〔埋土〕４層に分層した。上位は白色粒子を含む黒色土、中位は地山の崩落ブロックを含む褐灰色土、下位はにぶい黄橙色の粘土が堆積し、最下部には３層よりも黒みを帯びる灰黄褐色土が見られる。

〔底面・壁〕底面は緩く傾斜するが、ほぼ平坦である。横断面形はＶ字状をなす。検出面からの深さは60cmである。

遺物　出土していない。

時期　溝状のものは縄文時代の後・晩期に多いとされるが、詳細な時期は不明である。



第39図　101・102号焼土遺構、101号陥し穴状遺構

(9)柱 穴 状 土 坑

東側調査区(第７～10図)

東側調査区中央部に集中する掘立柱建物で使用した柱穴以外をここで扱う。確認調査区で検出した柱穴状土坑については、プランだけを図化したものもある。

土坑との区別は、概ね直径40cm前後を目安としたが、大形掘立柱建物を構成する柱穴については、その限りとしていない。柱穴状土坑は検出後、柱筋を考えながらすべて半裁して断面観察を行い、完掘した。計測値は第２表に掲載した。

第２表　東側調査区柱穴状土坑計測表

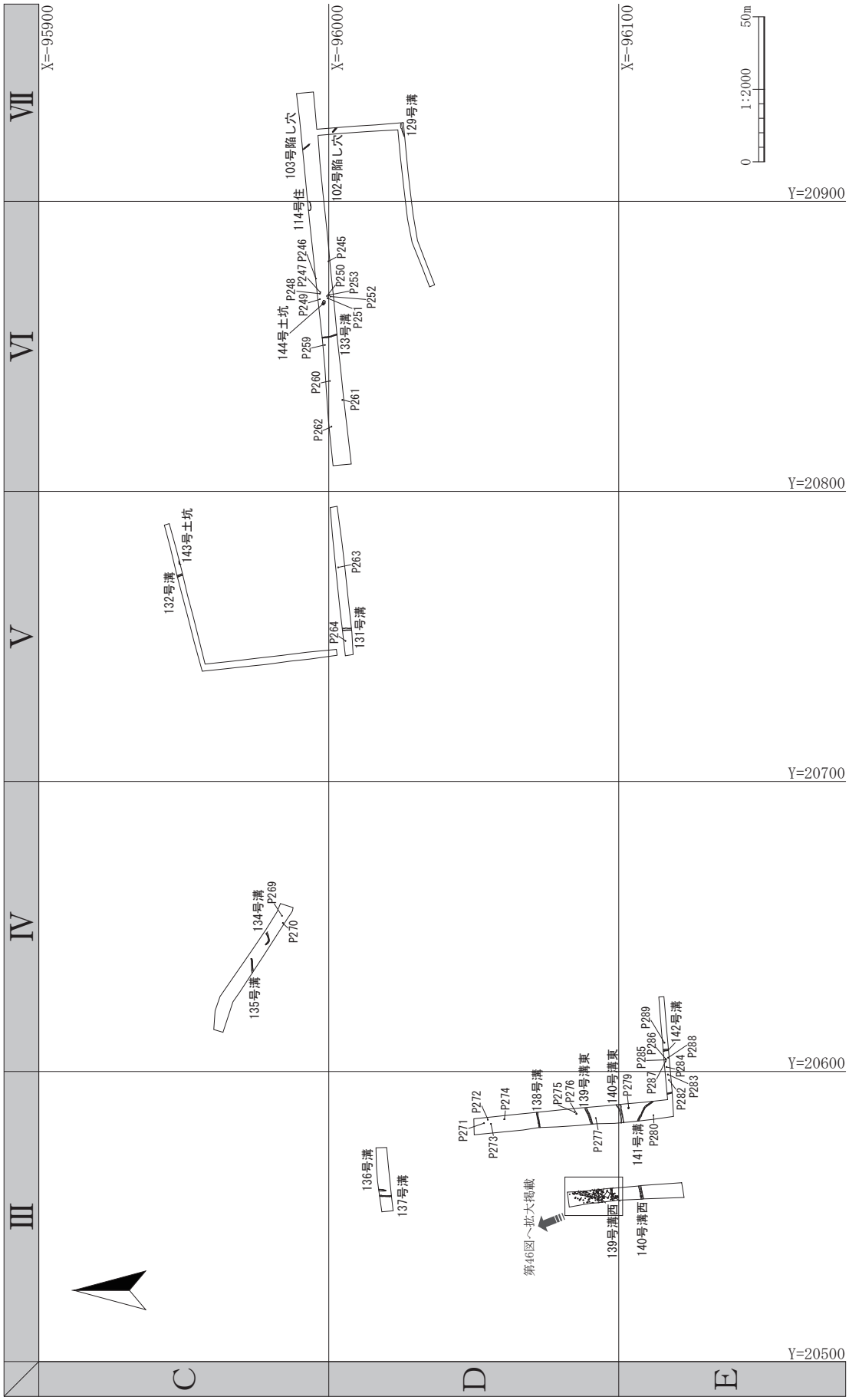
P名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P101	25×23	—	—	
P102	25×22	—	—	
P103	26×20	—	—	
P104	23×21	—	—	
P105	26×22	—	—	
P106	30×27	—	—	
P107	24×18	—	—	
P108	28×24	—	—	
P109	37×32	—	—	
P110	26×23	—	—	
P111	18×17	—	—	
P112	31×25	—	—	
P113	30×29	—	—	
P114	30×29	—	—	
P115	107×68	33	88.71	104号掘立柱建物

P名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P116	65×56	65	88.41	103号掘立柱建物
P117	72×62	41	88.57	103号掘立柱建物
P118	67×48	63	88.36	106号掘立柱建物
P119	48×46	54	88.55	102号掘立柱建物
P120	71×68	52	88.51	105号掘立柱建物
P121	44×40	64	88.39	102号掘立柱建物
P122	69×62	47	88.52	105号掘立柱建物
P123	50×44	62	88.39	102号掘立柱建物
P124	42×40	63	88.39	102号掘立柱建物
P125	68×60	36	88.65	103号掘立柱建物
P126	56×54	30	88.70	104号掘立柱建物
P128	72×68		88.66	103号掘立柱建物
P129	73×68	59	88.47	105号掘立柱建物
P130	50×48	62	88.39	102号掘立柱建物
P131	53×47	59	88.41	105号掘立柱建物

P名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P132	50×47	46	88.55	102号掘立柱建物
P133	103×80	46	88.67	103号掘立柱建物
P134	80×52	36	88.67	104号掘立柱建物
P135	74×72	18	88.87	103号掘立柱建物
P136	77×70	50	88.48	105号掘立柱建物
P137	47×42	50	88.54	102号掘立柱建物
P138	80×58	70	88.31	105号掘立柱建物
P139	42×38	64	88.38	102号掘立柱建物
P140	67×65	54	88.48	106号掘立柱建物
P141	46×42	70	88.29	102号掘立柱建物
P142	60×51	28	88.72	103号掘立柱建物
P143	67×65	25	88.72	103号掘立柱建物
P145	51×42	21	89.27	
P146	48×39	32	89.19	
P147	44×32	31	89.22	
P148	42×40	25	89.27	
P150	32	11	89.42	
P151	40×30	47	89.02	
P152	32×21	6	89.49	
P153	24×22	7	89.50	
P154	22×20	18	89.36	
P155	23×21	28	89.23	
P156	23×20	17	89.36	
P157	38×36	8	89.48	
P164	47×42	29	88.36	
P165	42×34	9	88.31	
P166	42×38		88.55	107号掘立柱建物
P167	79×78		88.67	107号掘立柱建物
P168	32×26	9	89.10	
P169	26×20	7	89.12	
P170	39×30	28	88.90	
P171	33×20	8	89.12	
P172	29×20	17	89.06	
P173	34×23	7	89.20	
P174	34×22	14	89.11	
P175	50	—	89.15	
P176	33×30	18	89.09	
P177	27×25	23	89.04	
P178	36×32	14	89.15	
P179	35×32	14	89.15	
P180	39×34	40	88.83	
P181	31×27	48	88.52	
P182	88×60		88.73	107号掘立柱建物
P183	55×44		88.60	107号掘立柱建物
P185	36	15	89.20	
P186	40	13	89.26	
P187	29×28	50	88.51	101号掘立柱建物
P188	32×32	59	88.46	101号掘立柱建物

P名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P189	35×33	52	88.54	101号掘立柱建物
P190	31×29	62	88.37	101号掘立柱建物
P191	43×41	49	88.53	101号掘立柱建物
P192	36×31	54	88.43	101号掘立柱建物
P193	39×34	60	88.41	106号掘立柱建物
P194	38×34	65	88.36	
P195	51×45	35	88.39	
P196	60×48	45	88.28	
P197	50×35	13	88.61	
P202	40×31	39	88.00	
P203	30×28	20	88.22	
P206	49×45	63	88.83	
P207	42×38	16	89.31	
P208	56×39	57	88.86	
P209	32×25	11	87.66	
P210	32×29	7	87.62	
P211	47×46	51	88.68	
P212	30×27	45	88.52	
P213	26×24	38	88.50	
P214	57×49	34	88.38	
P215	54×50	33	88.45	
P216	29×26	38	88.54	
P217	27×25	32	88.63	
P218	58×50	20	88.63	
P219	28×24	56	88.31	
P220	57×51	43	88.43	
P221	38×37	11	88.55	
P222	57×44	21	88.51	
P223	25×20	30	88.42	
P224	37×35	24	88.52	
P225	68×55	19	89.12	
P226	43×42	24	88.32	
P227	62×55	51	88.50	
P228	63×48	26	88.79	
P229	40×34	40	89.02	
P230	45×37	46	88.68	
P231	60×51	55	89.04	
P232	34×33	16	89.07	
P233	60×50	28	89.03	
P234	46×41	55	89.06	
P235	48×33	47	88.87	鉄滓135.8g 出土
P236	49×34	67	88.69	
P238	42×40	52	88.91	
P240	52×44	80	88.57	
P242	38×32	50	88.81	煙道？
P243	30×28	34	89.05	
P244	28×22	32	89.14	
P245	26×23	20	89.24	

※P118、P129、P131からは焼成粘土塊が出土している。



第40図　西側調査区遺構配置図

2　西 側 調 査 区

(1)竪 穴 住 居 跡

114号住居跡

遺構(第41図、写真図版13)

〔位置・重複〕西側調査区において唯一確認できた住居跡で、CⅥ区の南東端に位置する。本遺構の北側およそ2/3は調査区外に延び、かつ残りも悪い。遺構間の重複は認められない。

〔検出面・状況〕第144号土坑などとともに、第Ⅳ層上面で方形のプランを確認した。

〔平面形〕方形基調と思われるが、西側の壁は直線的ではない。

〔規模〕一辺3.2m前後か。

〔壁高〕7～19cm。

〔埋土〕黒褐色土の単層で、中央部に薄い暗褐色土層が入る。

〔壁〕東西壁とも緩く立ち上がる。

〔床面〕第Ⅳ層を床面とする。貼床は施されない。

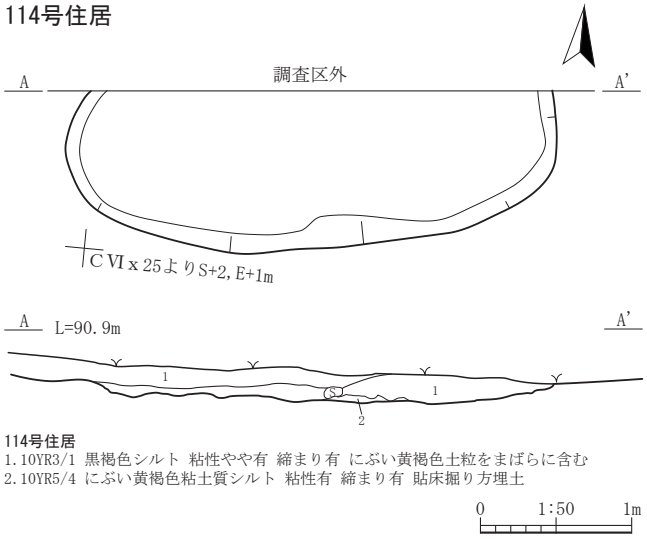
〔カマド〕〔柱穴〕〔周溝〕〔土坑〕はいずれも確認できなかった。

遺物(第54･55図、写真図版43)

〔出土状況〕埋土からロクロ成形の土師器坏・甕類と須恵器の甕が出土した。

〔土器〕土師器は656.7g、須恵器は102.7g 出土した。89～93はロクロ成形の土師器坏で、いずれも内面はヘラミガキ調整後黒色処理されている。器高がある90を除き、他の口縁は体部から直線的に延びる。89の底部は回転ヘラ切りか再調整されているもの。94は皿状をなすが、内面の処理などは他のものと変わらない。95は須恵器の大甕の口縁部である。

時期　出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭(第Ⅲ期)に属するものと考えられる。



第41図　114号住居跡

（２）掘 立 柱 建 物

108号掘立柱建物

遺構（第46図）

〔位置・重複関係〕ＤⅢ・ＥⅢ区に跨がる本調査区①・確認調査区②に位置する。第Ⅳ層で柱穴群を検出･精査し、調査終了後に柱筋を検討した。西側の調査区域外に延びており、全体規模は不明である。113号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴間の重複はなく新旧関係は不明である。

〔平面形式・方向〕桁行２間以上、梁間１間以上の掘立柱建物跡である。検出できた４個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－29°－Ｅである。

〔規模〕桁行、梁間ともに不明である。前者２間、後者１間を確認した。

〔柱間寸法〕桁行は225cm(7.4尺)、梁間は300cm(9.9尺)である。本遺構を構成する柱穴をはじめ、西側調査区で見つかった柱穴の形状はすべて円形基調である。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

109号掘立柱建物

遺構（第46図）

〔位置・重複関係〕108号掘立柱建物同様、ＤⅢ・ＥⅢ区に跨がる本調査区①・確認調査区②に位置する。これも西側の調査区域外に延びており、全体規模は不明である。108号・110号～112号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴間の重複はなく新旧関係は不明である。

〔平面形式・方向〕桁行２間以上、梁間１間以上の掘立柱建物跡である。検出できた４個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－21°－Ｅである。

〔規模〕桁行、梁間ともに不明である。前者２間を確認した。

〔柱間寸法〕桁行は250cm(8.3尺)～280cm(9.2尺)である。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

110号掘立柱建物

遺構（第46図）

〔位置・重複関係〕ＤⅢ・ＥⅢ区に跨がる本調査区①・確認調査区②に位置する。これも西側の調査区域外に延びており、全体規模は不明である。108号・109号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴間の重複はなく新旧関係は不明である。

〔平面形式・方向〕桁行２間以上、梁間１間以上の掘立柱建物跡である。検出できた４個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－23°－Ｅである。

〔規模〕桁行、梁間ともに不明である。前者２間、後者１間を確認した。

〔柱間寸法〕桁行は190cm(6.3尺)～225cm(7.4尺)、梁間223cm(7.4尺)である。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

111号掘立柱建物

遺構（第46図）

〔位置・重複関係〕108号掘立柱建物同様、ＤⅢ・ＥⅢ区に跨がる本調査区①・確認調査区②に位置する。これも西側の調査区域外に延びており、全体規模は不明である。110号～112号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴間の重複はなく新旧関係は不明である。

〔平面形式・方向〕桁行３間、梁間１間以上の掘立柱建物跡である。検出できた５個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－20°－Ｅである。

〔規模〕桁行496cm（16.4尺）、梁間は不明である。

〔柱間寸法〕桁行は163cm（5.4尺）～175cm（5.8尺）、梁間200cm（6.6尺）である。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

112号掘立柱建物

遺構（第46図）

〔位置・重複関係〕108号掘立柱建物同様、ＤⅢ・ＥⅢ区に跨がる本調査区①・確認調査区②に位置する。これも西側の調査区域外に延びており、全体規模は不明である。108号～111号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴間の重複はなく新旧関係は不明である。

〔平面形式・方向〕桁行３間以上、梁間１間以上の掘立柱建物跡である。検出できた５個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－22°－Ｅである。

〔規模〕桁行、梁間とも不明である。

〔柱間寸法〕桁行は160cm（5.3尺）～200cm（6.6尺）、梁間210cm（7.0尺）である。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

113号掘立柱建物

遺構（第46図）

〔位置・重複関係〕これもＤⅢ・ＥⅢ区に跨がる本調査区①・確認調査区②に位置する。南東側の調査区域外に延びており、全体規模は不明である。108号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴間の重複はなく新旧関係は不明である。

〔平面形式・方向〕桁行３間以上、梁間１間以上の掘立柱建物跡である。検出できた４個の柱穴を使用した。桁行の方向はＮ－39°－Ｅである。

〔規模〕桁行、梁間とも不明である。

〔柱間寸法〕桁行は167cm（5.5尺）～180cm（5.9尺）、梁間330cm（10.0尺）である。

遺物　出土していない。

時期　近世以降に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

（３）土　坑　類

143号土坑

遺構（第42図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕西側調査区中央部ＣＶｍ19グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。本遺構の南側2/3は調査区外にある。

〔平面形・規模〕平面形は方形もしくは長方形をなし、規模は開口部２ｍ前後、底部1.5ｍほどか。

〔埋土〕上位はにぶい黄褐色土シルト、次いで黒褐色土、中位から下位はフカフカと締まりのない黄褐色粘土質シルトが堆積する。

〔底面・壁〕壁は段を有しながら立ち上がるものもある。検出面からの深さは70cm で、さらに底面には26cm の掘り込みを有するが、柱穴の掘り方となるものか。

遺物　出土していない。

時期　遺物はないが規模や底面の状況などから、平安時代の掘立柱建物を構成する大形柱穴となる可能性がある。

144号土坑

遺構（第42図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕西側調査区中央最北部ＣⅥｘ17グリッドに位置し、これもⅣ層上面で検出した。本遺構の東およそ35ｍには114号住居がある。

〔平面形・規模〕平面形は不整長方形、規模は開口部径106×200cm、底部径94×180cm を測る。深さは10～30cm である。

〔埋土〕黒褐色シルトの単層で、小ピット部分には灰黄褐色粘土質シルトが入る。

〔底面・壁〕壁は緩く立ち上がる。遺構西壁寄りの底面には深さの異なる二つの小ピットがみられる。

遺物（第63･64図、写真図版47･48）

〔土器〕土師器が83.0g、須恵器が1,157.6g 出土した。213～215はロクロ成形の土師器坏で内面が黒色処理されるもの。213･215は底部下端にヘラケズリ調整が、後者の底部外面には手持ちヘラケズリによる再調整が認められる。216は須恵器の大甕口縁部、218は肩部、217は須恵器長頸壺の口縁部から肩部にかけての破片で、接合部には軽い突起状のリングを有する。

時期　形状から墓壙と思われる。出土した遺物から、時期は９世紀前半（第Ⅱ期）であろう。

（４）溝　　跡

129号溝

遺構（第42図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕本調査区⑦、ＤⅦｇ７グリッド付近に位置する。Ⅳ層上面で確認された。ほとんどが調査区外にあり、全体規模は不明である。

〔方向・規模〕東西方向に延びるが、規模は不明である。深さは最大で17cm を測る。

〔埋土〕粗砂のブロックを含む黒褐色土の単層である。　〔断面形〕浅皿状をなす。

遺物

〔土器〕埋土中から土師器が8.3ｇ出土した。

時期　古代以降と思われるが、詳細は不明である。

131号溝

遺構（第42図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕本調査区④、ＤＶｂ14グリッドの南側にある。Ⅳ層上面で確認された。

〔方向・規模〕ほぼ南北方向に直線状に延びる。規模は長さ314cm、幅80～90cm、深さは33cm である。

〔埋土〕上位は黒色土、下位は黒褐色土がみられる。ともに褐色土粒を含む。　〔断面形〕Ｕ字状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

132号溝

遺構（第42図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕本調査区⑤、ＣＶｍ18グリッドの西側に位置し、これもⅣ層で確認された。

〔方向・規模〕南北方向に延び数度西側に振れる。規模は長さ185cm、幅50～65cm、深さ34cm。

〔埋土〕上位は黒褐色土、中位は粘性の強い褐色土、下位は褐色土粒を含む黒褐色土がみられる。

〔断面形〕逆台形状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

133号溝

遺構（第42図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕本調査区⑥・確認調査区⑥、ＤⅥａ14グリッドの東側に位置する。

〔方向・規模〕ほぼ南北方向に延びるが、わずかに西側に振れる。規模は長さ520cm、幅32cm 前後、深さは７cm ほどである。

〔埋土〕白色の粒を含む黒褐色シルトの単層である。　〔断面形〕浅皿状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

134号溝

遺構（第43図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕本調査区③・確認調査区④のＣⅣｔ12グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層である。

〔方向・規模〕北東から南西に延びた後に西側に曲がるＪ字状の溝で、規模は長さ470cm 前後、幅28～45cm、深さは２cm である。

〔埋土〕黒褐色粘土質シルトの単層である。

遺物　出土していない。

時期　詳細な時期は不明であるが、ごく新しい時期の溝跡であろう。

135号溝

遺構（第43図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕本調査区③・確認調査区④のＣⅣｓ9・ｓ10グリッドにあり、134号溝とは北西方向に10ｍほどの距離を置く。

〔方向・規模〕ほぼ東西に延びる。規模は、長さ470cm、幅33～49cm、深さは３cm 程度である。

〔埋土〕黒褐色粘土質シルトの単層である。

遺物　出土していない。

時期　詳細な時期は不明であるが、これも時期の新しい溝跡と思われる。

136号溝

遺構（第43図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕確認調査区②ＤⅢｅ15グリッドにあって、137号溝とは1.5mほどの距離を保ちつつ、両者は平行しながら南北方向に延びる。

〔方向・規模〕規模は長さ250cm、幅30～58cm、深さは22cmを測る。　〔断面形〕段を持つ皿状。

〔埋土〕褐色土粒を含む黒色シルト質土の単層である。

遺物　出土していない。

時期　詳細な時期は不明であるが、新期の溝跡と思われる。

137号溝

遺構（第43図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕136号溝で記載のとおりである。

〔方向・規模〕規模は長さ400cm、幅30～43cm、深さは26cmを測る。

〔埋土〕褐色土粒を含む黒色シルト質土の単層である。　〔断面形〕浅皿状。

遺物　出土していない。

時期　詳細な時期は不明であるが、新期の溝跡と思われる。

138号溝

遺構（第43図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕本調査区②・確認調査区③の北寄りＤⅢｓ22グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層である。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に直線状に延びる。規模は長さ530cm、幅40～51cm、深さは12cmである。

〔埋土〕砂質シルトのブロックを含む黒褐色土の単層である。　〔断面形〕皿状をなす。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、古代を含むそれ以降の溝としておく。

139号溝（西・東）

遺構（第43図、写真図版34･35）

〔位置・検出状況〕本調査区①・確認調査区①、ＤＶｙ15グリッド付近と、本調査区②・確認調査区③、ＤⅢｗ22グリッド南側でそれぞれ１条ずつ確認したが、同一の遺構として扱う。前者を139号溝西、後者を同東とする。検出面はいずれもⅣ層上面である。

〔方向・規模〕いずれもほぼ東西方向に延びるが、若干北側に振れる。西側の規模は長さ430cm、幅50～58cm、深さ18cm、東側は長さ595cm、幅25～33cm、深さ30cmである。

〔埋土〕西側は黒褐色土の単層、東側は２層に分層でき、その下層にも別な黒褐色土が堆積する。

〔断面形〕長方形とＶ字状をなす。

遺物（第66図、写真図版49）

〔土器〕埋土中から土師器が8.4ｇ、須恵器が36.0g 出土した。249は須恵器甕の口縁部で、わずかに櫛描波状文がみられる。

時期　出土遺物から、平安時代に属する溝跡と思われる。９世紀前半か。

140号溝（西・東）

遺構（第43図、写真図版35）

〔位置・検出状況〕139号溝（西・東）の南側約10ｍに位置し、西側・東側ともそれに平行している。いずれもⅣ層上面で検出した。

〔方向・規模〕ほぼ東西方向に直線状に延びる。西側の規模は長さ470cm、幅76～92cm、深さは最大で24cm、東側は長さ650cm、幅70～133cm、深さ14cm である。西側には小穴を２個有する。

〔埋土〕上位は黒褐色の砂質シルト、下位は暗褐色の粘土質シルトが堆積するが、東側では前者の単層となる。　〔断面形〕逆台形状と長方形。

遺物（第66図、写真図版49）

〔土器〕埋土から土師器が24.2g、12世紀の国産陶器・須恵器が418.2ｇ出土した。250は須恵器甕の体部破片、251～255は12世紀の国産陶器の破片である。251は渥美産片口鉢の体部、252は渥美産甕の肩部、253は常滑産壺か甕の口縁部である。254･255は須恵器系陶器と思われる破片で、前者は壺の肩部、後者は甕の体部と思われる。

時期　12世紀の国産陶器が出土していることから、平安時代後期に属する溝跡と考えられる。

141号溝

遺構（第44図、写真図版35）

〔位置・検出状況〕本調査区②・確認調査区③、ＥⅢｂ21グリッドから南東方向に延びている。途中、調査区域外に入り途切れている。検出面はⅣ層である。

〔方向・規模〕北西から南東方向に延びるが、わずかに曲がる。規模は長さ850cm 前後、幅26～60cm、深さは18cm である。

〔埋土〕褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

142号溝

遺構（第44図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕本調査区②、ＥⅣｅ２グリッド付近に位置する。Ⅳ層で確認した。

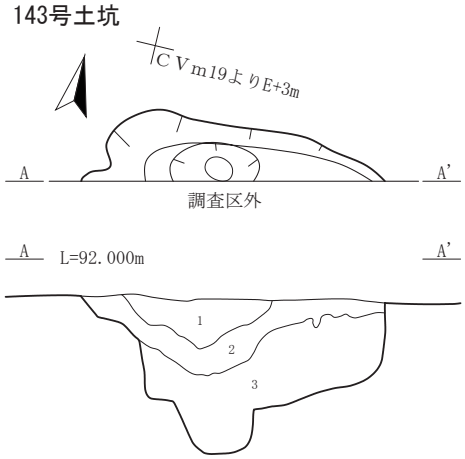
〔方向・規模〕南北方向に延びている。長さ185cm、幅55～70cm、深さは13cm を測る。

〔埋土〕褐色土粒を含む黒褐色シルトの単層である。

遺物　出土していない。

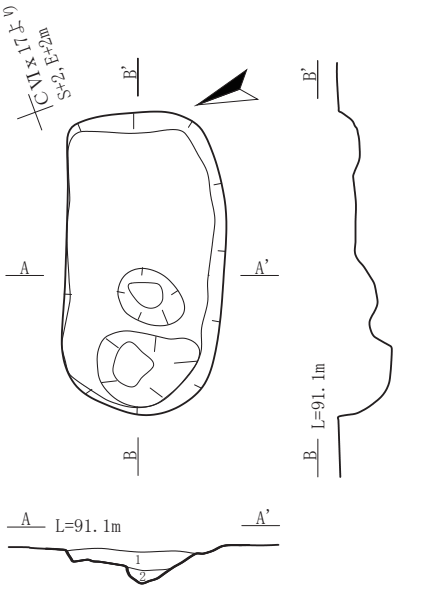
時期　出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

143号土坑



143号土坑
1.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性やや有 締まり有
　黒色土をわずかに含む
2.10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　1層のブロックを含む
3.10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まりやや有 地山に似る、
　フカフカやわらかい、黒褐色土粒をわずかに含む

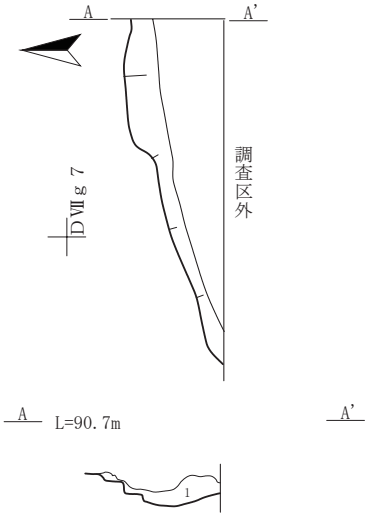
144号土坑



144号土坑
1.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有 締まり有 混入物なし
2.10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 粘性有 締まり有
　にぶい黄褐色土と黒褐色土との混合土

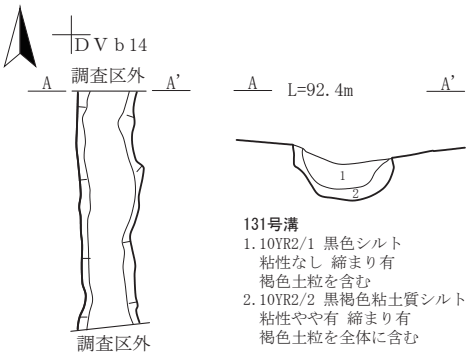
0　1:40　1m

129号溝



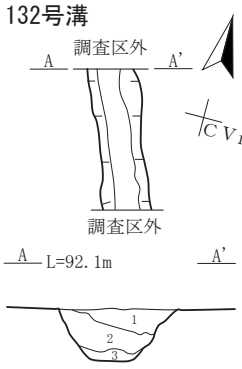
129号溝
1.10YR3/2 黒褐色砂質シルト
　粘性有 締まりあまりなし
　部分的に砂のブロックを含む

131号溝



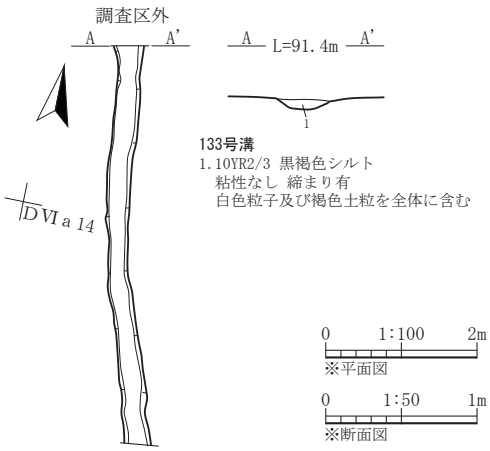
131号溝
1.10YR2/1 黒色シルト
　粘性なし 締まり有
　褐色土粒を含む
2.10YR2/2 黒褐色粘土質シルト
　粘性やや有 締まり有
　褐色土粒を全体に含む

132号溝



132号溝
1.10YR2/2 黒褐色シルト
　粘性やや有 締まり有
　褐色土粒をまばらに含む
2.10YR4/4 褐色粘土質シルト
　粘性有 締まり有
　黒褐色土粒の混合土でマーブル状に見える
3.10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
　粘性有 締まりやや有
　褐色土粒を全体に含む

133号溝

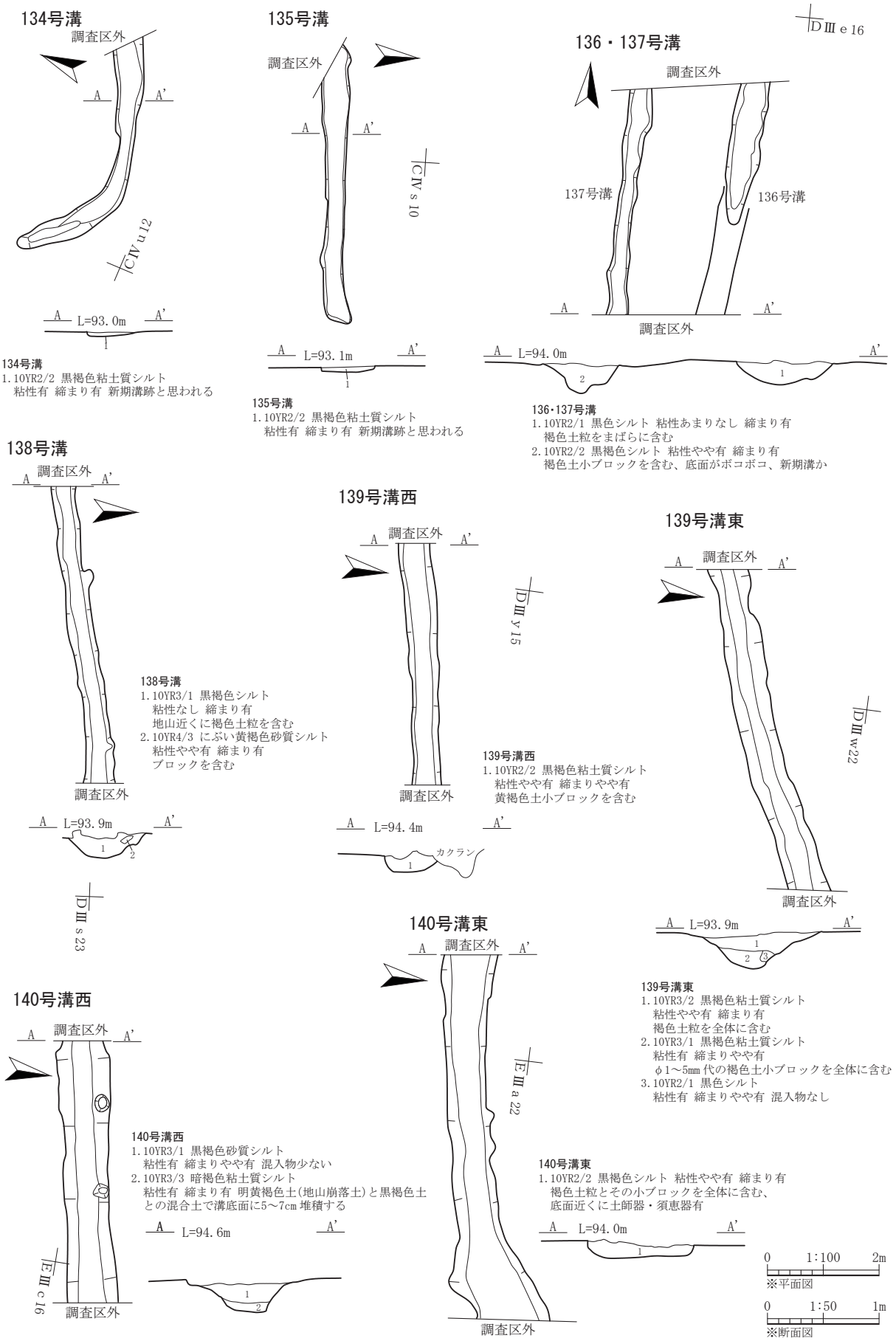


133号溝
1.10YR2/3 黒褐色シルト
　粘性なし 締まり有
　白色粒子及び褐色土粒を全体に含む

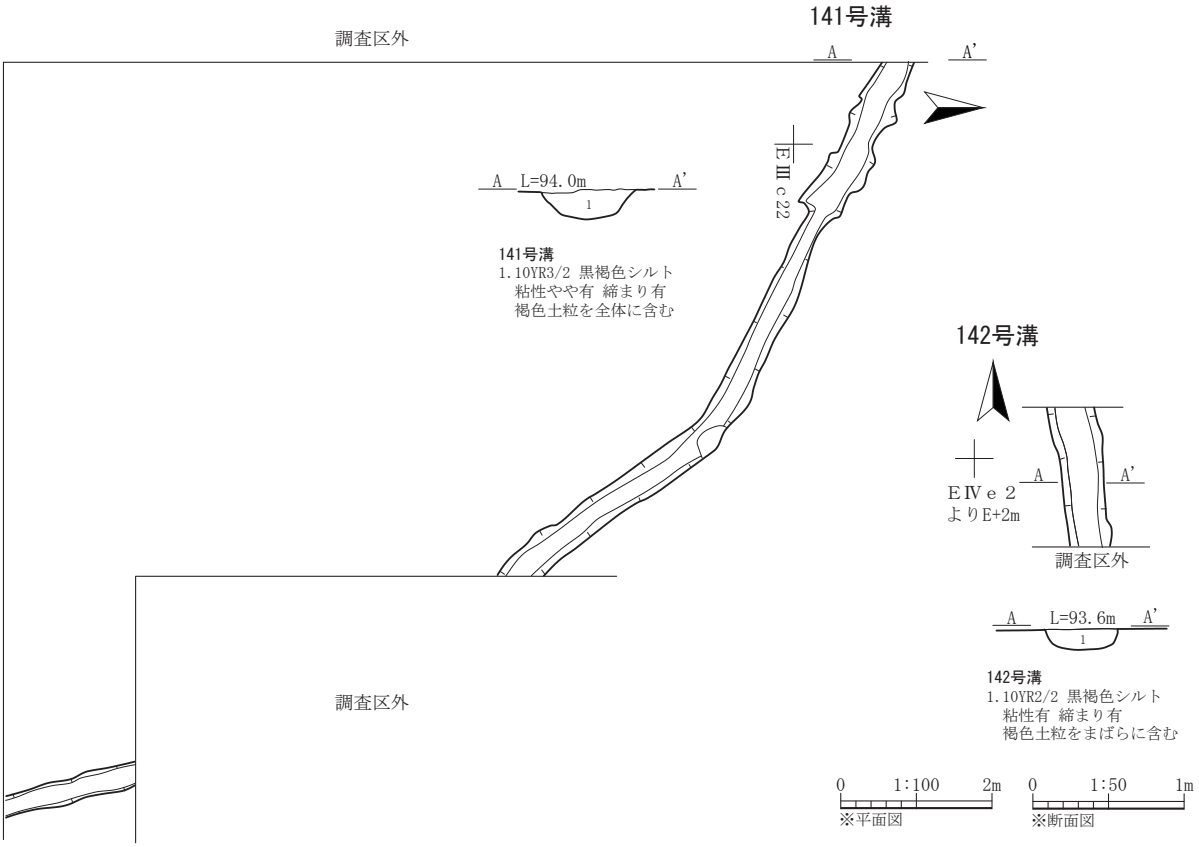
0　1:100　2m
※平面図

0　1:50　1m
※断面図

第42図　143・144号土坑、129・131～133号溝跡



第43図　134～140号溝跡



第44図　141・142号溝跡

（５）陥し穴状遺構

102号陥し穴状遺構

遺構（第45図、写真図版37）

〔位置・検出状況〕西側調査区ＣⅦ区・ＤⅦ区の境界付近西寄りに位置する。北側数ｍにある103号陥し穴状遺構とともに、Ⅳ層上面で確認した。本遺構も南東側約1/2は、調査区域外に延びている。

〔平面形・規模〕平面形は溝状をなす。調査できた長さは、開口部でおよそ200cm、幅37～53cm、底部では210cm、８～13cm である。〔長軸方向〕Ｎ -50°　－Ｗ

〔埋土〕６層に分層した。上位から中位にかけては酸化鉄分を含む黒色土、中位は灰黄褐色シルトや黒褐色粘土の崩落ブロック、下位にはしまりのない褐灰色粘土が堆積する。

〔底面・壁〕底面は高低をもち、北西側が浅くなっている。北西壁はオーバーハングしながら立ち上がる。横断面形はＹ字状をなす。検出面からの深さは96cmである。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

103号陥し穴状遺構

遺構（第45図、写真図版37）

〔位置・検出状況〕西側調査区ＣⅦ区の南西隅にあり、Ⅳ層上面で調査区内に全プランを確認した。

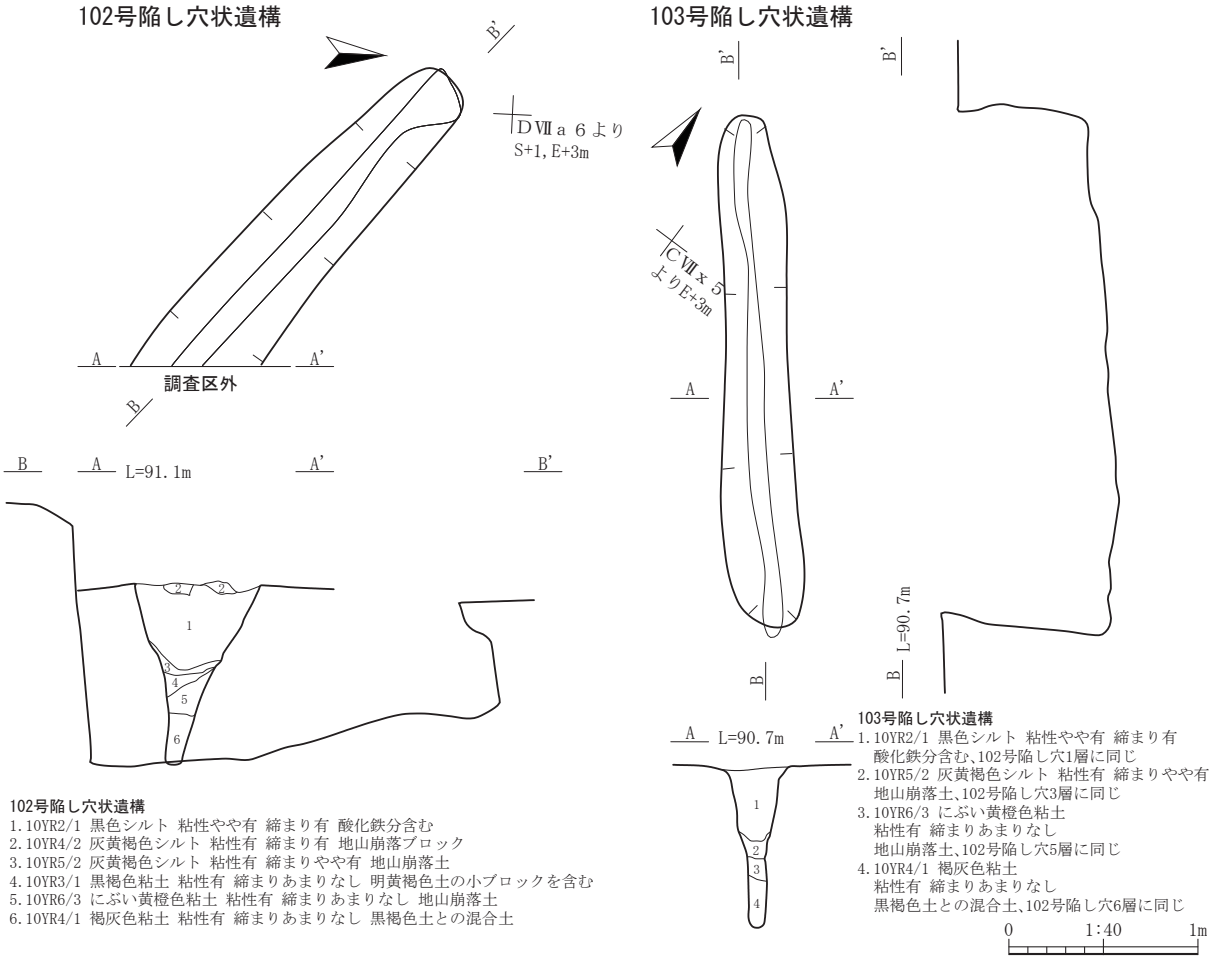
〔平面形・規模〕平面形は溝状である。開口部の長さは273cm、幅は30～40cm、底部では275cm、５～10cmである。〔長軸方向〕Ｎ－39°　－Ｗ

〔埋土〕４層に分層した。上位は黒色のシルト質土、中位は灰黄褐色シルトとにぶい黄橙色の粘土質土、下位は褐灰色の粘土質土からなる。

〔底面・壁〕底面は細かい凹凸をもち、北西側が若干浅い。北西・南東壁はわずかにオーバーハングしている。横断面形はＶ字状、深さは84cmを測る。

遺物　出土していない。

時期　縄文時代の遺構であるが、詳細な時期は不明である。



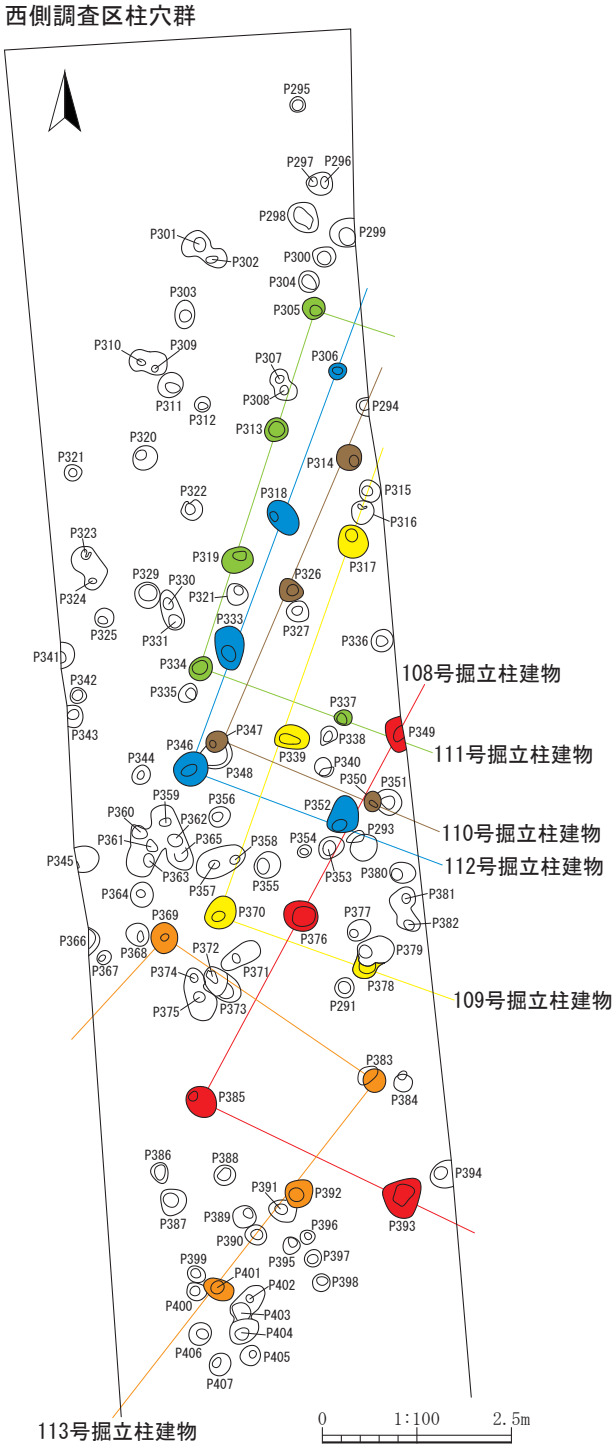
第45図　102･103号陥し穴状遺構

（６）柱 穴 状 土 坑

西側調査区（第40･46図、写真図版37）

西側調査区では、あわせて約100個の柱穴状土坑を検出した。これらのほとんどは、規則的な配置を見ず、掘立柱建物や柱穴列を構成するものは少ない。Ｃ区の柱穴状土坑の配置は第40図に、Ｅ区のそれは第46図に示した。これには掘立柱建物や柱穴列に使用したものも含めている。図では、掘立柱建物に使用した柱穴とそれ以外とを色で区別した。

西側調査区柱穴群



第46図　西側調査区柱穴群、108～113号掘立柱建物

第３表　西側調査区柱穴状土坑計測表

Ｐ名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P245	24×21	13	90.77	
P246	40×28	22	90.73	
P247	22×18	16	90.83	
P248	28×20	22	90.73	
P249	24×22	20	90.83	
P250	26×23	15	90.83	
P251	32×22	13	90.95	
P252	19×15	15	90.86	
P253	38×27	16	90.83	
P254	24×22	27	91.47	
P255	32×28	16	91.61	
P259	26×22	－	－	下端なし
P260	24×22	12	91.03	
P261	38×32	22	91.04	
P262	28×26	29	90.99	
P263	31×21	22	91.55	
P264	20×18	17	91.75	
P269	29×28	39	92.49	
P270	34×28	28	92.65	
P271	30×28	22	92.56	
P272	32×22	11	93.65	
P273	36×30	18	93.60	
P274	46×30	9	93.66	
P275	24×22	12	93.54	
P276	42×40	20	93.53	
P277	31×21	15	93.57	
P279	60×47	20	93.61	
P280	28×23	20	93.65	
P282	29×26	49	93.32	
P283	30×27	30	93.36	
P284	30×27	32	93.34	
P285	32×26	13	93.53	
P286	26×23	26	93.36	
P287	35×31	23	93.37	
P288	25×23	25	93.44	
P289	48×40	21	93.41	
P291	26×25	23	93.91	
P293	38×35	66	93.44	
P294	25	53	93.56	
P295	21×20	13	93.89	
P296	35×30	48	93.55	
P297	35×30	36	93.68	
P298	46×38	21	93.81	
P299	39	50	93.60	
P300	31×28	30	93.74	
P301	40×33	35	93.70	
P302	37×26	55	93.50	
P303	38×26	30	93.79	
P304	29×28	20	93.85	
P305	31×30	64	93.41	111号掘立柱建物
P306	23×22	30	93.76	112号掘立柱建物
P307	27×22	28	93.80	
P308	30×26	27	93.82	
P309	30×28	54	93.52	

P名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P310	30×28	56	93.52	
P311	34×31	39	93.71	
P312	22×20	17	93.90	
P313	32×31	13	93.97	111号掘立柱建物
P314	34×34	57	93.54	110号掘立柱建物
P315	30×28	25	93.85	
P316	34×30	31	93.80	
P317	45×40	40	93.69	109号掘立柱建物
P318	40×35	52	93.55	112号掘立柱建物
P319	41×34	51	93.59	111号掘立柱建物
P320	34×32	44	93.63	
P321	23×22	36	93.74	
P322	30×28	15	93.97	
P323	40×36	44	93.70	
P324	30×27	50	93.64	
P325	25×25	36	93.78	
P326	32×30	27	93.82	110号掘立柱建物
P327	30×29	37	93.74	
P329	36×34	59	93.49	
P330	36×27	43	93.71	
P331	36×27	49	93.72	
P333	58×38	72	93.40	112号掘立柱建物
P334	33×30	73	93.39	111号掘立柱建物
P335	28×23	63	93.49	
P336	31×29	30	93.89	
P337	24×21	23	93.86	111号掘立柱建物
P338	28×22	17	93.90	
P339	45×32	21	93.91	109号掘立柱建物
P340	24×22	50	93.60	
P341	22	57	93.59	
P342	22×21	13	93.99	
P343	28	68	93.47	
P344	23×22	23	93.90	
P345	32	46	93.73	
P346	48×43	48	93.67	112号掘立柱建物
P347	30×29	62	93.48	110号掘立柱建物
P348	43×36	17	93.96	
P349	42	42	93.74	108号掘立柱建物
P350	28×22	46	93.65	110号掘立柱建物
P351	35×32	13	93.98	
P352	49×38	71	93.44	112号掘立柱建物
P353	36×28	19	93.90	
P354	19×16	10	94.02	
P355	37×35	79	93.31	
P356	30×27	23	93.87	
P357	68×38	72	93.40	
P358	68×38	46	93.71	
P359	92×29	80	93.36	

P名	開口部(cm)	深さ(cm)	標高(m)	備考
P360	70×45	30	93.91	
P361	70×45	88	93.22	
P362	92×29	62	93.51	
P363	70×45	74	93.39	
P364	32×31	23	93.94	
P365	92×29	40	93.77	
P366	38	54	93.68	
P367	20×18	50	93.70	
P368	32×28	50	93.66	
P369	40×35	69	93.47	113号掘立柱建物
P370	47×38	58	93.52	109号掘立柱建物
P371	57×25	37	93.69	
P372	57×35	69	93.45	
P373	57×35	46	93.71	
P374	30×26	51	93.66	
P375	48×38	54	93.61	
P376	47×42	37	93.75	108号掘立柱建物
P377	31×28	45	93.66	
P378	34×30	45	93.63	109号掘立柱建物
P379	49×36	74	93.40	
P380	35×28	48	93.62	
P381	39×32	51	93.61	
P382	31×24	49	93.65	
P383	30×30	73	93.36	113号掘立柱建物
P384	24×22	55	93.55	
P385	44×38	90	93.24	108号掘立柱建物
P386	28×22	20	94.02	
P387	37×33	42	93.76	
P388	19×19	16	93.98	
P389	31×28	91	93.10	
P390	22×29	34	93.78	
P391	38×28	30	93.75	
P392	41×37	65	93.47	113号掘立柱建物
P393	55×48	113	93.46	108号掘立柱建物
P394	36	61	93.47	
P395	24×22	40	93.72	
P396	20×19	17	93.92	
P397	24×22	16	93.95	
P398	24×24	70	93.44	
P399	26×22	31	93.83	
P400	27×26	21	93.94	
P401	42×27	66	93.48	113号掘立柱建物
P402	55×30	43	93.68	
P403	55×30	13	93.68	
P404	40×34	69	93.43	
P405	28×26	45	93.65	
P406	31×29	54	93.58	
P407	30×28	33	93.81	

３　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の総重量は15,597.４ｇで、全体量のおよそ18％である。これらは、開田以降の耕作などで動かされた遺物であり、本来は遺構に伴っていたものが大半と思われる。

ここに掲載した土器・土製品類は、平安時代の土師器甕１点と須恵器の坏や甕類あわせて25点、12世紀のかわらけ１点、フイゴの羽口３点、支脚とも思える不明土製品１点で、陶磁器類には中国産青磁碗１点と瀬戸産などの近世陶磁器４点がある。石器には、定型的な剥片石器４点と旧石器時代の細石刃とも思えるもの１点のほか、礫石器では縄文時代の半円状扁平打製石器１点、古代以降の砥石１点がある。以下に詳細を記載する。

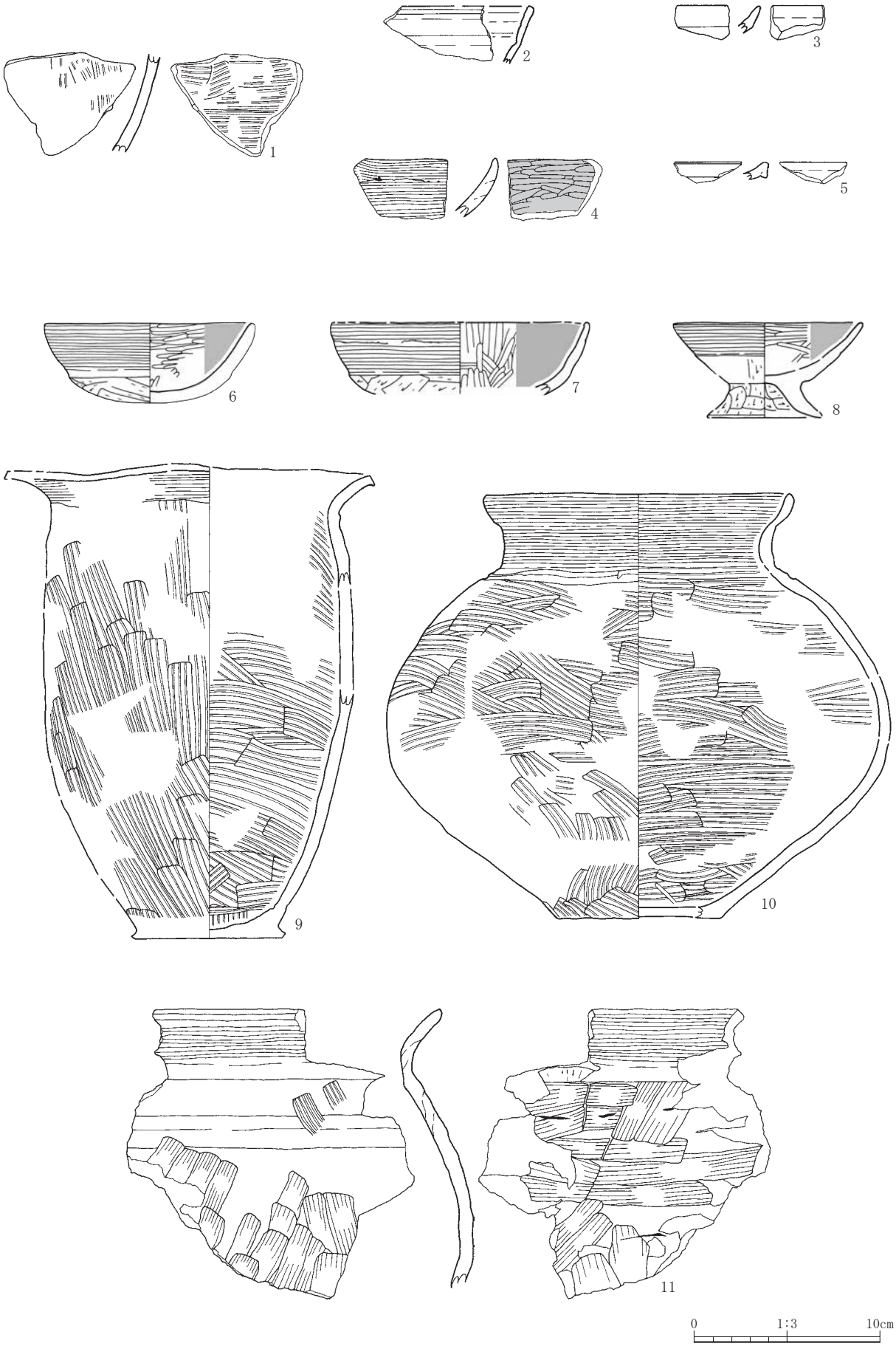
284は指の圧痕が残る土師器の中～小型甕で、外面にヘラケズリ調整がある個体。285～288は須恵器の坏で、285・288は口端部が外反している。底部が残るもの(285・286・287)はいずれも回転糸切り痕が明瞭である。289～293は須恵器の壺類の破片で、290・293は底部の資料である。293は高台風の上げ底をもつもの、292は長頸壺の頸部と思われるものである。294～309は大甕を含む甕類の破片資料で、299は内面に放射状の当て具痕が明瞭であるのに対し、308の当て具痕は直線状である。

これらはすべて９世紀から10世紀前半のものであろう。

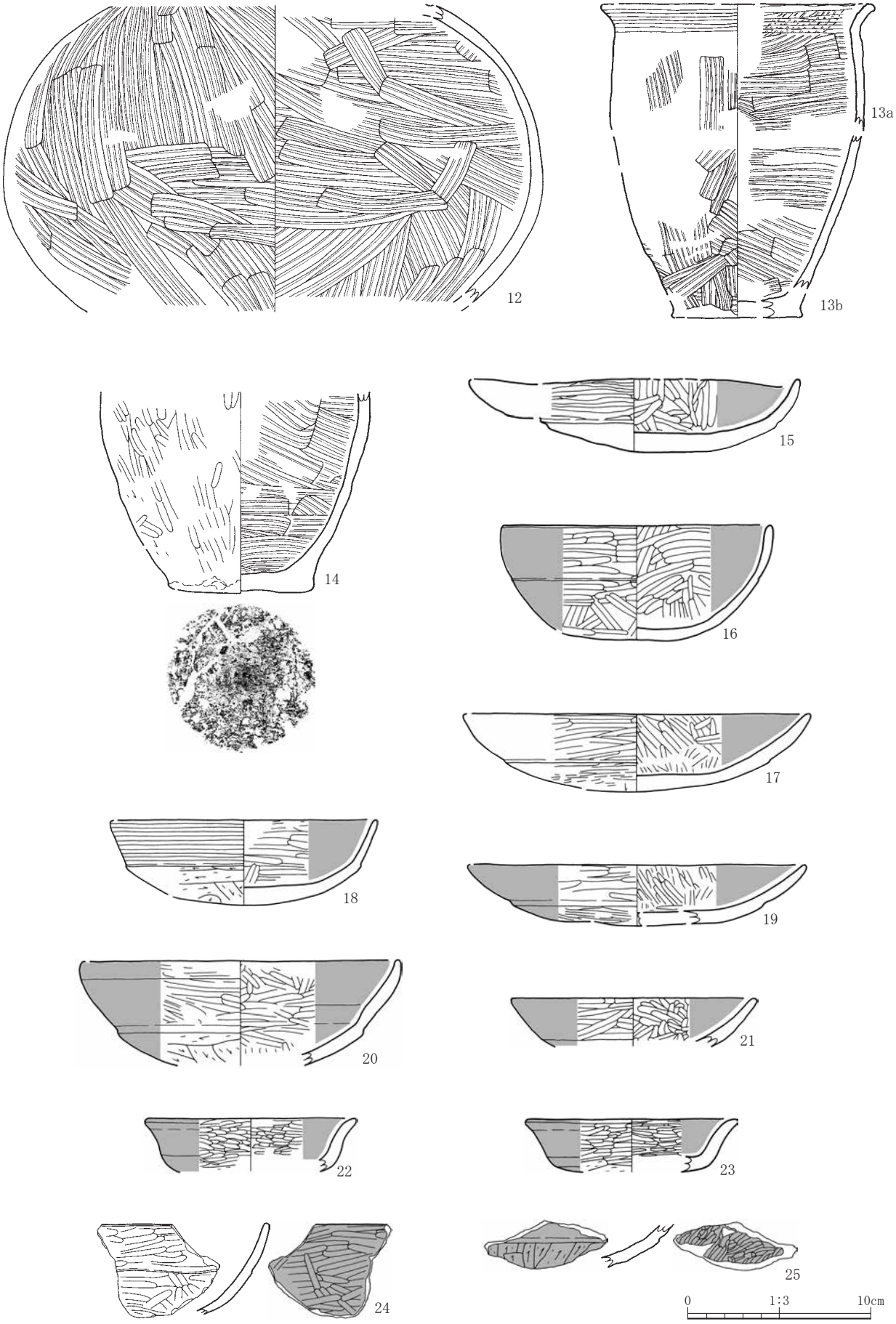
310はてづくねかわらけの小皿で、東側調査区確認⑧の用水路付近から出土した。一段ナデで面取りされた個体である。311～313の羽口はいずれも細片であるが、推定される直径は５cm前後か。314は支脚とするには太すぎる棒状の土製品である。円形か隅の丸い中実の製品であろう。

315～319は陶磁器類である。315は中国産青磁の端反り碗口縁部で14～15世紀代のもの。316は在地産19世紀の鉢の底部付近、317・319は瀬戸産の擂り鉢の体部と口縁部、318は大堀・相馬産の小瓶で江戸末～明治の年代か。

最後に石器であるが、320・321は石鏃で前者は完形の有茎鏃、後者は無茎鏃と思われる。322は石篦、323は掻器とした。324はⅣ層の検出面で出土した細石刃様の石器剥片である。320は珪質頁岩、321～324は頁岩を素材としている。325は黒曜石の剥片で、産地は北上地区北上系と判定されているもの。326の礫石器は直線状の磨面を有する、いわゆる縄文時代の半円状扁平打製石器で、石質は安山岩である。327は凝灰岩製の砥石で平安時代に属するものと思われる。

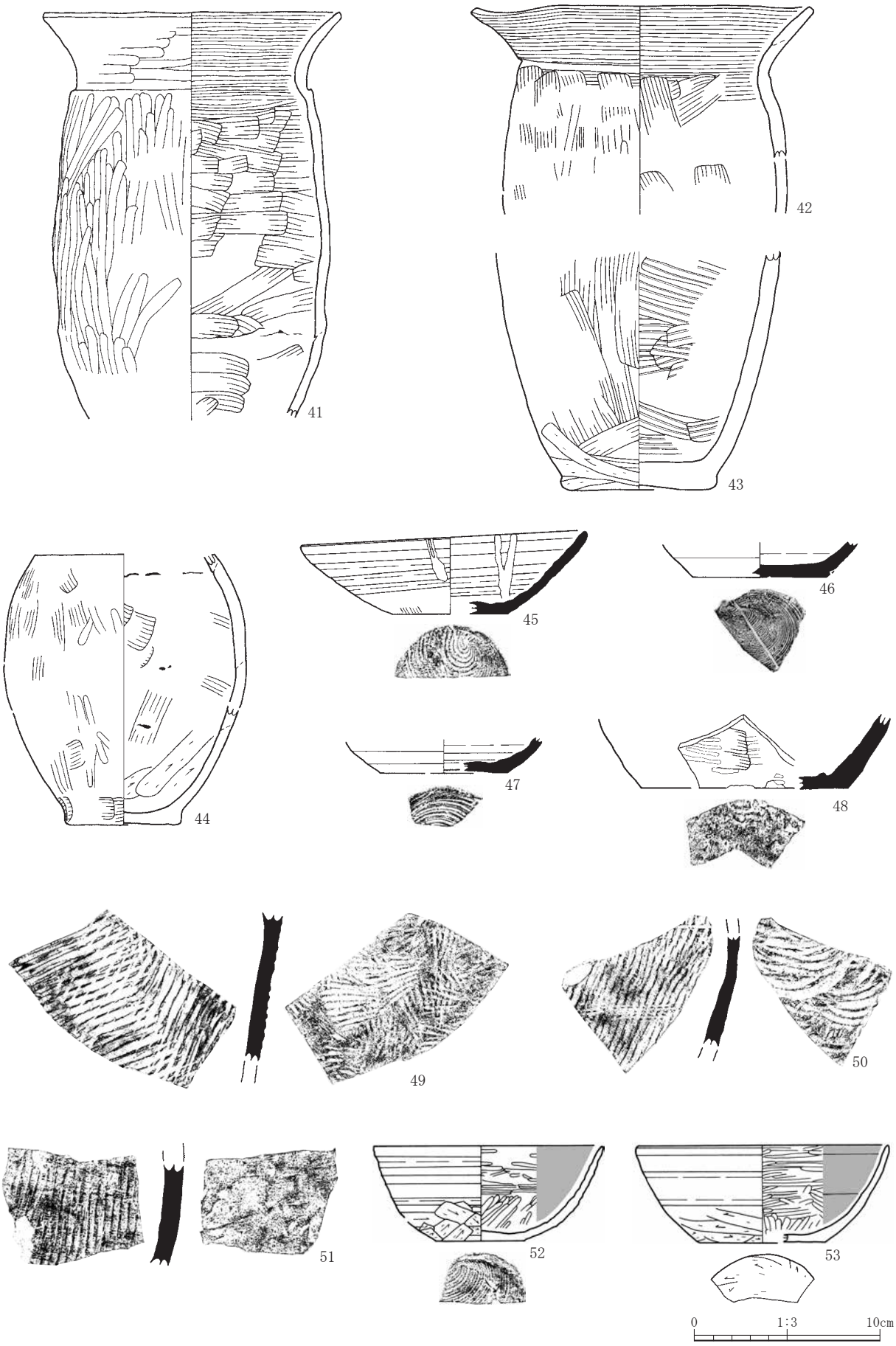


第47図　出土遺物（１）

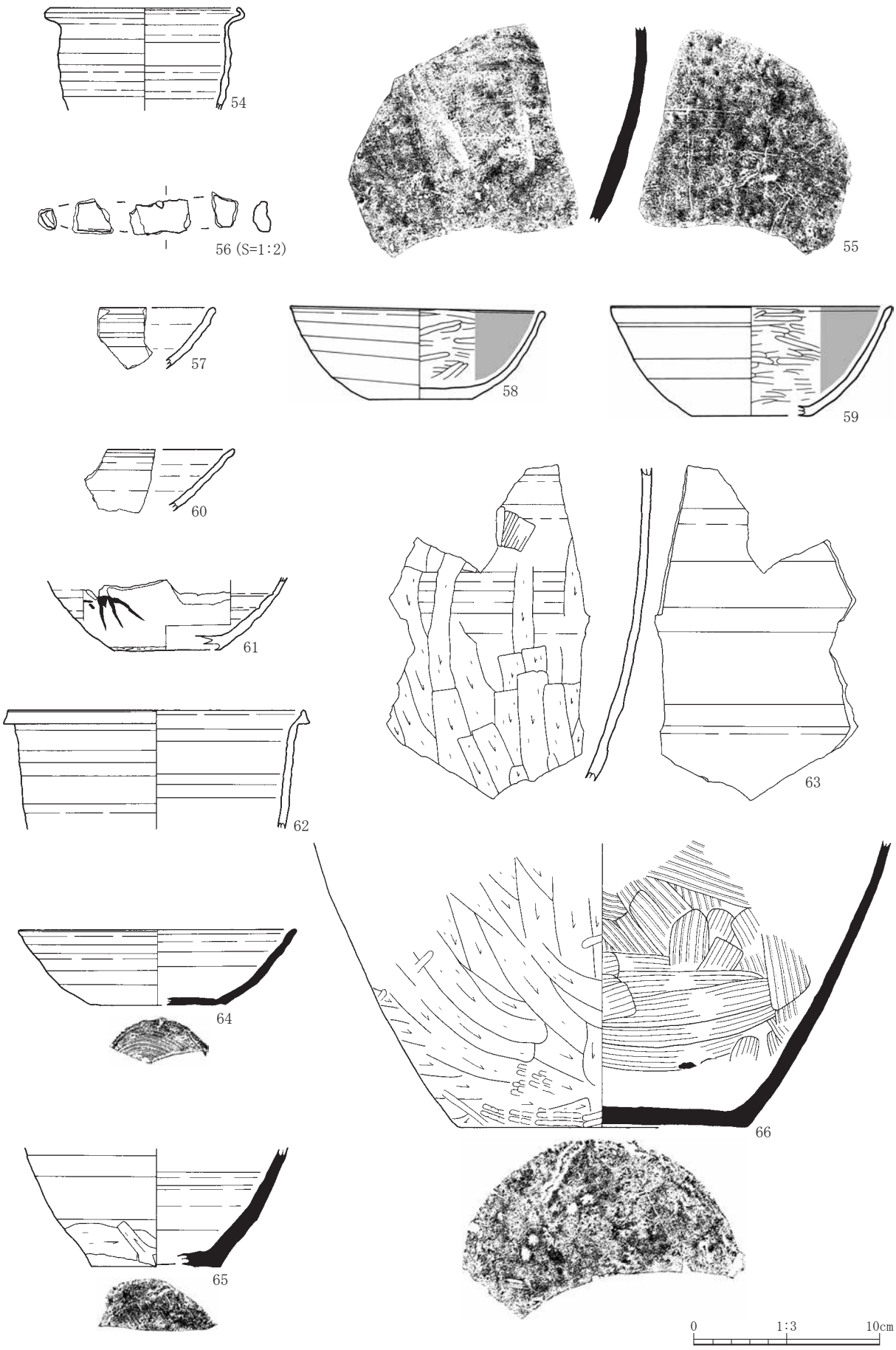


第48図　出土遺物（２）

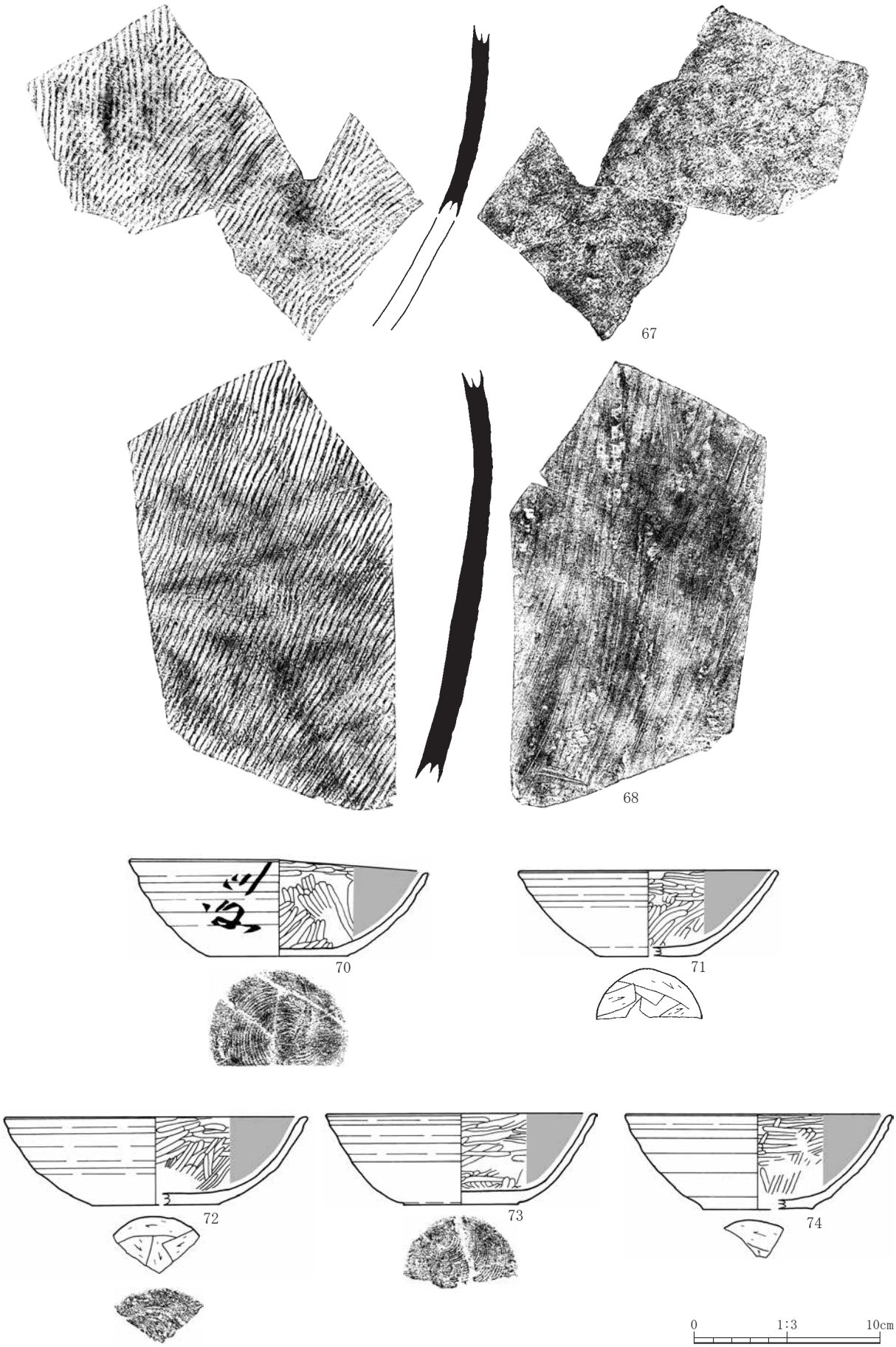
第49図　出土遺物（３）



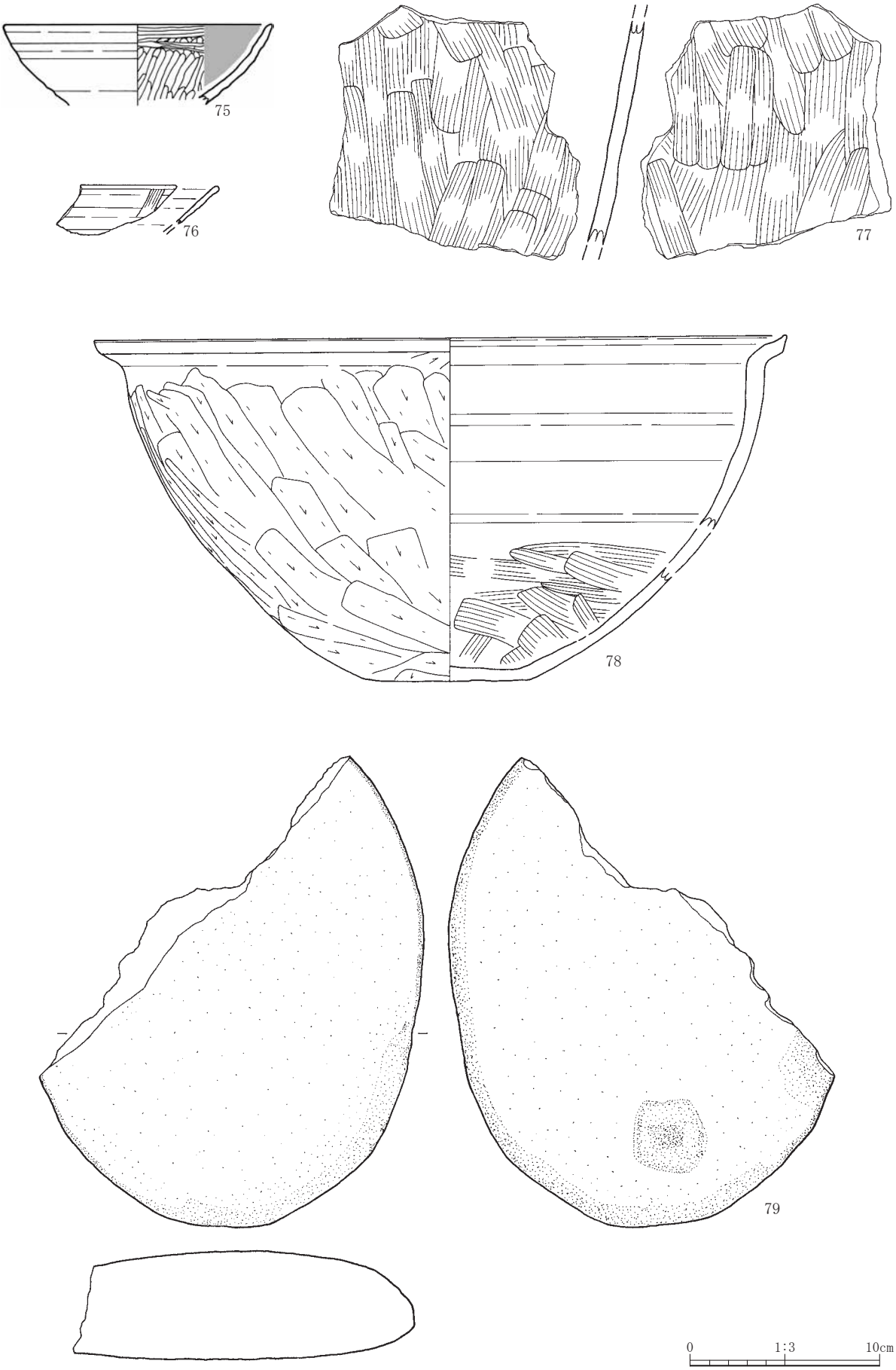
第50図　出土遺物（４）



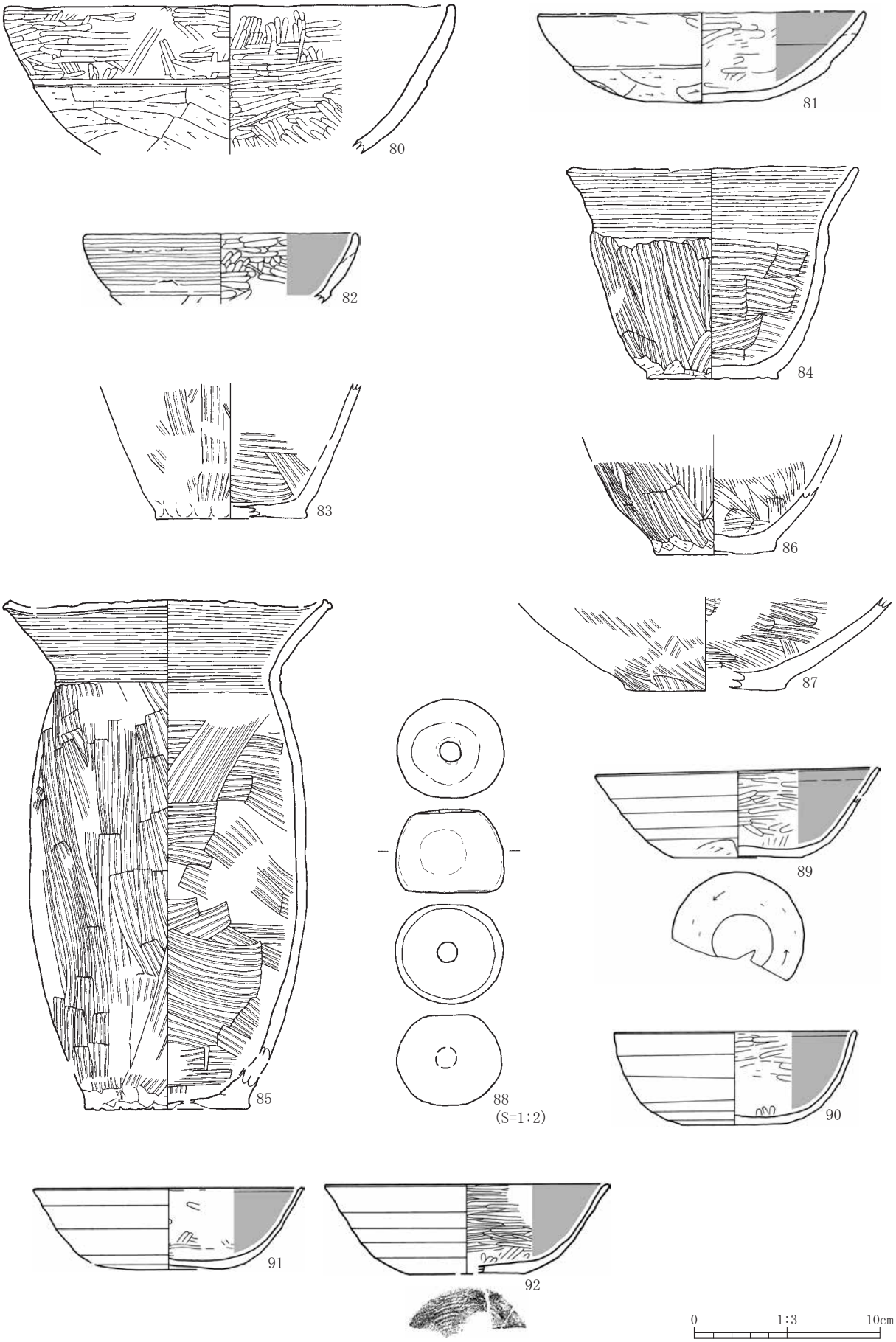
第51図　出土遺物（５）



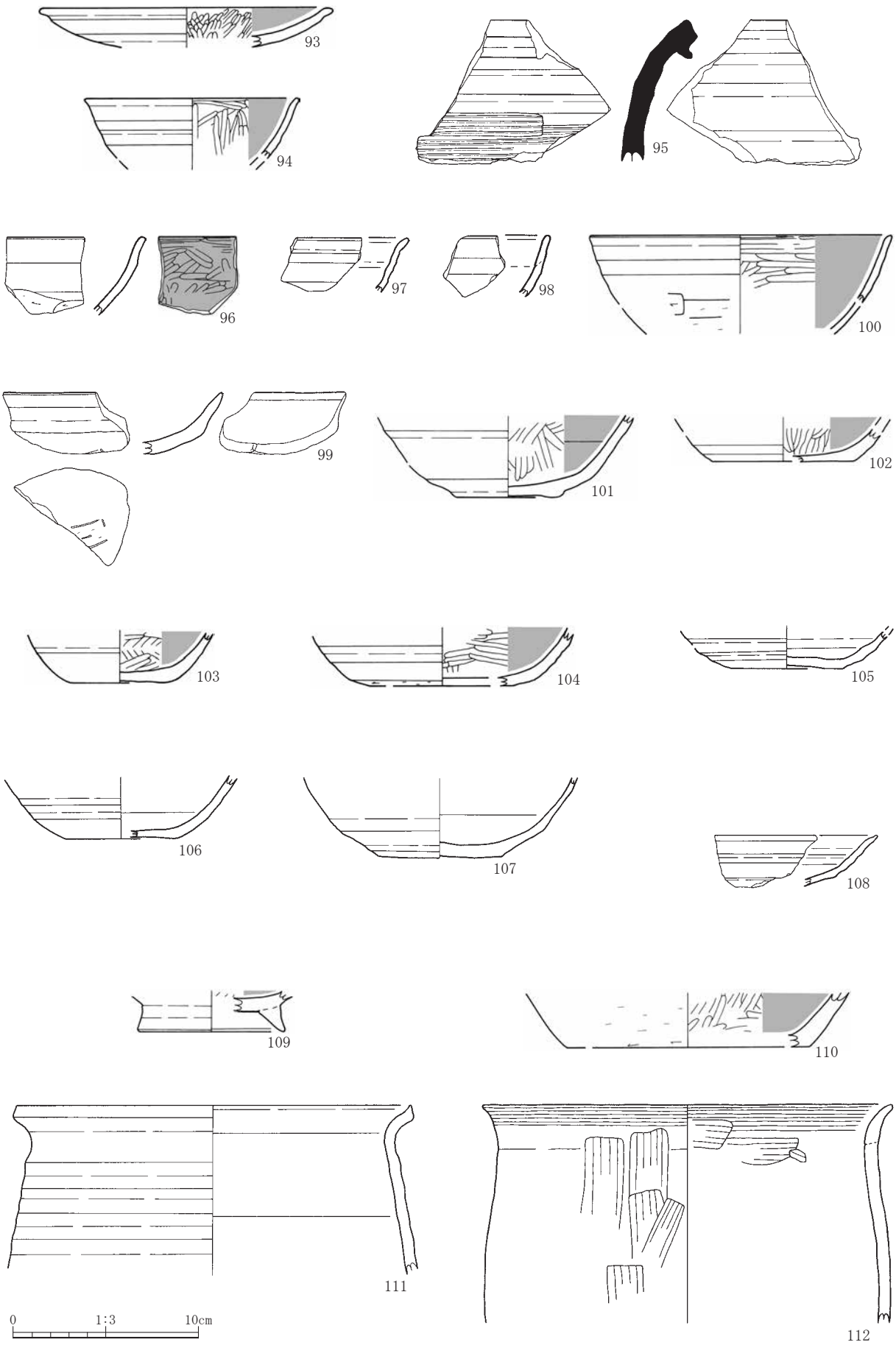
第52図　出土遺物（６）



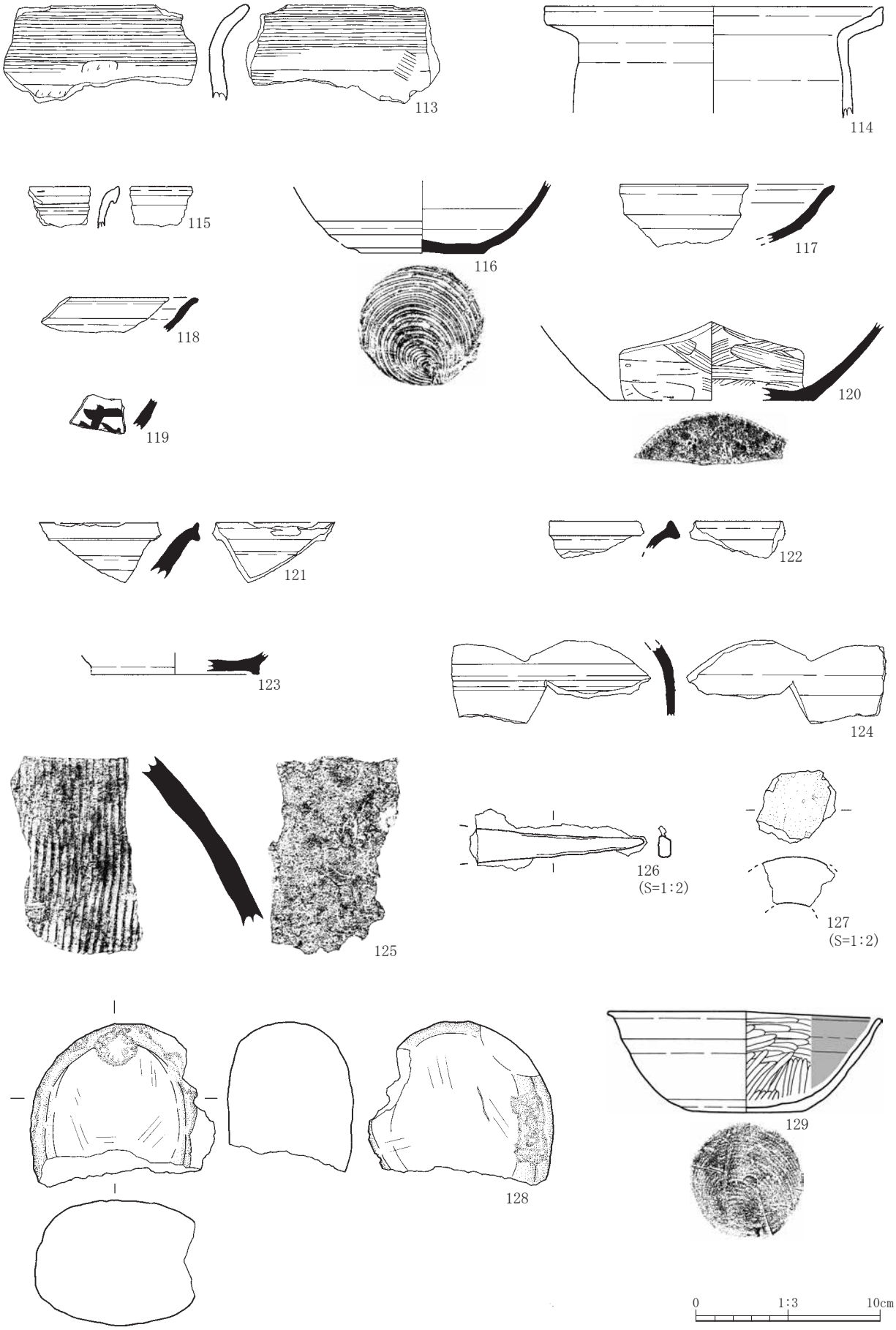
第53図　出土遺物（７）



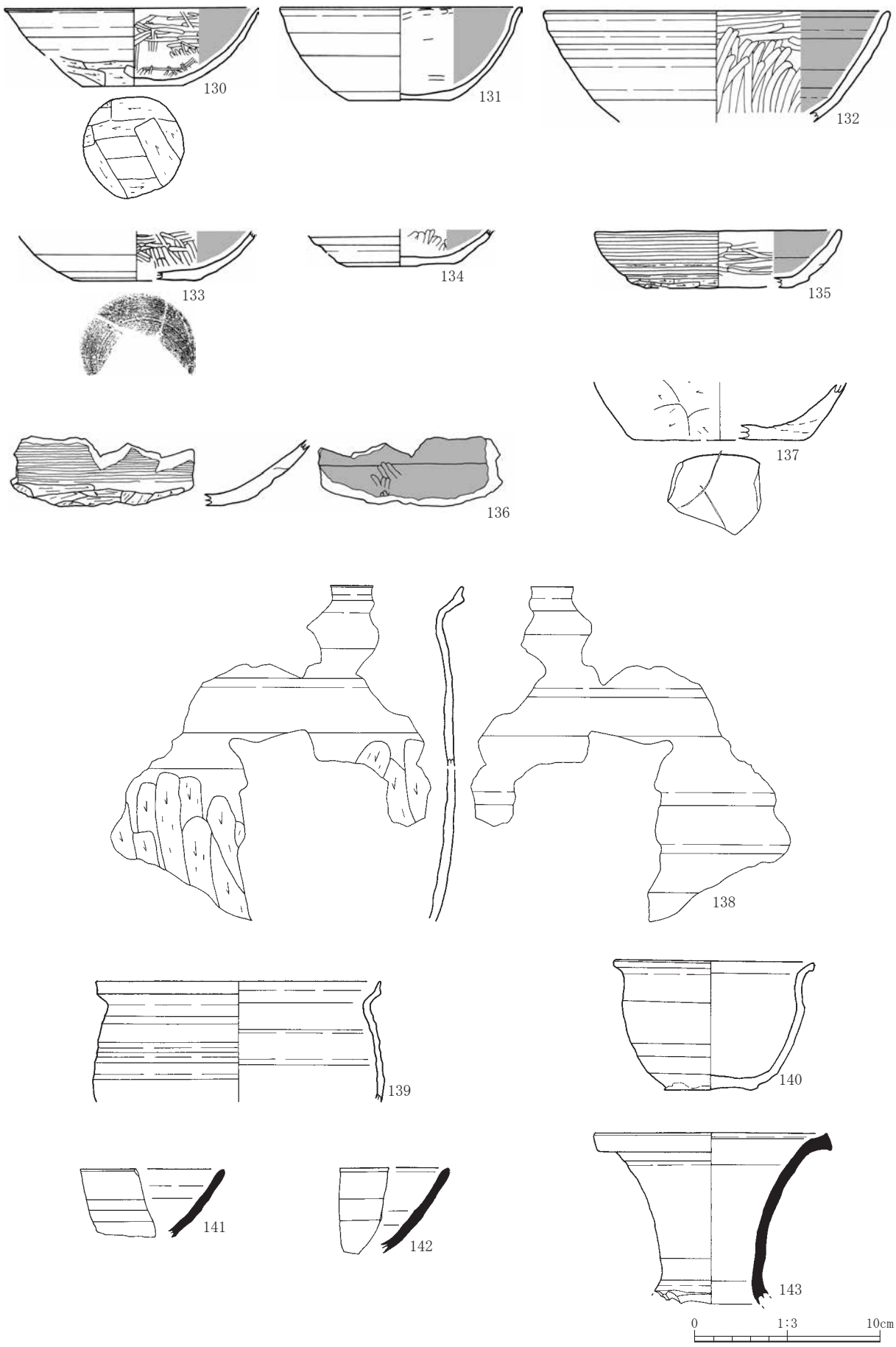
第54図　出土遺物（８）


93
94
95
96
97
98
100
99
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
0
1:3
10cm

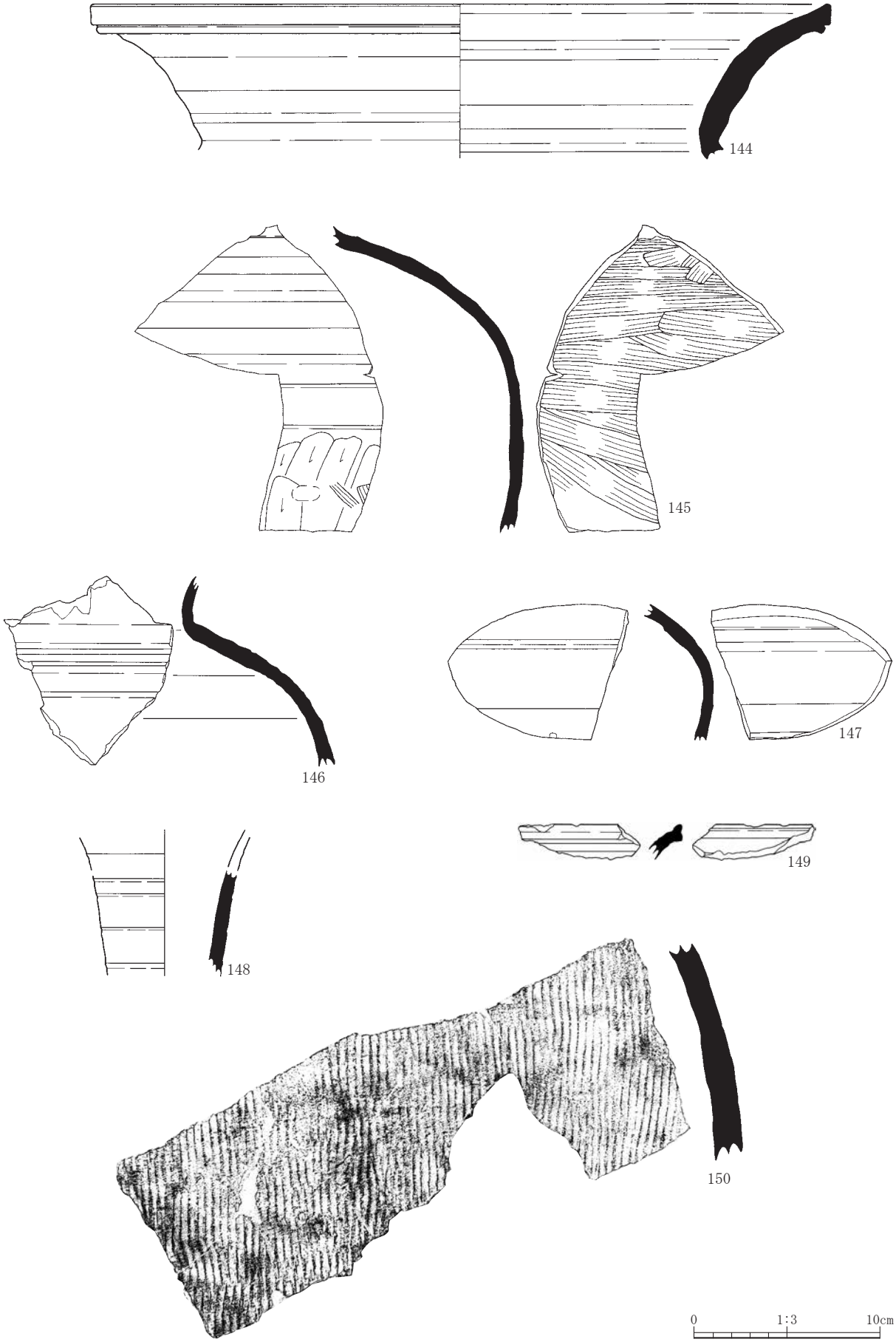
第55図　出土遺物（９）


113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
(S=1:2)
127
(S=1:2)
128
129
0
1:3
10cm

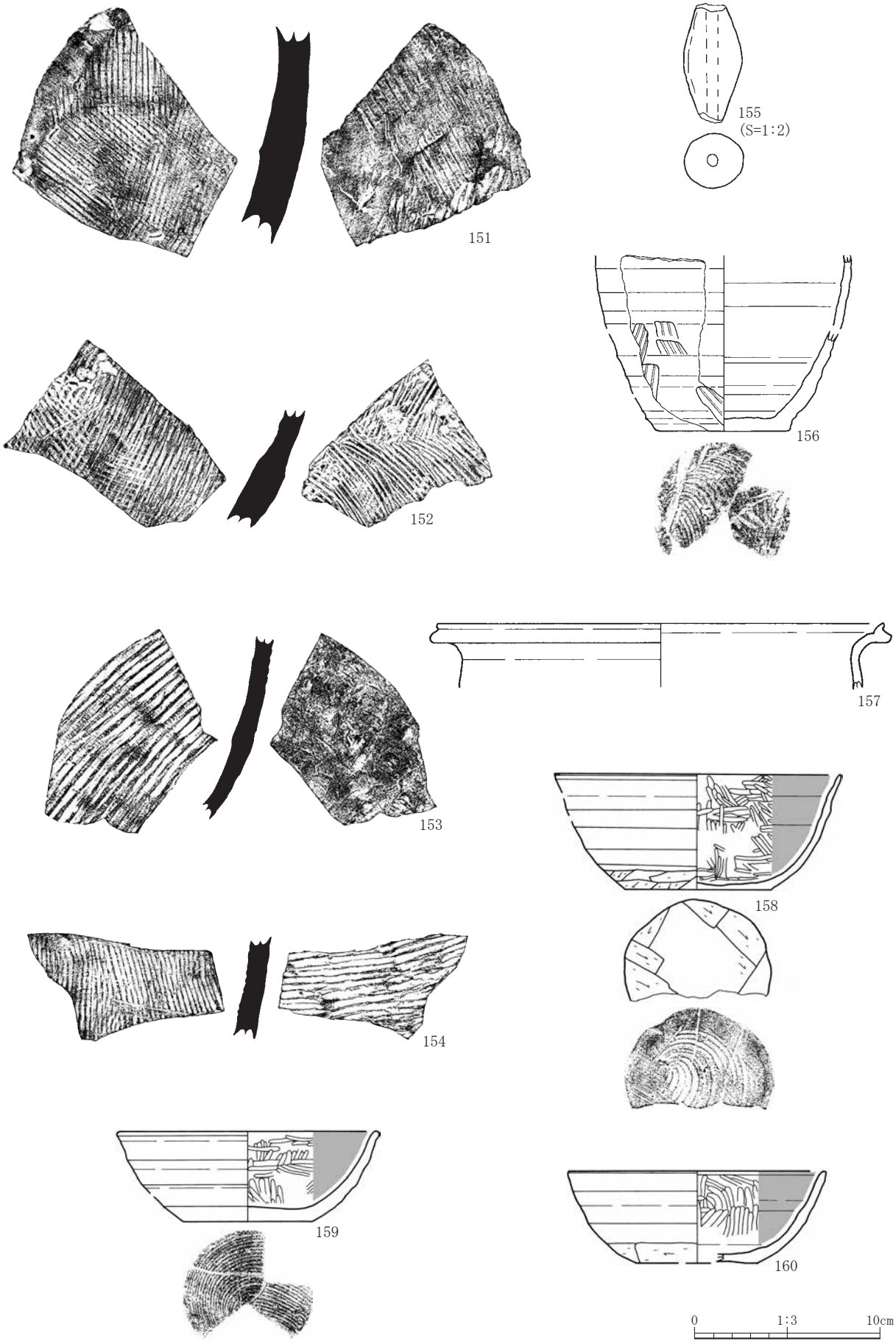
第56図　出土遺物(10)



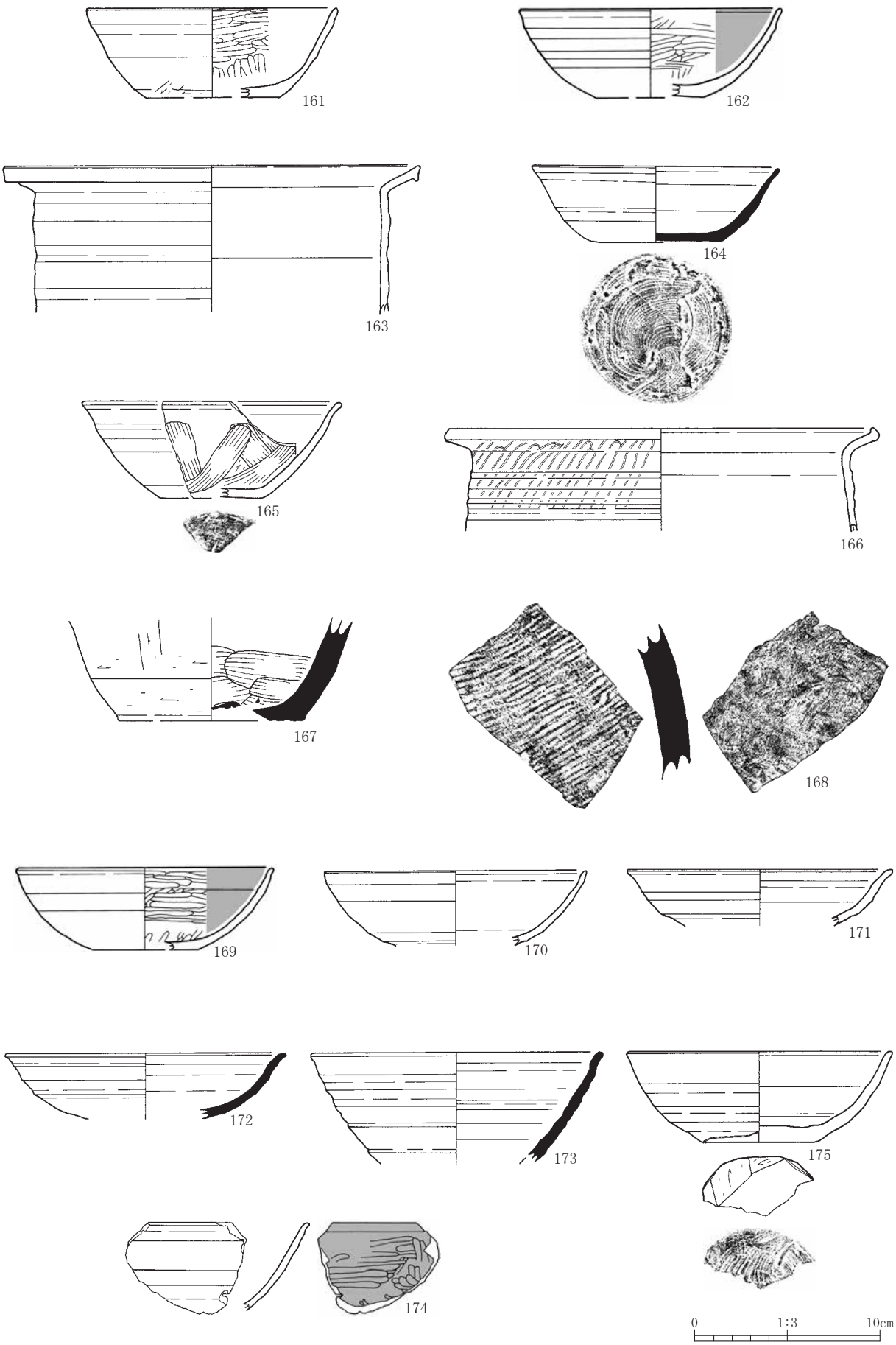
第57図　出土遺物(11)



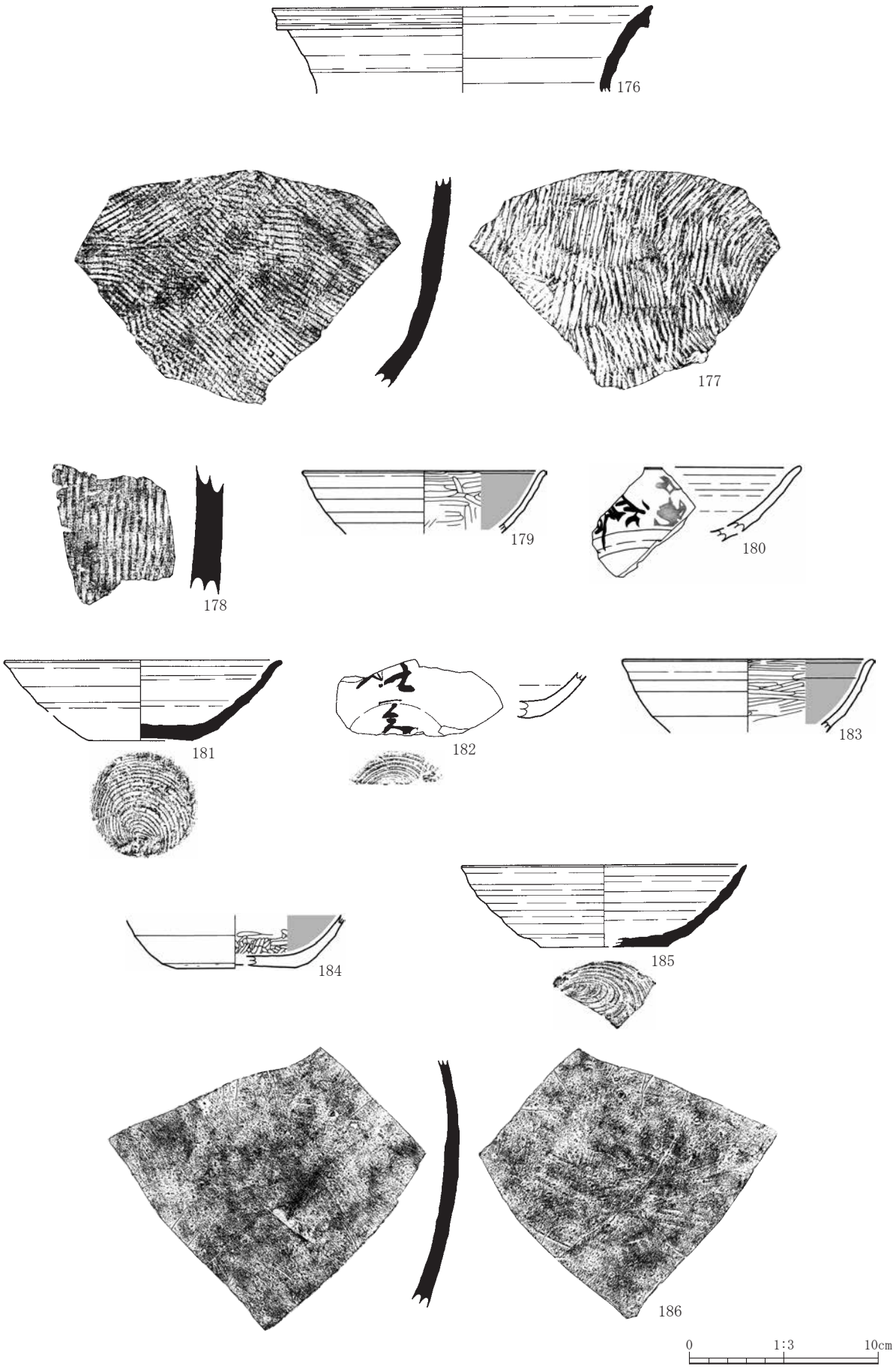
第58図　出土遺物(12)



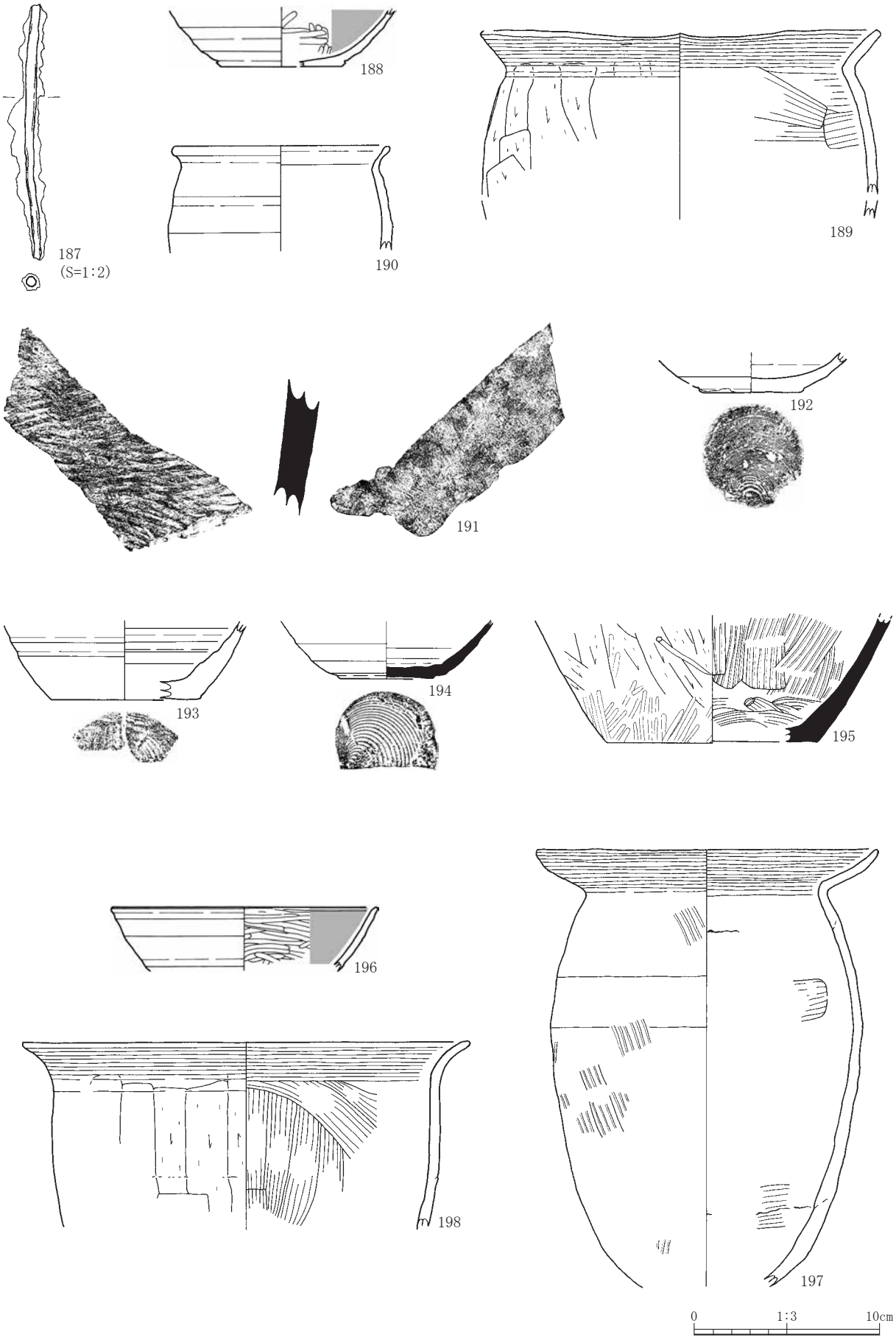
第59図　出土遺物(13)


161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
0
1:3
10cm

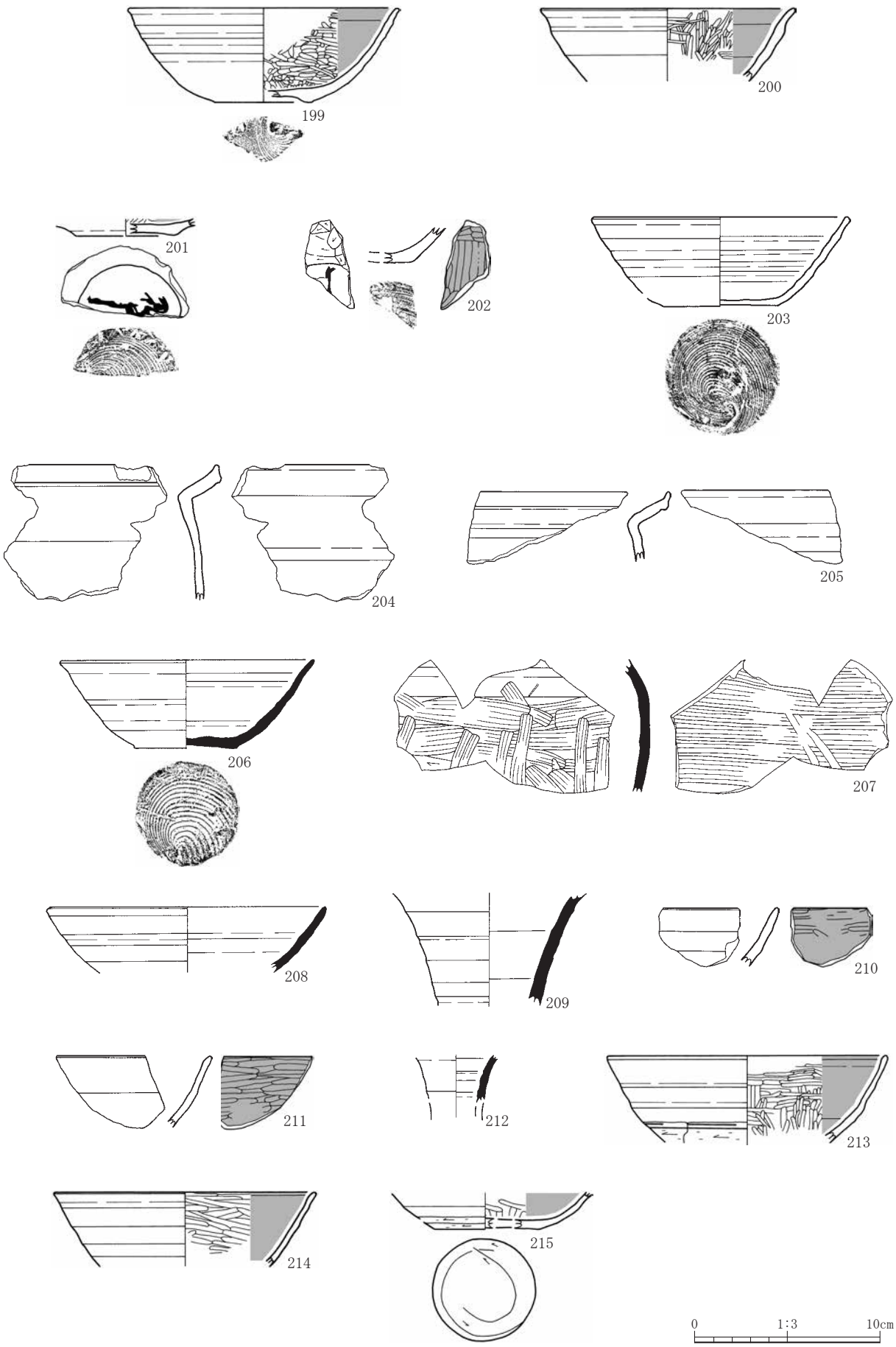
第60図　出土遺物(14)



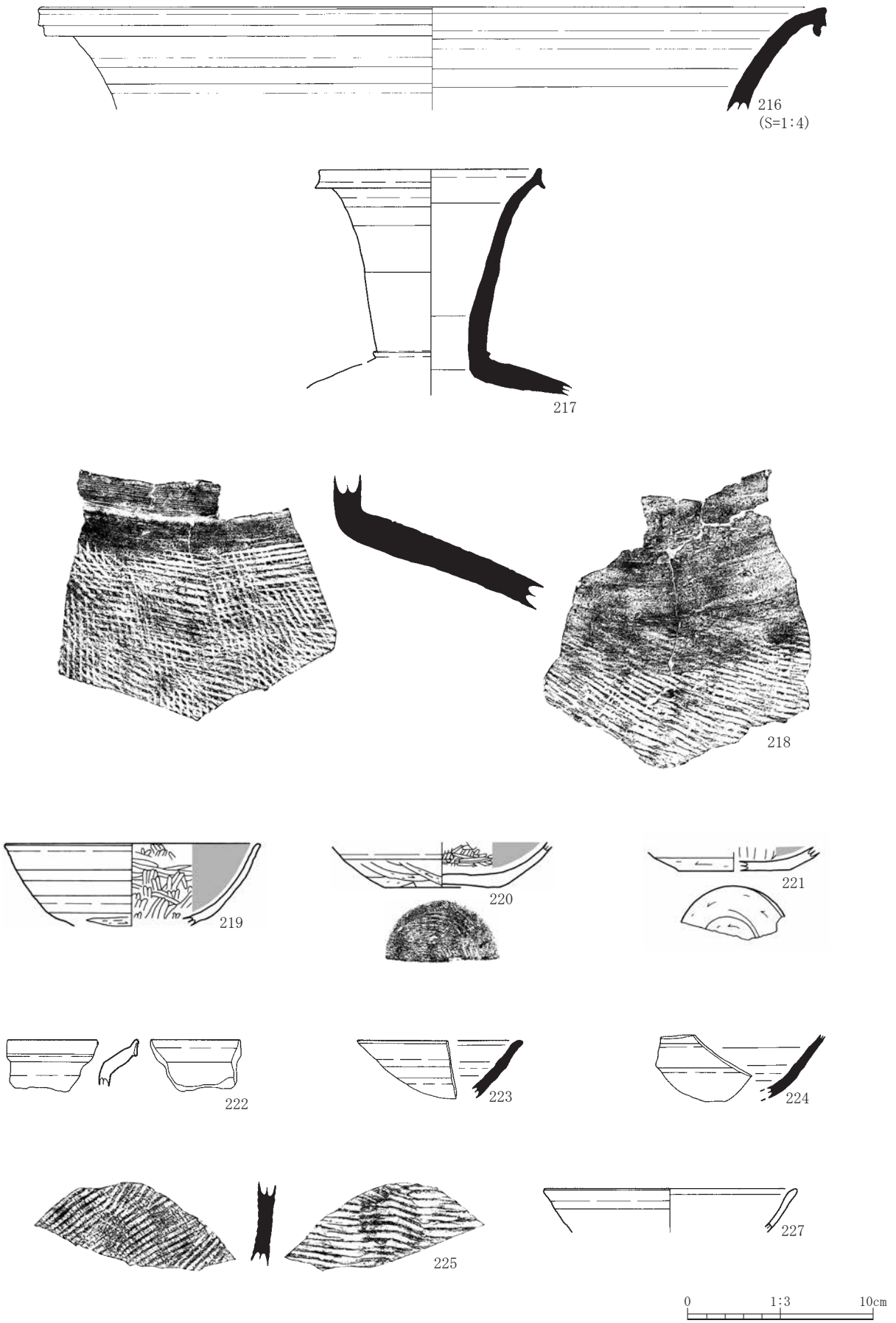
第61図　出土遺物(15)



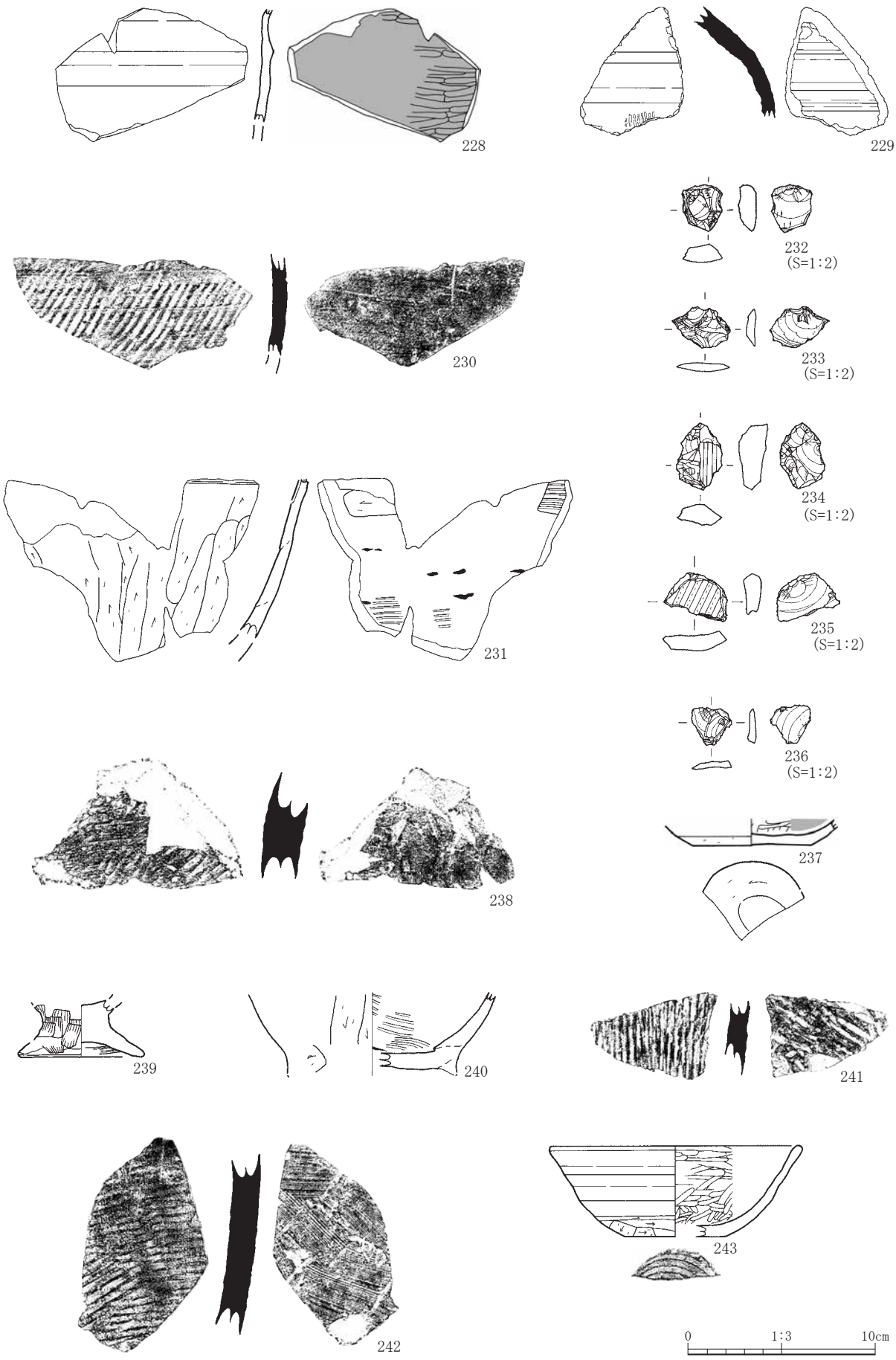
第62図　出土遺物(16)


199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
0
1:3
10cm

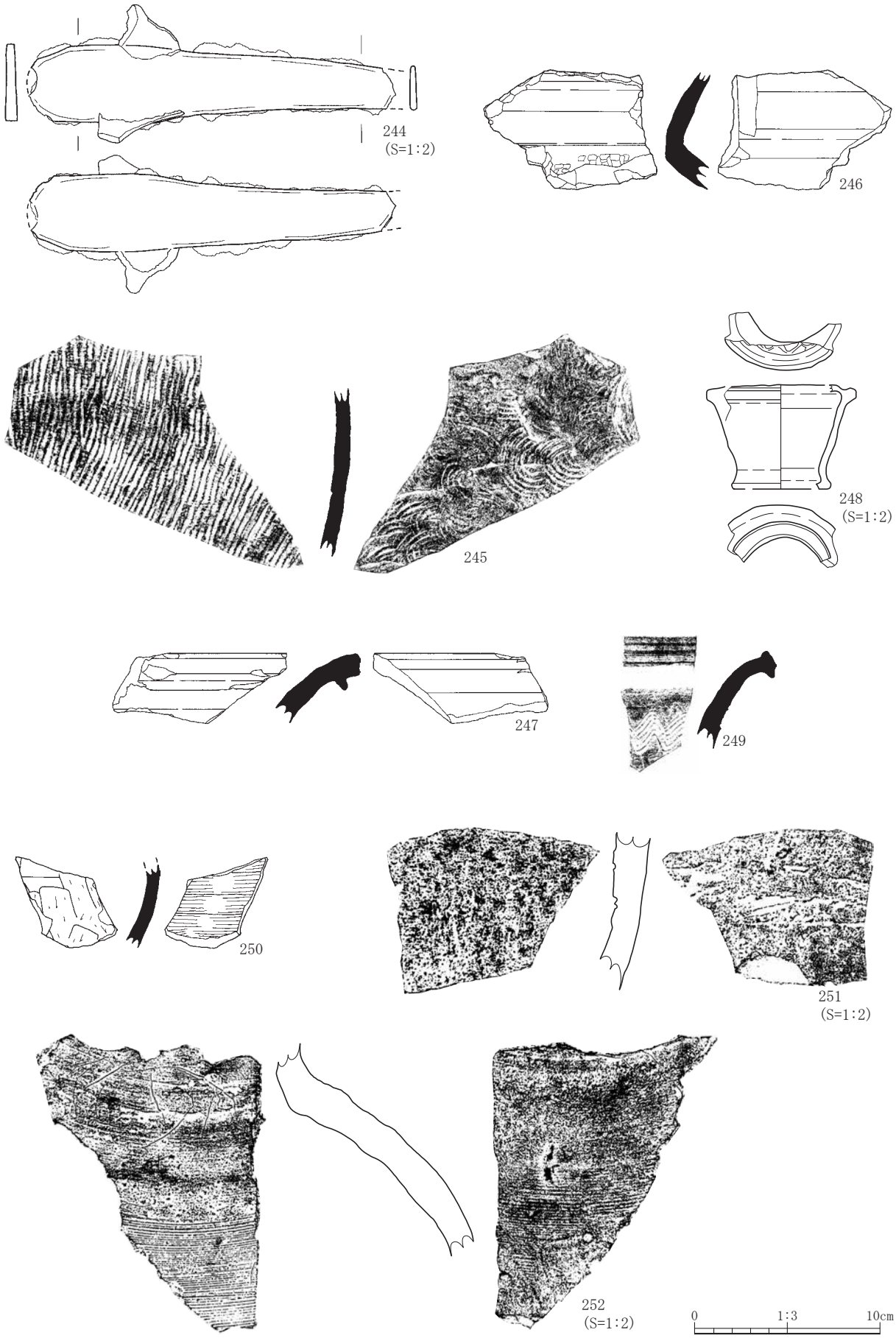
第63図　出土遺物(17)



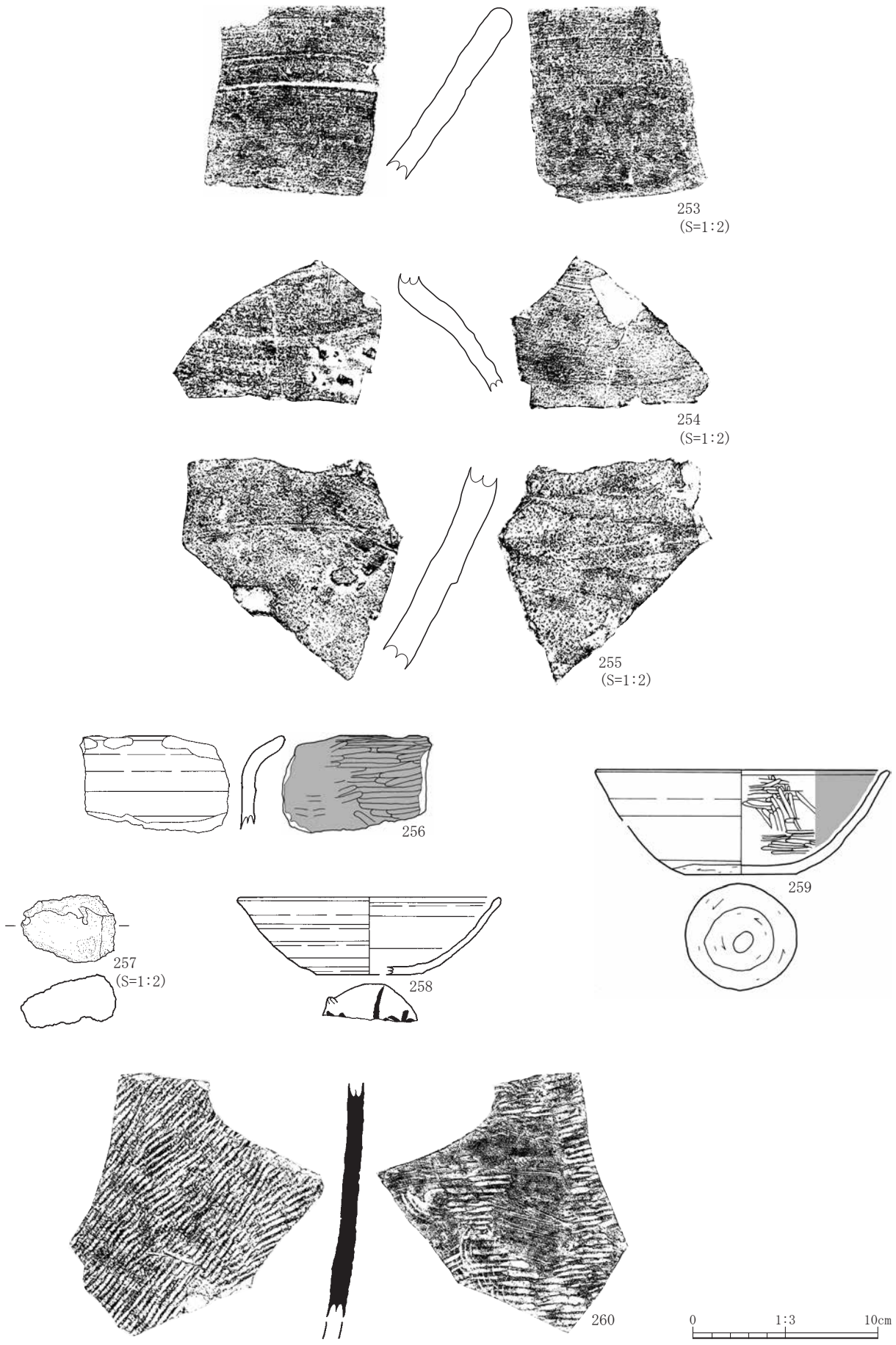
第64図　出土遺物(18)


228
229
232
(S=1:2)
230
233
(S=1:2)
234
(S=1:2)
231
235
(S=1:2)
236
(S=1:2)
237
238
239
240
241
242
243
0
1:3
10cm

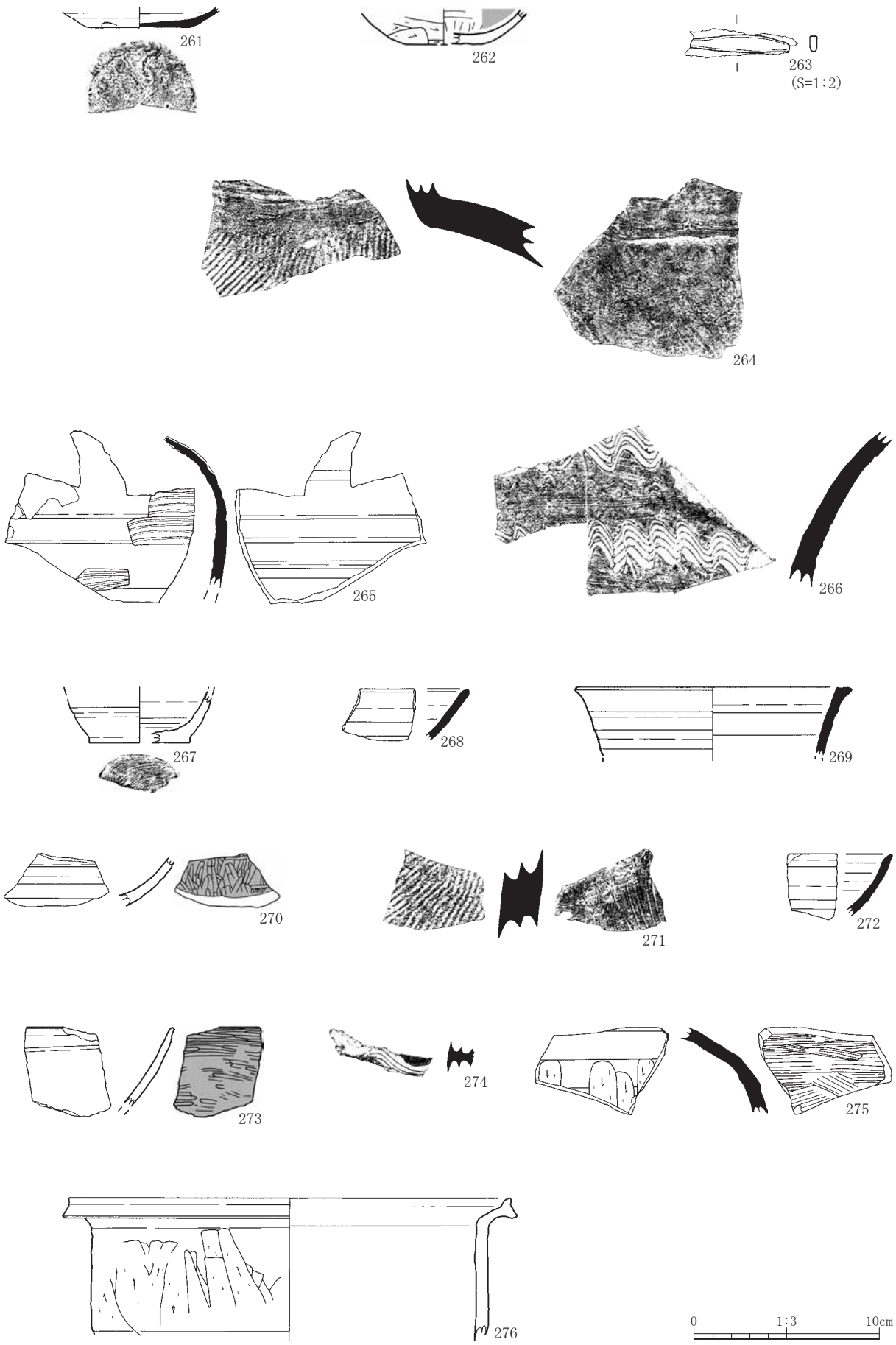
第65図　出土遺物(19)



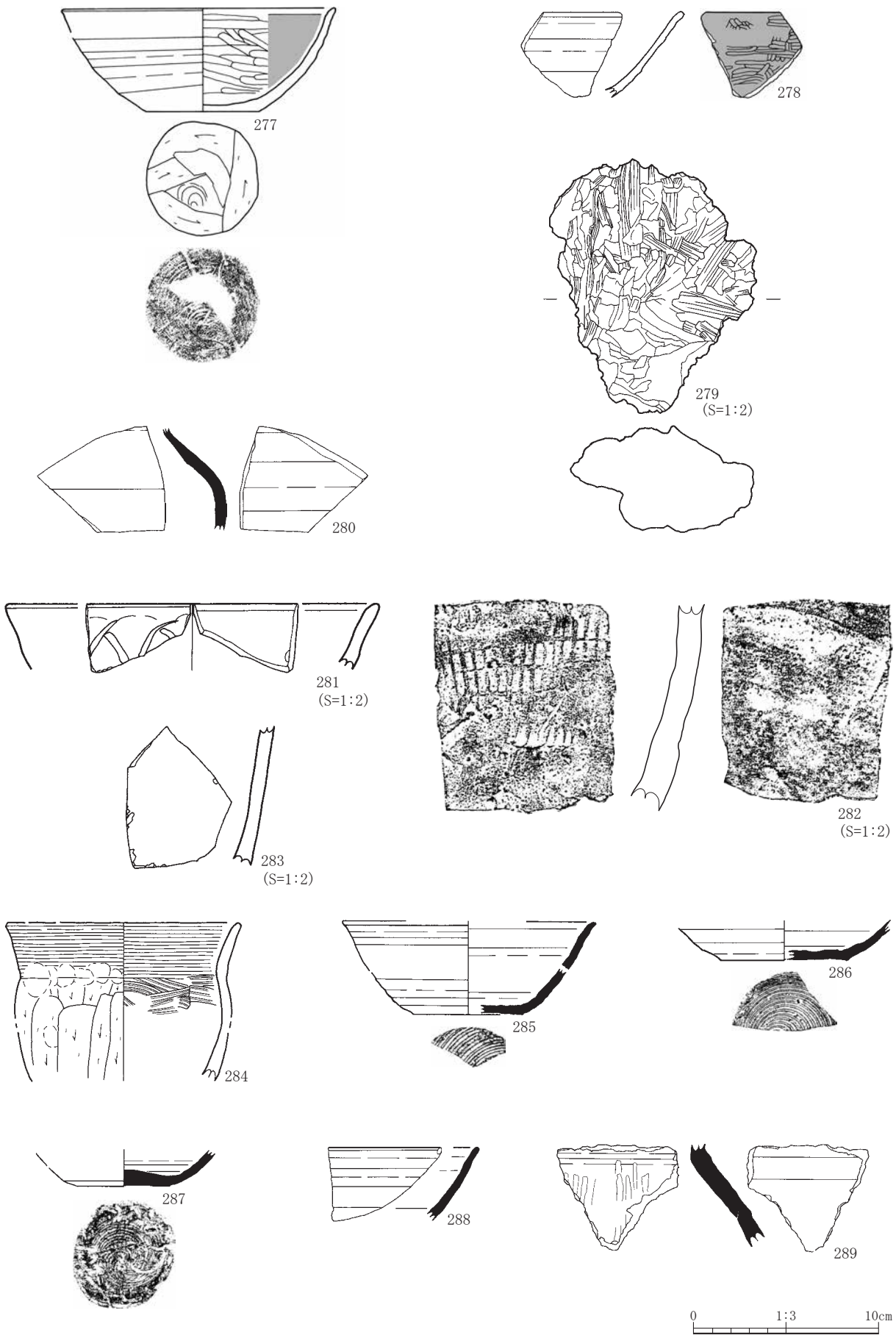
第66図　出土遺物(20)



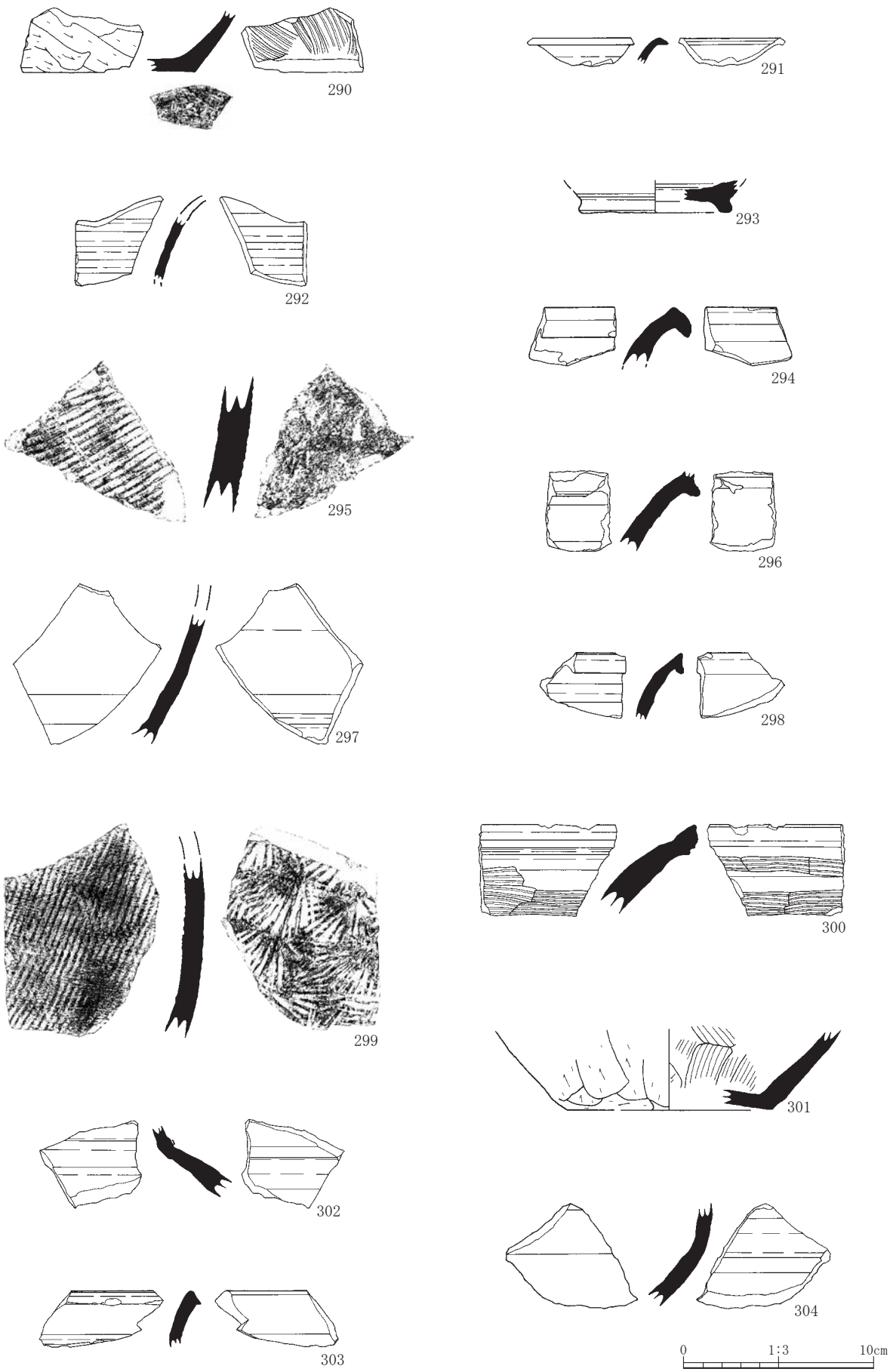
第67図　出土遺物(21)


261
262
263
(S=1:2)
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
0
1:3
10cm

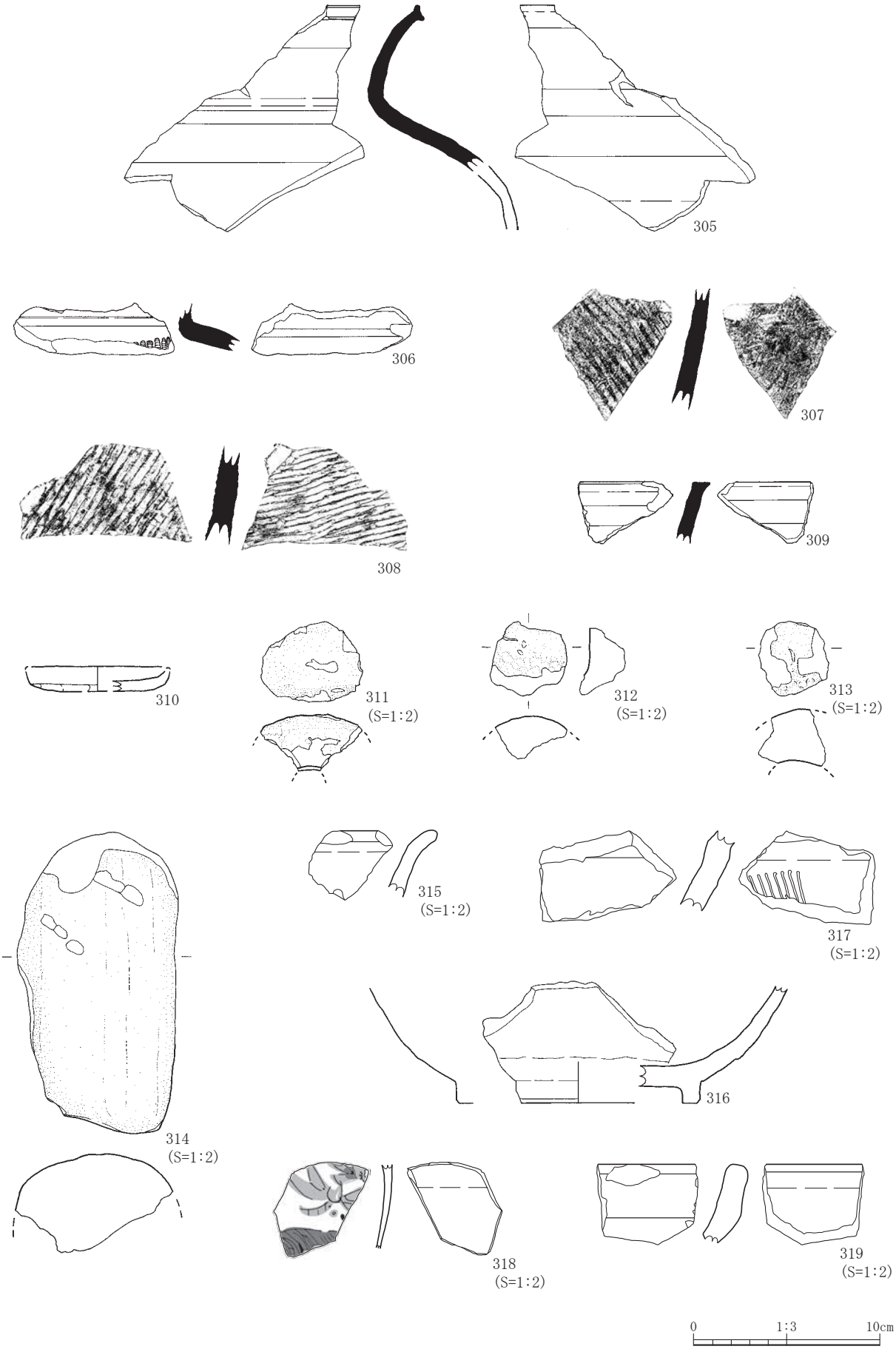
第68図　出土遺物(22)


277
278
279
(S=1:2)
280
281
(S=1:2)
282
(S=1:2)
283
(S=1:2)
284
285
286
287
288
289
0
1:3
10cm

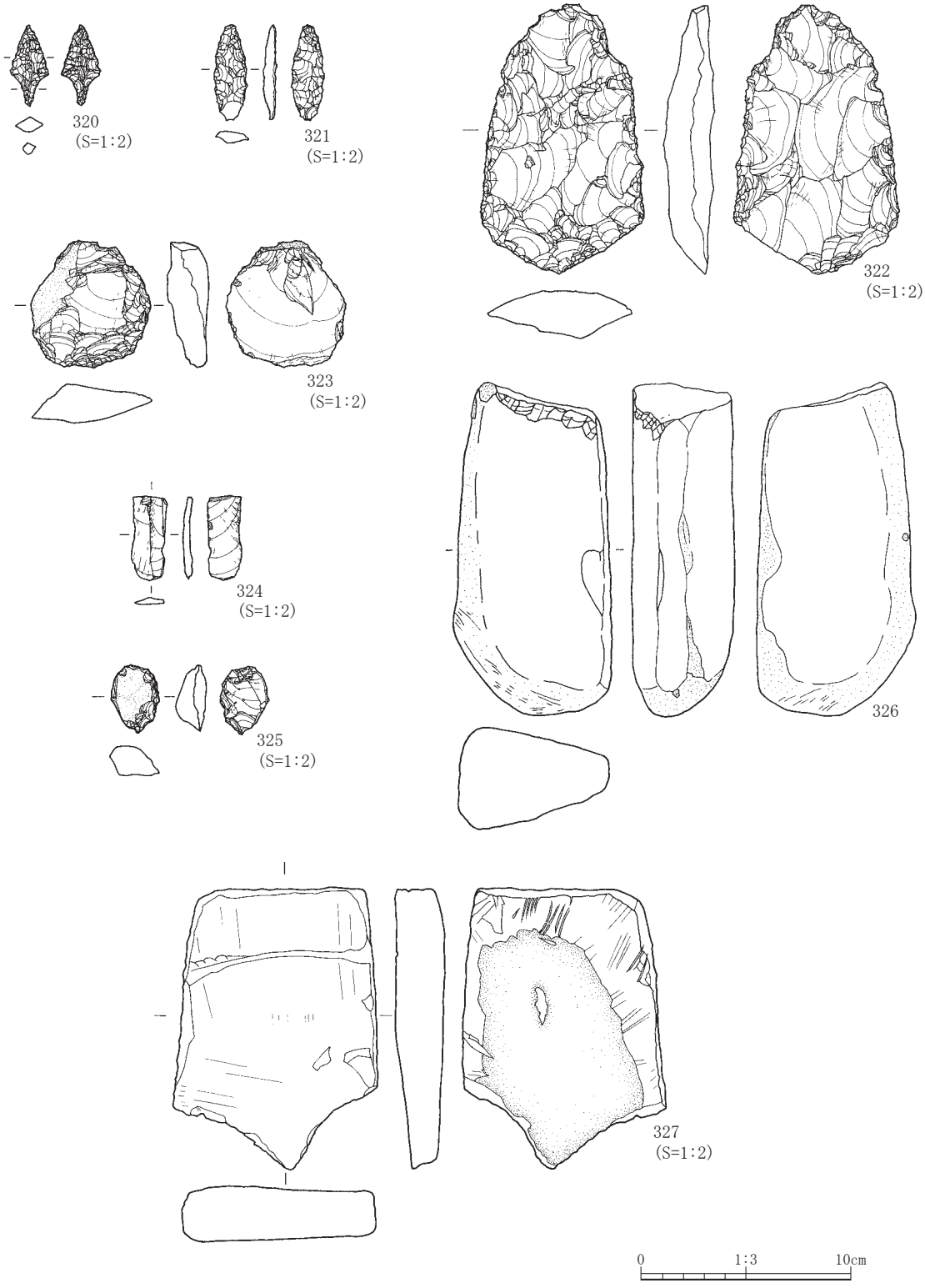
第69図　出土遺物(23)


290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
0
1:3
10cm

第70図　出土遺物(24)


305
306
307
308
309
310
311
(S=1:2)
312
(S=1:2)
313
(S=1:2)
314
(S=1:2)
315
(S=1:2)
316
317
(S=1:2)
318
(S=1:2)
319
(S=1:2)
0
1:3
10cm

第71図　出土遺物(25)


320
(S=1:2)
321
(S=1:2)
322
(S=1:2)
323
(S=1:2)
324
(S=1:2)
325
(S=1:2)
326
327
(S=1:2)
0
1:3
10cm

第72図　出土遺物(26)

第４表　土器(土師器・須恵器等)観察表

No	遺構名	出土地点	種類	器種	部位	外面調整(口縁／体部)	内面調整(口縁／体部)	口径	底径	器高	底面	分類	備考
1	101号住	埋土	土師器	甕	体	/ハケメ	/ハケメ	－	－	(5.2)		ＢⅠb	
2	102号住	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(2.8)		ＡⅡa	
3	103号住	埋土	土師器	甕	口唇	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(1.4)		ＢⅡa	
4	105号住	ベルト埋土	土師器	坏	口～体	ヨコナデ/ヨコナデ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(3.2)		ＡⅠ	輪積痕
5	105号住	ベルト埋土	土師器	甕	口唇	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(1.0)		ＢⅡc	
6	106号住		土師器	坏	口～底	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	10.3	丸底	4.2	平底風丸底	ＡⅠa	内黒、外面有段
7	106号住	南西埋土	土師器	坏	口～体	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.8〉	－	(3.9)		ＡⅠ	内黒、外面有段、輪積痕
8	106号住	土器No5	土師器	高坏	口～高台	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈10.2〉	〈6.1〉	5.1	高台付	ＡⅠc	内黒、外面有段
9	106号住	床面ほか	土師器	甕(長胴)	口～底	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ハケメ	19.4	9.8	25.7	内面やや丸味有り	ＢⅠb	
10	106号住	土器No1	土師器	甕(球胴)	口～底	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ハケメ	16.7	〈9.2〉	22.8		ＢⅠb	頸部有段､2個体で図化
11	106号住	土器No2	土師器	甕(球胴)	口～体	ヨコナデ/ヘラナデ	ヨコナデ/ヘラケズリ・ヘラナデ	－	－	(15.0)		ＢⅠb	
12	106号住	土器No3	土師器	甕(球胴)	体	/ハケメ	/ハケメ	－	－	(16.9)		ＢⅠb	
13	106号住	南西埋土ほか	土師器	甕	口～底	ヨコナデ/ハケメ	ハケメ・ヨコナデ/ハケメ	〈15.0〉	〈7.0〉	(17.3)		ＢⅠb	2個体で図化
14	106号住	南東貼床ほか	土師器	甕	体～底	/ヘラミガキ	/ハケメ	－	8.0	(11.0)	内面やや丸味有り	ＢⅠ	
15	107号住	土器No1	土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈18.0〉	－	4.0	丸底	ＡⅠa	内黒、外面有段
16	107号住	Pit1埋土	土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.6	3.5	6.3	平底	ＡⅠb	内外黒、外面有段
17	107号住	土器No6	土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈18.8〉	－	4.3	丸底	ＡⅠa	内黒、外面有段
18	107号住	Pit1横	土師器	坏	口～底	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.4〉	－	4.7	丸底	ＡⅠa	内外黒、外面有段
19	107号住	北埋土ほか	土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈18.4〉	－	3.3	平底風丸底	ＡⅠa	内外黒、外面有段
20	107号住	北埋土	土師器	坏	口～体下	ヘラミガキ/ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈17.2〉	－	(5.7)		ＡⅠ	内外黒、内外面有段
21	107号住	土器No1	土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.4〉	－	(2.7)		ＡⅠ	内外黒、外面段不明瞭
22	107号住		土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈11.5〉	－	(2.9)		ＡⅠ	内外黒
23	107号住											ＡⅠ	No38と同一個体
24	107号住	Pit1埋土	土師器	坏	口～体	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	5.0		ＡⅠ	内黒、外面有段
25	107号住	南埋土	土師器	坏	体	/ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	－	(2.5)		ＡⅠ	内外黒、外面有段
26	107号住	土器No2	土師器	坏	口～体	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(4.9)		ＡⅠ	内外黒、内外面有段
27	107号住	土器No13ほか	土師器	坏	口～体	ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.0〉	－	(3.2)		ＡⅠ	内黒、外面有段
28	107号住	ベルト埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈6.4〉	(2.7)	回転糸切	ＡⅡ	内黒、灯明皿転用
29	107号住	埋土	土師器	坏	完形	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	14.4	8.8	4.0	回転ヘラ切り	ＡⅡa	
30	107号住	東埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ロクロ	－	5.5	(2.1)	ヘラの再調整	ＡⅡ	
31	107号住	北埋土	土師器	高坏	体～脚	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(6.9)	脚付	ＡⅠc	内黒、外面有段
32	107号住	東埋土	土師器	高坏	体～脚	/ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	－	(3.0)	脚付	ＡⅠc	内黒
33	107号住	土器No6	土師器	高坏	脚部	/	/ヘラミガキ、脚部内面ハケメ	－	－	(3.2)	脚付	ＡⅠc	内黒
34	107号住	東埋土下位	土師器	鉢	口～体	ヘラナデ/ヘラナデ	ヘラナデ/ヘラナデ	〈14.4〉	－	(7.8)		ＢⅠb？	外面有段2段
35	107号住	東埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈22.0〉	－	(6.7)		ＢⅡc	
36	107号住	東埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ→ヘラナデ	ロクロ/ロクロ	－	－	(7.0)		ＢⅡb	
37	107号住	西埋土	土師器	甑	底						有孔	―	
38	107号住	西埋土	土師器	甑	底						有孔	―	竹管様工具痕か？
39	107号住	土器No9	土師器	甕(球胴？)	口縁	ヨコナデ/	ヨコナデ・ヘラナデ/	〈18.0〉	－	(5.2)		ＢⅠ	輪積痕
40	107号住	北埋土	土師器	甕(長胴)	口～底	ヨコナデ/ヘラナデ→ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	〈16.6〉	6.8	31.0		ＢⅠb	輪積痕
41	107号住	土器No11ほか	土師器	甕	口～体	ヨコナデ→ヘラミガキ/ヘラミガキ	ヨコナデ/ヘラナデ					ＢⅠa	輪積痕
42	107号住	土器No16	土師器	甕	口～体	ヨコナデ/ヘラナデ→ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ/ヘラナデ	18.5	－	(11.2)		ＢⅠb	
43	107号住	東埋土	土師器	甕	体～底	/ヘラナデ・ヘラミケズリ	/ハケメ	－	8.3	(13.9)		ＢⅠb	
44	107号住	土器No14ほか	土師器	甕(中)	頸～底	/ヘラナデ・ヘラミガキ	/ヘラナデ・ヘラケズリ	－	6.1	(14.6)		ＢⅠb	輪積痕、摩滅激
45	107号住	東・南埋土	須恵器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラナデ	ロクロ/ロクロ	15.2	〈6.2〉	4.4	回転糸切		内外面火襷
46	107号住	南埋土	須恵器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈7.0〉	(1.9)	回転糸切		
47	107号住	東・南埋土	須恵器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈6.7〉	(1.9)	回転糸切		
48	107号住	南埋土	須恵器	甕	体～底	/タタキメ→ヘラナデ	/ロクロ	－	〈11.0〉	(3.7)			
49	107号住	北埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(7.9)			
50	107号住	南東埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(6.0)			
51	107号住	南埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(5.5)			
52	108号住	埋土北側	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ→ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈12.4〉	4.7	5.1	回転糸切	ＡⅡb	内黒、体部下端再調整

No	遺構名	出土地点	種類	器種	部位	外面調整（口縁／体部）	内面調整（口縁／体部）	口径	底径	器高	底面	分類	備考
53	108号住	埋土南側	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ→ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.6〉	〈6.8〉	5.2	ヘラの再調整	AⅡb	内黒、体部下端再調整
54	108号住	埋土南側	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈10.2〉	－	(5.5)		BⅡb	小型
55	108号住	埋土北側	須恵器	甕	体	/ナデ	/ナデ	－	－	(10.6)			
57	109号住	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.3)		AⅡb	
58	110号住	カマドほか	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.8	5.1	5.5	ヘラの再調整	AⅡb	内黒、再被熱
59	110号住	埋土南側	土師器	坏	口～体下	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.2〉	〈6.4〉	5.9		AⅡb	内黒
60	110号住	ベルト埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.3)		AⅡc	
61	110号住	土器No4	土師器	甕	体～底	/ロクロ・最下部ヘラケズリ	/ロクロ	－	〈5.8〉	(3.8)	下端にヘラケズリ	AⅡb	墨書「？」
62	110号住	カマドほか	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈16.0〉	－	(6.4)		BⅡc	
63	110号住	焼土付近	土師器	甕	体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(17.0)		BⅡ	
64	110号住	南埋土	須恵器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈14.8〉	〈6.0〉	4.1	回転糸切		
65	110号住	土器No6	須恵器	壺	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ロクロ	－	〈6.8〉	(6.4)			
66	110号住	Pit1ほか	須恵器	甕	体～底	/ヘラケズリ・タタキメ	/ヘラナデ	－	〈15.4〉	(15.4)			
67	110号住	南埋土ほか	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(9.8)			
68	110号住	土器No5	須恵器	甕	体～底	/タタキメ	/ヘラナデ	－	－	(22.4)			
70	111号住ほか	カマド内ほか	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	16.1	7.4	5.3	回転糸切	AⅡb	内黒、墨書「？」
71	111号住	カマド内ほか	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.0〉	〈5.6〉	4.6	糸切後ヘラケズリ	AⅡa	内黒
72	111号住	土器No1ほか	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈16.4〉	〈6.8〉	4.7	糸切後ヘラケズリ	AⅡb	内黒
73	111号住	土器No1ほか	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.6〉	6.2	4.8	回転糸切	AⅡa	内黒
74	111号住	カマド	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.2〉	〈6.0〉	5.1	糸切り後ヘラケズリ	AⅡd	内黒
75	111号住	土器No1	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.0〉	－	(4.2)		AⅡb	内黒
76	111号住	カマド内	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(2.6)		AⅡa	
77	111号住	土器No1	土師器	甕	体	/ヘラナデ	/ヘラナデ	－	－	(11.6)		BⅠb	
78	111号住	土器No1ほか	土師器	鍋(盤)	略完形	ロクロ/ヘラケズリ	ロクロ/ヘラナデ	36.6	9.0	18.3		BⅡb	
80	113号住	土器No3	土師器	坏(大型)	口～体	ヘラミガキ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈24.0〉	－	(8.0)		AⅠ	内黒、外面有段
81	113号住	煙道内	土師器	坏	口～底	ヘラミガキ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈17.6〉	－	4.9	平底風丸底	AⅠa	内黒、外面有段
82	113号住	煙道東側	土師器	坏	口～体	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.8〉	－	(3.8)		AⅠ	内黒、外面有段、輪積み痕
83	113号住	煙道内	土師器	甕	体～底	/ハケメ・指の圧痕	/ハケメ	－	＜8.1〉	(7.2)		BⅠ	
84	113号住	土器No1	土師器	鉢	口～底	ヨコナデ/ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ/ハケメ	15.7	7.0	11.4		BⅠb	小型甕？
85	113号住	煙道内	土師器	甕	口～底	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ハケメ	〈17.6〉	8.6	27.2		BⅠb	輪積み痕
86	113号住	土器No1	土師器	甕	底	/ハケメ・ヘラケズリ	/ヘラナデ・ハケメ	－	6.3	(6.4)		BⅠ	
87	113号住	土器No1	土師器	甕(球胴)	体～底	/ハケメ	/ヘラナデ・ハケメ	－	〈8.6〉	(5.1)		BⅠ	
89	114号住		土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.1〉	7.0	4.9	回転ヘラ切り？	AⅡa	内黒
90	114号住		土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.0	5.6	5.1	ヘラの再調整	AⅡb	内黒
91	114号住		土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.4〉	6.0	4.4	ヘラの再調整	AⅡa	内黒
92	114号住		土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.1〉	〈6.0〉	4.8	ヘラの再調整	AⅡc	内黒、内面摩滅
93	114号住		土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈11.4〉	－	(3.2)		AⅡc	内黒
94	114号住		土師器	坏(皿状)	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.6〉	－	(2.1)		AⅡc	内黒
95	114号住		須恵器	大甕	口縁	ロクロ・ヘラナデ/	ロクロ/	－	－	(7.6)			
96	101号住状		土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(4.2)		AⅡc	内黒
97	101号住状		土師器	坏	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(2.9)		AⅡc	赤焼き
98	101号住状		土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.3)		AⅡb	赤焼き
99	101号住状		土師器	坏	口～底	ヨコナデ/ヘラケズリ？	ヨコナデ/ヨコナデ？	－	－	(3.3)	ヘラケズリ痕？	AⅠ	外面有段
100	102号住状	土器No5	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈16.2〉	－	(5.3)		AⅡb	内黒
101	102号住状南西	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	5.4	(4.3)	ヘラの再調整	AⅡc	内黒
102	102号住状北東	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	〈7.6〉	(1.8)	再調整	AⅡ	内黒
103	102号住状	土器No7	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	5.2	(2.8)	再調整	AⅡ	内黒
104	102号住状	土器No1	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈7.6〉	(3.2)	ヘラの再調整	AⅡ	内黒
105	102号住状	西ベルト埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	6.0	(2.3)	回転糸切	AⅡ	非内黒
106	102号住状	土器No3	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	6.0	(3.3)	回転糸切	AⅡ	非内黒、底部に付着物あり
107	102号住状	土器No5	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	6.7	(4.3)	回転糸切	AⅡ	非内黒
108	102号住状	土器No8	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(2.8)		AⅡc	非内黒
109	102号住状	土器No3	土師器	坏	高台部	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	〈7.9〉	(2.2)	高台付	AⅡ	内黒
110	102号住状	土器No1	土師器	甕	体～底	/ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈13.0〉	(3.0)		BⅠ	内黒
111	102号住状		土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈21.2〉	－	(8.5)		BⅡb	
112	102号住状	埋土下位ほか	土師器	甕	口～体	ヨコナデ/ヘラナデ	ヨコナデ/ヘラナデ	〈21.0〉	－	(11.8)		BⅠb	輪積痕
113	102号住状	土器No4	土師器	甕	口縁	ヨコナデ・ヘラケズリ/	ヨコナデ・ヘラナデ/	－	－	(5.1)		BⅠ	

No	遺構名	出土地点	種類	器種	部位	外面調整（口縁／体部）	内面調整（口縁／体部）	口径	底径	器高	底面	分類	備考
114	102号住状		土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈18.4〉	－	(5.8)		BⅡb	
115	102号住状		土師器	甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(2.2)		BⅡc	
116	102号住状	No7	須恵器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	6.7	(3.9)	回転糸切		
117	102号住状	No7	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.2)			
118	102号住状	南西	須恵器	坏	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(1.8)			
119	102号住状	No6	須恵器	坏	体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(1.7)			墨書「？」
120	102号住状	No7	須恵器	甕	体～底	/ヘラナデ・ヘラケズリ	/ヘラナデ	－	〈11.0〉	(4.0)			
121	102号住状	No1	須恵器	甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(3.0)			
122	102号住状	No2	須恵器	甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(1.8)			
123	102号住状	北側埋土	須恵器	甕	底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈9.0〉	(1.0)			
124	102号住状	西ベルト	須恵器	壺	肩	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(3.8)			
125	102号住状		須恵器	甕	肩	/タタキメ	/	－	－	(9.3)			
129	103号住状	土器No1ほか	土師器	坏	略完形	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.4	6.0	5.5	回転糸切	AⅡc	内黒、底部摩滅
130	103号住状	F区埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.8	5.4	4.2	糸切後ヘラケズリ	AⅡb	内黒
131	103号住状	Pit3埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈12.9〉	〈5.4〉	5.0	ヘラの再調整	AⅡb	内黒、内面摩滅
132	103号住状	土器No9	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈18.6〉	－	(6.0)		AⅡb	内黒
133	103号住状	D･E埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	〈6.2〉	(2.7)	回転糸切	AⅡd	内黒
134	103号住状	Pit2埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	5.8	(1.9)	ヘラの再調整	AⅡ	内黒
135	103号住状	A埋土	土師器	坏	口～底	ヨコナデ/ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.2〉	〈8.0〉	(3.0)		AⅠb	内黒、輪積痕
136	103号住状	土器No2	土師器	坏	体	/ヨコナデ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	－	(3.6)		AⅠ	内黒、輪積痕
137	103号住状	埋土	土師器	甕	体～底	/ヘラケズリ	/摩滅のため不明	－	〈9.4〉	(3.1)	刻線あり	BⅠ	輪積み
138	103号住状	D埋土ほか	土師器	甕	口～体	ロクロ/ヘラケズリ	ロクロ/ロクロ	－	－	(18.0)		BⅡb	
139	103号住状	D埋土ほか	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈15.2〉	－	(6.5)		BⅡb	
140	103号住状	E埋土	土師器	甕	略完形	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	10.7	7.0	5.0	回転糸切	BⅡa	
141	103号住状	Pit3内	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.6)			
142	103号住状	埋土	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(4.6)			
143	103号住状	Pit3内	須恵器	長頸壺	口～頸	ロクロ/	ロクロ/	12.4	－	(9.2)			
144	103号住状	ベルト埋土	須恵器	大甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	〈39.6〉	－	(8.3)			
145	103号住状	Pit3・埋土ほか	須恵器	壺	肩～体	ロクロ・ヘラケズリ/	ヘラナデ/	－	－	(16.5)			
146	103号住状	Pit3・埋土ほか	須恵器	壺	頸～体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(9.6)			
147	103号住状	貼床埋土	須恵器	壺	肩～体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(7.2)			
148	103号住状	ベルト埋土	須恵器	長頸壺	頸	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(5.5)			
149	103号住状	埋土	須恵器	壺	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(1.8)			
150	103号住状	Pit3・埋土ほか	須恵器	大甕	体	/タタキメ		－	－	(11.3)			
151	103号住状	土器No6ほか	須恵器	大甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(11.5)			
152	103号住状	貼床埋土	須恵器	大甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(7.0)			
153	103号住状	埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(9.8)			
154	103号住状	ベルト埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(5.5)			
156	104・113号土坑		土師器	甕	体～底	/ロクロ・ハケメ	/ロクロ	－	7.0	(9.5)	回転糸切後ヘラの再調整	BⅡ	
157	105号土坑	埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈23.8〉	－	(3.5)		BⅡb	
158	106号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	15.4	7.0	6.2	ヘラケズリ	AⅡb	内黒
159	106号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.0〉	6.8	4.8	回転糸切	AⅡb	内黒
160	106号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	13.8	6.4	5.0	ヘラの再調整	AⅡa	内黒
161	106号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.4〉	〈7.0〉	4.9	ヘラの再調整	AⅡa	内黒
162	106号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.0〉	〈5.6〉	4.8	再調整	AⅡb	内黒
163	106・107号土坑	いずれも埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈22.2〉	－	(8.0)		BⅡc	
164	106号土坑	埋土	須恵器	坏	略完形	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.3	7.6	4.2	回転糸切		
165	108号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラナデ	ロクロ/ロクロ	〈14.0〉	〈5.6〉	5.2		AⅡc	赤焼きか須恵器
166	108号土坑	埋土	土師器	甕	口～底	ロクロ/ロクロ・タタキメ	ロクロ/ロクロ	〈22.8〉	－	(5.5)		BⅡb	
167	108号土坑	埋土	須恵器	甕	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ロクロ・ヘラナデ	－	〈10.0〉	(5.6)			輪積み痕
168	116号土坑	埋土	須恵器	大甕	体	/タタキメ		－	－	(8.3)			
169	116号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.8〉	〈5.8〉	4.4	再調整	AⅡb	内黒
170	118号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈14.0〉	－	(4.0)		AⅡb	赤焼き
171	118号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈14.2〉	－	(3.1)		AⅡc	赤焼き
172	118・122号土坑	埋土	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈15.0〉	－	(3.5)			
173	118号土坑	埋土	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈15.6〉	－	(6.0)			
174	119号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(4.8)		AⅡb	内黒
175	119号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈14.2〉	〈6.0〉	4.9	回転糸切後ヘラの再調整	AⅡb	赤焼き
176	119号土坑	埋土	須恵器	甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	〈20.0〉	－	(4.6)			
177	120号土坑	埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(11.3)			
178	120号土坑	埋土	須恵器	大甕	体	/タタキメ		－	－	(6.9)			
179	121号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈12.8〉	－	(3.4)		AⅡb	内黒
180	121号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.9)		AⅡb	赤焼き、墨書「？」
181	121号土坑	埋土	須恵器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈14.6〉	5.4	4.2	回転糸切		

No	遺構名	出土地点	種類	器種	部位	外面調整（口縁／体部）	内面調整（口縁／体部）	口径	底径	器高	底面	分類	備考
182	122号土坑	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(2.4)	回転糸切	AⅡ	赤焼き、墨書「？」
183	122号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.2〉	－	(3.9)		AⅡb	内黒
184	122号土坑	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈6.2〉	(2.8)	ヘラの再調整	AⅡ	内黒
185	122号土坑	埋土	須恵器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈15.0〉	6.6	4.3	回転糸切		
186	122号土坑	埋土	須恵器	甕	体	/ナデ	/ヘラナデ	－	－	(13.1)			
188	102号住状	Pit2埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	〈6.6〉	(3.1)	回転糸切	AⅡ	内黒とび
189	102号住状	Pit2埋土	土師器	甕	口～体	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	〈21.0〉	－	(10.2)		BⅠb	
190	102号住状	Pit2埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈11.6〉	－	(5.7)		BⅡa	
191	102号住状	Pit2埋土	須恵器	大甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(7.5)			
192	125号土坑	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	5.5	(2.2)	回転糸切	AⅡ	赤焼き
193	125号土坑	埋土	土師器	甕	底部	/ロクロ	/ロクロ	－	〈8.0〉	(4.3)	回転糸切	BⅡ	
194	127号土坑	埋土	須恵器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈5.0〉	(3.1)	回転糸切		
195	127号土坑	埋土	須恵器	甕	体～底	/タタキメ→ヘラナデ	/ハケメ・ヘラナデ	－	〈11.4〉	(6.7)			
196	130号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.2〉	－	(3.4)		AⅡa	内黒
197	131号土坑	埋土	土師器	甕	口～体	ヨコナデ/ハケメ	ヨコナデ/ヘラナデ	〈18.4〉	－	(23.6)		BⅠb	輪積み痕
198	133号土坑	埋土	土師器	甕	口～体	ヨコナデ/ヘラケズリ	ヨコナデ/ヘラナデ	〈24.0〉	－	(10.0)		BⅠb	輪積み痕
199	136号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.6〉	〈5.2〉	5.1	回転糸切	AⅡb	内黒
200	136号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.6〉	－	(3.6)		AⅡc	内黒
201	136号土坑	埋土	土師器	坏	底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	〈5.6〉	(0.9)	回転糸切	AⅡ	内黒、墨書「？」
202	136号土坑	埋土	土師器	坏	底	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	－	(1.9)	回転糸切	AⅡ	内黒、墨書「？」
203	136号土坑	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈13.8〉	6.0	4.8	回転糸切	AⅡa	赤焼き
204	136号土坑	埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(7.2)		BⅡb	
205	136号土坑	埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.9)		BⅡc	
206	136号土坑	埋土	須恵器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.7	5.6	4.8	回転糸切		
207	136号土坑	埋土	須恵器	壺	肩～体	/ロクロ→ヘラナデ	/ヘラナデ	－	－	(7.2)			
208	137号土坑	埋土	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈15.4〉	－	(3.6)			
209	138号土坑	埋土	須恵器	長頸壺	頸	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(6.1)			
210	139号土坑	埋土	土師器	坏	口縁	ロクロ/	ヘラミガキ/	－	－	(3.1)		AⅡa	内黒
211	140号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(3.9)		AⅡb	内黒
212	141号土坑	埋土	須恵器	長頸壺	頸	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(3.5)			小型長頸壺
213	144号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.0〉	－	(4.7)		AⅡb	内黒
214	144号土坑	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈14.0〉	－	(4.0)		AⅡa	内黒
215	144号土坑	埋土	土師器	坏	体～底	/ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	5.5	(2.0)	ヘラの再調整	AⅡ	内黒
216	144号土坑	埋土	須恵器	大甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	〈56.3〉	－	(7.4)			
217	144号土坑	埋土	須恵器	長頸壺	口～肩	ロクロ/	ロクロ/	11.8	－	(12.1)			繋ぎ目突帯状
218	144号土坑	埋土	須恵器	大甕	肩	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(7.8)			
219	101号炉跡	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.6〉	－	(4.5)		AⅡa	内黒
220	101号炉跡	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈6.1〉	(2.4)	回転糸切ヘラの再調整	AⅡ	内黒
221	101号炉跡	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈6.0〉	(1.3)	回転ヘラ切りか再調整	AⅡ	内黒
222	101号炉跡	埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(2.7)		BⅡb	
223	101号炉跡	埋土	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.2)			
224	101号炉跡	埋土	須恵器	坏	体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(3.4)			
225	101号炉跡	埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(4.4)			
226	101号炉跡	埋土	土製品	粘土塊				長：4.8	幅：3.5	厚：2.3		ー	
227	102号炉跡	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈13.5〉	－	(2.3)		AⅡc	赤焼き
228	102号炉跡	埋土	土師器	甕	体	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	－	(6.0)		BⅡ	内黒とび、摩耗
229	102号炉跡	埋土	須恵器	壺	肩	/タタキメ・ロクロ	/ロクロ	－	－	(6.8)			
230	102号炉跡	埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/ヘラナデ(カキメ)	－	－	(5.5)			
231	104号溝跡	埋土	土師器	甕	体	/ヘラケズリ	/ヘラケズリ・ハケメ	－	－	(9.6)		BⅠ	輪積み痕
237	101号住状	溝埋土	土師器	坏	底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈6.2〉	(1.4)	ヘラの再調整	AⅡ	内黒
238	101号住状	溝北側埋土	須恵器	大甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(5.8)			
239	118号溝跡	南埋土	土師器	高坏	脚部	/ヘラナデ	/ヘラナデ	－	〈6.4〉	(2.9)		AⅠc	
240	118号溝跡	南埋土	土師器	甕	体～底	/ヘラケズリ	/ハケメ	－	＜9.0〉	(4.4)		BⅠ	輪積み痕
241	118号溝跡	南側埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(4.1)			
242	120号溝跡	南埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/ヘラナデ(カキメ)	－	－	(9.8)			
243	122号溝跡	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈13.4〉	〈4.8〉	4.8	回転糸切	AⅡa	内黒
245	124号溝跡	上位	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕（円形）	－	－	(8.9)			
246	124号溝跡	埋土	須恵器	大甕	頸	/ロクロ・タタキメ	/ロクロ	－	－	(6.3)			
247	124号溝跡	埋土	須恵器	大甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(3.7)			
249	139号溝跡	埋土	須恵器	甕	口縁	ロクロ・櫛描波状文		－	－	(5.3)			
250	140号溝跡	埋土	須恵器	甕	体	/ロクロ→ヘラケズリ	/ヨコナデ	－	－	(4.5)			
256	101号焼土		土師器	甕	口縁	ロクロ/	ヘラミガキ/	－	－	(5.0)		BⅡa	内黒とび
258	P118	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈14.2〉	〈5.6〉	4.2	回転糸切り	AⅡb	赤焼き、底部に墨書「？」
259	P120	埋土	土師器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ・ヘラケズリ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	〈15.6〉	6.0	5.7	回転ヘラ切り？	AⅡa	内黒
260	P120	埋土	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕（円形）・カキメ	－	－	(12.8)			
261	P122	埋土	須恵器	坏	底	/ロクロ	/ロクロ	－	4.6	(1.1)	回転糸切		刻線あり
262	P126	埋土	土師器	坏	体～底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラミガキ	－	〈4.0〉	(1.9)	回転糸切り	AⅡ	内黒

No	遺構名	出土地点	種類	器種	部位	外面調整（口縁／体部）	内面調整（口縁／体部）	口径	底径	器高	底面	分類	備考
264	P129	埋土	須恵器	大甕	肩	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(4.6)			
265	P131	埋土	須恵器	壺	肩～体	/ロクロ・ハケメ	/ロクロ	－	－	(8.2)			
266	P131	埋土	須恵器	大甕	口縁	カキメ・櫛描波状文２条/		－	－	(8.3)			
267	P133	埋土	土師器	甕	底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈5.4〉	(3.0)	回転糸切り	BⅡ	
268	P133	埋土	須恵器	坏	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(2.8)			
269	P133	埋土	須恵器	鉢？甕？	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(3.9)			
270	P134	埋土	土師器	坏	体	/ロクロ	/ヘラミガキ	－	－	(2.6)		AⅡ	内黒
271	P134	埋土	須恵器	大甕	体	/タタキメ	/ヘラナデ(カキメ)	－	－	(4.2)			
272	P135	埋土	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(3.3)			
273	P140	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(4.3)		AⅡb	内黒
274	P142	埋土	須恵器	甕	体	/櫛描波状文		－	－	(1.7)			
275	P196	埋土	須恵器	壺	肩	/ロクロ・ヘラケズリ	/ヘラナデ	－	－	(4.7)			
276	P200	埋土	土師器	甕	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈24.4〉	－	(7.7)		BⅡc	
277	P211	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	14.6	6.0	5.7	回転糸切後ヘラケズリ	AⅡb	内黒
278	P226	埋土	土師器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ヘラミガキ/ヘラミガキ	－	－	(4.6)		AⅡb	内黒
280	P240	埋土	須恵器	壺	肩	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(5.6)			
284	確認調査区⑧	遺構外	土師器	甕	口～体	ヨコナデ・指圧痕/ヘラケズリ	ヨコナデ/ハケメ	〈12.6〉	－	(8.6)		BⅠb	
285	本調査区⑩	遺構外	須恵器	坏	口～底	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	〈13.6〉	〈5.8〉	5.0	回転糸切		
286	本調査区⑩中央	遺構外	須恵器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈6.8〉	(2.2)	回転糸切		
287	107号住付近	遺構外	須恵器	坏	体～底	/ロクロ	/ロクロ	－	4.9	(2.0)	回転糸切		
288	107号住付近	遺構外	須恵器	坏	口～体	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	－	－	(4.0)			
289	106号住付近	遺構外	須恵器	壺	体	/タタキメ・ロクロ	/ロクロ	－	－	(5.5)			
290	107号住付近	遺構外	須恵器	壺？	底	/ロクロ・ヘラケズリ	/ハケメ	－	－	(3.3)			
291	確認調査区⑧撹乱部	遺構外	須恵器	壺？	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(1.5)			
292	本調査区⑧	遺構外	須恵器	長頸壺	頸	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(4.8)			
293	掘立群南側	遺構外	須恵器	壺	底	/ロクロ	/ロクロ	－	〈7.6〉	(1.7)			
294	確認調査区⑧	遺構外Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	大甕	口唇	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(2.9)			
295	確認調査区⑧	遺構外Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(7.3)			
296	本調査区⑧	遺構外	須恵器	大甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(4.2)			
297	本調査区⑧	遺構外	須恵器	甕	体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(8.4)			
298	本調査区⑧	遺構外	須恵器	甕	口唇	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(3.4)			
299	本調査区⑧	遺構外	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕（放射状）	－	－	(9.5)			
300	本調査区⑧	遺構外	須恵器	大甕	口唇	ロクロ・ハケメ/	ロクロ・ハケメ/	－	－	(4.7)			
301	本調査区⑩南側	遺構外Ⅰ層	須恵器	甕	底	/ヘラケズリ	/ヘラケズリ・ヘラナデ	－	〈10.6〉	(4.4)			
302	本調査区⑩南側	遺構外Ⅰ層	須恵器	甕	頸	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(3.6)			
303	本調査区⑩	遺構外Ⅱ層	須恵器	甕	口縁	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(2.9)			
304	確認調査区⑧中央	遺構外Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	甕？	体	/ロクロ	/ロクロ	－	－	(5.4)			
305	104号住付近	遺構外	須恵器	甕	口～肩	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(12.1)			
306	104号住付近	遺構外	須恵器	甕	肩	/ロクロ・タタキメ	/ロクロ	－	－	(2.5)			
307	107号住付近	遺構外	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕不明瞭	－	－	(6.6)			
308	116号溝跡付近	遺構外	須恵器	甕	体	/タタキメ	/当て具痕	－	－	(5.3)			
309	104号住付近	遺構外	須恵器	鉢？	口～体	ロクロ/	ロクロ/	－	－	(3.2)			
310	確認調査区⑧	遺構外	かわらけ	小皿	口～底	一段ナデ・面取りなし		〈7.6〉	－	1.4		ー	

第５表　土製品観察表

No	遺構名	出土地点	種類	器種	計測値	備考
127	104号住	埋土	土製品	羽口	長さ：(2.60cm)　幅：(2.80cm)　厚さ：1.80cm　重さ：(8.4g)	
155	112号住	埋土	土製品	土錘	長さ：(4.20cm)　幅：(2.10cm)　重さ：(14.6g)	
279	P227	埋土	土製品	炉壁？	長さ：(8.90cm)　幅：(7.00cm)　重さ：(106.7g)	スサ入り
311	104号住付近	Ⅰ～Ⅱ層	土製品	羽口	長さ：(2.85cm)　幅：(3.60cm)　厚さ：2.00cm　重さ：(9.1g)	
312	発掘⑧撹乱		土製品	羽口	長さ：(2.70cm)　幅：(2.70cm)　厚さ：1.50cm　重さ：(2.9g)	
313	発掘⑩中央部	Ⅱ層	土製品	羽口	長さ：(2.70cm)　幅：(2.50cm)　厚さ：2.00cm　重さ：(11.3g)	
314	発掘⑩中央部	Ⅱ層	土製品	支脚？	長さ：(10.9cm)　幅：(5.70cm)　厚さ：3.50cm　重さ：(185.2g)	ヘラミガキ調整

第６表　鉄製品観察表

No	遺構名(出土地点)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
56	108号住　床面	刀子	4.40	0.7～1.0	0.30	接合せず
69	110号住　ベルト内埋土	鉄滓	7.10	7.60	3.00	碗形、重さ:200.1g
126	104号住　埋土	刀子	6.20	0.3～1.2	0.2～0.5	2分割接合
187	122号土坑	釘	9.00	0.50	0.5～0.7	2分割接合
244	122号溝跡　埋土	刀子	13.30	1.4～2.5	0.5～1.2	3分割接合、土器付着
257	101号焼土遺構	鉄滓	2.40	3.40	1.90	重さ:16.5g
263	P126(柱穴)	刀子？	3.50	0.5～0.9	0.40	

第７表　陶磁器観察表

No	遺構名(出土地点)	器種・部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
248	124号溝跡　埋土	仏具？・口～底部	〈5.40〉	3.70	(3.60)	
251	140号溝跡　埋土	片口鉢・体部	－	1.00～1.20	(5.70)	渥美産（12世紀）
252	140号溝跡　埋土	甕か壺・肩部	－	1.00～1.40	(7.80)	渥美産（12世紀）
253	140号溝跡　埋土	甕か壺・口縁部	－	0.80	(5.30)	常滑産（12世紀）
254	140号溝跡　埋土	壺・肩部	－	0.50～0.80	(4.30)	須恵器系陶器か？（12世紀）
255	140号溝跡　埋土	甕・体部	－	1.00	(7.60)	須恵器系陶器（12世紀）
281	P293　埋土	青磁碗・口～体部	〈13.40〉	0.45	(2.40)	中国産・鎬連弁文(14～15世紀)
282	P294　埋土	甕・体部	－	0.80～1.10	(7.50)	常滑産（12世紀）
283	P372　埋土	青磁瓶類・体部	－	0.60	(5.10)	中国産（15世紀か？）
315	確認調査区⑨	青磁碗・口縁部	－	0.60	(2.50)	中国産・端反り（14～15世紀）
316	本調査区⑧　Ⅰ層	鉢・体～底部	－	〈厚さ13.0〉	(6.50)	東北在地産（19世紀）
317	本調査区①　Ⅰ層	擂り鉢・体部	－	0.90	(3.40)	瀬戸産（近世）
318	本調査区⑩中央部　Ⅱ層	小瓶・体部	－	0.2～0.3	(3.40)	大堀・相馬産（江戸末～明治）
319	本調査区⑪113号溝跡東側	擂り鉢・口縁部	－	1.00	(2.90)	瀬戸産（近世）

第８表　石器・石製品観察表

No	遺構名(出土地点)	器　　種	残　存	石　　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	備　　考
79	111号住　石器No5	台石	2/3？	デイサイト(奥羽山脈・新生代新第三紀)	(24.70)	(20.40)	5.80	3460.00	
88	113号住　床面	紡錘車	完形	デイサイト(奥羽山脈・新生代新第三紀)	3.90	3.50	3.00	59.10	穿孔径0.7cm
128	104号住北東　埋土	磨石	1/2	デイサイト(奥羽山脈・新生代新第三紀)	(8.20)	(9.90)	6.80	753.80	
232	105号溝　埋土　No1	剥片		黒曜石	1.65	1.40	0.65	1.90	
233	105号溝　埋土　No2	剥片		黒曜石	1.45	2.10	0.35	0.80	
234	105号溝　埋土　No3	剥片		黒曜石	2.40	1.60	0.70	2.50	
235	105号溝　埋土　No4	剥片		黒曜石	1.40	2.20	0.50	1.70	
236	105号溝　埋土　No5	剥片		黒曜石	1.30	1.40	0.25	0.40	
320	追加分調査区	石鏃	完形	珪質頁岩(古～中生代)	2.50	1.20	0.45	0.80	有茎
321	本調査区⑧　プレハブ裏	石鏃	略完形	頁岩(奥羽山脈・新生代新第三紀)	3.00	1.00	0.40	1.00	無茎
322	本調査区⑧　124号溝跡　埋土	石篦	完形	頁岩(奥羽山脈・新生代新第三紀)	8.55	5.20	1.60	68.20	
323	124号溝跡付近	掻器	完形	頁岩(奥羽山脈・新生代新第三紀)	4.00	3.80	1.30	18.40	
324	確認調査区⑧	剥片	完形	頁岩(奥羽山脈・新生代新第三紀)	2.70	1.10	0.30	0.90	
325	確認調査区⑨電柱南側	剥片		黒曜石	2.15	1.55	2.50	2.50	
326	本調査区⑫中央　盛土中	半円状扁平石器	2/3	安山岩(奥羽山脈・新生代新第三紀)	(16.00)	7.50	4.90	938.70	
327	104号住付近　Ⅰ～Ⅱ層	砥石	1/2？	凝灰岩(奥羽山脈・新生代新第三紀)	8.90	6.40	1.60	138.40	

Ⅴ　総　　括

１　遺　　物

今次の調査で出土した遺物は、そのほとんどが奈良・平安時代の遺構に伴う土師器・須恵器で、この他に当該期の土製品や焼成粘土塊(総重量121.4g)、石器類(12,450ｇ)、金属製品と鉄滓(295.8g)、中世以降現代までの陶磁器類(880g)、ガラス製品(95g)などがみられた。土師器(土製品含む)・須恵器等の土器類の総出土量は87,024.3ｇで、うち遺構内は71,426.9ｇ(全体の82%)、遺構外は15,597.4ｇ(18%)である。

ここからは、遺物の主体である奈良・平安時代の土師器坏・鉢・甕の分類を行う。本分類では、土師器を「酸化焔焼成された土器」と定義し、ロクロ成形回転糸切り後に再調整や内面黒色処理が施されない所謂「赤焼き土器」「須恵系土器」などと呼ばれるものを含めている。なお、今回出土量の少ない須恵器は分類の対象としなかった。

Ａ群−土師器坏(酸化焔焼成されたもの)
Ⅰ類−非ロクロ成形の一群
　ａ−底部が丸底および丸底風のもの
　ｂ−底部が平底のもの
　ｃ−底部に高台が付く(高坏)のもの
Ⅱ類−ロクロ成形の一群
　ａ−体部が直線状に立ち上がり、断面形が逆台形をなすもの
　ｂ−体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は直線的か内湾気味、断面形は椀形をなすもの
　ｃ−体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反するもの
　ｄ−体部が底部最下端で屈曲し、口縁部へと内湾しながら立ち上がるもの
Ｂ群−土師器鉢・甕類(酸化焔焼成されたもの)
Ⅰ類−非ロクロ成形の一群
　ａ−口縁部が外反し、体部はヘラミガキ調整主体のもの
　ｂ−口縁部が外反し、体部はヘラナデ・ハケメ・ヘラケズリ調整のもの
Ⅱ類−ロクロ成形の一群
　ａ−口縁部が外反するもの
　ｂ−口縁部が外反し、口唇端部が上方に引き出されるもの
　ｃ−口縁部が外反し、口唇端部が上下方向に肥厚するもの

次に、坏・甕類が一定量以上の出土をみた遺構の土器組成とその年代観についてである。遺物組成からみて最も旧く位置づけられる住居は、ＡⅠ・ＢⅠからなる106･113号住居跡で、それにＡⅡａなどのロクロ成形のものが加わる107号住居がそれらに次ぐものであろう。本書では前者を第Ⅰ期(８世紀中頃から後半)、後者を第Ⅱ期(８世紀末から９世紀初め)と設定した。これ以降については、ＢⅡなどロクロ成形の甕が増加する第Ⅲ期(９世紀前半から後半)の105･108住居跡、ＡⅡｃのような口縁部外反の坏の割合が増える第Ⅳ期(９世紀後半から10世紀初め)の110･111号住居跡、102号住居状遺構

が続くものと考えられる。

ここからは特徴のある遺物について記載する。墨書土器は８点出土したが、どれひとつ判読できる文字は見当たらない。土師器坏の体部(70・180)や底部(182・201・202・258)のほか、甕の体部下端(61)や須恵器の坏(119)に書かれるものもあった。全体の出土量に対しては極めて少ない印象である。これまで触れてこなかった須恵器であるが、坏・甕類や長頸壺(143・209・212・217)などの器種があり、中には「流水波状文」を有する甕の破片(266・274)も２点ほど見られた。本書第Ⅱ期以降、竪穴住居、土坑、掘立柱建物の柱穴などから出土しているが、産地については不明である。次に、本書で土師器鍋(78)として掲載した111号住居出土の遺物について。ロクロ成形された小さい底部から、体部が大きく左右に広がって立ち上がるもので、花巻市東和町の羽黒田遺跡出土のものなどに類例が求められる。羽黒田例のほうが底径は大きめだが、器形や器面調整に関してはほぼ同じと言って良い。時期的には、９世紀後半から10世紀にかけての遺物とされている。

今回の調査では、平安時代後期12世紀のかわらけや常滑・渥美産陶器、須恵器系陶器なども溝跡から出土しており、境界や区画割などの用途が想定される平泉関連の遺構がさらに広がる可能性が高まった。この他には、西側調査区の柱穴群から出土した14～15世紀代の中国産青磁片なども見られた。

２　遺　　構

ここでは、主に東側調査区の竪穴住居・住居状遺構、掘立柱建物群についてまとめ、土坑類は特徴のあるものについて触れることとする。

検出された竪穴住居で最大規模のものは、一辺が6.5mと推定される103号住居(103号住居状遺構も同程度)で、最小は３m弱の113号住居である。全体を調査できた住居が少ないが、他は概ね4.0～4.5m程度でまとまっている。カマドは、第Ⅰ期奈良時代では北西壁のみに、第Ⅱ期以降平安時代には北西・北東・東壁に設置される。一般的に平安時代のカマド設置壁は後者に示した順に移行する傾向があるようだが、作屋敷遺跡ではサンプル数が不足しており不明といわざるを得ない。また、107号住居などのように深さが50cm以上の立派な主柱穴が複数確認出来るものがある一方、106号のように全く検出されない例もある。付属施設としては、108号住居などのように貯蔵穴と思われる小土坑を有するものがあり、そこから鉄滓が出土する住居(住居状遺構)もあることから、屋内で小鍛冶な作業を行っていた可能性も想定される。最後に101号住居状遺構についてであるが、大形の方形土坑のまわりを溝が巡ることから、一体のものとして報告した。偶然かもしれない。遺構の南側は調査区域外にあるため、ほぼ半分の精査しか出来ていないこともあり、用途等については言及できない。

次に、東側調査区中央部で確認された掘立柱建物群についてであるが、第73図に建物毎に色分けした図を掲載した。これらの所属年代は、最も旧いもので平安時代９世紀前半としたが、それ以降どのあたりまでの年代幅があるのかは、わずかな出土遺物だけでは判断できない。そこで、柱穴間の重複関係と平面形式からみた建物群の新旧関係について見てみる。

105号掘立柱建物(P120・122・129・136・138の５個使用)

　(105・106号は併設？)

106号掘立柱建物(P118・131・140・193の４個使用)

↓

104号掘立柱建物(P115・126・134の３個使用)

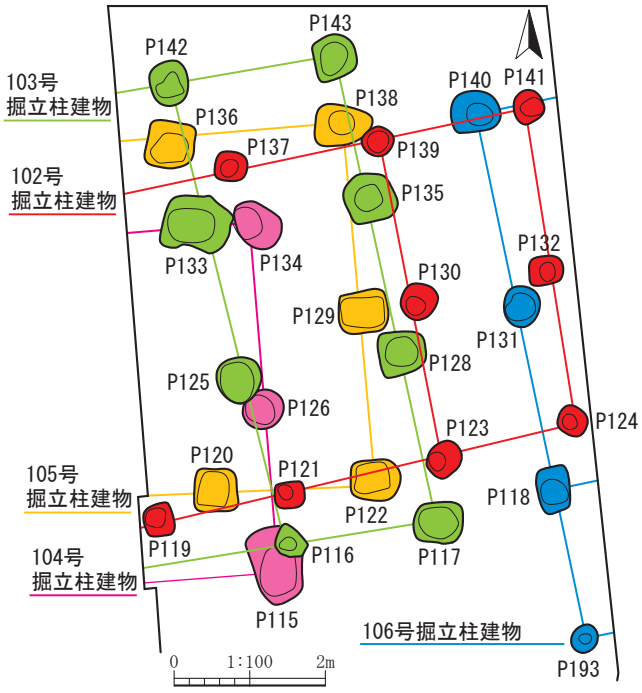
↓

103号掘立柱建物(P116・117・125・128・133・135・142・143の８個使用)

↓

102号掘立柱建物(P119・121・123・124・130・132・137・139・141の９個使用)

柱穴間の切り合いから見るとこの順に新旧の並びとなるが、105・106号掘立柱建物は重複関係になく、調査当初から両者は併設していた可能性もあると推測してきた遺構である。106号掘立柱建物は南側に庇が付く建物であり、併設していたとすればこちらのほうがより大きな建物ということが出来よう。出土遺物からは、ここで検出したいずれの掘立柱建物も平安時代を下ることはないものと考えられる。



第73図　102～106号掘立柱建物全体図

最後に土坑であるが、ある程度用途が想定できそうな数種類について簡単にまとめる。まずは、北上川中流域などで検出例が多い焼成遺構について。その形状や内部の壁が赤変している状況から、それに該当するものは、２基の土坑が連結する104号土坑、方形をなす117・127号土坑などが挙げられよう。土師器の大量出土など、土器焼成をにおわせるようなものは確認されなかったが、これに関連して土器製作用の粘土を採取したと思われるものに125号土坑がある。この他、須恵器の長頸壺が出土した長方形の、いかにも墓的な様相を見せる144号土坑、全体は把握できないものの、大形掘立柱建物の柱穴となりそうな143号土坑なども見つかっている。

また、土坑とは別に扱った炉跡と報告したものが２基あるが、これらは人為的に埋め戻されたという事実と、並列する２基がセットで使われたであろうという予測がたてられる他は内容が不明である。何らかの生産施設としておきたい。

本遺跡の前回調査では、県内でも例が少ない猿投産と東濃産の緑釉陶器(いずれも稜碗)が出土し、今回は９世紀前半以降の大形掘立柱建物群が検出されるに至った。また、あわせて古い方は奈良時代、新しい方は12世紀、その後15世紀前後の遺構・遺物が確認されたことから、この周辺が胆沢地区の拠点的集落として存続した年代を前後に広げることも明らかとなった。これまで２カ年にわたる調査では、面積約24万㎡を数える作屋敷遺跡の様相が一部判明したに過ぎないが、その内容は遺構・遺物の面から注目すべきものがあり、今後予定される周辺遺跡の調査とその成果を踏まえながら、遺跡の内容を再検討していく必要が出てくるものと思われる。

付編　自然化学分析結果　「岩手県奥州市作屋敷遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定」

明治大学文化財研究施設

表３　北海道・東北地方における黒曜石原産地の区分

	地区 (area)	系 (series)	産出地 (point)	産出量
a) 北海道地方	名寄地区	名寄系	智恵文川,忠烈布川,朝日川,下川橋	△
	白滝地区	赤石山系	赤石山,八号沢,球顆の沢,幌加沢,幌加蜂の巣沢,幌加湧別川,湧別川	◎
		十勝石沢系	十勝石沢の露頭,十勝石沢川,白戸の沢,あじさいの滝,IK露頭,幌加蜂の巣沢,幌加湧別川 (野宿の沢) ,湧別川	◎
	社名淵地区	社名淵系	サナブチ川,湧別川	△
	生田原地区	生田原	仁田布川,背谷牛山南東麓	○
	置戸地区	置戸山系	置戸山,訓子府川,墓地の沢川,常呂川	○
		所山系	所山,オンネアンズ川,墓地の沢川,常呂川	○
	ケショマップ地区	ケショマップ系	ケショマップ川,七ノ沢 (武利川)	△
	旭川地区	旭川系	高砂台 (雨粉台) ,近文台,	−
	滝川地区	滝川系	江部乙,秩父別,大和,美葉牛	−
	十勝地区	上士幌系	十一の沢,タウシュベツ川,芽登川,旭ケ丘,居辺川,音更川	○
		美蔓系	十勝川,鎮練川,佐幌川	△
	赤井川地区	赤井川系	土木川	○
	豊浦地区	豊浦系	豊泉	△
b) 東北地方	小泊地区	小泊系	小泊中学校,折腰内	−
	西青森地区	西青森系	鷹森山,天田内川,新城川	−
	岩木山地区	岩木山系	出来島,鳴沢川 (建石町) ,中村川,鶴ケ坂	△
	深浦地区	深浦系	六角沢,岡崎浜	△
	男鹿地区	男鹿系	金ヶ崎,脇本	○
	北上地区	北上系	雫石 (小赤沢) ,折居,花泉	−
	月山地区	月山系	田代沢・大越沢,長防山,上野新田 (小野木山)	○
	湯の倉地区	湯の倉系	湯の倉	−
	色麻地区	色麻系	東原	△
	秋保地区	土蔵系	土蔵,水上南	−
		馬場町北系	馬場町北	○

産出量 : ◎多,○有,△少, −極少

（１～７並びに引用・参考文献は省略）

８．石器の原産地推定結果

今回測定したのは，岩手県奥州市作屋敷遺跡(奈良・平安時代)から出土した黒曜石製遺物である。測定した遺物は6点であり，原産地が判別できた遺物は５点であった。

原産地推定の結果は，北上地区北上系Ａが５点であった。

９．おわりに

黒曜石製遺物の原産地推定は、明治大学文化財研究施設に設置されている「黒曜石原産地推定システム」で行ったものである。なお、この報告書を参考に論文を作成する場合は、原産地推定の結果を遺物の出土状況からも検討していただきたい。

註：本遺跡105号溝跡出土の黒曜石製遺物は、明治大学文化財研究施設に原産地の分析を依頼し、上記の報告を頂戴したが、紙幅の関係ですべてを掲載することが出来なかった。ここにお詫び申し上げます。

参考・引用文献

伊藤博幸　(1997)　「律令期村落の基礎構造−胆沢城周辺の平安期集落−」『岩手史学研究』80号　岩手史学会

伊藤博幸　(2007)　「胆沢地方の古代掘立柱建物群とその評価」『岩手考古学』第19号　岩手考古学会

小向裕明ほか（1992）『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』 遠野市埋蔵文化財調査報告書第５集　岩手県遠野市教育委員会

昆野　靖ほか　(1990)　『松川遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第143集　（財）岩埋文

佐藤良和ほか　(2006)　『林前Ⅱ遺跡・寺ノ西遺跡』 水沢市埋蔵文化財調査センター

高木　晃ほか　(2002)　『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第380集　（財）岩埋文

高橋千晶・福島正和・柴田知二・長谷川真　(2009)　「8　古代」『岩手考古学』第20号　岩手考古学会

高橋千晶　(2004)　「胆沢城と蝦夷社会」『古代蝦夷と律令国家』 奥羽史研究叢書7　蝦夷研究会編　高志書院

千葉周秋ほか　(1993)　『妻根遺跡』 金ヶ崎町教育委員会

中村絵美ほか　(2010)　『中嶋遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第547集　（財）岩埋文

西澤正晴　(2004)　『中半入遺跡第２次発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第443集　（財）岩埋文

西澤正晴ほか　(2005)　『西川目・堰向遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第464集　（財）岩埋文

西野　修　(2008)　「岩手の三城柵の歴史的背景」『志波城・徳丹城跡−古代陸奥国北端の二城柵−』 同成社

福島正和・高橋静歩　(2010)「平安時代の土師器鉢に関する研究−岩手県内出土資料を中心に−」『紀要　ＸＸⅨ』(財)岩埋文

福島正和　(2011)　「平安時代の土師器有高台供膳具に関する若干の考察」『岩手考古学』第22号　岩手考古学会

星　雅之(2010)　『尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第569集　（財）岩埋文

村上　拓ほか　(2010)　『羽黒田遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第548集　（財）岩埋文

村田　晃一　(1995)　「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号　福島考古学会

村田　淳ほか　(2010)　『金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩文埋調査報告書第553集　（財）岩埋文

写　真　図　版

遺跡遠景（E→）

調査区全景（直上→）

写真図版１　航空写真

発掘⑧・確認⑧調査区調査前（Ｓ→）

同地点掘立柱建物群の検出状況（Ｓ→）

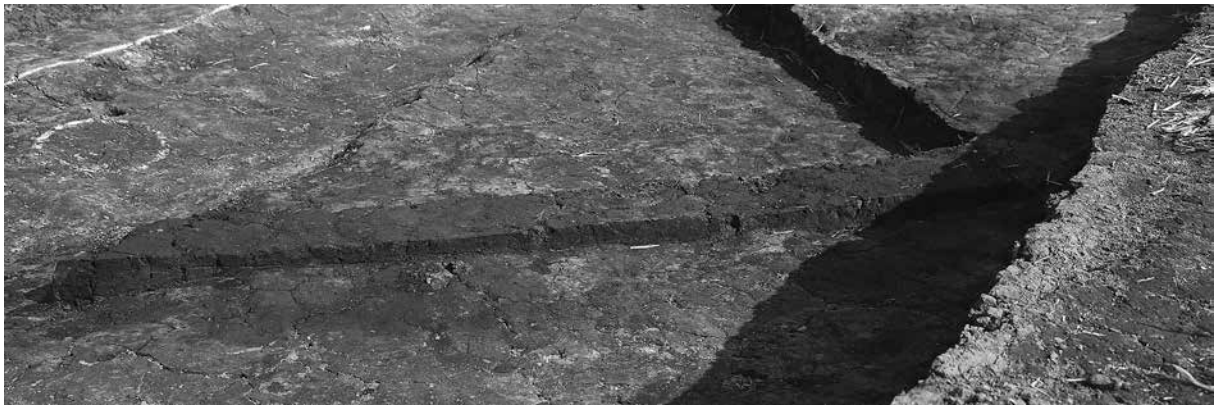
写真図版２　調査前風景と掘立柱建物群

101号住居跡　全景（S→）

102号住居跡　全景(NE →)

写真図版３　101･102号住居跡

103号住居跡　全景(SE →)



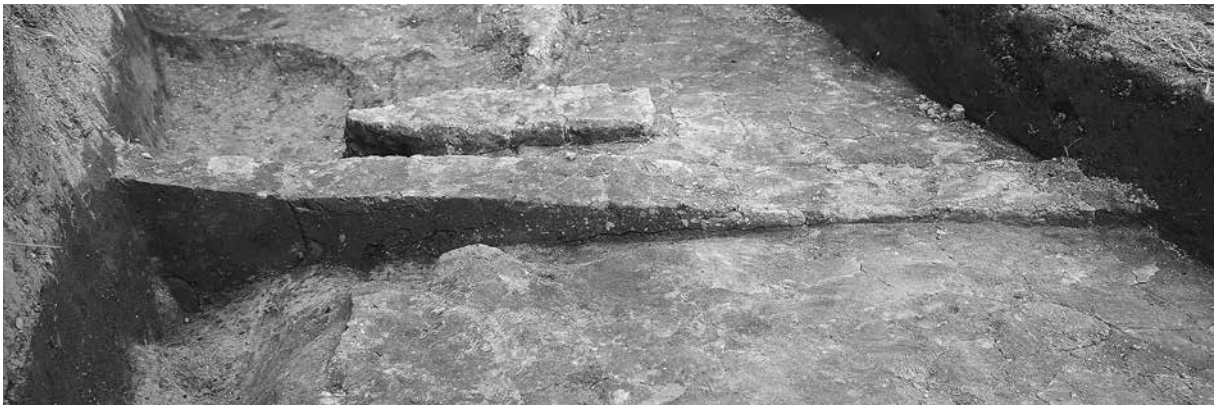
103号住居跡　埋土(NW →)

103号住居跡煙道・煙出埋土(SW →)

103号住居跡　柱穴埋土(SW →)

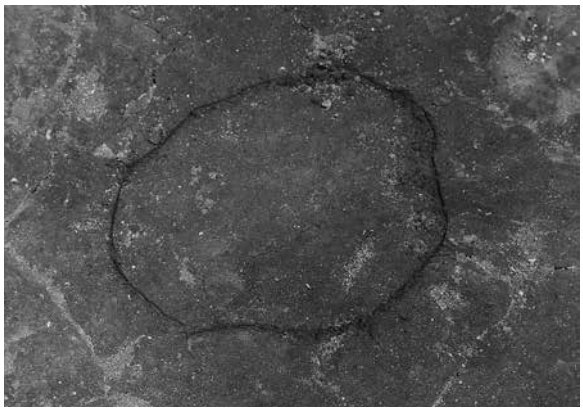
写真図版４　103号住居跡

105号住居跡　全景(SW →)



105号住居跡　埋土(NW →)

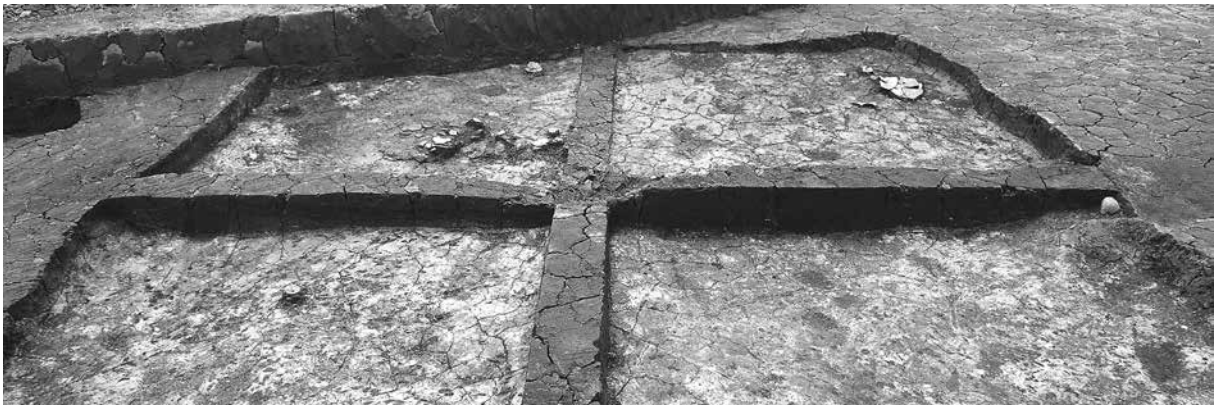
105号住居跡　貼床除去後(Ｎ→)



105号住居跡　カマド燃焼部(Ｓ→)

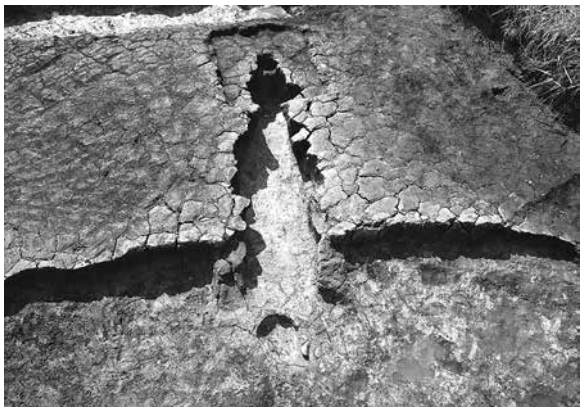
写真図版５　105号住居跡

106号住居跡　全景(SE →)



106号住居跡　埋土(W→)

106号住居跡カマド横断面　（E→）



106号住居跡カマド全景(SE →)

写真図版６　106号住居跡

107号住居跡　全景(SE →)

107号住居跡　埋土(SE →)

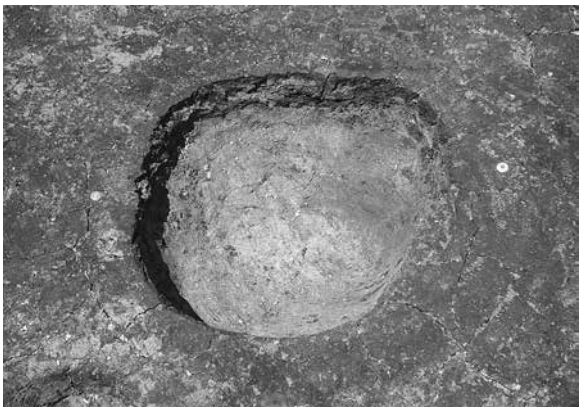
107号住居跡カマド縦断面(S →)

107号住居跡カマド全景(SE →)

写真図版７　107号住居跡

108号住居跡　全景（E→）

108号住居跡　埋土（W→）

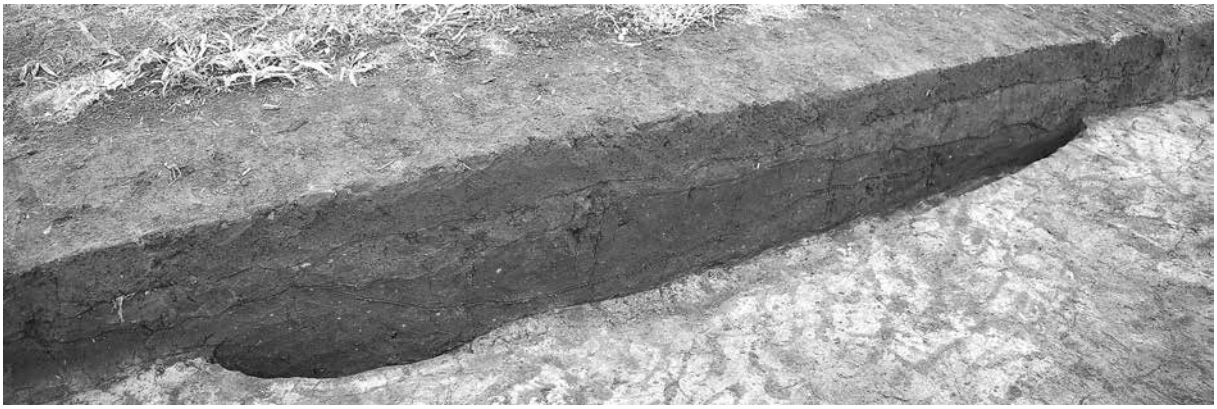


108号住居跡　Pit1全景（E→）

108号住居跡　貼床除去後（S→）

写真図版８　108号住居跡

109号住居跡　全景（N→）



109号住居跡　埋土（W→）

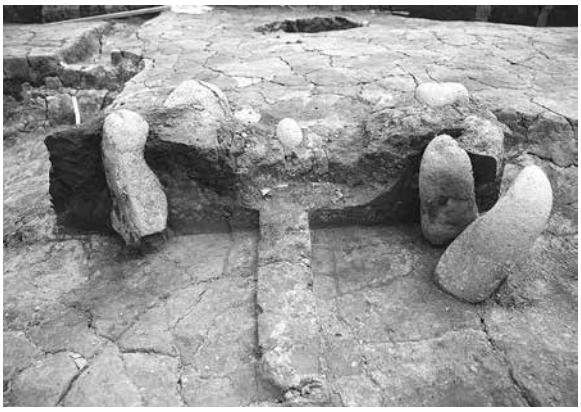
発掘⑪・確認⑧調査区作業風景（W→）

発掘⑩調査区作業風景（N→）

写真図版９　109号住居跡、作業風景

110号住居跡　全景(NW →)

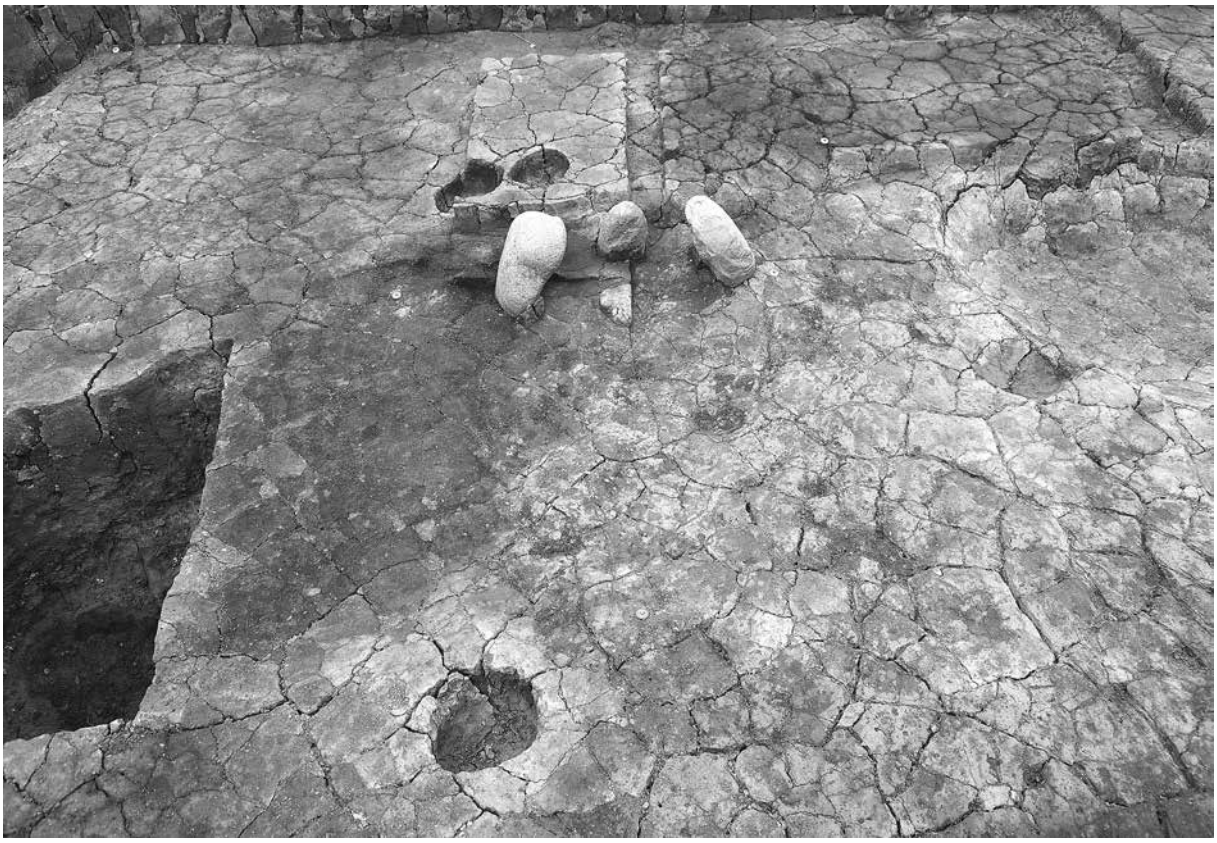
110号住居跡　埋土(E→)



110号住居跡　カマド横断面(W→)

110号住居跡　カマド全景(W→)

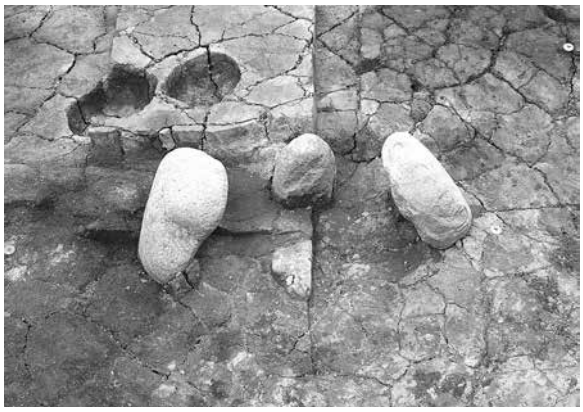
写真図版10　110号住居跡



111号住居跡　全景（W→）

111号住居跡　埋土（S→）

111号住居跡　カマド横断面（W→）



111号住居跡　カマド全景（W→）

写真図版11　111号住居跡

113号住居跡　全景（S→）

113号住居跡　埋土（N→）

113号住居跡　遺物出土状況(NW →)

113号住居跡　カマド全景(SW →)

写真図版12　113号住居跡

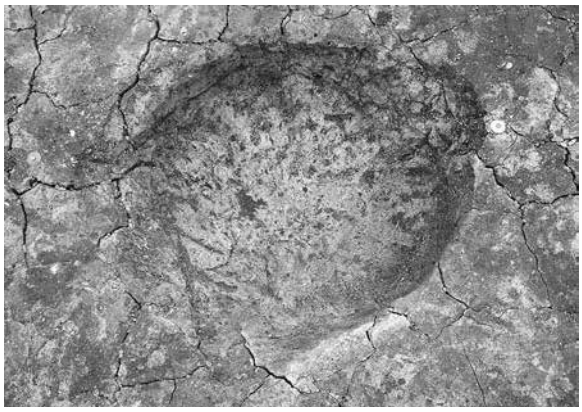
114号住居跡　全景(SE →)

101号住居状遺構　全景（S→）

写真図版13　114号住居跡、101号住居状遺構

102号住居状遺構　全景（Ｓ→）

102号住居状遺構　埋土（Ｓ→）



102号住居状遺構　Pit １全景(NE →)

102号住居状遺構　貼床除去後断面（Ｓ→）

写真図版14　102号住居状遺構

103号住居状遺構　全景（Ｎ→）

103号住居状遺構　埋土(NE →)

103号住居状遺構　遺物出土状況（Ｓ→）

103号住居状遺構　貼床除去後（Ｎ→）

写真図版15　103号住居状遺構

102～106号掘立柱建物　全景（N→）

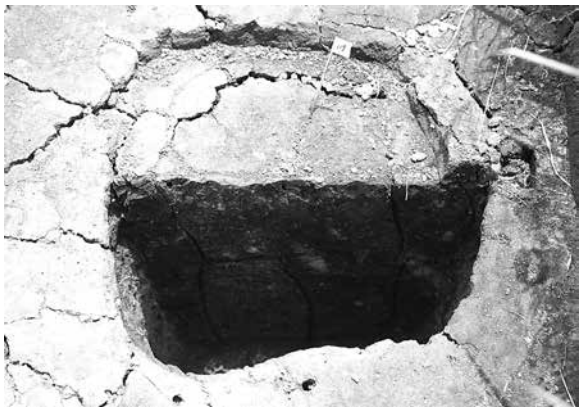
101号掘立柱建物　全景（N→）

102～106号掘立柱建物　検出状況（NE →）

P115･116　埋土

P118　埋土

写真図版16　掘立柱建物、柱穴埋土（１）



P119　埋土

P120　埋土

P122　埋土

P128　埋土

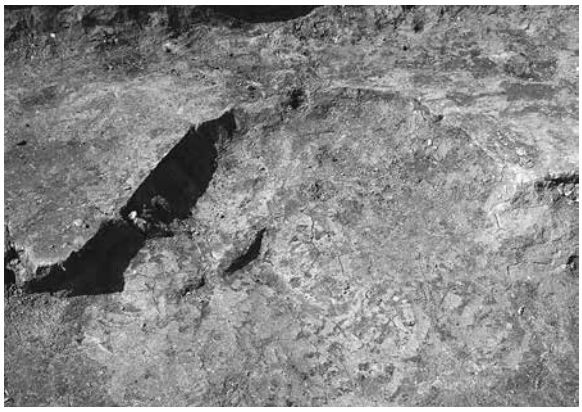
P129　埋土

P140　埋土

P167　埋土

P182　埋土

写真図版17　柱穴埋土（２）



101号土坑　全景（S→）

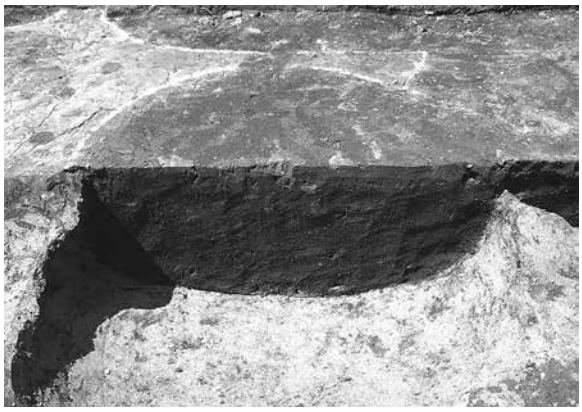
102号土坑　全景（S→）

101号土坑　埋土（S→）

102号土坑　埋土（S→）

103号土坑　全景（S→）

104号土坑　全景（S→）



103号土坑　埋土（S→）

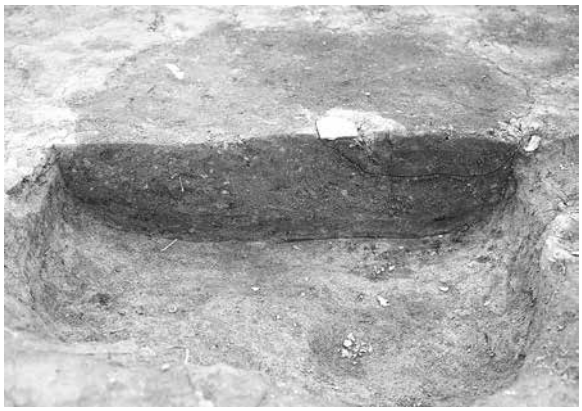
104号土坑　埋土（S→）

写真図版18　101～104号土坑

105号土坑　全景（N→）

106号土坑　全景（S→）

105号土坑　埋土（N→）



106号土坑　埋土（E→）

107号土坑　全景（S→）

108号土坑　全景（E→）

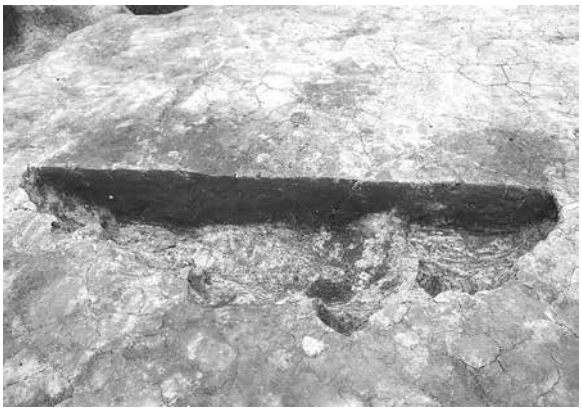
107号土坑　埋土（E→）

108号土坑　埋土（S→）

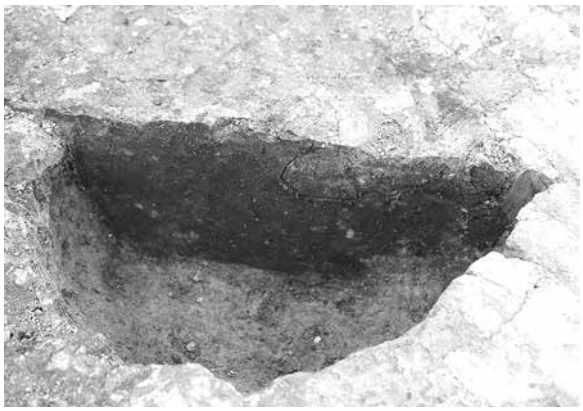
写真図版19　105～108号土坑

109号土坑　全景（S→）

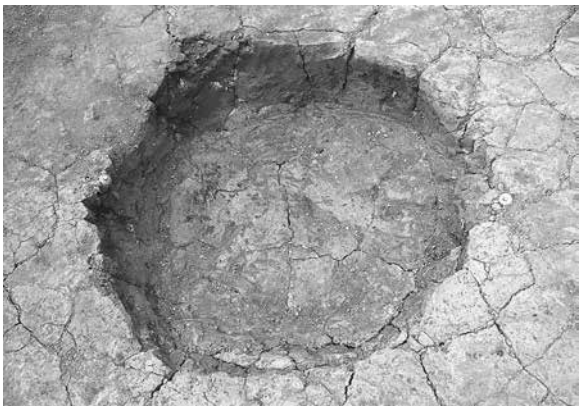
111号土坑　全景（S→）



109・110号土坑　埋土（S→）

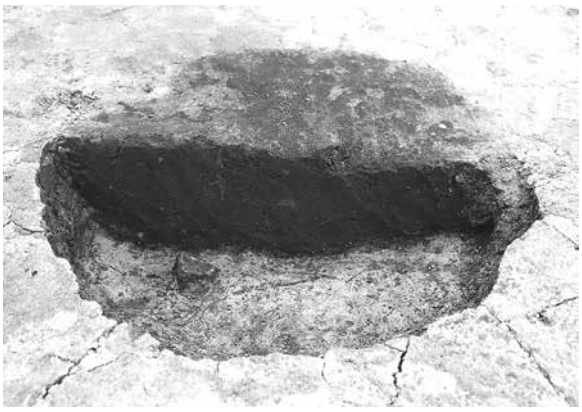


111号土坑　埋土（S→）



112号土坑　全景（S→）

113号土坑　全景（S→）



112号土坑　埋土（S→）

113号土坑　埋土（W→）

写真図版20　109～113号土坑

115号土坑　全景（E→）

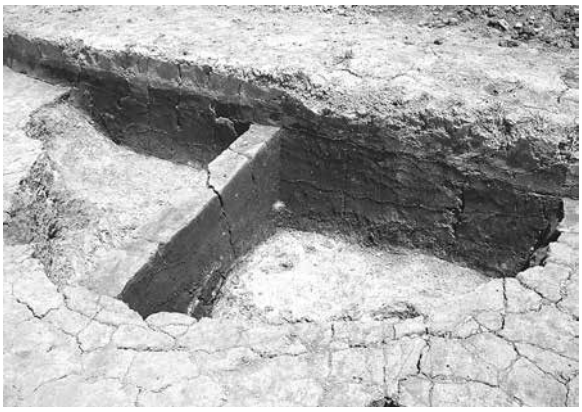
116号土坑　全景１(NW→)

115号土坑　埋土（S→）

116号土坑　埋土１(NW→)

116号土坑Ａ・Ｂ　全景２（N→）

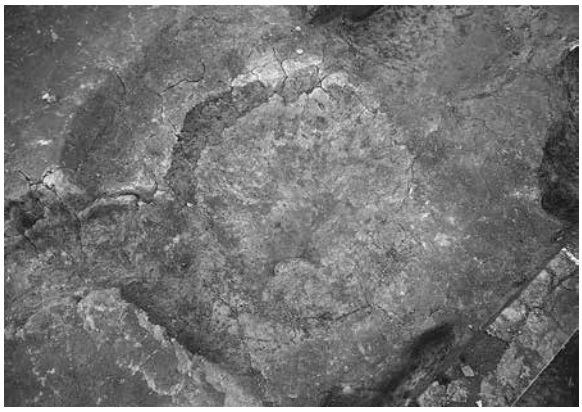
117号土坑　全景(NW→)



116号土坑　埋土２(SW→)

117号土坑　埋土（S→）

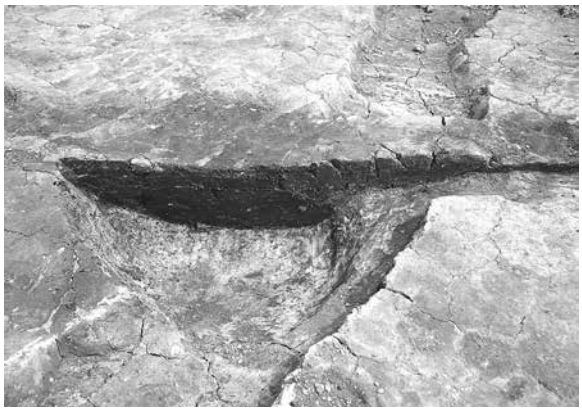
写真図版21　115～117号土坑



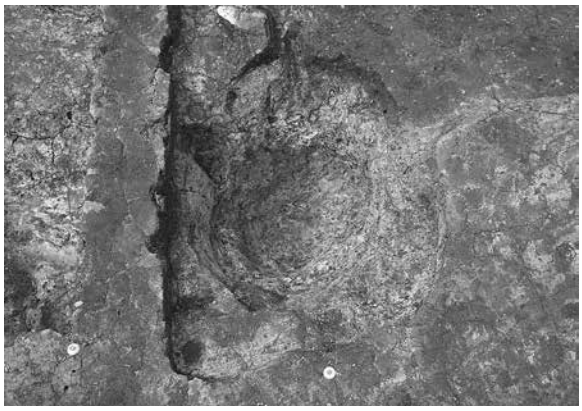
118号土坑　全景(SW →)

119号土坑　全景(E→)

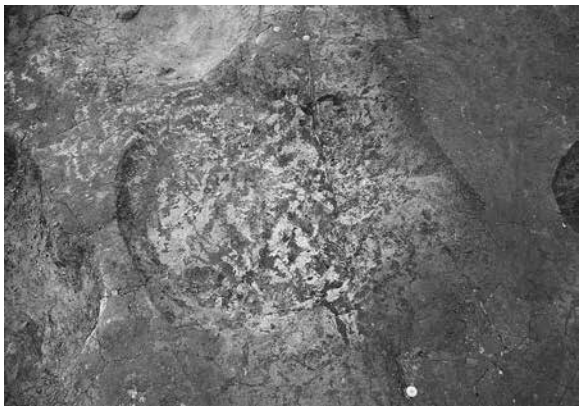
118号土坑　埋土(SE →)



119号土坑埋土(NW →)



120号土坑　全景(S→)

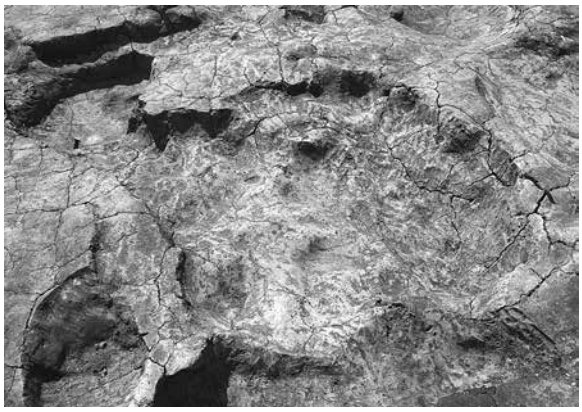


121号土坑　全景(E→)

120号土坑　埋土(W→)

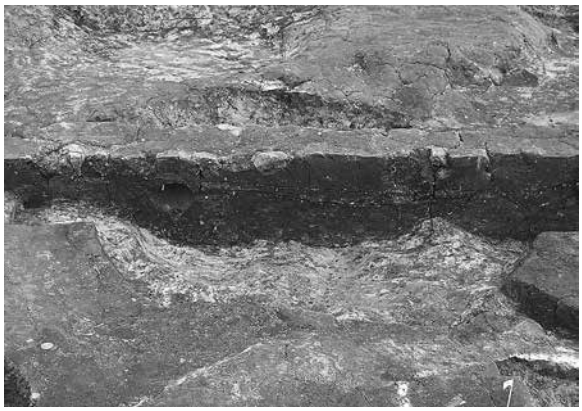
121号土坑　埋土(S→)

写真図版22　118～121号土坑



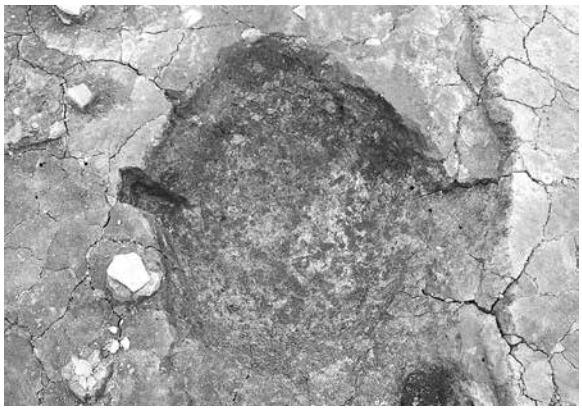
122号土坑　全景（E→）

123号土坑　全景（W→）



122号土坑　埋土（S→）

123号土坑　埋土（S→）



102号住居状遺構 pit ２　全景（SW →）

125号土坑　全景（NW →）

102号住居状遺構 pit ２　埋土（SW →）

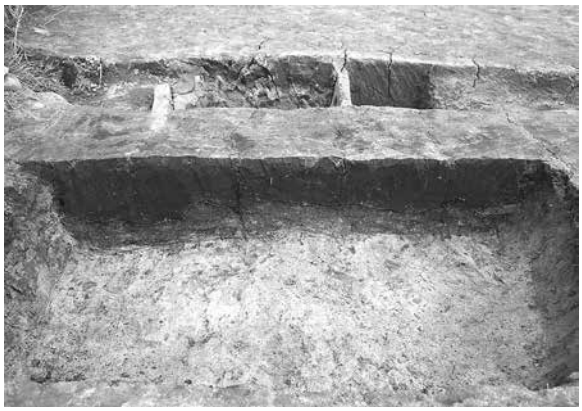
125号土坑　埋土（NE →）

写真図版23　122･123･125号土坑、102号住居状遺構

126号土坑　全景（S→）

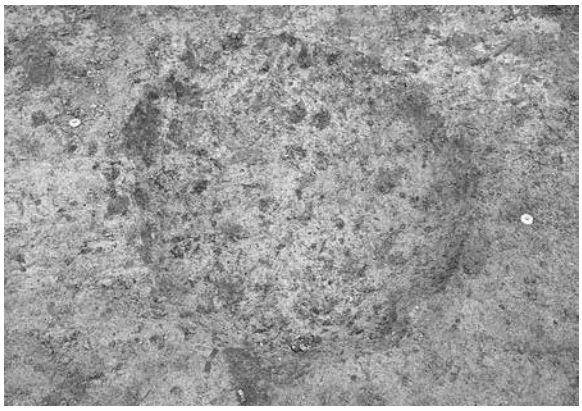
127号土坑　全景（W→）

126号土坑　埋土（W→）



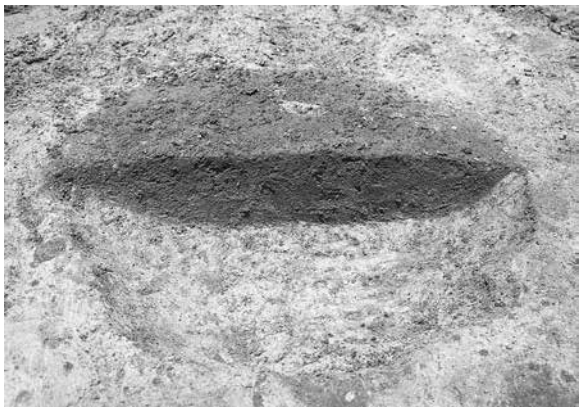
127号土坑　埋土（S→）

128号土坑　全景（S→）



129号土坑　全景（S→）

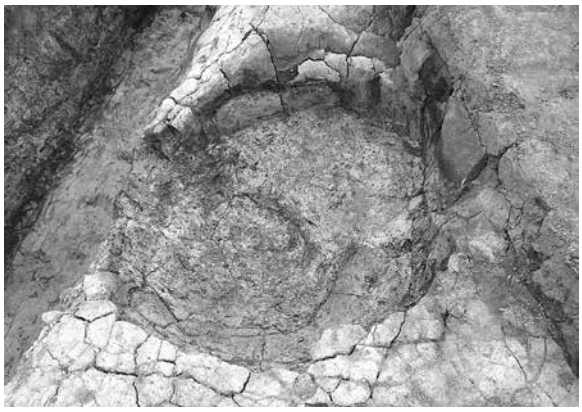
128号土坑　埋土（S→）



129号土坑　埋土（S→）

写真図版24　126～129号土坑

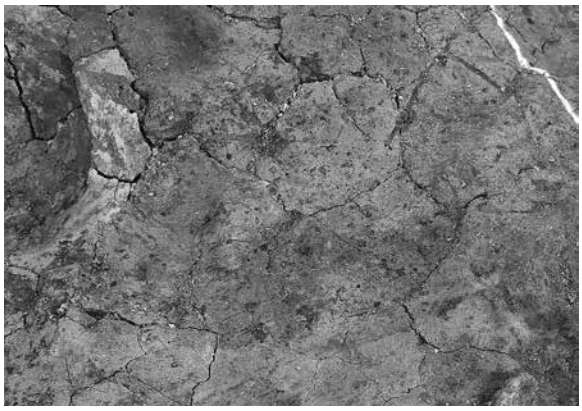
130号土坑　全景(W→)



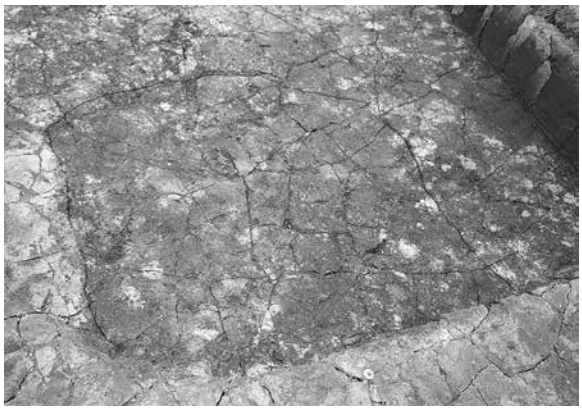
131号土坑　全景(N→)

掘立柱建物群周辺の作業風景(SW →)

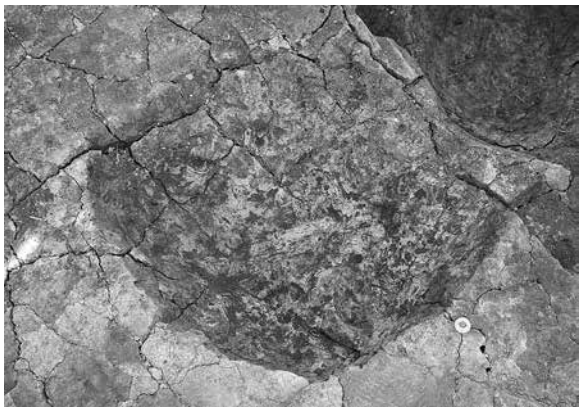
131号土坑　埋土(NE →)



132号土坑　全景(S→)



134号土坑　全景(S→)



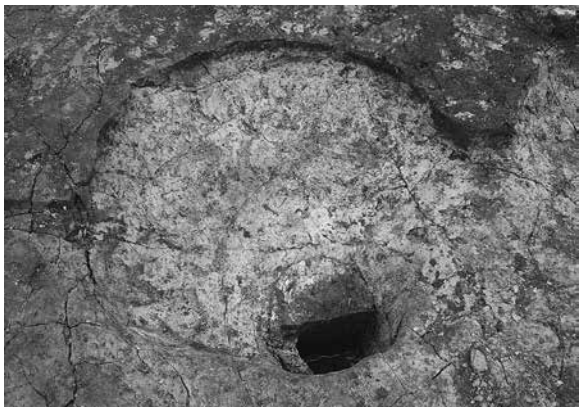
133号土坑　全景(S→)

134号土坑　埋土(E→)

写真図版25　130～134号土坑、作業風景

135号土坑　全景(W→)

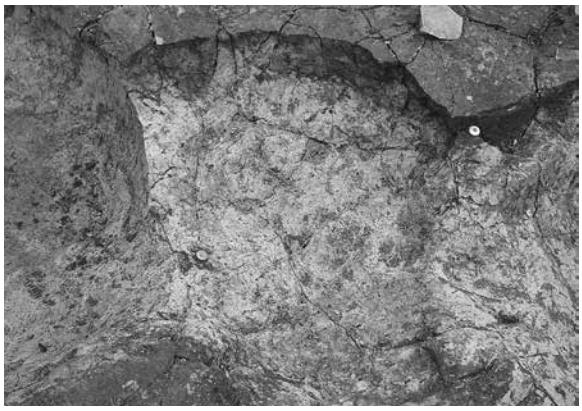
136号土坑　全景(S→)



138号土坑　全景(E→)

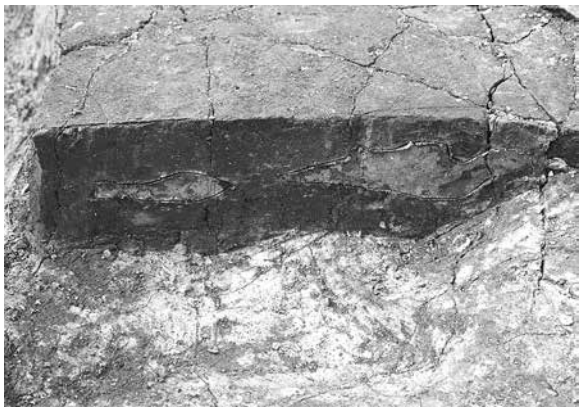
136号土坑　埋土(S→)

137号土坑　全景(W→)



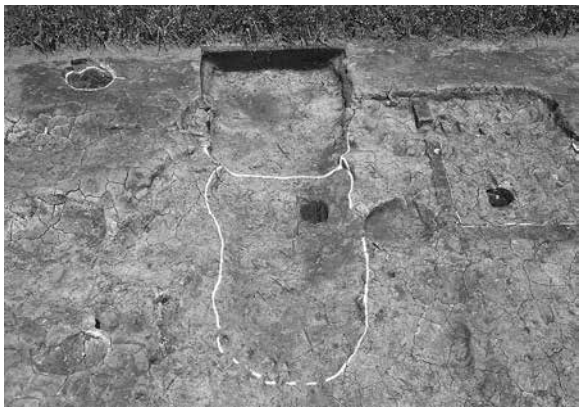
139号土坑　全景(S→)

137号土坑　埋土(S→)



139号土坑　埋土(S→)

写真図版26　135～139号土坑



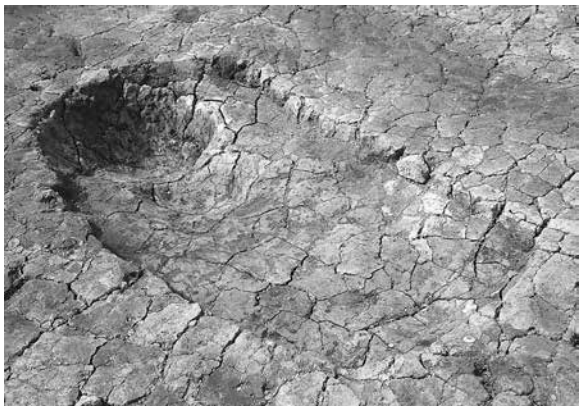
136・141号土坑　全景（Ｓ→）

142号土坑　全景(SE →)

141号土坑周辺の作業風景(W→)

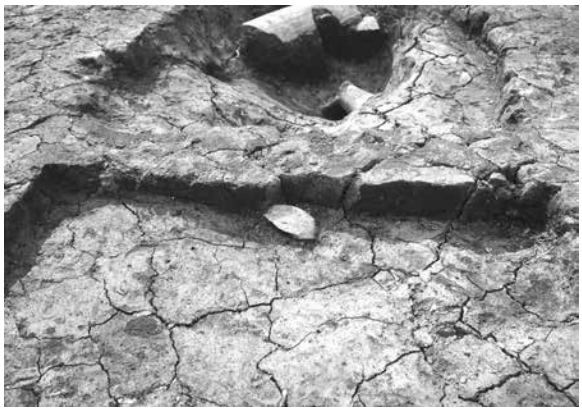
142号土坑　埋土(Ｅ→)

143号土坑　全景(W→)



144号土坑(墓壙)全景(Ｓ→)

143号土坑　埋土(Ｎ→)



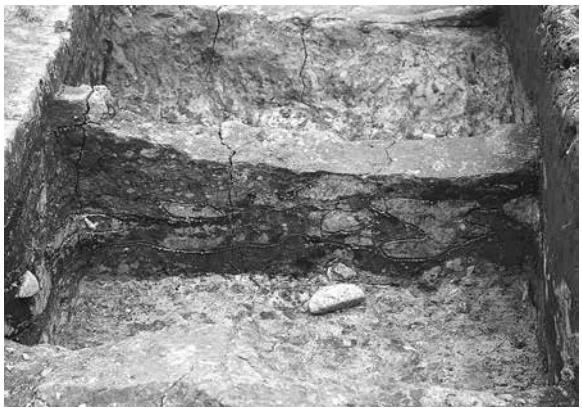
144号土坑　埋土(SE →)

写真図版27　136・141～144号土坑

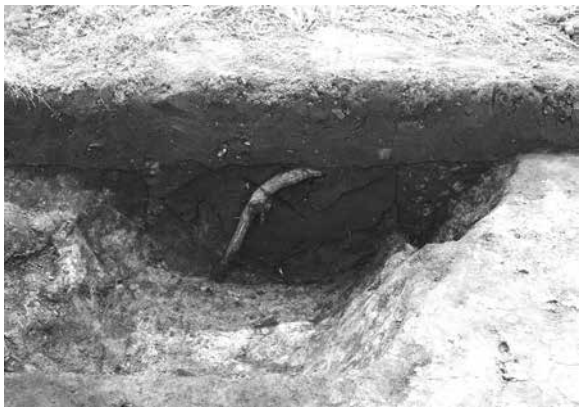
101・102号炉跡　全景（Ｓ→）

101号炉　埋土（W→）

101・102号炉　埋土（Ｓ→）

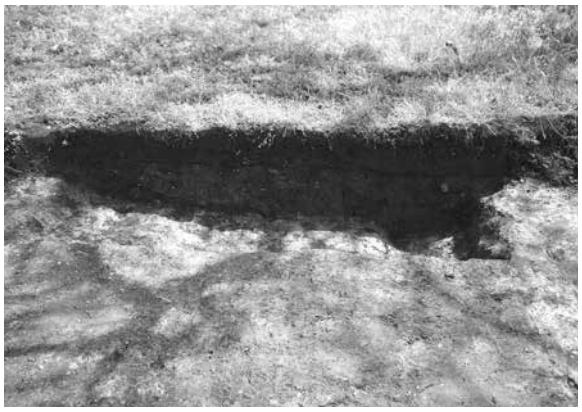


102号炉　埋土（W→）

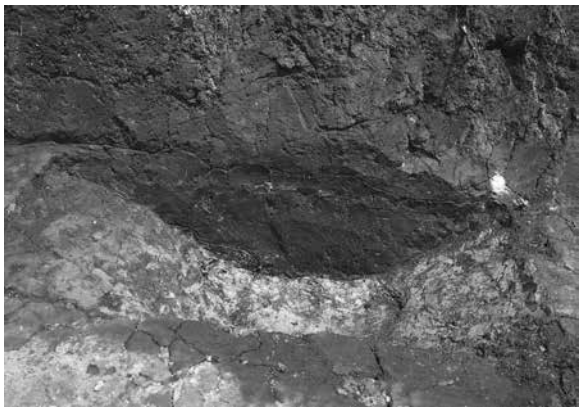


101号溝跡　埋土（Ｎ→）

103号溝跡　埋土（SW →）



102号溝跡　埋土（Ｎ→）



104号溝跡　埋土（Ｓ→）

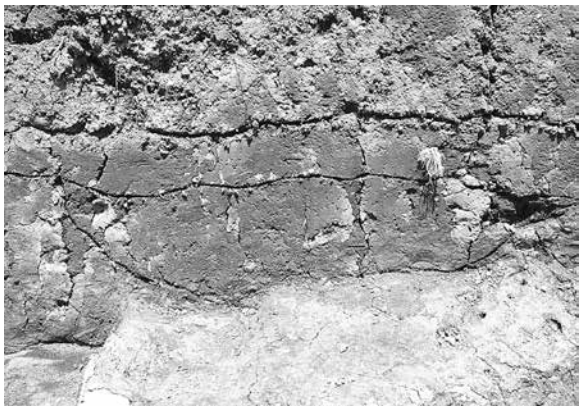
写真図版28　101・102号炉跡、101～104号溝跡

105号溝跡　埋土（Ｅ→）

106号溝跡　埋土（Ｎ→）

105号溝跡　黒曜石出土状況（Ｓ→）

107号溝跡　埋土（Ｅ→）



108号溝跡　埋土（Ｓ→）

110号溝跡　埋土（W→）

109号溝跡・104号溝跡　埋土（Ｎ→）

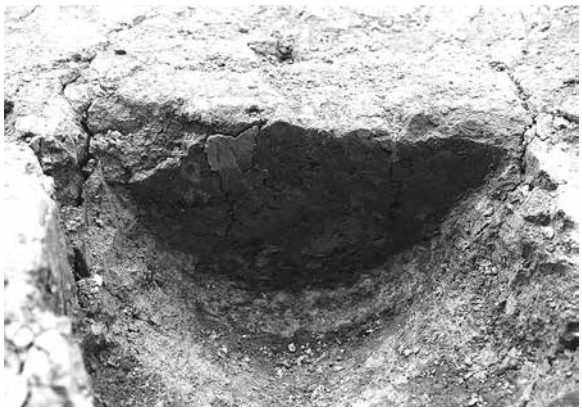
111号溝跡　埋土（W→）

写真図版29　105～111号溝跡

112号溝跡　埋土（Ｅ→）

114号溝跡　埋土（Ｓ→）

113号溝跡　埋土（Ｅ→）



115号溝跡　埋土（Ｎ→）

117号溝跡　埋土(SW →)

118号溝跡　全景１（Ｎ→）

118号溝跡　埋土１（Ｓ→）

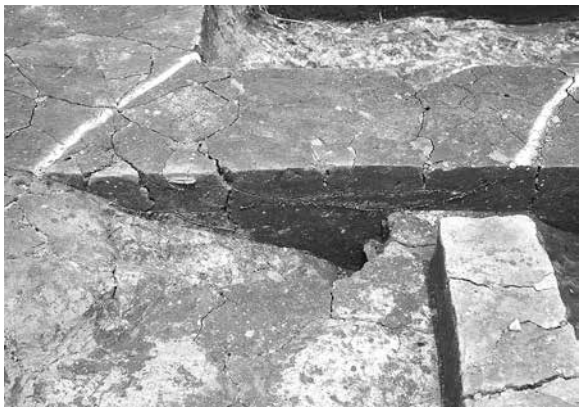
118号溝跡　埋土２(NE →)

写真図版30　112～115･117･118号溝跡

118号溝跡　全景２（Ｓ→）

121号溝跡　全景(SW →)

118号溝跡　埋土３（Ｓ→）



123号溝跡　埋土（Ｓ→）

124号溝跡内の撹乱(NW →)

125号溝跡　全景（Ｅ→）

124号溝跡　埋土(W→)

125号溝跡　埋土(W→)

写真図版31　118･121･123～125号溝跡

126号溝跡　全景(W→)

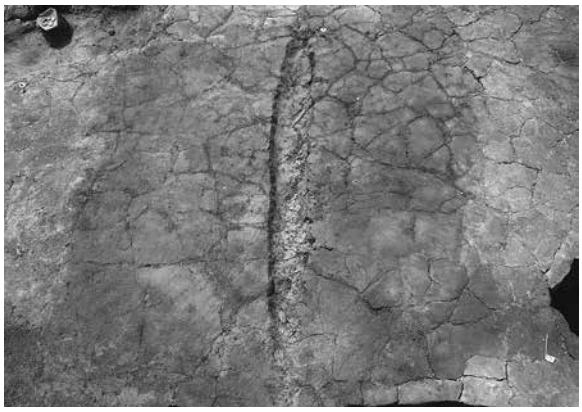
127･128号溝跡　全景(S→)

126号溝跡　埋土(E→)

127･128号溝跡　埋土(S→)

129号溝跡　全景(W→)

131号溝跡　全景(SW→)



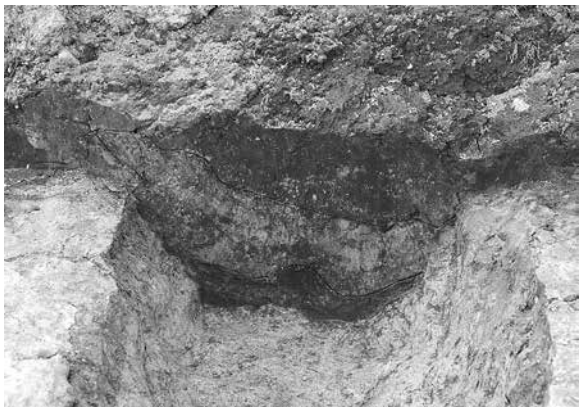
130号溝跡　全景(E→)

131号溝跡　埋土(S→)

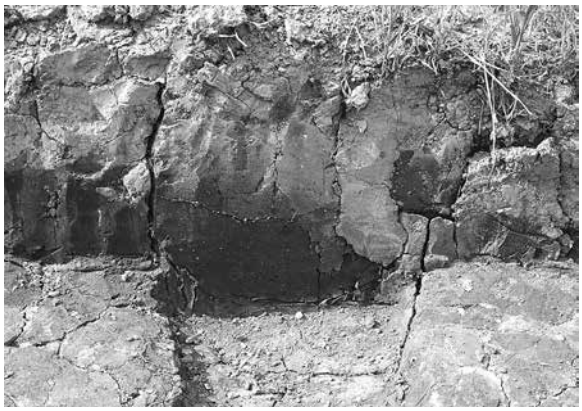
写真図版32　126～131号溝跡

132号溝跡　全景(SE →)

133号溝跡　全景（N→）



132号溝跡　埋土（S→）



133号溝跡　埋土（S→）

134号溝跡　全景(NW →)

135号溝跡　全景(SE →)

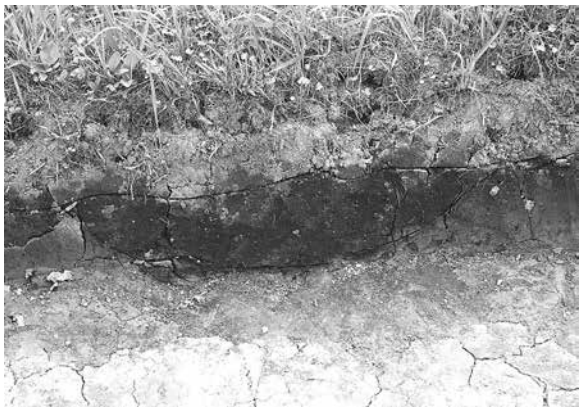
134号溝跡　埋土(W→)

135号溝跡　埋土(SE →)

写真図版33　132～135号溝跡

136号溝跡　全景（Ｓ→）

137号溝跡　全景(SW →)

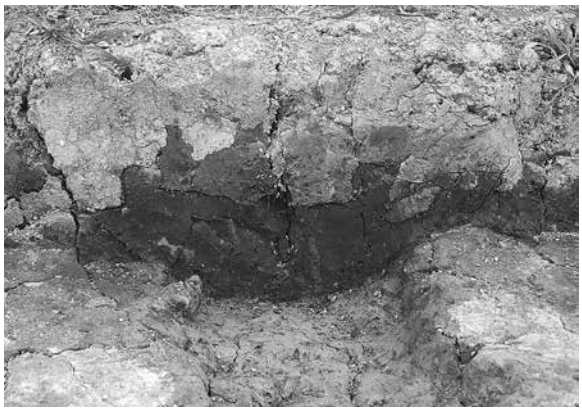


136号溝跡　埋土（Ｎ→）

137号溝跡　埋土（Ｎ→）

138号溝跡　全景(W→)

139号溝跡　全景１（Ｎ→）



138号溝跡　埋土（Ｓ→）

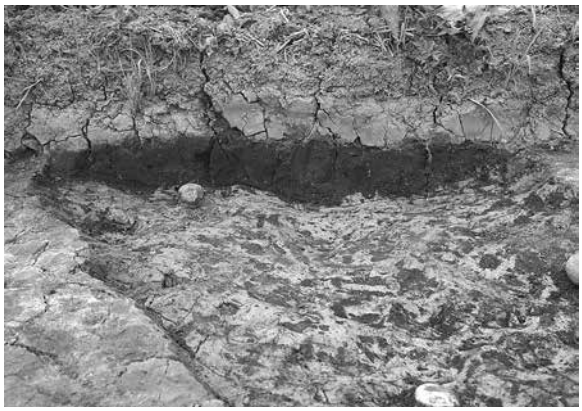
139号溝跡　埋土１（Ｅ→）

写真図版34　136～139号溝跡

139号溝跡　全景２（Ｅ→）

140号溝跡　全景１（W→）

139号溝跡　埋土２（W→）



140号溝跡　埋土１（W→）

140号溝跡　全景２（Ｅ→）

141号溝跡　全景(NE →)

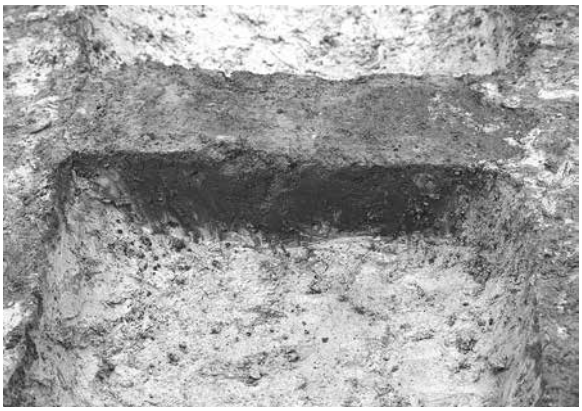
140号溝跡　埋土２（Ｅ→）

141号溝跡　埋土（Ｅ→）

写真図版35　139～141号溝跡

142号溝跡　全景（Ｓ→）

101号焼土遺構　検出（W→）



142号溝跡　埋土（Ｓ→）

101号焼土遺構　断面（W→）

102号焼土遺構　検出（Ｅ→）

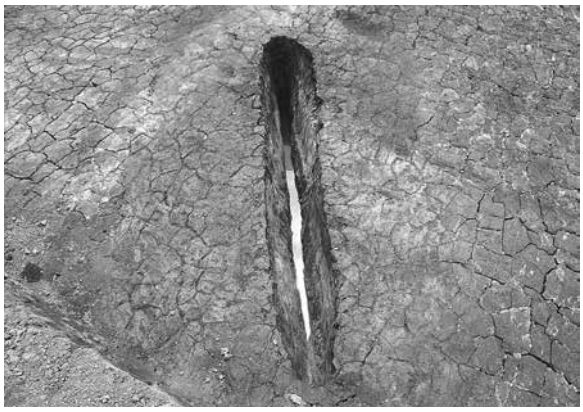
101号陥し穴状遺構　全景（SW →）

102号焼土遺構　断面（Ｓ→）

101号陥し穴状遺構　埋土（SW →）

写真図版36　142号溝跡、101・102号焼土遺構、101号陥し穴状遺構

102号陥し穴状遺構　全景(NW →)



103号陥し穴状遺構　全景(NW →)

102号陥し穴状遺構　埋土(NW →)

103号陥し穴状遺構　埋土(SE →)

西側調査区柱穴群周辺の作業風景（S→）

現地説明会１（W→）

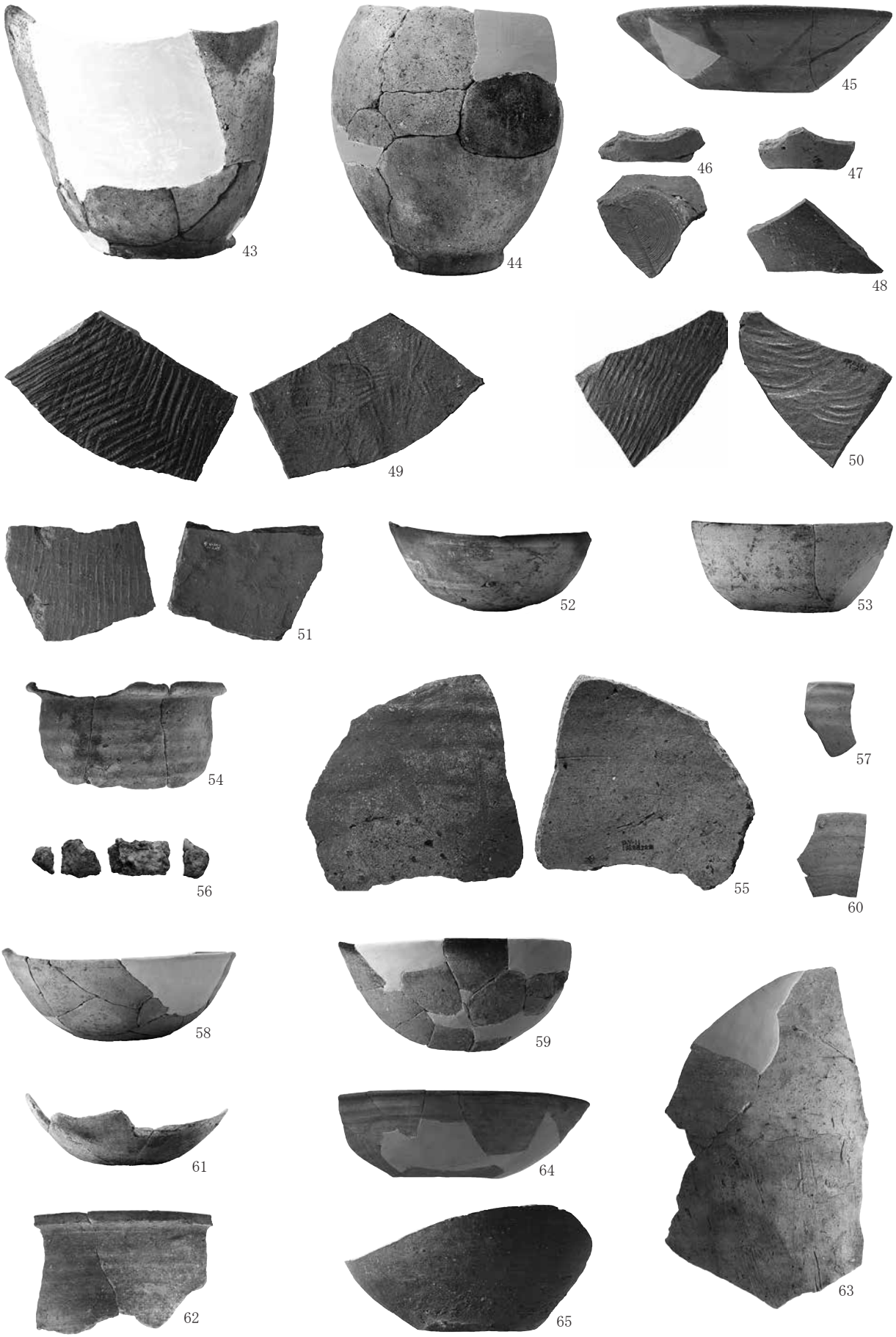
発掘⑬調査区　全景（W→）

現地説明会２（N→）

写真図版37　102･103号陥し穴状遺構ほか

写真図版38　出土遺物（１）

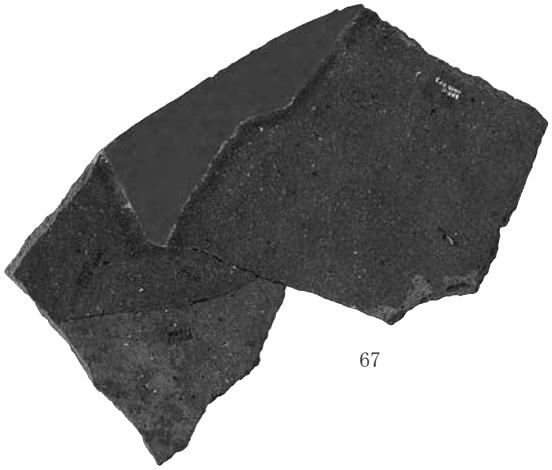
写真図版39　出土遺物（２）



写真図版40　出土遺物（３）

66

69


67

68

70

71

72

73

74

77

75

76

写真図版41　出土遺物（４）

78

79

80

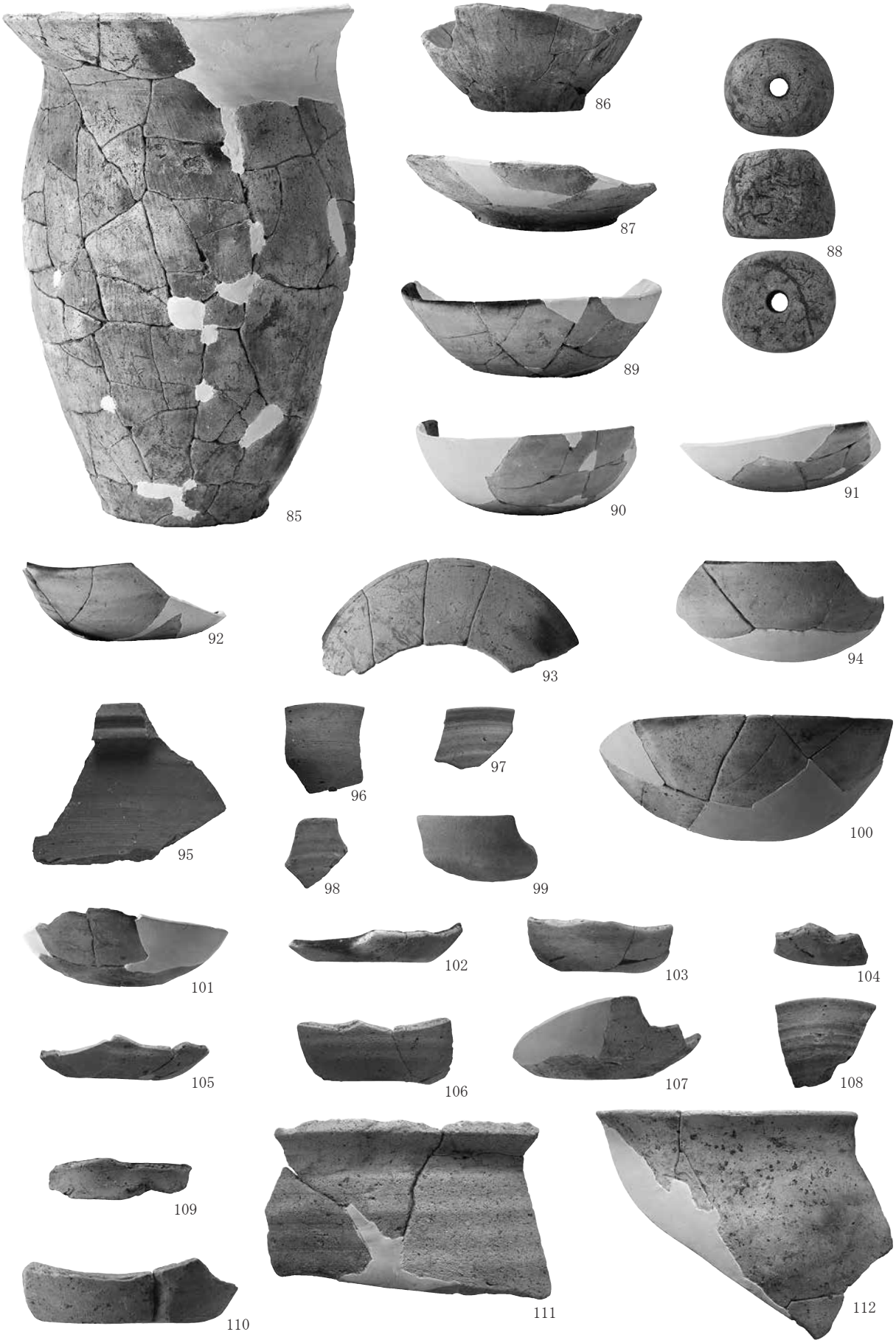
81

82

83

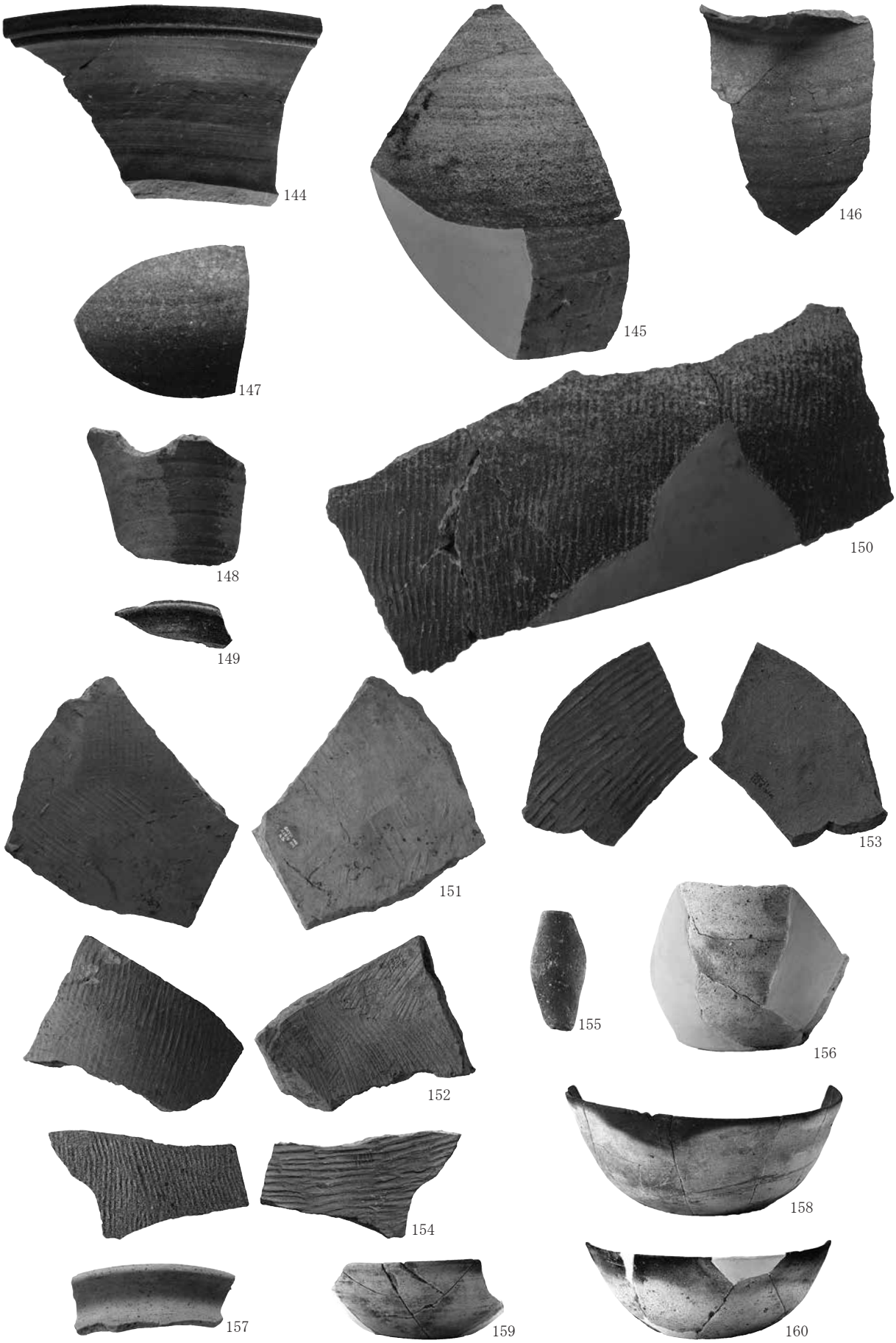
84

写真図版42　出土遺物（５）

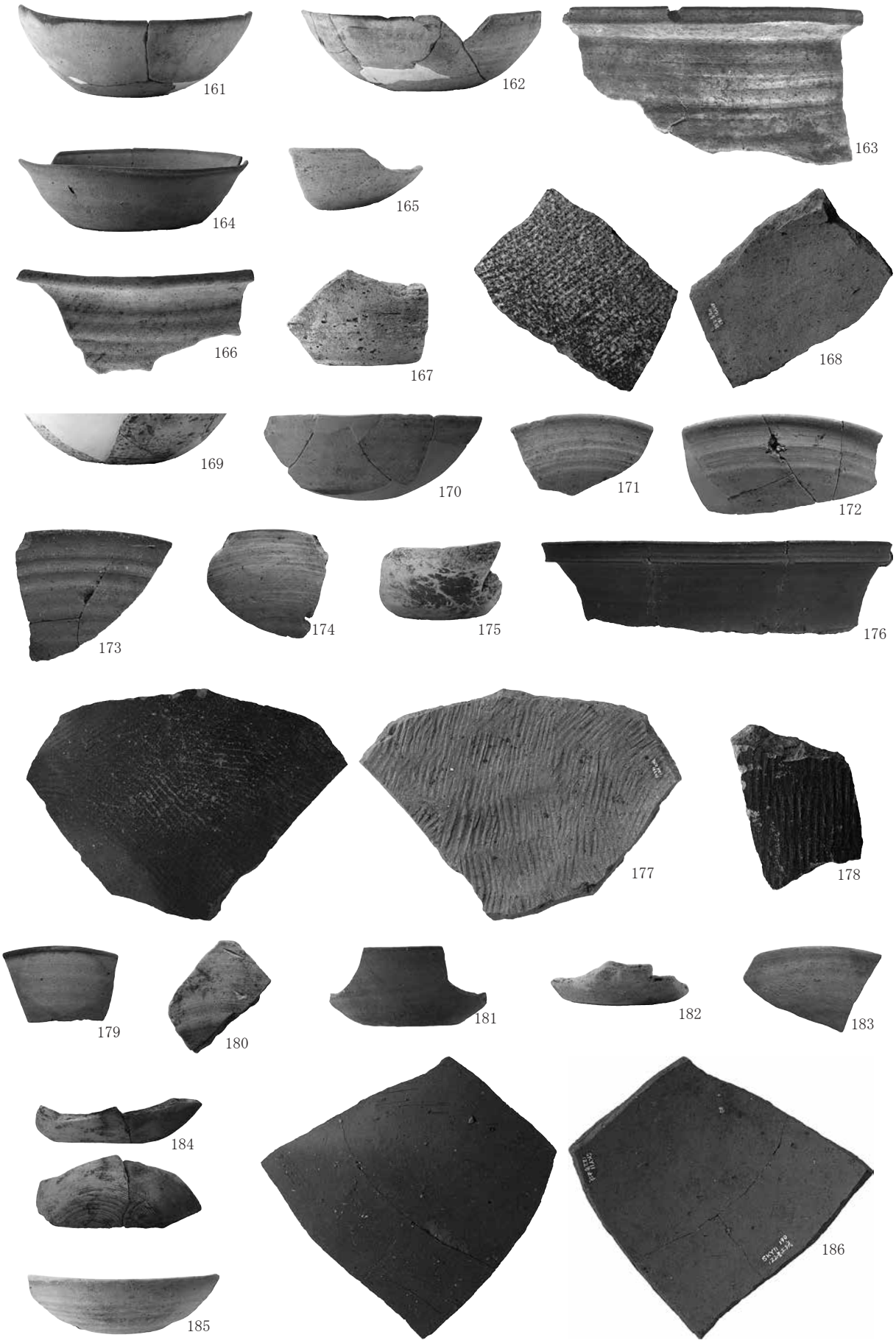


写真図版43　出土遺物（６）

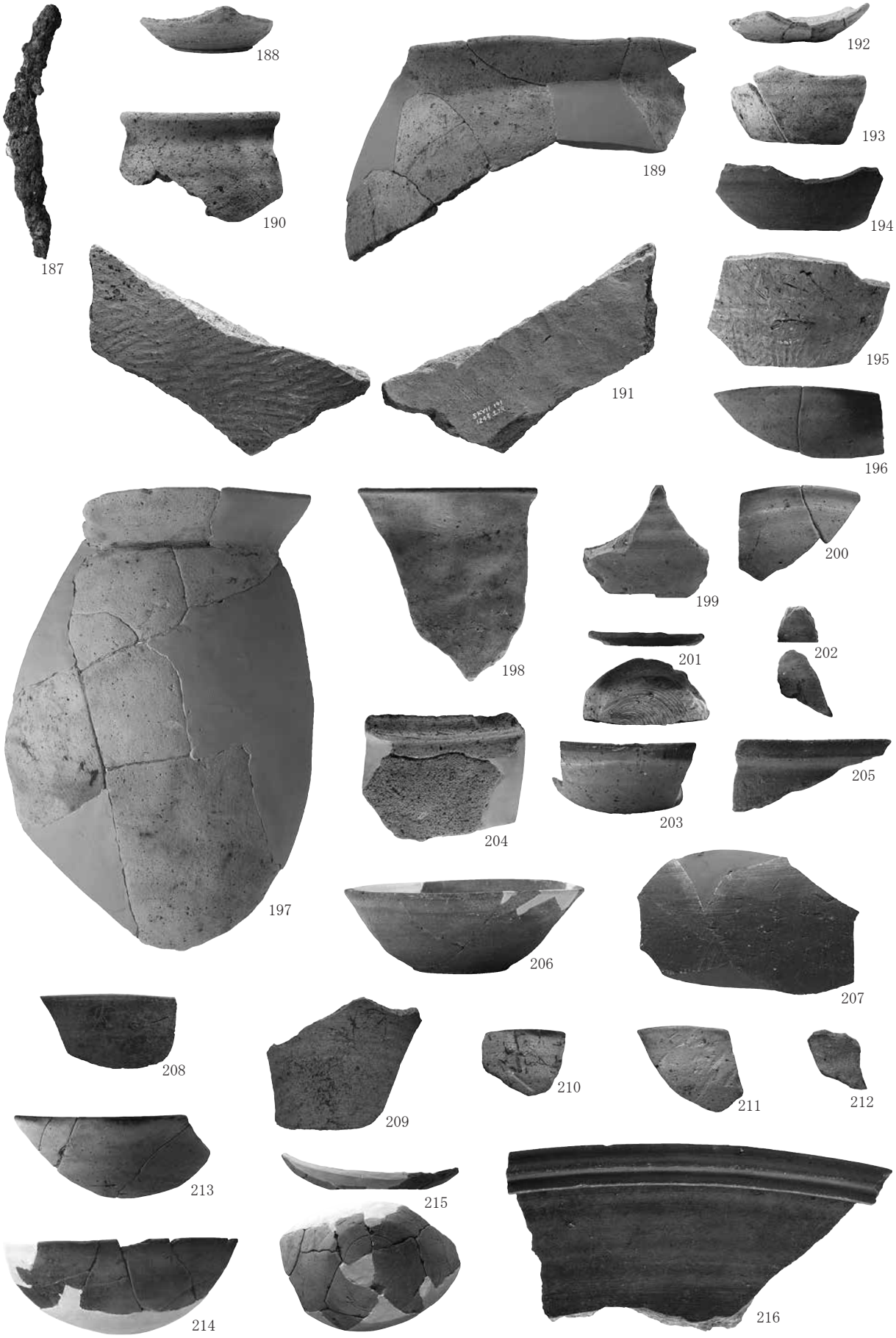
写真図版44　出土遺物（７）



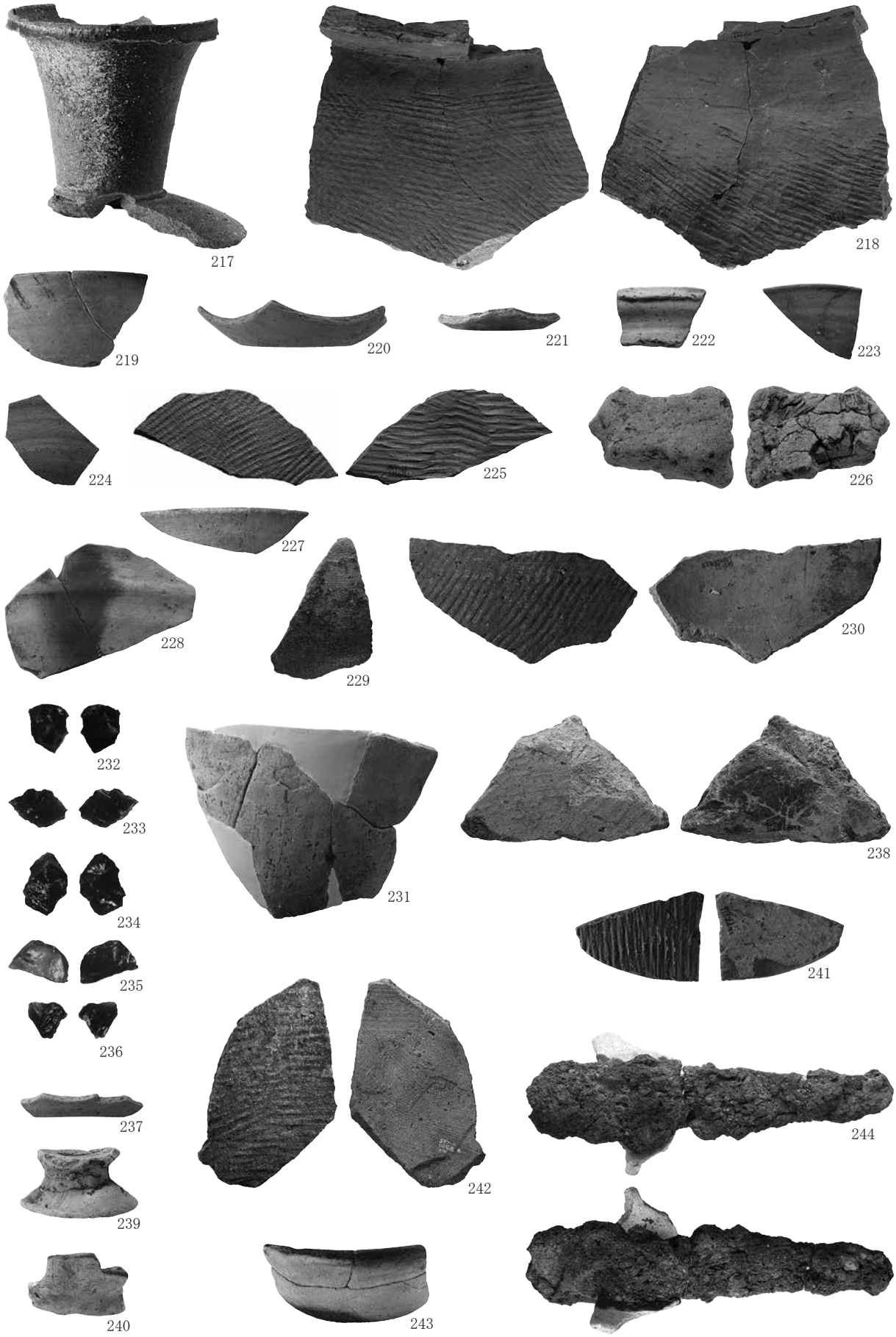
写真図版45　出土遺物（８）



写真図版46　出土遺物（９）

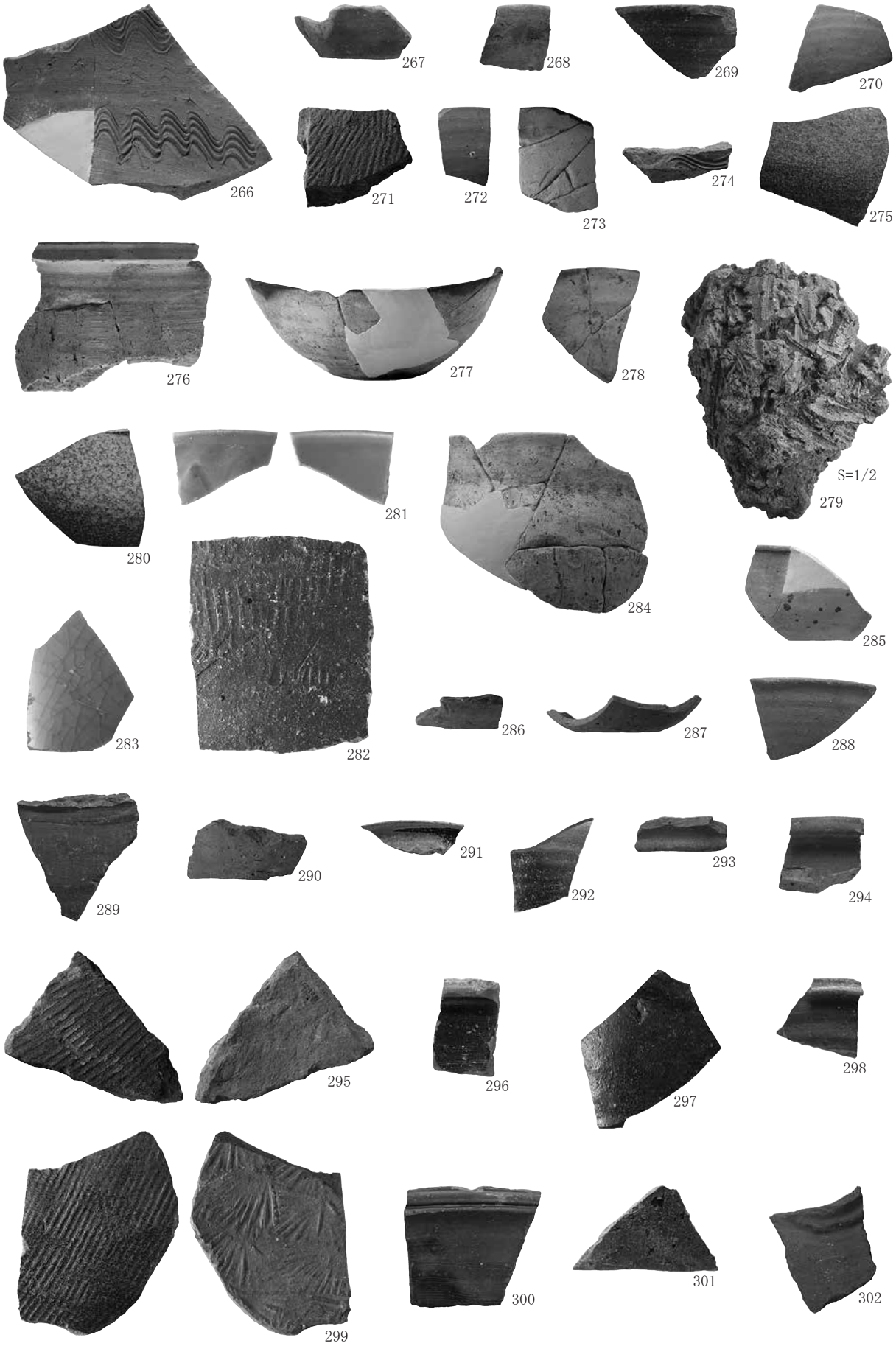


写真図版47　出土遺物(10)

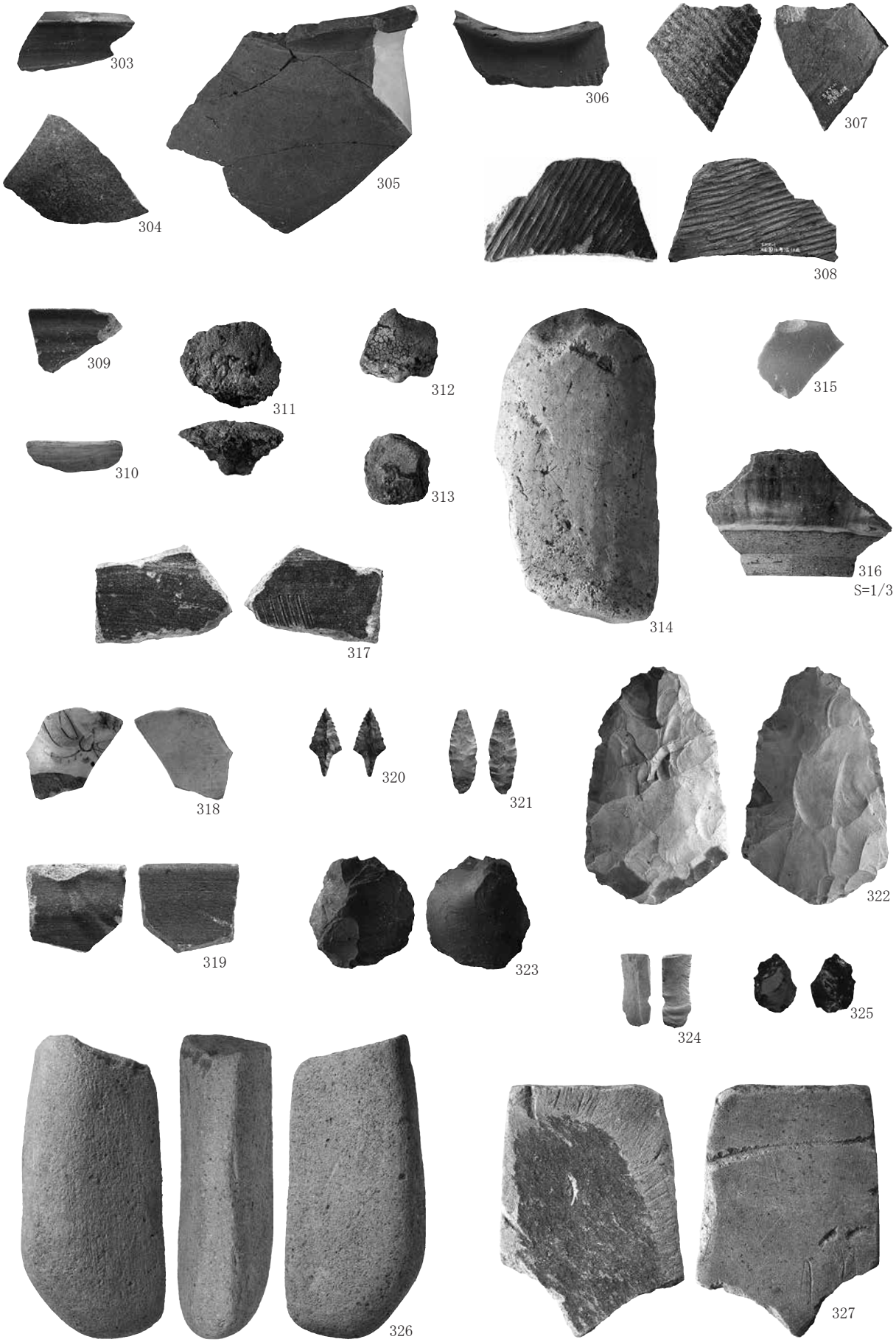


写真図版48　出土遺物(11)

写真図版49　出土遺物(12)



写真図版50　出土遺物(13)



写真図版51　出土遺物(14)

報告書抄録

ふりがな	さくやしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	作屋敷遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第616集
編著者名	濱田 宏・小林弘卓
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL(019)638-9001
発行年月日	2013年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
作屋敷遺跡 （さくやしきいせき）	岩手県奥州市胆沢区南都田字独光287番地ほか （いわてけんおうしゅうしいさわくなったあざどっこうばんち）	03215	NE25-0144	39度 08分 02秒	141度 04分 16秒	2011.04.26 ～ 2011.09.02	5,190㎡	経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区に伴なう緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
作屋敷遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡　12棟 住居状遺構　３棟 掘立柱建物跡　７棟 土坑類　47基 （含墓壙） 炉跡　２基 溝跡　42条 （含近世） 焼土遺構　２基 柱穴状土坑　270個余 （含時期不明）	土師器・須恵器・土製品・鉄製品・石器類・国産陶器・かわらけ	
		縄文時代	陥し穴　３基	石鏃など	
		近世以降	掘立柱建物跡　６棟 溝跡　上記に含む	陶磁器など	

要約	胆沢扇状地内の水沢段丘高位面に立地する遺跡である。調査の結果、東側調査区には奈良・平安時代の住居跡や工房と思われる遺構、掘立柱建物群からなる集落跡が、西側調査区には平安時代後期や中世の掘立柱建物が展開する。本遺跡の北東約２km にある角塚古墳期に相当する遺構・遺物は確認されておらず、主体となる時期は奈良時代は８世紀中頃から後半、平安時代では９世紀前半から後半にかけてである。また、遺物には平安後期 12 世紀の常滑産や渥美産の国産陶器やかわらけ、さらに 15 世紀ころの青磁片などもあり、古代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第616集

作屋敷遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥３期地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成25年３月18日
発行　平成25年３月25日

編集　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019)638-9001
発行　岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
〒023-1111　岩手県奥州市江刺区大通り７－13
電話　(0197)35-8443
(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話　(019)654-2235
印刷　セーコー印刷
〒020-0877　岩手県盛岡市下の橋町2-23
電話　(019)651-3606

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2013